

家庭教育指導資料

家庭教育の活性化のために

～地域とのつながりをもとめて～

昭和62年度 家庭教育総合推進事業報告書



福岡県教育委員会

福岡県立社会教育総合センター

は じ め に

この2～3年、青少年をとりまく問題状況は、校内暴力や家庭内暴力などが徐々に減少しつつある反面、いじめの問題がますます陰湿化しているのではないかと、という危惧がもたれています。

一方、昭和61年度の厚生省「児童環境調査」で、初めて子どもたちの生の声を聞いてみると、「困っている人を助けた」57%、「赤ちゃんをあやした」62%など多くの児童・生徒が人のために役に立つ経験をしています。そして、「乗り物でお年寄りなどに席を譲る」と答えた子どもは71%です。他方、核家族化を反映してか、「病人や寝たきりのお年寄りの世話」は、81%が未経験であるなど、今の子どもたちの「豊かな中にあっても、思いやりの心は失われていない」という状況が報告されています。

このように、両極端な面を併せ持っている子どもたちの現状を、どのように受けとめ、どのようにして健全な方向へ導いていくのかという課題に、家庭、学校、そして地域でそれぞれ取りくまれています。

福岡県教育委員会としても、いろいろな施策を通して、問題解決のため、その条件整備に努めています。家庭教育の領域では、家庭教育に関する学習機会の拡充、更に、学習内容の充実を図るため、市町村に対する家庭教育学級開設費補助をはじめとし、家庭教育幼児期相談事業及び家庭教育総合推進事業、電話相談事業などを実施し、広く関係者の皆さんの学習活動を援助しているところです。

この家庭教育総合推進事業では、過去3年間、主に、家庭内での基本的な生活習慣やしつけなどの問題と親の日常的な養育態度や行動との関連について研究してまいりました。本年度は、「家庭教育と地域とのつながりをもとめて」という研究テーマのもとに、県内7小学校の協力を得て、保護者の皆さんを対象に、「家庭教育と地域とのかかわりに関するアンケート調査」を実施いたしました。この報告書は、その調査結果を分析したものです。この冊子が、地域の指導者の皆さんが、今後の家庭教育を考える上で、ひとつの参考資料となれば幸いです。

最後になりましたが、この調査に御協力いただいた小学校や保護者の皆さんに心から感謝いたしますとともに、この事業をすすめるにあたって、御多忙中にもかかわらず、終始熱心に御指導・御助言をいただきました家庭教育企画推進委員の先生方並びに関係者の皆さん方に厚くお礼申し上げます。

昭和63年 3月

福岡県立社会教育総合センター

所 長 加 来 宣 幸

目 次

序 章	調査の概要	1
1.	調査の目的	1
2.	調査の方法	2
3.	分析の基本的視点	4
4.	調査結果の概要	5
第1章	親と地域とのつながり	8
1.	親同士の近所のつきあい	9
2.	親と地域の子どものつながり	22
3.	親と地域の活動とのつながり	32
4.	本章のまとめ	55
第2章	子どもと地域とのつながり	57
1.	地域での交友関係と子どもの成長	58
2.	地域の人たちとの交流	62
3.	本章のまとめ	67
第3章	家庭教育と地域とのつながり	68
1.	家庭教育の実態	69
2.	家庭教育と地域とのつながり	82
3.	本章のまとめ	89
第4章	地域の活動	91
1.	地域活動の実態	92
2.	地域への期待	102
3.	本章のまとめ	109
第5章	結論と今後の課題	111
資 料		115
(資料1)	家庭教育と地域とのかかわりに関するアンケート調査票	
(資料2)	調査結果の集計	
(資料3)	昭和62年度家庭教育総合推進事業の概要	

序章 調査の概要

1. 調査の目的

本県では、今日の家庭教育の課題に対処するために、昭和59年度から家庭教育総合推進事業を実施しているが、その一環として、昭和60年度に「福岡県における小、中学生をもつ親の日常生活の実態」について調査を行った。

この調査の結果報告では、親の問題点として第1に、親は子どもにあれこれと注文をつける割には自分には甘いという面、例えば生活のリズム、不器用な手先、活字離れ、飽食等、第2に身近な社会とのつながりが希薄な面、第3に現実の生活に満足して、より一層の向上をしようという意欲がみられないという面が指摘された。子どもが見習うべき成長のモデルであるはずの「親の後ろ姿」が、ぼんやりとしているようである。子どもに見られていることを自覚することが、親としてまず心得ておくべきことであろう。

問題点の指摘は易しい。指導者が抱えている課題は、いかにしてその問題点を、親が自分の問題として受け入れてくれるかにある。ややもすると親は、その問題点が一般的なことであるとして関心の外に置くか、あるいは自分はそれほど問題とは思わないと見過ごそうとする。はっきりとした症状が出ない内は本気にならないし、自覚できるときは手遅れになっていることが多い。具体的な形で表面化するに至っていないことが、自覚の盲点になっている。どうすればこの盲点をふさぐことができるのだろうか。さらに事態を困難なものにしているのは、個々の家庭で問題の種類が異なり、またその程度に差があるということである。家庭教育上の問題は個別的なのである。そこで社会活動の立場から言えば、個別の問題点に親自身で気づいてもらうことが出発点である。そうでなければ「ヤル気」がわからないし、適切な処置ができないからである。

指導者は、親が自分で自分を診断するシステムを社会の中に作り上げていかなければならない。セルフサービスが浸透している社会では、セルフサービスを支援するサービス網が完備していなければならない。すなわち、ごく自然に、それとは知らずに自分を診断できるようなシステムを、環境の中に配置しておくことが求められている。例えば、多くの人が自分は中流であると思っている。どうしてだろうか。それは、自分の周りにいるさまざまな人たちの生活と自分の生活とが大して違っていないからである。つまり、多数の人の生活を垣間見ることによって、平均としての中流生活のイメージが描かれ、そのイメージを基準として自分の生活がまあまあ中流であろうと、相対的に判断をしている。中流生活の絶対的イメージがあるわけではない。

先に述べたように、親の生活実態には問題がある。それは自己診断を欠いているからである。その結果、家庭教育に関して「かくあるべし」という理想を持ち込んだり、「こんなものだろう」と現状認識をいかげんにしたり、「忙しい」とか「面倒」とか言って関わりを避けてしまう。生活レベルが中流であると無意識のうちに判断を行っているのと同じように、自分の家の家庭教育レベルはどの程度のも

のなのかを判断できる情報環境が必要である。その判断基準を決める情報網は地域の情報網である。生活レベルに関する情報は外面的、物的、量的情報で事足りるため、地域を飛び越えて入手出来るが、家庭教育に関する情報は内面的、心理的、質的情報でなければならないため、地域を越えては伝わって来ない。生活者の直接的関係を通してしか情報は集められない。家庭教育に必要な情報は、地域における人間関係の中に込められているのである。即ち、地域での生活の連鎖を通して、家庭教育の判断基準がイメージ化されることになる。

さらに家庭教育は、例えばしつけのチェックリストのようなものに従って実践しようとする、発散し徒勞に終わってしまう。しつけはあくまでも時と場合を選ばなければならない。生活の場面に即した実践がなされない限り、「知っているしつけ」に留まり「出来るしつけ」にならない。しつけに明日はない。今日出来ることは今日しておかねばならない。明日には明日のしつけがある。日曜日にまとめてしつけをしようとしても、テレビのマンガにはかなわない。家庭教育は生活の一部なのである。しかし、親は子どもの生活につきっきりというわけにはいかない。誰かの世話になっているはずであるし、世話もしなければならない。

生活の連鎖の中で家庭教育というものをながめてみると、一個の輪である親子関係としての「家庭内教育」、輪と輪のつながりである隣近所とのつきあいとしての「家庭間教育」（親たちと子どもたち）、一本の鎖である地域社会としての「家庭外教育」（大人と子ども）という三つの機能別形態がイメージされる。地域という言葉は、顔見知りの関係を基本とする家庭間教育と、公共の色合いの強い家庭外教育とに機能を分けておいた方が議論しやすい。このようにしていわゆる地域社会を家庭教育のイメージの中に組み込むことによって、親子関係をより大きな観点から考察できる。木を育てるには森という環境を整えることが不可欠のように、親子関係の正しい認識と適格な実践には、地域という広がりの中で営まれている親と子の生活のあらゆる側面を視野の中に入れておかなければならない。

今回は以上のような観点から、地域というコミュニケーションネットワークの中で、家庭はどのように位置し、どのように機能しているのかを調査しようとした。具体的には、「親と地域とのつながり」、「子どもと地域とのつながり」、「家庭教育と地域とのつながり」、「地域の活動」の四つの調査項目である。この調査によって、今の家庭がどこに地域との接点を持っているのかを知ることによって、指導者は的を射た地域活動を進めることが出来るはずである。その結果、地域ネットワークが完備すれば、親は自然に家庭教育の中流レベルのイメージを描くことが出来、適切な自己診断と具体的な実践が行われることであろう。望ましい家庭教育という目的への第一歩が、踏み出されることを期待する。

2. 調査の方法

(1) 調査対象

本調査は、福岡県内の7小学校の、3・4年生の子どもを持つ親を対象にして実施した。この7小学校の選定にあたっては、地域性を考慮してセレクトした。それは、いうまでもなくこの調査が、地

域性と密接に結びついた問題であり、それぞれの地域によって、かなりの差異があると考えられるからである。

地域性については、都市部、農村部、団地の3つに分け、これら3つの地域から、それぞれの地域に典型的な対象校を数校ずつ選んだ。都市部が2校、農村部が3校、そして団地が2校で、あわせて7校である。

これら、7つの小学校に在籍する3・4年生の親を対象にして、アンケート調査を実施した。アンケートの総配布数は1,012を数えているが、未回収、無効票を除く最終的な有効票数は925サンプルで、回収率91.4%である。これら925サンプルの、地域別、年齢別、居住年数別、祖父母との同居別の内訳を示したものが、表1から表4である。

表1 サンプルの内訳(地域別)

単位：%(実数)

地域類型	都市部	農村部	団地	計
サンプルの内訳	32.1(297)	30.9(286)	37.0(342)	100.0(925)

表2 サンプルの内訳(年齢別)

単位：%(実数)

年齢	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代以上	計
サンプルの内訳	0.6(6)	74.4(688)	24.0(222)	0.9(8)	0.1(1)	100.0(925)

(注) *以下の分析では、「30歳代以下」と「40歳代以上」の2つのカテゴリーとした。

表3 サンプルの内訳(居住年数別)

単位：%(実数)

居住年数	1年未満	1年以上 ～3年未満	3年以上 ～5年未満	5年以上 ～10年未満	10年以上	計
サンプルの内訳	5.9(55)	13.8(128)	11.8(109)	39.0(361)	29.4(272)	100.0(925)

表4 サンプルの内訳(祖父母との同居別)

単位：%(実数)

祖父母との同居	同居している	同居していない	無記入	計
サンプルの内訳	25.3(234)	74.5(689)	0.2(2)	100.0(925)

(2) 調査の方法

調査方法としては、調査協力校を通じて、子どもに調査票を持ち帰らせ、数日のちに回収という方法をとった。本調査の回収率が高いのは、このことによる。

アンケート用紙は、質問総数32項目の「家庭教育と地域とのかかわりに関するアンケート調査票」である。この質問紙の構成は、表5に示したように、基本的には5つのカテゴリーからなっている。

- ① フェイス・シート
- ② 親と地域とのつながり
- ③ 子どもと地域とのつながり
- ④ 家庭教育と地域とのつながり
- ⑤ 地域の活動

フェイス・シートでは、回答者の年齢や、いまの地域での居住年数といった、基本的な事柄についてきいている。2番目の「親と地域とのつながり」では、親同士の近所づきあい、親と地域の子どもたちとのつきあい、そして親の地域活動の実態といったものがふくまれている。3番目の「子どもと地域とのつながり」では、子どもの地域での交友関係と子どもの成長や、地域の人たちとの交流についてきいている。

また、4番目の「家庭教育と地域とのつながり」では、家庭教育の実態にくわえて、家庭教育に地域がどのように結びついているのか問題にしている。そして、5番目の「地域の活動」では、それぞれの地域での活動の実態や、地域や地域における活動にどんな期待をよせているのかきいている。

なお、本調査で使用したアンケート調査票を、末尾に掲載しておいた。

表5 質問紙の構成

質問のカテゴリー	フェイス・シート	親と地域とのつながり	子どもと地域とのつながり	家庭教育と地域とのつながり	地域の活動
質問の内容	* 年齢 * 居住年数 * 祖父母との同居	* 近所づきあい * 地域の子どもとのつながり * 親の地域活動	* 地域での交友関係と子どもの成長 * 地域の人たちとの交流	* 家庭教育の実態 * 家庭教育と地域	* 活動の実態 * 地域やそこでの活動に対する期待
項目数	4問	16問	4問	6問	2問

3. 分析の基本的視点

以下の分析は、さきほど述べた質問紙の構成にしたがって行なっている。すなわち、親と地域とのつながり、子どもと地域とのつながり、家庭教育と地域とのつながり、そして地域の活動といった具合である。

これらの問題について、基本的には、地域別、年齢別、居住年数別、そして祖父母との同居別の4つの視点から分析している。この4つの分析視点は、いずれも親や子どもの地域とのつながりや、家庭教育のありかた、そして地域の活動への参加・期待に影響をおよぼす要因である。その意味で、以下の分析では、この4つの視点から、家庭と地域とのつながり、家庭教育と地域とのつながりを、明らかにすることとした。

4. 調査結果の概要

(1) 親と地域とのつながり

① 親同士の近所のつきあいについては、近所の人への声かけはよくなされており(97.0%)、近所で気軽に行き来できる家は、平均して「3軒」程度であり、親しくなったきっかけは、「隣近所」や「子ども同士が友達」のことが多い。また、近所の人と、家庭教育について「話す」親、「話さない」親の割合は3:1であり、近所づきあいを「わずらわしい」と感じている親は50%弱である。

地域別では、団地の親同士のつきあいがよくなされている半面、農村部でのわずらわしさ(48.9%)や都市部でのつきあいの希薄さが目立つ。年齢別では、近所のつきあいはあまり差がなく、居住3年たてば、近所の人との実質的つながりが成立し、祖父母との同居は、近所とのつきあいに好影響を与えている。

② 親と地域の子どものつながりについては、親は、子どもの友だちをよく知っていて(92.2%)その親もかなり知っている(82.3%)。近所の子どもへのあいさつや声かけを「よくする」親は、64.2%であり、危険な遊びをみて、「やめるまで注意する」親は26.5%であり、大部分の親(72.1%)は、「やめるよう一応注意する」と回答している。

地域別では、都市部の親は、子どもの友だちやその親をよく知っている。子どもへのあいさつ・声かけは団地において、危険な遊びへの注意は農村部において、より活発になされている。年齢別では、30代以下の方が、子どもの友だちやその親をよく知っている半面、子どもへのあいさつ、声かけ、危険な遊びへの注意は、40代以上の親の方がよくしている。居住年数別では、子どもの友だちを知るのは3年、その親を知ったり、子どもへのあいさつ、声かけは5年、危険な遊びへの注意は10年で、それぞれかなりの較差がでている。ここでも、祖父母との同居は、好影響を与えている。

③ 親と地域の活動とのつながりについては、学校教育との接点であるPTAの集会に出席する親は、78.6%である。地域の行事や活動について、「関心がある」親は71.9%であるが、実際に「参加する」と答えた親は82.7%であり、10%以上「参加する」親が多い。95.7%の親が、子どもを地域の行事や活動に「参加させる」と答えているが、地域の世話役の経験が「まったくない」と答えた親は31.1%である。公民館などで実施する家庭教育に関する学級・講座等に「参加している」親は37.0%であり、その実施を「知っている」親は70.7%であり、かなりの較差がある。その情報源は、「回覧板・掲示板等」と「広報誌」が多かった。

地域別では、農村部の親はあらゆる地域の活動への関心・参加が多い。団地では、地域の世話役は割と均等に経験しているが、都市部では、子どもを参加させたいというニーズは高い割に、親の地域の活動への関心・参加、そして地域の世話役の経験は少ない。年齢別では、学級・講座などは40代以上の方が積極的であり、居住年数が長くなれば、地域の活動とのつながりは強くなる。ただし、1年未満の親の積極性が目を引く半面、1年以上～3年未満の親の消極性が気にかかる。祖父母との同居別では、地域の活動への参加は、同居の方がはるかに多い。

(2) 子どもと地域とのつながり

① 近所の子ども同士で「よく遊んでいる」とみている親は、約60%であり、農村部、40代以上、そして、居住年数5年以上の親がやや多くなっているが、全体的にはそう大差はない。

また、子どもの成長に、子ども同士のつきあいが「必要である」と考えている親は、99.0%であり、都市部、1年未満の親が、「大いに必要である」という積極的肯定が数%多い。

② 子どもの近所の人へのあいさつは、「よくしている」が31.0%であり、都市部、30代以下、1年未満、祖父母との同居者が他より数%多くなっている。

また、子どもが近所の人から注意されたことが「ある」と答えた親は、約50%であり、農村部、30代以下、祖父母との同居者、居住年数の長い方がよく注意されている。

(3) 家庭教育と地域とのつながり

① 家庭教育の実態については、子どもが最もよく聞くのは、「父親」の50.6%であり、次に「母親」、「学校の先生」の順となっている。家庭教育についての悩みでは、「勉強のこと」が21.3%で最も多く、次に、「しつけのこと」(20.8%)、「性格的なこと」(17.8%)が多く、悩みの程度は、「少し気になる程度」が67.5%と大部分を占めているが、「とても悩んでいる」親が6.8%いる。相談相手は、まず「夫(妻)」であり、次に、「学校の先生」、「友人」がつづいている。また、家庭教育について自信のない親の方が、わずかに多い。

地域別では、「父親」の言うことをよく聞くのは、農村部、団地が多く、「母親」は農村部でかなり少なくなっている。家庭教育の悩みは、都市部で「勉強のこと」、農村部で「性格的なこと」、団地で「しつけのこと」が、他の地域より多くなっている。

年齢別では、「父親」の言うことをよく聞くのは、30代以下で多くなっていて、逆に、「母親」と「学校の先生」は40代以上で多くなっている。また、家庭教育について、40代以上の方が、「自信のある」親が多くなっている。

居住年数別では、1年以上～3年未満の親が、家庭教育について「とても悩んでいる」割合が最も多くなっている。

同居している祖父母は、家庭教育についての相談相手によくになっているようである。

② 家庭教育と地域とのつながりについては、子育てにとって、地域の行事や活動が「役に立っている」と肯定的にみる親は、71.5%であり、一方、近所の人とのつきあいについては、80.5%の親が「役に立っている」と回答している。特に、子育てにとって、近所の人とのつきあいが「大いに役に立っている」と積極的に肯定する割合は、地域の行事や活動の場合の2倍近い数字となっている。

地域別では、地域の行事や活動に最も関心や参加が多かった農村部において、「役に立っていない」と否定的にみる親が一番多かった。近所のつきあいを「役に立っていない」と否定的にみるのは、都市部に多かった。

年齢別では、近所のつきあいを肯定的にみる親は、30代以下の方が多い。

居住年数別では、1年以上～5年未満の親に「役に立っていない」という否定的傾向が多くみられる。

(4) 地域の活動

① 地域活動の実態については、「非常に活発」と「ある程度活発」を合わせた割合でみると

ア. 60%台……「スポーツ・レク活動」、「祭り・年中行事」、「子ども会・青少年団体の活動」
(いずれも、団地での活動が活発)

イ. 40%台……「PTAの地域懇談会」、「交通安全・街頭パトロール」(都市部で活発)

ウ. 30%台……「環境美化活動」、「子どもへのあいさつ・声かけ運動」(都市部が不活発)、
「家庭教育学級などの学習活動」

エ. 10%台……「健全な環境づくり」、「福祉活動」

となっている。

特に、「スポーツ・レク活動」「祭り・年中行事」「子ども会、青少年団体の活動」などは、各地で比較的活発に行われているが、「子どもへのあいさつ・声かけ運動」や「家庭教育学級などの学習活動」は、あまり活発ではないようだ。

② 子どもを育てていく上で、地域に期待するもの(3つ以内の複数回答)は、

ア. 60%台……「子どもの遊び場などの整備充実」(都市部が多い)

イ. 40%台……「子どもへのあいさつ・声かけ運動」(農村部が多い)

ウ. 30%台……「スポーツ・レク活動」

エ. 20%台……「子ども会、青少年団体の活動」、「家庭教育学級などの学習活動」、「祭り・年中行事」

オ. 10%台……「環境美化活動」、「福祉活動」、「交通安全・街頭パトロール」(都市部が多い)

カ. 10%以下…「健全な環境づくり」、「PTAの地域懇談会」、「相談体制の整備」

となっている。

特に、交通量の激しい都市部では、「子どもの遊び場などの整備充実」や「交通安全・街頭パトロール」などの活動への期待が非常に高くなっている。農村部では、「子どもへのあいさつ・声かけ運動」への期待が高かった。

第1章 親と地域とのつながり

地域社会を組み込むことによって、新しい家庭教育のイメージを探る手がかりを得る。この調査の主なねらいが、ここにあることは序章で述べたとおりである。その家庭教育の主体は、一人ひとりの親である。その主体である親は、地域と一般的にどのようなつながりを持っているのだろうか。この点を明らかにする必要がある。

なぜなら、戦後40年、わが国の社会環境は大きく変化した。とりわけ、この20年、人々の生活圏である地域は、様変わりしてしまった。それに伴って、親も子どもも地域とのかかわりを変えてきた。そのような背景を土台にしながら、実は、家庭教育も大きく変ぼうしてきている。

この調査の基礎認識もそこにある。だからこそ、今、家庭教育の真只中にある親にスポットを当てて考察することにした。そして、その手始めに、本章では、親が地域とどのようにつながっているかを吟味した。40年前、20年前とは、かなり違ったスタイルで、地域とのかかわりを持っている親の像が浮かびでてくるだろうか。何が変り、何が変っていないのだろうか。

では、どのような角度から、親と地域をつながりをみていけばよいのだろうか。ここでは、親の地域へのかかわり方の中で、これからの“地域に開かれた家庭教育”を考える上で、特に重要な条件となるであろう、次の3つの視点から、考えることにした。いずれも、日常的、基礎的な条件ばかりである。

まず第1に、親同士はどのようなつながりを持っているのだろうか。親同士の日常的なつながりの現状を知ることによって、今後、地域における親同士の協力による子育てのネットワークづくりの条件が、どこまで進んできているのかを知ることができるであろう。

第2に、親は、地域の子どもたちにどのように接しているのだろうか。この点を見ることによって、親が“地域の子育て”の主体者として、当面どの程度の役割が期待できるのかの目安がつかめるであろう。

第3に、親は、地域の活動に、どのようにかかわっているのだろうか。地域の諸々の活動への親のかかわり方をみることによって、地域における家庭教育に関する諸活動を企画・立案する場合の条件を考えてみたい。

以上の3つの視点からの考察は、地域まで枠を広げて、家庭教育を見直していこうとする、家庭教育企画推進委員会の問題意識を進める上で、欠かせないものばかりである。そして、より具体的で、より実践的な手がかりを見い出していきたい。

1. 親同士の近所のつきあい

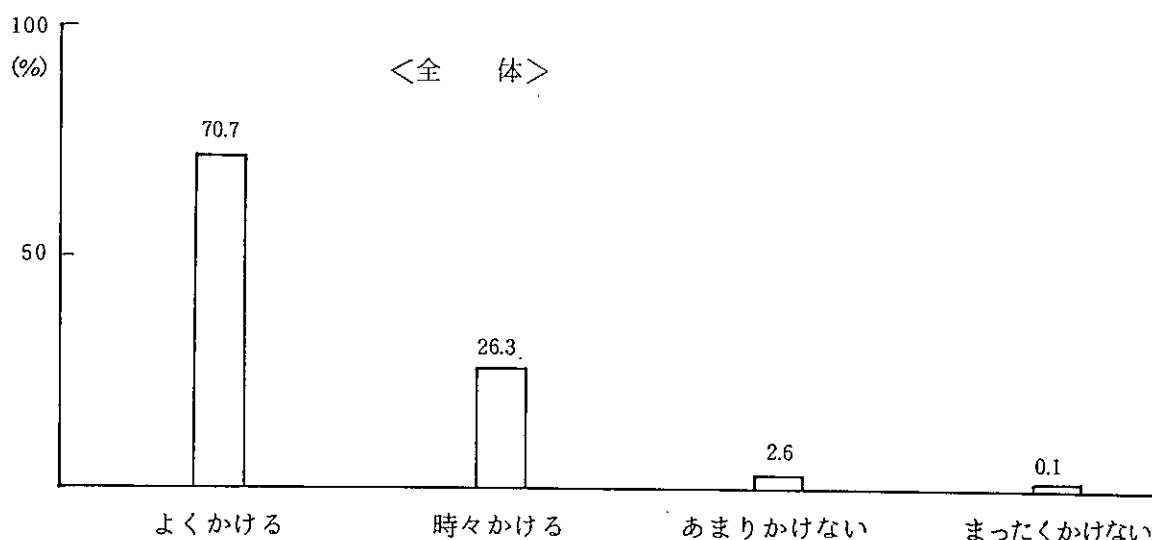
小学生の子どもを持つ親について、その近所とのつきあい方はどうなっているのか、次の5項目について、調査結果をみながら考えていくことにする。

(1) 近所の人への声かけ

近所つきあいというのは、まず、お互いの声かけ・あいさつからはじまると思われるが、その実態はどうであろうか。

「あなたは、近所の人に出会った時、声をかけますか」という問に対して、全体では、(図1-1)のように、「よくかける」と答えた親が70.7%、「時々かける」が26.3%で、合わせると97.0%となり、ほとんどの親が何らかの形で声をかけている。残り3%の親が、近所の人にほとんど声をかけていな

(図1-1) 2.あなたは、近所の人に出会った時、声をかけますか。



い。まったく声をかけないということは、どんな生活形態であろうか。例えば、夫婦共働きで、しかも通勤距離が遠い場合など、朝早く家を出て、夜遅く帰宅するので、近所の人と声をかわす時がない、などということも考えられる。

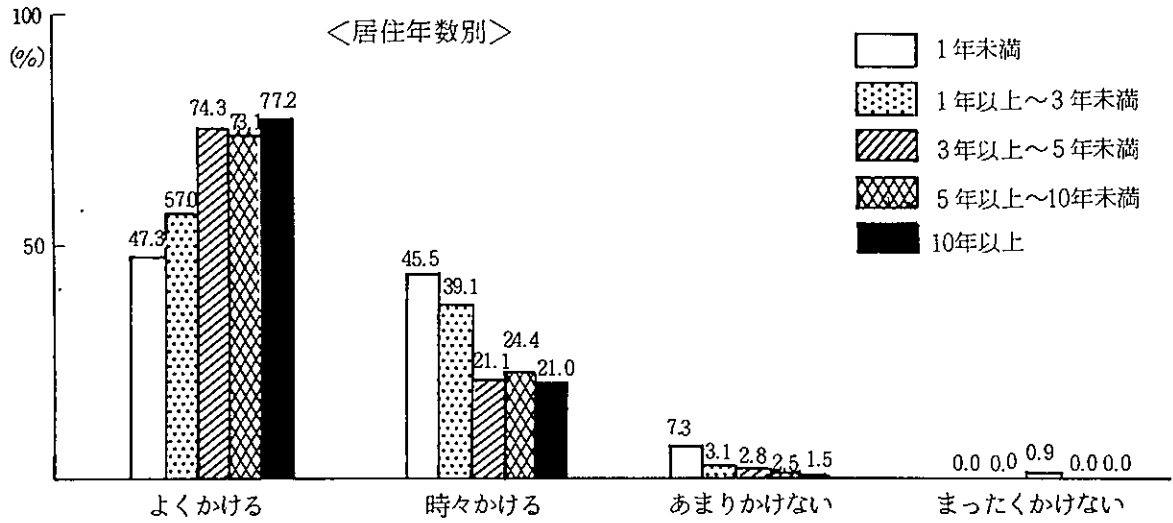
では、年齢別にみるとどうなるだろうか。「よくかける」と答えた親は、30代以下が70.9%、40代以上が70.1%でほとんどかわらない。その他の項についても、同様の割合であることから、年齢による差はあまりないといえる。

次に、居住年数別(図1-2)にしてみると、「よくかける」と答えた親の中では、10年以上の居住者が77.2%と最も多い。「よくかける」と「時々かける」を合わせると、居住1年未満が92.8%、1年以上～3年未満は96.1%、3年以上～5年未満で95.4%、5年以上～10年未満で97.5%、10年以上で98.2%と、いずれも90%以上の親が声をかけている。また、「よくかける」と答えた親が、居住3年以上になったところで、70%台に急に上がり、以後あまりかわらないところから、3年たてば、

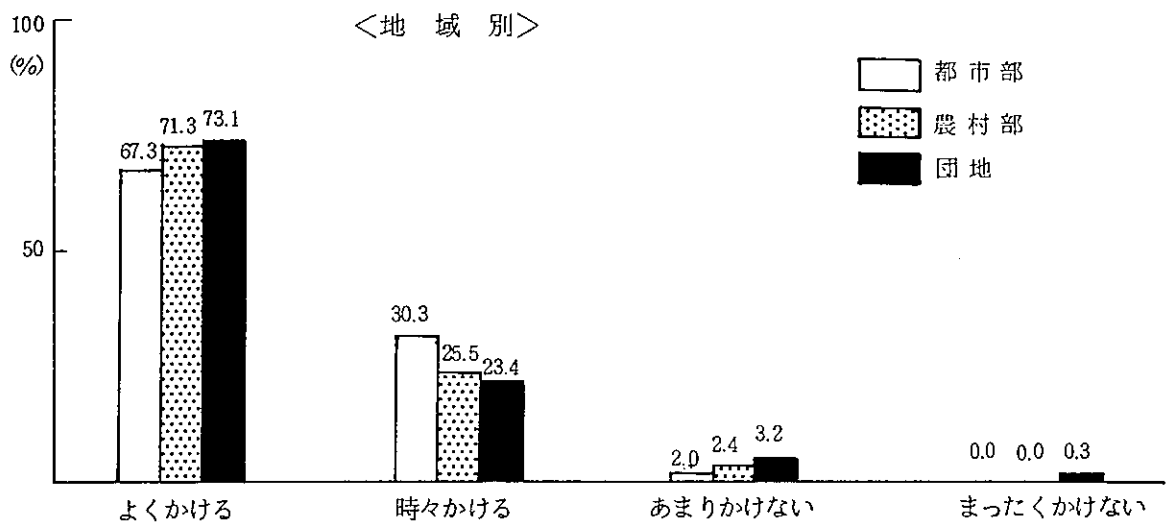
その土地にしっかり慣れるということだろうか。

では、これを地域別(図1-3)にみるとどうなるだろうか。「よくかける」については、団地73.1%、農村部71.3%、都市部67.3%の順で高く、「あまりかけない」と「まったくかけない」を合わせてみても、団地、農村部、都市部の順となっている。

(図1-2) 2.あなたは、近所の人に出会った時、声をかけますか。



(図1-3) 2.あなたは、近所の人に出会った時、声をかけますか。



都市型は、「よく声をかける」というほどではないが、かといって、「まったくかけない」ということもない。深すぎず、浅すぎず、ほどほどのつきあいといえる。

農村型は、昔からの家同士のつきあいということから、ほとんどの人が声をかけるが、農村の家は隣が離れている場合が多いので、顔を合わせる確率は低いことも考えられる。

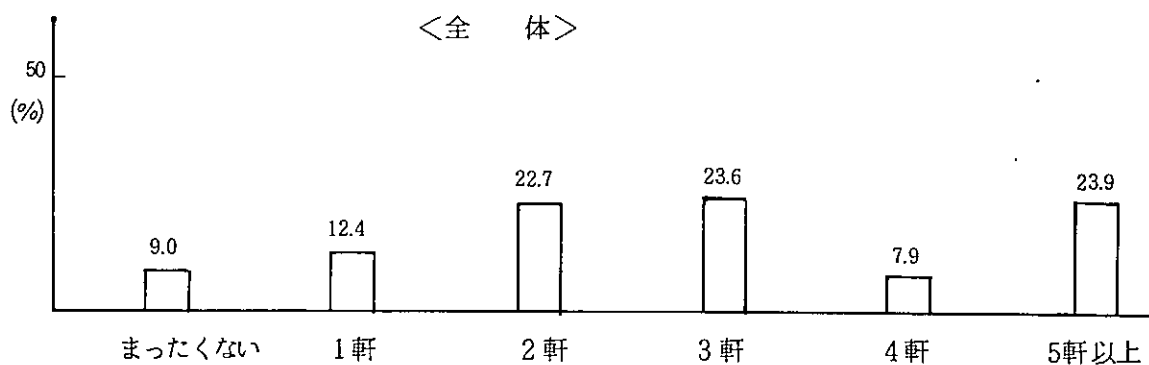
団地型は、その住居形態から隣近所の人と顔を合わせる機会は、都市部、農村部に比べて多いと思われる。そこで、積極的につきあう人も多いが、逆にあまりつき合おうとしない人も多い。団地での、「あまりかけない」と「まったくかけない」を合わせて3.5%の人達にとって、そこは永住の場所ではないということもあろうし、居住年数別のところで出ていたように、まだそこに住んで日が浅いということも考えられる。

最後に、祖父母との同居別に見てみると、「よくかける」と「時々かける」を合わせて、同居している親97.8%、同居していない親96.9%とほとんど差はない。「あまりかけない」「まったくかけない」についても同様である。このことから、近所の人に出会った時のあいさつについては、祖父母と同居している、していないはあまり関係ないと思われる。

(2) 気軽に行き来できる家

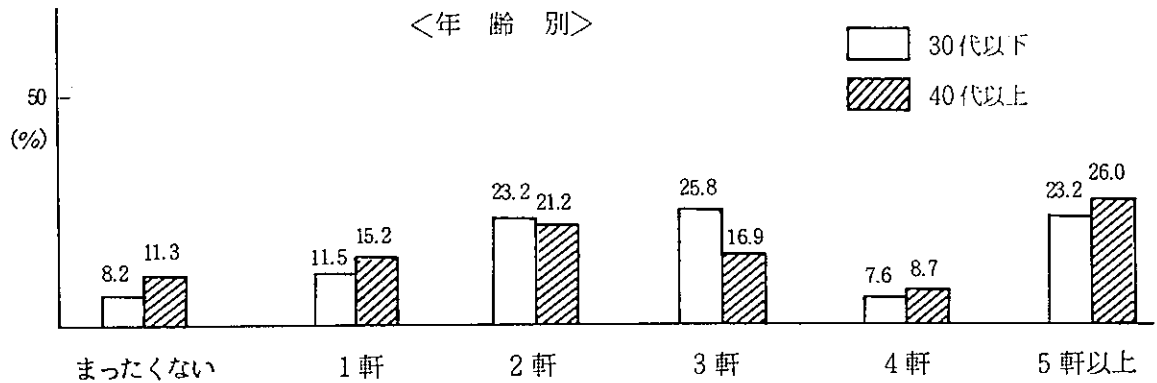
「あなたは、気軽に行き来できる家が、近所に何軒くらいありますか」という問に対して、全体では(図1-4)のように、「5軒以上」と答えた親が多かった。次に多いのが「3軒」で、「まったくない」の答えは9.0%もあった。

(図1-4) 3.あなたは、気軽に行き来できる家が、近所に何軒くらいありますか。



(図1-5)

3.あなたは、気軽に行き来できる家が、近所に何軒くらいありますか。

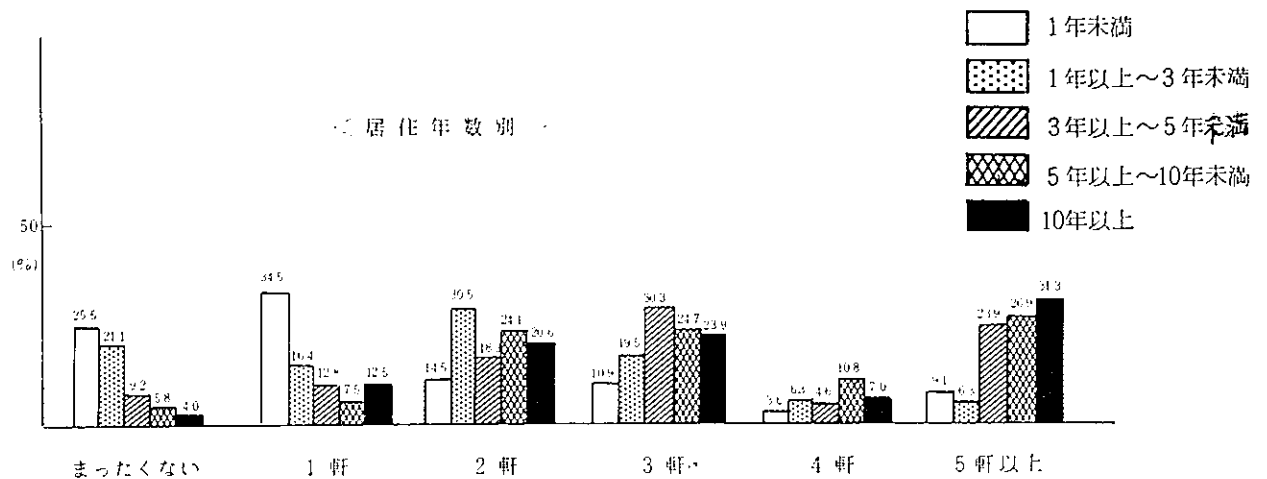


ではこれを、年齢別(図1-5)にみてみよう。「まったくない」と「1軒」は40代以上が多く、「2軒」「3軒」は30代以下が多く、「4軒」以上となると、今度は40代以上が多くなる。そこで、「0～3軒」までを合わせてみると、30代以下で68.7%、40代以上で64.6%と30代以下が多くなり、「4軒以上」となると、30代以下で30.8%、40代以上で34.7%と、40代以上の方が多くなる。40代以上だと居住年数も長くなり、つきあいも広くなるということであろうか。

そこで次に、居住年数別(図1-6)にみてみると、「まったくない」と答えた親は、居住年数が短いほど多くなっている。その割合も、3年を過ぎると急に低くなっているところから、その土地に慣れるのに3年はかかるということであろうか。

(図1-6)

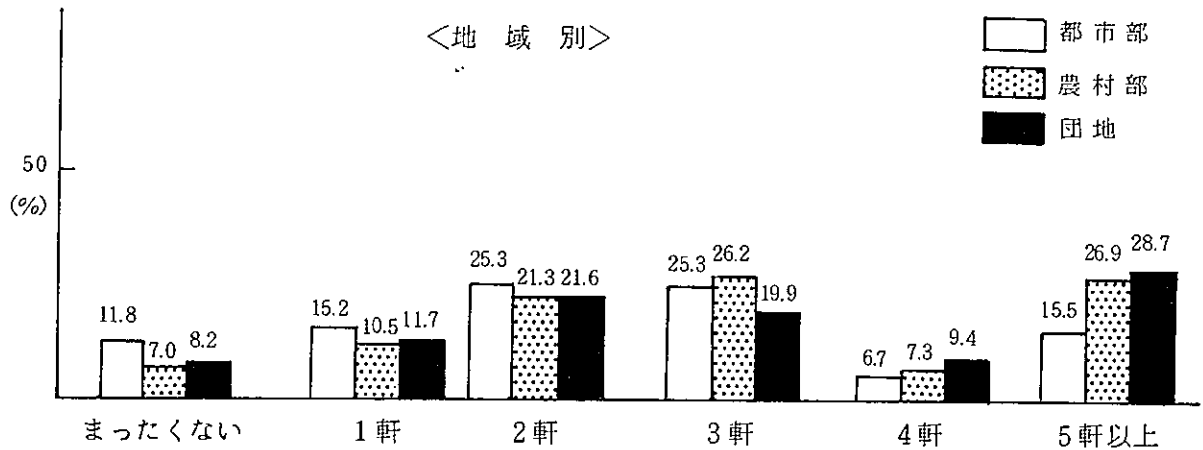
3.あなたは、気軽に行き来できる家が、近所に何軒くらいありますか。



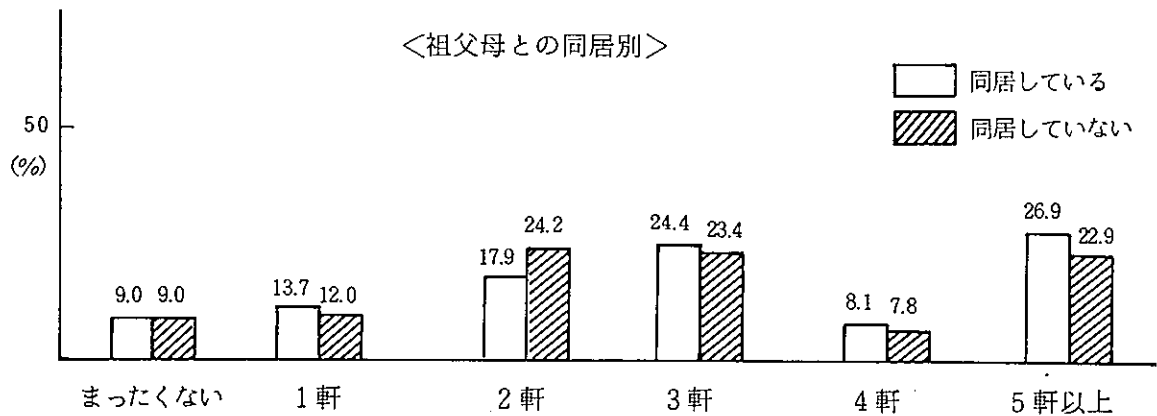
また、「1軒」は1年未満が、「2軒」は1年以上～3年未満が、「3軒」は3年以上～5年未満が、「4軒」は5年以上～10年未満が、「5軒以上」は10年以上が、それぞれ最も多くなっており、居住年数と気軽に行き来できる軒数とは比例しているようである。しかし、居住1年未満についてみ

ると、「まったくない」と「1軒」を合わせると60%と高いのは当然だとしても、「5軒以上」と答

(図1-7) 3.あなたは、気軽に行き来できる家が、近所に何軒くらいありますか。



(図1-8) 3.あなたは、気軽に行き来できる家が、近所に何軒くらいありますか。



えた親が9.1%もいたことは、居住地域との関連も考えてみる必要があるようだ。

そこで、地域別(図1-7)にしてみると、「まったくない」から「3軒」までを合わせると、都市部では77.6%、農村部では65.0%、団地では61.4%となる。居住年数が長いと思われる農村部よりも、団地の方が行き来できる軒数が多いということは、団地の構造上と合わせて、家族構成、年齢、生活程度など似た家族が多いことから、お互い気をつかわずに、そして同時に多くの人々とも行き来できるということではなかろうか。

最後に、祖父母との同居別(図1-8)でしてみると、同居している親の方が、「2軒」をのぞいて、すべて高い割合となっている。「1軒」と「2軒」を合わせてみると、同居者は31.6%、非同居者は36.2%となり、非同居者の方が高くなっているが、「3軒以上」で見ると、同居者59.4%、非同居者54.1%と同居者の方が高くなっている。このことから、祖父母と同居している親の方が、近所づきあいが広いといえる。

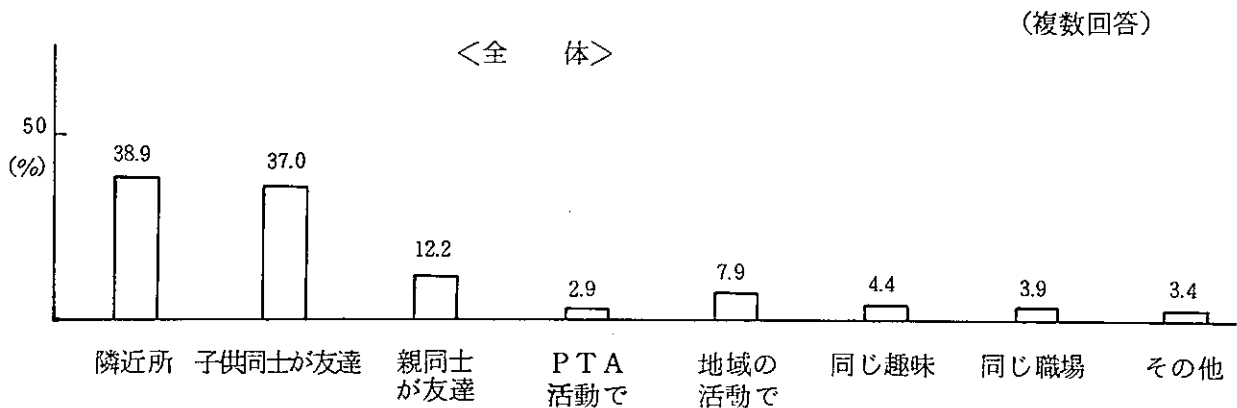
(3) 親しくなったきっかけ

近所同士親しくなるには、いろいろなきっかけがあるが、近所で最も親しい家とそうなったきっかけについて聞いてみた。(複数回答)

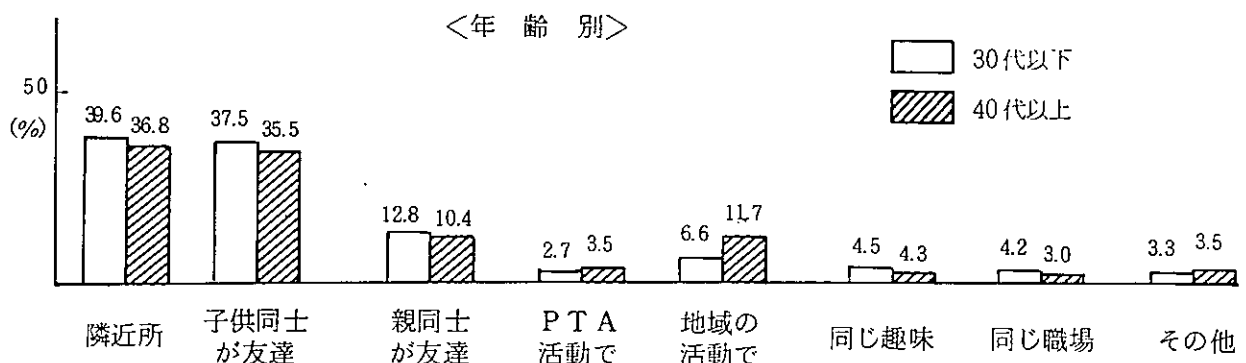
全体では、(図1-9)のとおり、1位「隣近所」、2位「子ども同士が友達」、3位「親同士が友達」、4位「地域の活動で」、5位「同じ趣味」、以下「同じ職場」、「その他」、「PTA活動で」という順になっている。1位の「隣近所」については、ただ単に距離が近いということが重要なきっかけとなっている。2位の「子ども同士が友達」については、子ども同士のつながりが親同士のつながりへと広がっていくことは確かに多い。3位の「親同士が友達」という場合については、父親の場合だと幼なじみということもあろうし、母親の場合だと年齢が近いということもあろう。

そこで、親しくなったきっかけを回答者の年齢別(図1-10)にみると、あまり差はみられない。ただ、「地域の活動で」と答えた人が、40代以上が30代以下より5.1%多いことが、いくぶん目立つ程度である。40代以上の回答者については、50代の人と60代の人が含まれるが、地域の活動の中心的

(図1-9) 4.あなたは、近所で最も親しい家とはどんなきっかけで、そうになりましたか。



(図1-10) 4.あなたは、近所で最も親しい家とはどんなきっかけで、そうになりましたか。



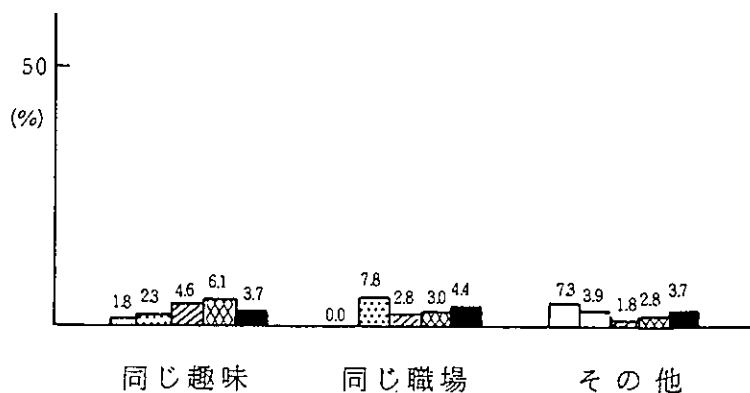
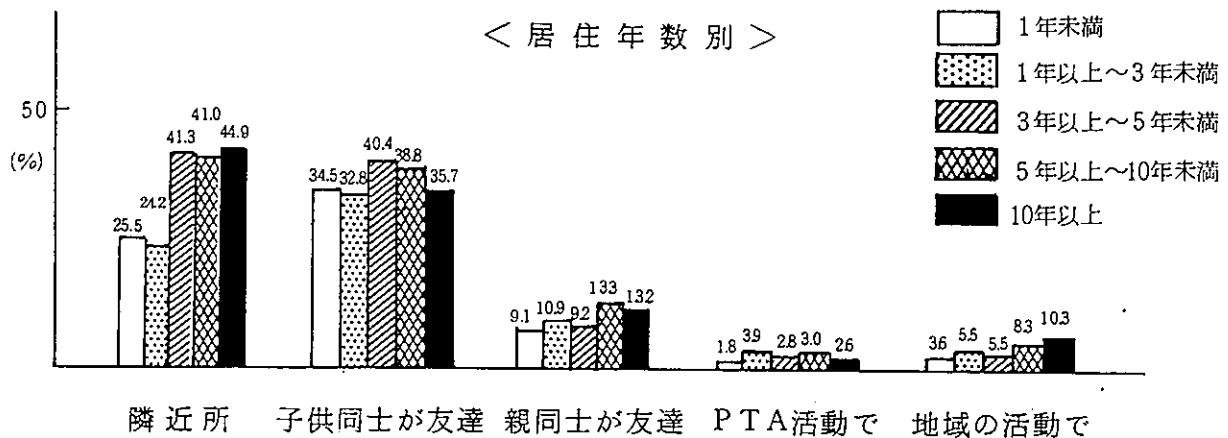
な立場の人が多いのではないかとと思われる。

次に、居住年数との関連をみていくと、(図1-11)のとおり、居住年数が1年未満の場合は、「隣近所」という理由よりもむしろ、子どもがきっかけになっていることが多い。3年以上になると、どの項目についてもあまり大差はない。このことから親しくなるきっかけについては、距離的に近いということの他にもう一つ、居住年数が長いということも大きいようである。

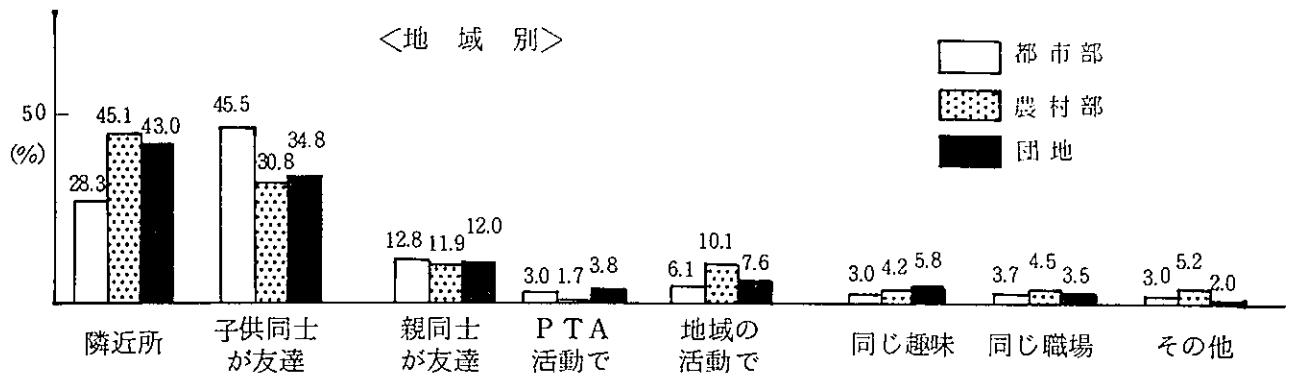
また、これらを地域別(図1-12)でみてみると、都市部では、「隣近所」よりも「子ども同士が友達」の方が17.2%も多い。農村部と団地では、「地域の活動」が少し農村部が高くなる程度で、あとはどの項目についてもほとんどかわらない割合となっている。「地域の活動」で農村部が少し他より高くなっているのは、村まつり・共同農作業等、他の地域に比べてやや活動が活発で、つながりが深いと思われる。

それでは、祖父母との同居別(図-13)でみると、祖父母との同居の場合の「隣近所」は47.0%で、非同居の36.3%に比べ、ずいぶん高くなっているし、「子ども同士が友達」では、非同居者の方が高くなっている。このことを地域別でみた結果と考え合わせると、同居者は非同居者に比べて、子ども

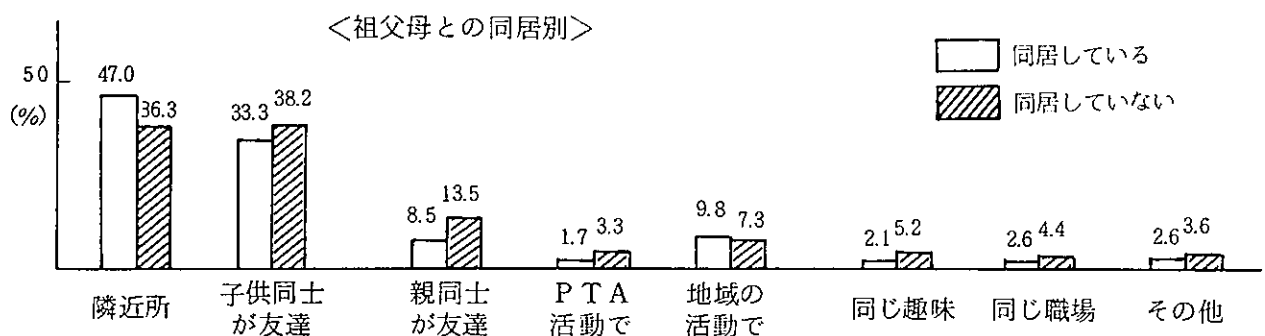
(図1-11) 4.あなたは、近所で最も親しい家とはどんなきっかけで、そうになりましたか。



(図1-12) 4.あなたは、近所で最も親しい家とはどんなきっかけで、そうになりましたか。



(図1-13) 4.あなたは、近所で最も親しい家とはどんなきっかけで、そうになりましたか。



以前にすでに家同士のつきあいが深いといえるのではないだろうか。

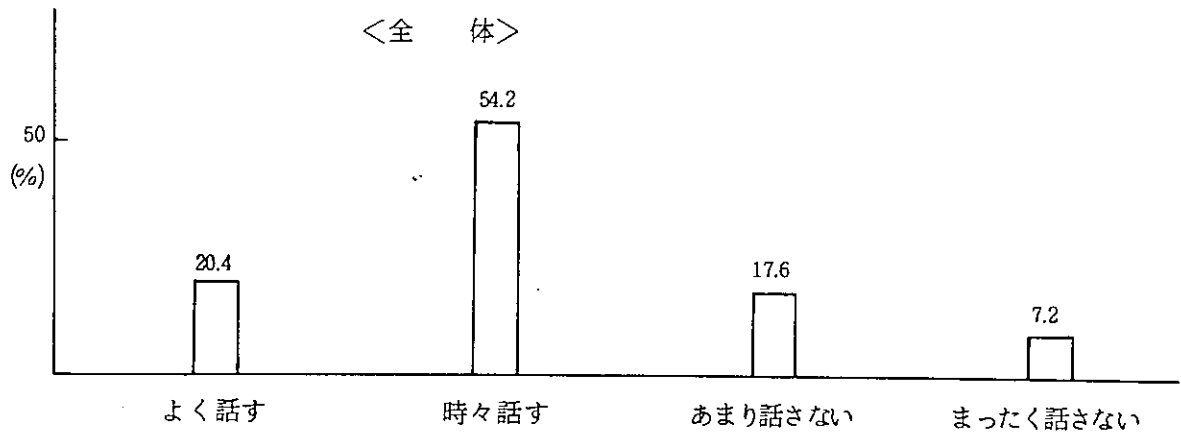
年齢別、居住年数別、地域別、祖父母との同居別にみても、いずれの場合でも、「隣近所」と「子ども同士が友達」がその大きなきっかけになっているが、少し気になることは、P T A活動を通して親しくなるということが非常に少ないということである。このことは、P T A活動が学校の中に限られていて、地域活動としての広がりにないのではないかと思われるからである。

(4) 家庭教育の話題

子どもを持つ親ならだれでも、子育てのさまざまな悩みをかかえている。そして、それを誰かに話して解決していこうとする。では、そのことを、近所の人とどの程度話すだろうか。

全体では、(図1-14)のように、「時々話す」が最も多くなっている。また、「よく話す」と「時

(図-14) 5.あなたは、家庭教育について、近所の人と話しますか。

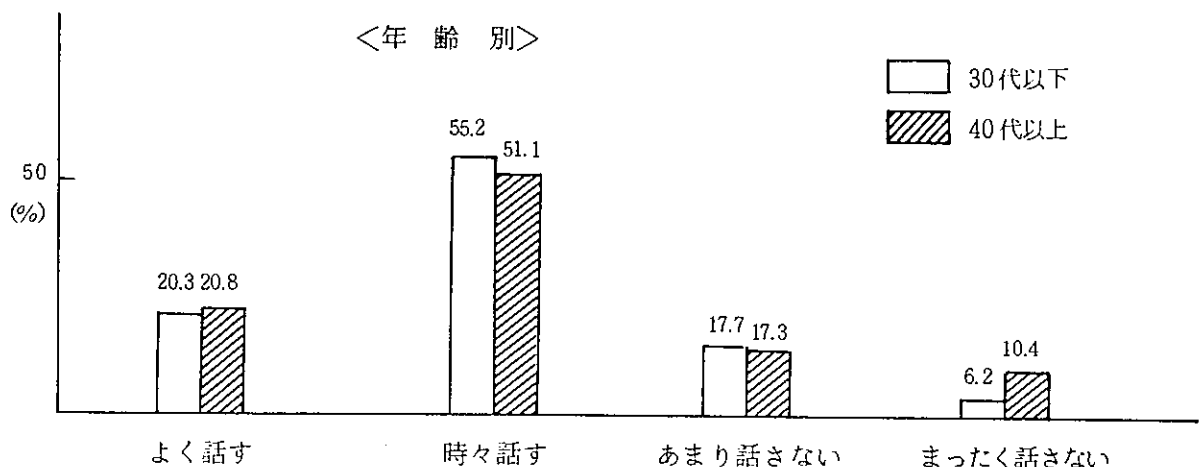


「よく話す」と「時々話す」を合わせると74.6%、「あまり話さない」と「まったく話さない」の合計が24.8%で3対1の割合になっている。

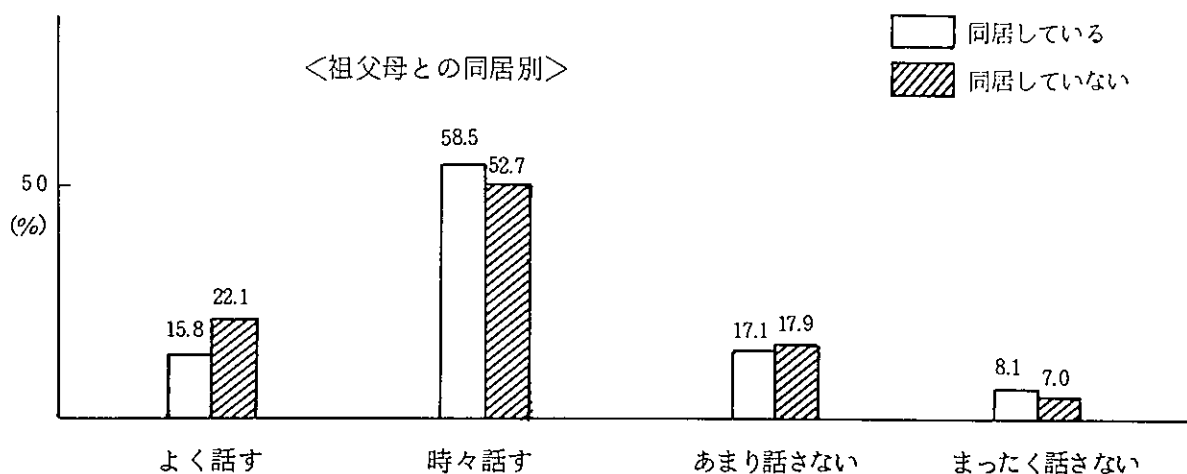
では、これを年齢別(図1-15)にみるとどうであろうか。どの項目についても大差はみられないが、「よく話す」と「時々話す」を合わせてみると、30代以下で75.5%、40代以上で71.9%、「あまり話さない」と「まったく話さない」を合わせてみると、30代以下で23.9%、40代以上で27.7%となり、子どもにあまり手がかからなくなって、外に働きに出る人が多くなる40代以上の場合は、近所よりも職場での人間関係の中で話題にすることが多くなるのではなかろうか。ところで、祖父母と同居している場合は、近所の人に相談する前に、子育ての先輩である祖父母に相談し、解決することもあるのではなかろうか。

そこで、祖父母との同居別(図1-16)でみると、「よく話す」と答えた親が、同居者が15.8%に対し、非同居者22.1%。「時々話す」と答えた親が同居者58.5%、非同居者52.7%となっているが、「よく話す」と「時々話す」を合わせてみると、同居者、非同居者とも約75%となり、ほとんど差はみられない。このことから、祖父母と同居している、同居していないは、あまり関係ないと思わ

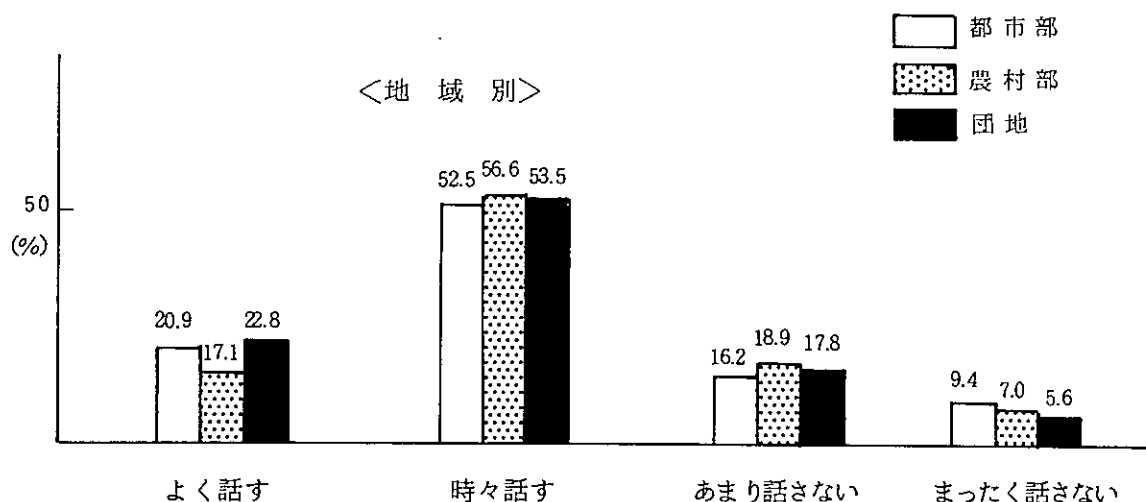
(図1-15) 5.あなたは、家庭教育について、近所の人と話しますか。



(図1-16) 5.あなたは、家庭教育について、近所の人と話しますか。



(図1-17) 5.あなたは、家庭教育について、近所の人と話しますか。

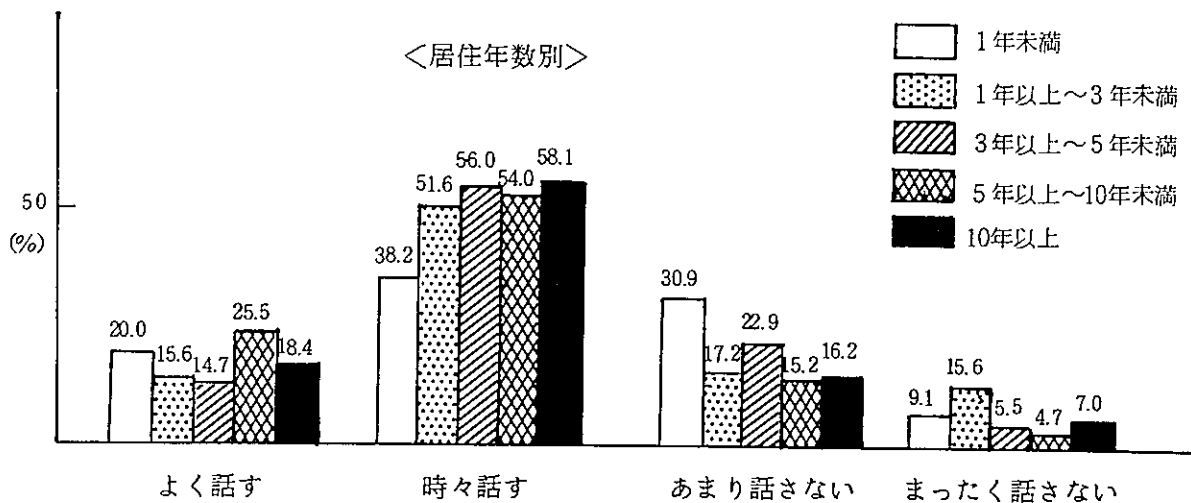


れる。

次に、居住地域との関連をみてみよう。(図1-17)のように、「よく話す」については、団地、都市部、農村部と人口密度の高い順になっているが、これを「時々話す」と合わせてみると、都市部73.4%、農村部73.7%、団地76.3%となり、農村部と都市部の順序が入れかわるが大きな差はない。次に、「あまり話さない」と「まったく話さない」を合わせてみると、都市部25.6%、農村部25.9%、団地23.4%と、団地が最も低くなっている。

次に、居住年数別(図1-18)でみてみると、「あまり話さない」と「まったく話さない」を合わせてみると、1年未満40.0%、1年以上～3年未満32.8%、3年以上～5年未満28.4%、5年以上～10年未満19.9%、10年以上23.2%となっていて、ほぼ、居住年数が長くなれば、だんだん低くなっている。

(図1-18) 5.あなたは、家庭教育について、近所の人と話しますか。



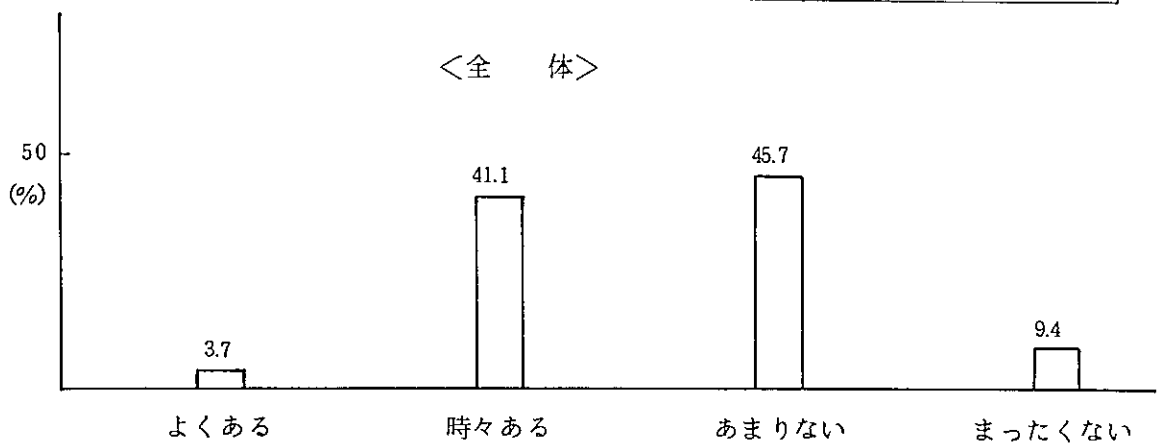
「家庭教育について、近所の人と話しますか」という質問の解答については、「あまり話さない」「まったく話さない」の割合が高いように思うが、子育ての話などは、近所よりも職場で話すことが多かったり、電話の普及によって、少々家が離れていても、電話で話せるなどを考え合わせると、親同士の人間関係も、隣近所に限られた時代から、ずいぶん変わってきていると思われる。

(5) 近所づきあいのわずらわしさ

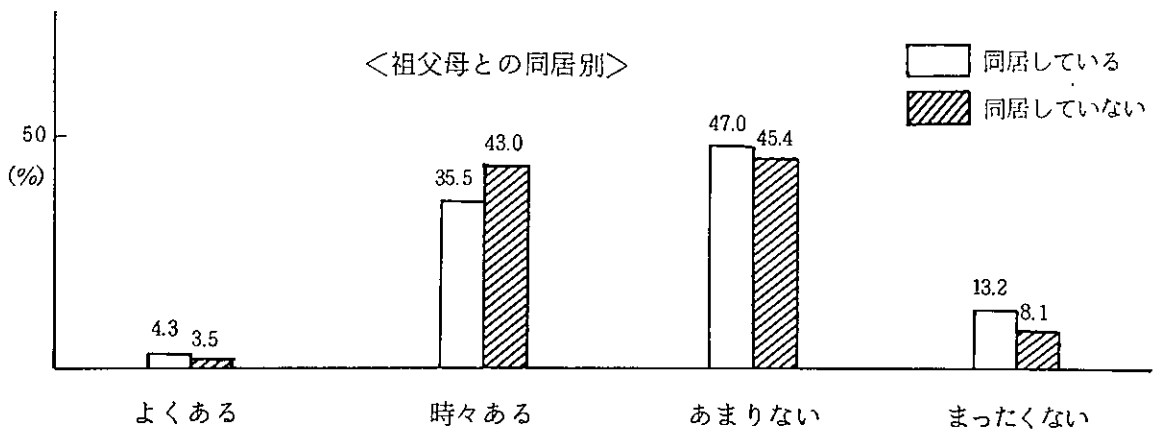
“遠くの親戚より近くの他人”といわれるように、何かあった時、すぐ頼める近所があるということとは、本当に助かるが、さて、日常のつきあいとなると、親はどのように考えているのだろうか。

全体では、(図1-19)のように、わずらわしいと思うことが「よくある」と答えた親が3.7%、「時々ある」と答えた親が41.1%となっている。「よくある」と「時々ある」を合わせると44.8%、「あまりない」と「まったくない」を合わせると55.1%となり、あまりわずらわしいと思わない親の方がわずかに多い。また、祖父母と同居している場合は、祖父母がわずらわしい部分を肩代りしてくれるのではないだろうか。

(図1-19) 6.あなたは、近所の人とのつきあいをわずらわしいと思うことがありますか。



(図1-20) 6.あなたは、近所の人とのつきあいをわずらわしいと思うことがありますか。

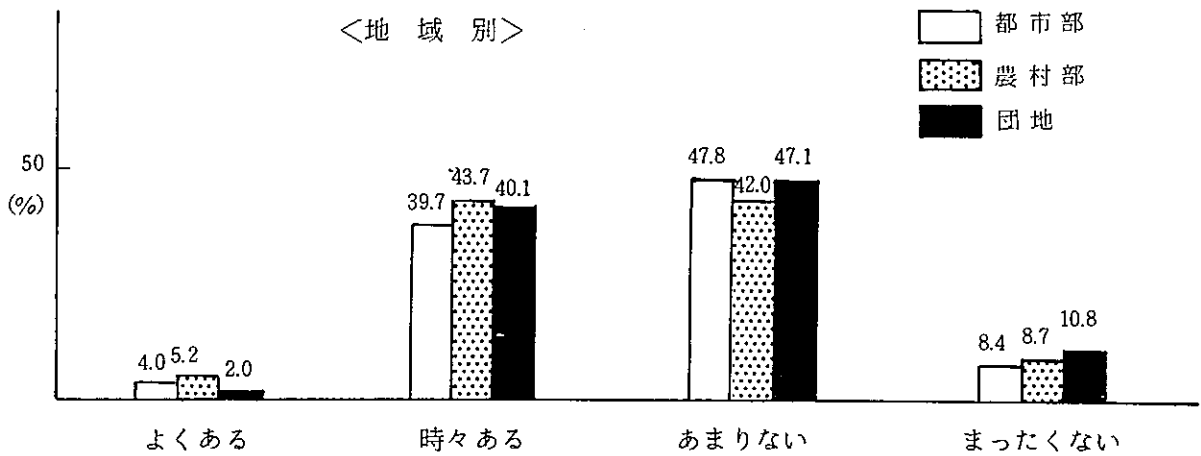


そこで、祖父母との同居別(図1-20)にみると、「よくある」と「時々ある」を合わせると、同居者39.8%、非同居者46.5%となる。また、「あまりない」と「まったくない」を合わせると、同居者60.2%、非同居者53.5%となり、祖父母と同居している親の方が、わずらわしいと思うことが少ないようだ。

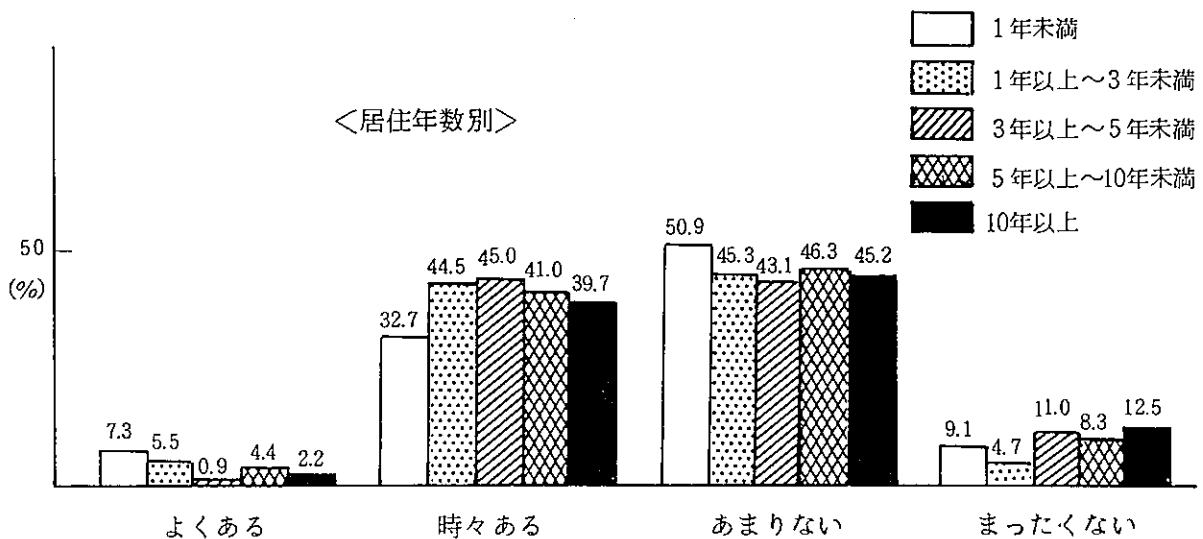
それでは、地域別(図1-21)にみると、どうなるだろうか。「よくある」と「時々ある」を合わせると、都市部43.7%、農村部48.9%、団地42.1%となり、一番わずらわしさを感じているのは農村部であるようだ。農村部では近所づきあいの程度が、昔ながらのつきあい方で、個人的なつきあいよりも家同士のつきあいが多く、そうしたい、そうしたくないにかかわらず、つきあわなければならないといった点から、わずらわしさが出てくるのだろうか。そういった意味からは、農村部、都市部、団地の順で、だんだんつきあいの程度が浅くなっているともいえる。

では、居住年数別(図1-22)にみてみよう。「よくある」と「時々ある」を合わせると、1年未満40.0%、1年以上～3年未満50.9%、3年以上～5年未満45.9%、5年以上～10年未満45.4%、10

(図1-21) 6.あなたは、近所の人とのつきあいをわずらわしいと思うことがありますか。



(図1-22) 6.あなたは、近所の人とのつきあいをわずらわしいと思うことがありますか。



年以上41.9%となっているが、1年未満というのは、まだわずらわしさを感じるほどのつき合いはなさそうである。それが1年がすぎ、2年、3年となってくると、だんだん近所とのつき合いも多くなり、そのわりに、まだ気心が知れないところがあって、わずらわしさも最高に達する。しかし、3年をすぎる頃から、やっとその土地にも慣れ、人間関係も安定し、だんだんわずらわしさも少なくなるようだ。親の年齢別ではあまり差がないということから、やはり居住年数の方がその関連性が高いといえよう。

近所のつきあい方も、ずいぶん変わってきている。お互いの生活には深く干渉しないつきあい方が都市部、団地では多くなってきているのではないだろうか。冠婚葬祭のあり方もずいぶん変わってきていることから考えても、それが良い悪いは別にして、近所つきあいが次第に希薄なものになってきていることは確かであろう。

2. 親と地域の子どものつながり

家庭生活を明るくするおいのある、しかも親子関係がより確かなものに高められていかなければならないことは論をまたないところである。しかし、家庭生活が近隣社会とのかかわりによって、より一層充実し発展することは万人が知っているところであろう。

地域社会における連帯感の欠如や人間関係の疎外が、ちまたで常に問題とされていることは誠に淋しいことである。核家族化が進み、少子家庭の増加傾向が、このことに一段と拍車をかけていると考えられる。

一方、子どもたちの日常生活は、核家族化や少子家庭とにかかわりなく、親しい友人や遊び友だちを求めて、隣近所の友人や地域の友だちへと遊びの仲間づくりを中心に生活圏は広がりを見せている。子どもにとっては、このような仲間づくりや遊びが自然に繰り返される日常生活が大事なことはいうまでもないことである。この日常生活がさまざまな生活学習として重要な意味あいを持っていることに着目しなければならないと考えられる。

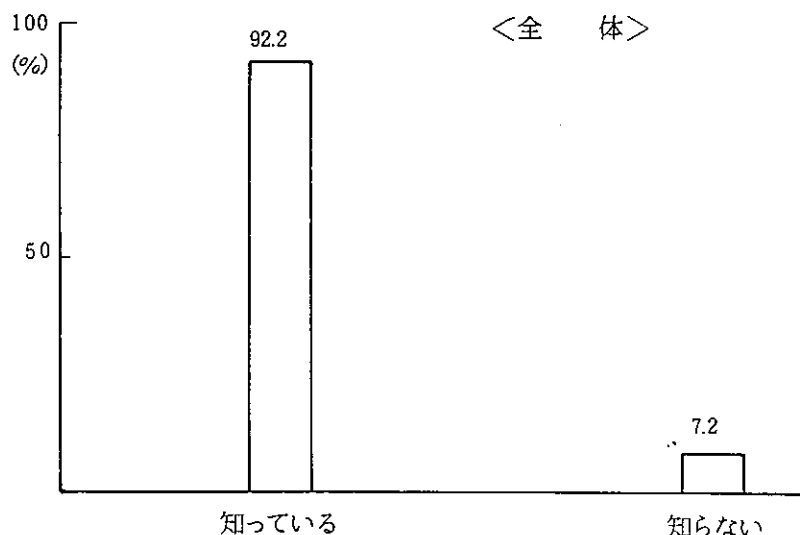
子どもの養育責任のある親が、このような意味から近隣生活への関心を高め、地域へのつながりを深めることは、子どもの健全育成に大切なことである。ここでは、子どもの日常生活圏における交流関係と親の地域の子どもに対する生活態度について考えてみることにした。

(1) 親しい友だち

わが子の最も親しい友だちを、親がどの程度知っているかを調査したものである。

全体では、(図1-23)のように、「知っている」が92.2%、「知らない」が7.2%であり、90%

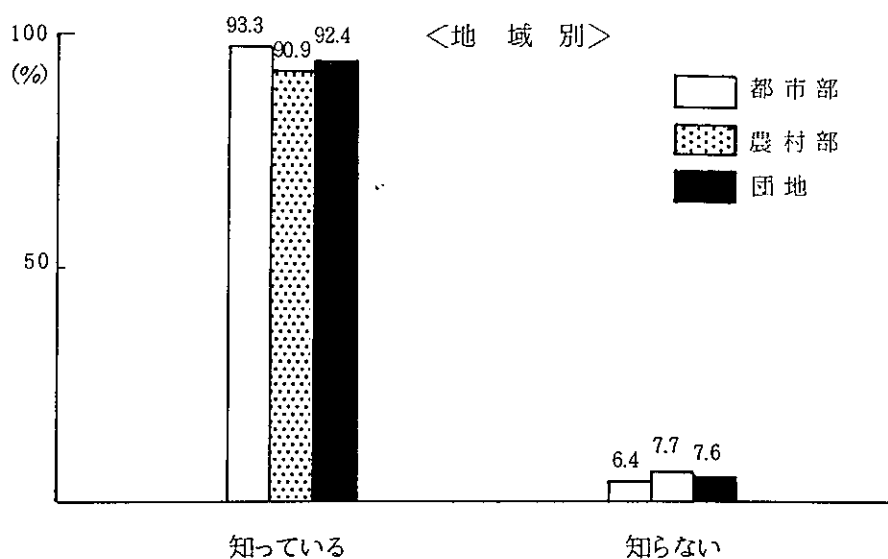
(図1-23) 7.あなたは、お子さんの最も親しい友達を知っていますか。



以上の親が、子どもの最も親しい友だちを知っているようだ。

地域別(図1-24)にみると、「知っている」では、都市部93.3%、団地92.4%、農村部90.9%の

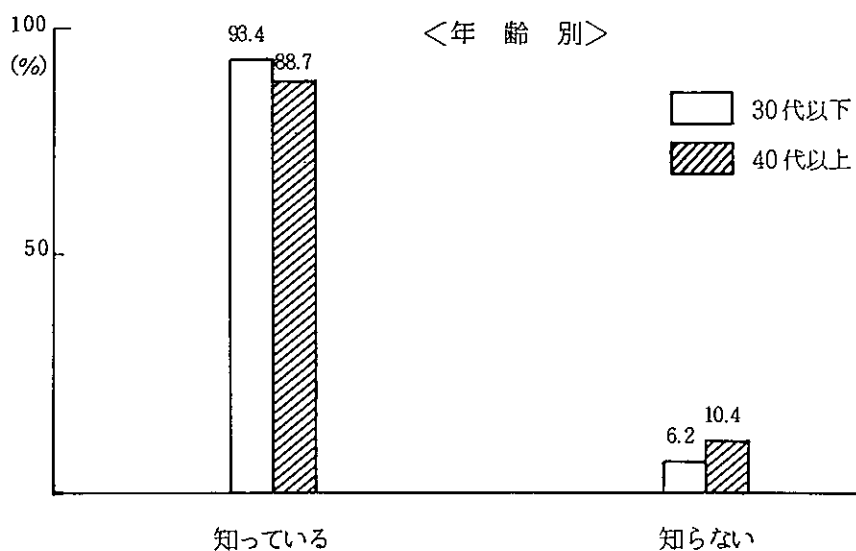
(図1-24) 7.あなたは、お子さんの最も親しい友達を知っていますか。



順で高く、わずかではあるが、都市部の親が、他の地域の親より、子どもの最も親しい友達を知っている割合が多くなっている。

年齢別(図1-25)では、40代以上の親は、「知っている」88.7%、「知らない」が10.4%であり、子どもの親しい友だちを知らない親が1割強であった。30代以下の親は、「知っている」93.4%で、

(図1-25) 7.あなたは、お子さんの最も親しい友達を知っていますか。

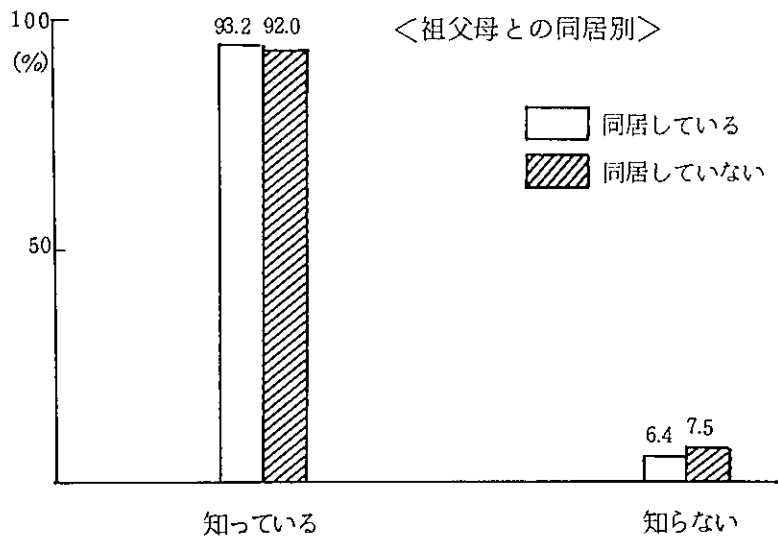


若い親の方が、子どもの友だちをよく知っているようである。

祖父母との同居別(図1-26)については、同居者の方が、「知っている」93.2%、「知らない」6.4%と、非同居者より知っているのがやや高い結果となっている。子どもと親との対話や子どもの

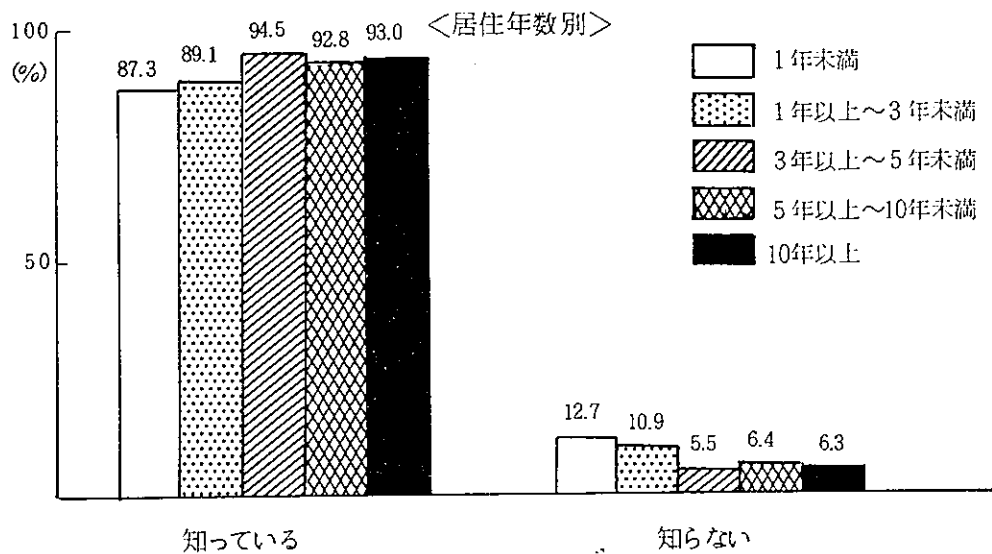
交流が、祖父母との同居家族の方が多いといえるのではなかろうか。

(図1-26) 7.あなたは、お子さんの最も親しい友達を知っていますか。



最後に、居住年数別(図1-27)にみると、3年を境に、「知っている」も「知らない」でも5.4%の差がでている。このことから、3年たてば、ほとんどの親が、自分の子どもの最も親しい友だちを知るようになるようだ。

(図1-27) 7.あなたは、お子さんの最も親しい友達を知っていますか。



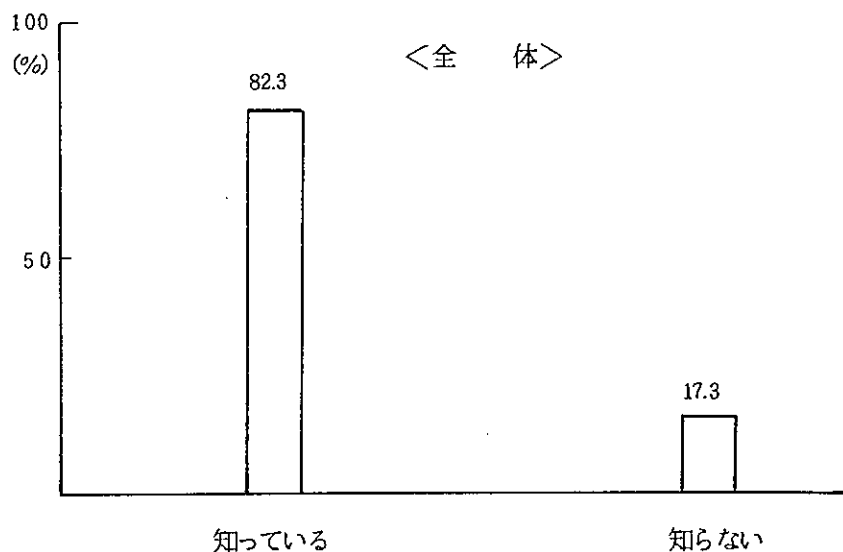
(2) 親しい友だちの親

子どもの生活圏や子どもの遊び友だちについてよく熟知しておくことは、親として当然のことであろうと思う。前問で、子どもの「最も親しい友だち」について調査結果をみたが、ここでは、その「最

も親しい友だちの親」をどの程度知っているかを調べてみた。

全体では、(図1-28)のように、「知っている」が82.3%、「知らない」が17.3%となっている。子ども同士の交流については、話や遊びの行き来で、親は、親しい友だちを知る機会が多いとみられるが、その親も知っているということは、かなり地域での交流が必要ではないだろうか。そのため、

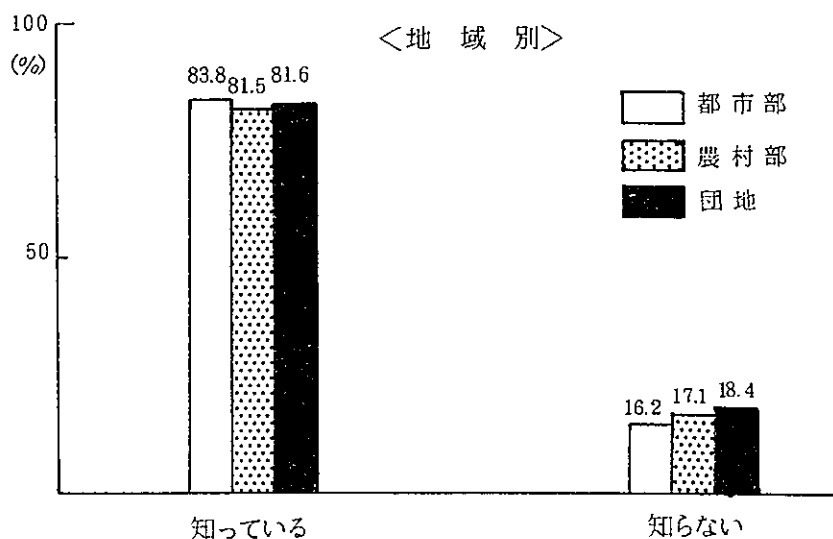
(図1-28) 8.あなたは、お子さんの最も親しい友達の親を知っていますか。



「知らない」と答えた親が17.3%とかなり高い結果がでたようだ。

それでは、地域別(図1-29)にみてみよう。「知っている」では、都市部83.8%、団地81.6%、農村部81.5%であり、わずかではあるが、都市部の親の積極性がでているようだ。「知らない」では、団地の親が18.4%とわずかに多く、団地の特徴をあらわしているようだ。

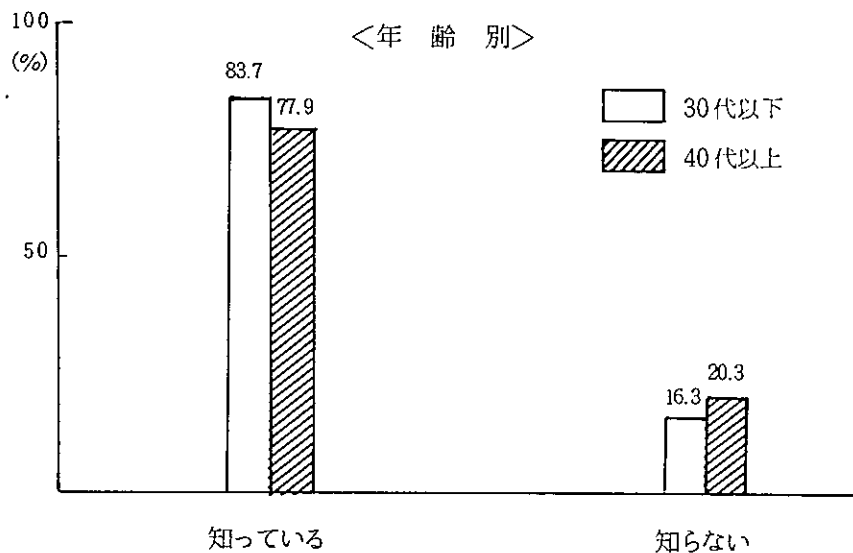
(図1-29) 8.あなたは、お子さんの最も親しい友達の親を知っていますか。



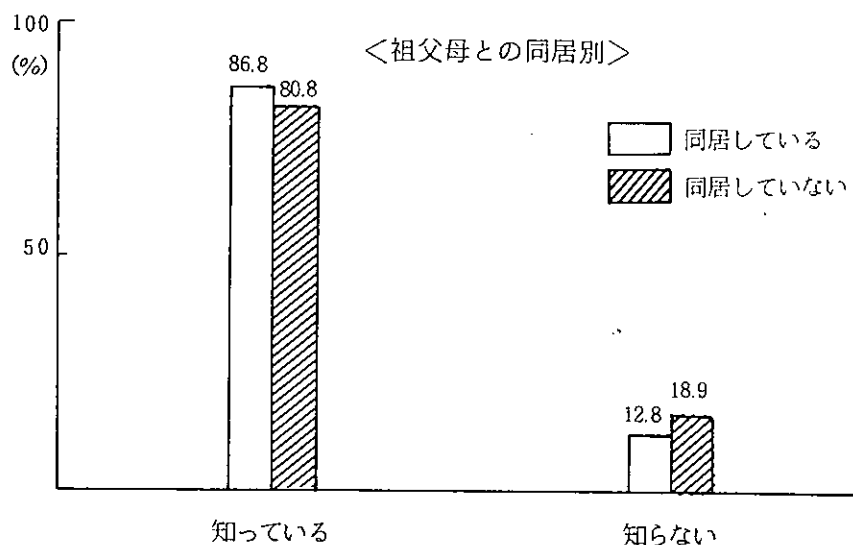
次に、年齢別（図1-30）にみると、「知っている」が、30代以下では83.7%、40代以上は77.9%とやや開きがあらわれている。「知らない」についても同様に30代以下の16.3%に対し、40代以上は20.3%という結果がでている。若い親の方が、子どもの友だちと同じように、その親についてもよく知っているようである。

祖父母との同居別（図1-31）にみると、「知っている」「知らない」でそれぞれ6%ほどの違いがみられる。このことは、子どもの交流をとおして、相互の家庭や親のようすなどを知りあうことに、祖父母の存在が、かなりの影響を与えているといえるのではなかろうか。

（図1-30） 8.あなたは、お子さんの最も親しい友達の親を知っていますか。

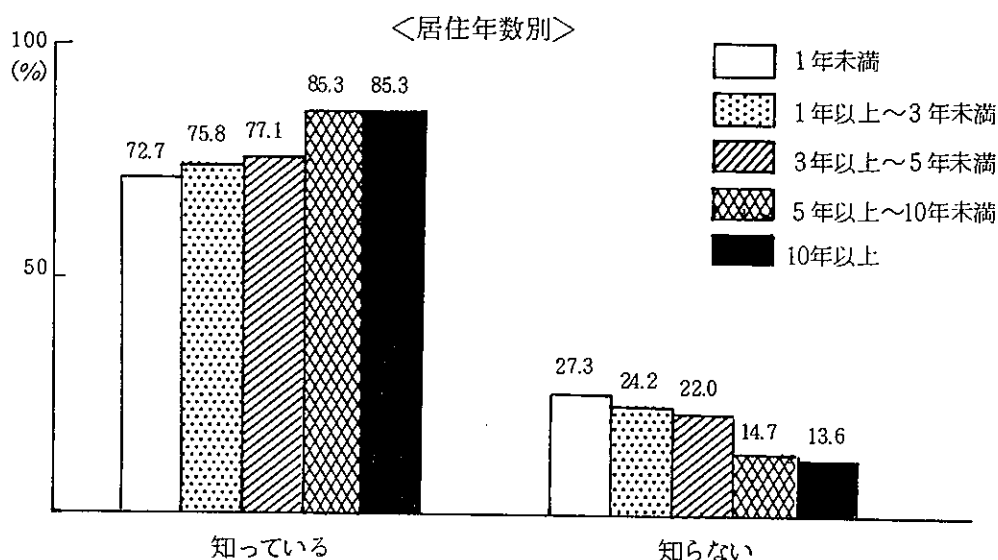


（図1-31） 8.あなたは、お子さんの最も親しい友達の親を知っていますか。



最後に、居住年数別（図1-32）にみると、「知らない」と答えた親が、1年未満で27.3%、1年以上～3年未満で24.2%、3年以上～5年未満で22.0%と、かなりの高率を示している。居住年数が短いことは、子どもの親しい友だちの親を知るまでのかかわりには至っていない家庭が多いということがいえる。また、「知っている」と答えた親は、5年以上になると85%を上まわるようになり、そ

（図1-32） 8.あなたは、お子さんの最も親しい友達の親を知っていますか。



れまでの70%台から一挙に高くなっている。それで、前問と比べてみると、3年をすぎると、子どもの親しい友だちをほとんどの親が知るようになり、5年をすぎると、その親とも知り合いになるようである。

（3）あいさつや声かけ

親が近所の子どもたちとどのようなかかわりをもっているかを、「あいさつをしたり、声をかけたりしますか」という問で調査をした。オアシス運動とかコスモス運動が展開されているが、常に身近かにいる近所の子どもたちとのあいさつや声かけはどのような傾向にあるかを考えてみたい。

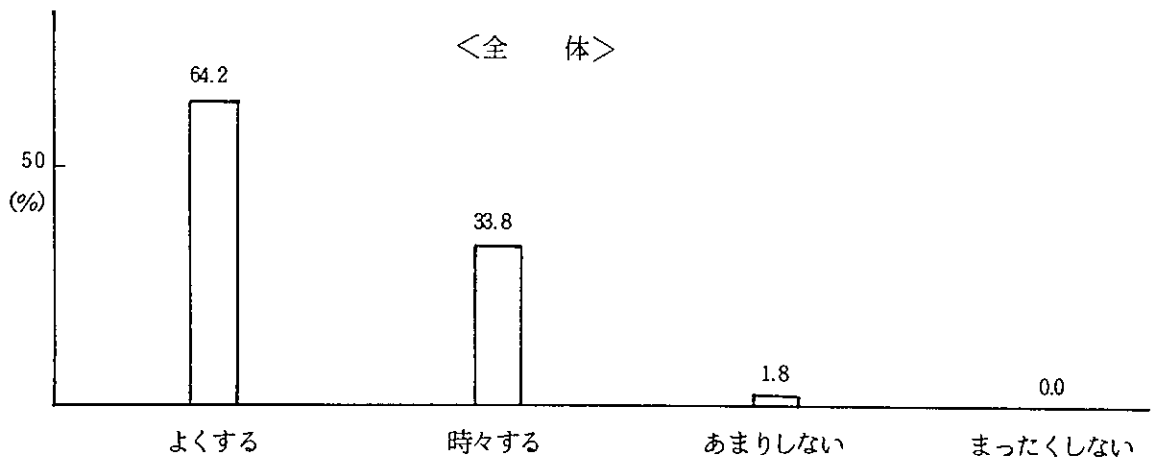
全体では、（図1-33）のように、「よくする」が64.2%、「時々する」が33.8%、「あまりしない」が1.8%という結果である。「よくする」と「時々する」を合わせると98.0%となる。大人と近所の子どもたちとのあいさつや声かけは大変重要である。「おはよう、こんにちは、さようなら」のあいさつだけは、是非とも100%達成へ努力していきたいものである。

地域別では、団地の「よくする」が65.8%と他に比してやや高い程度で、あまり差はない。

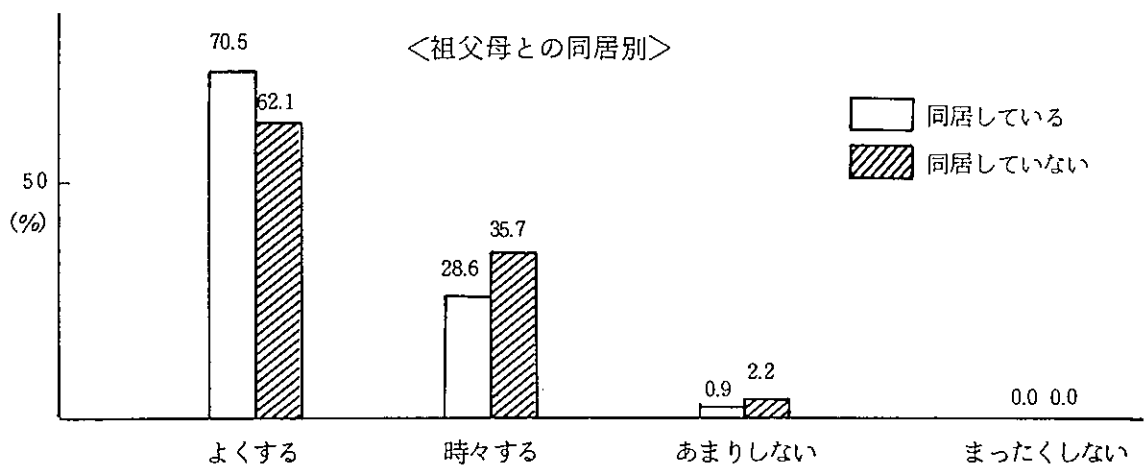
年齢別では、30代以下より40代以上の親が、「よくする」でわずかに高い結果がでている。

祖父母との同居別（図1-34）では、「よくする」と答えた親は、同居者が70.5%、非同居者が62.1%で、8.4%同居者の方が多くなっている。ここでも、祖父母の存在が、近所の子どもたちとの交流にかなりの好影響を与えているといえそうである。

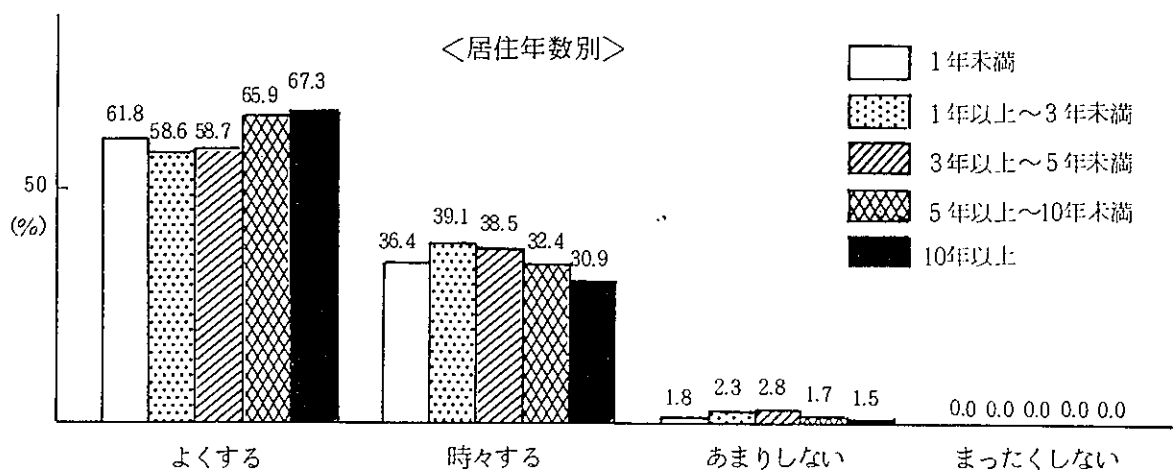
(図1-33) 9.あなたは、近所の子どもさんに出会った時、あいさつをしたり、声をかけたりしますか。



(図1-34) 9.あなたは、近所の子どもさんに出会った時、あいさつをしたり、声をかけたりしますか。



(図1-35) 9.あなたは、近所の子どもさんに出会った時、あいさつをしたり、声をかけたりしますか。



最後に、居住年数別（図1-35）にみると、「よくする」は5年以上～10年未満で65.9%、10年以上で67.3%と高い結果がでていいる。居住年数が5年以上になると、近所の子どもへのあいさつや声かけを、「よくする」ようになるようだ。

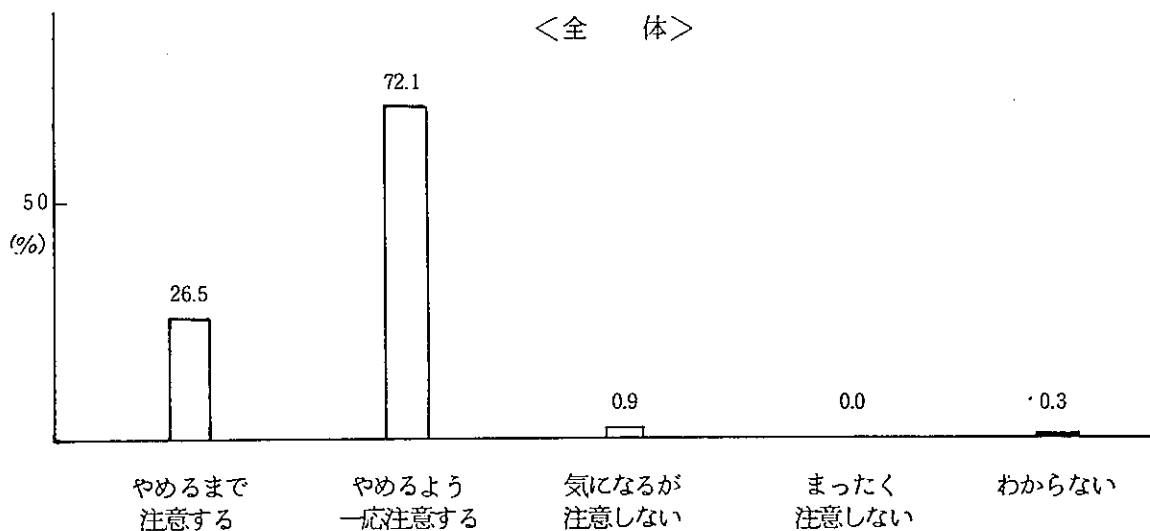
大人の近所の子どもたちへのあいさつや声かけをもっともっと期待したいところである。

(4) 危険な遊びへの注意

親の近所の子どもたちとの交流関係を見てきたが、ここでは、近所の子どもたちに対する大人としての生活態度をみてみよう。子どもたちは、日常生活の中で、遊びや運動に夢中になると、ついつい危険性の高い遊びや運動にまで発展しやすいものである。このときの親としての態度を調査したものである。

全体では、（図1-36）のように、「やめるまで注意する」が26.5%、「やめるよう一応注意する」が72.1%、「気になるが注意しない」が0.9%という結果がでた。

（図1-36） 10.あなたは、近所の子どもさんが危険な遊びをしていたら、注意しますか。



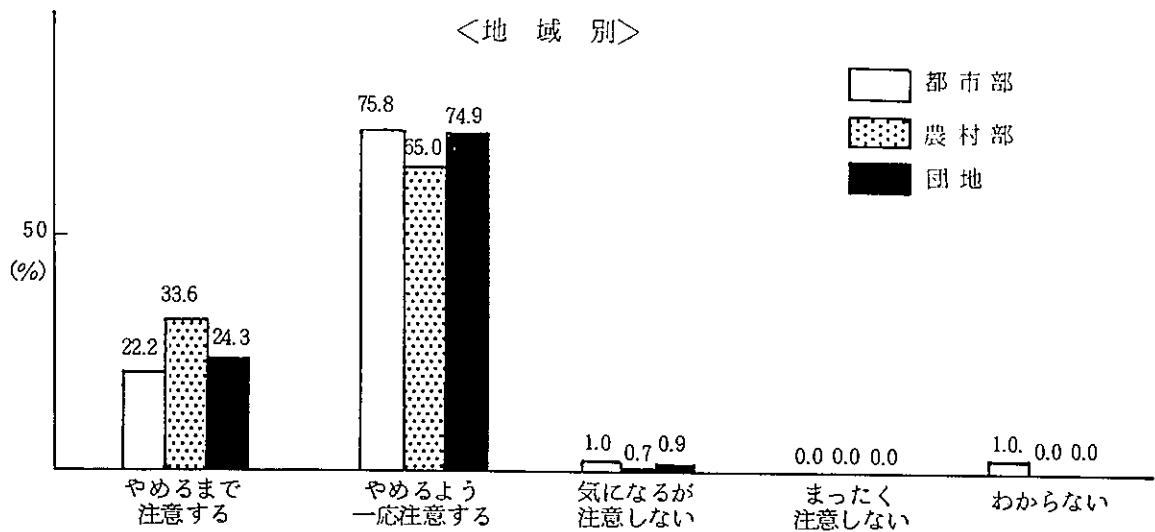
地域別（図1-37）にみると、「やめるまで注意する」では、都市部22.2%、団地24.3%に対し、農村部は33.6%と高く、日常生活の中での交流やかかわりが深く、このような態度が育まれてきたのではなかろうか。

次に、年齢別（図1-38）にみると、「やめるまで注意する」では、30代以下の親が23.6%に対し、40代以上の親は35.1%という高い結果がでていいる。40代以上の親の厳しい生活態度のあらわれではなかろうか。

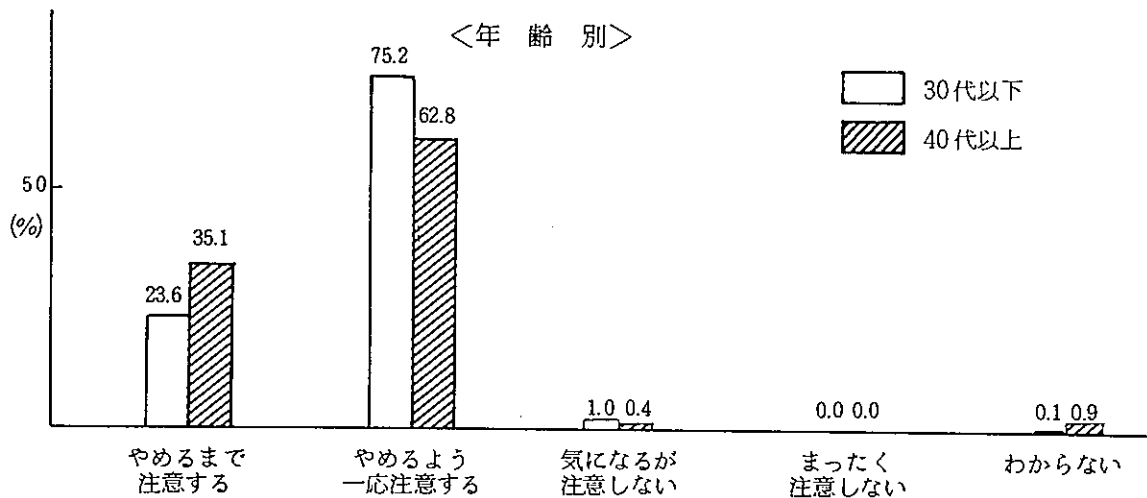
祖父母との同居別については、さしたる差はみられず、「やめるまで注意する」が、同居者28.2%非同居者26.0%となっている。

次に、居住年数別（図1-39）にみると、「やめるまで注意する」は、10年以上で34.2%と最も高

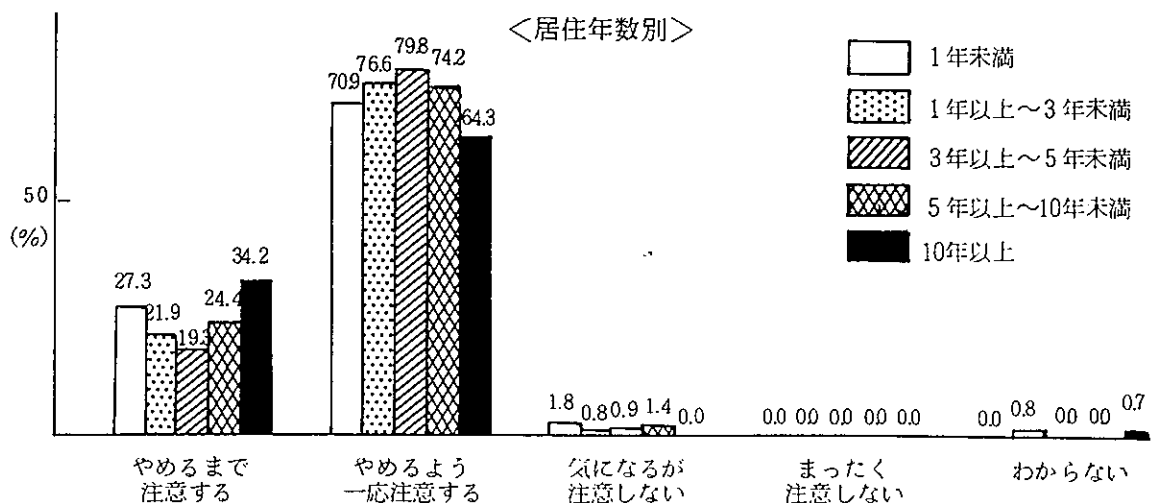
(図1-37) 10.あなたは、近所の子どもさんが危険な遊びをしていたら、注意しますか。



(図1-38) 10.あなたは、近所の子どもさんが危険な遊びをしていたら、注意しますか。



(図1-39) 10.あなたは、近所の子どもさんが危険な遊びをしていたら、注意しますか。



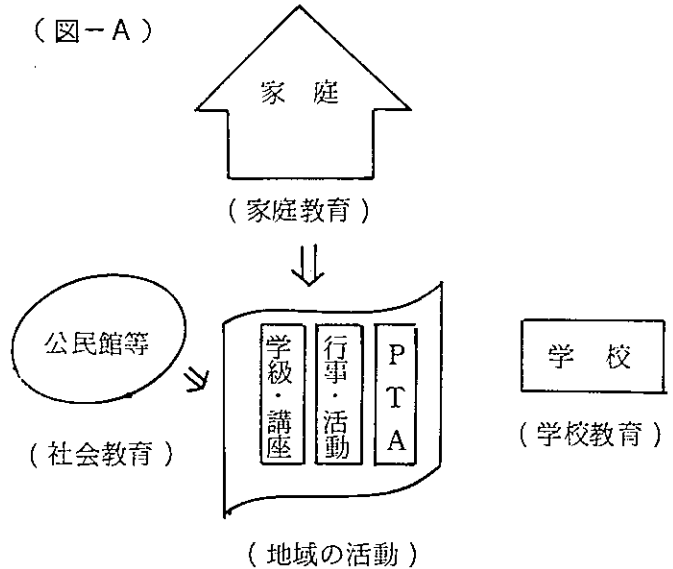
くなり、1年未満 27.3%、5年以上～10年未満 24.4%、1年以上～3年未満 21.9%、3年以上～5年未満 19.3%の順となっている。10年以上とそれ以下ではかなりの較差がでている。また、1年未満の親が高いのは、新しい地域での積極性のあらわれとして注目に値するが、それが、居住年数が長くなるにつれて、だんだん、注意する親が減っていくのは、気になる傾向である。

地域の親（大人）の生活態度として、近所の子どもたちの危険な遊びを見て、「気になるが注意しない」親が、わずかではあるが、いるということは、淋しい限りである。「やめるまで注意する」という毅然たる大人がもっと増えることを期待したい。

3. 親と地域の活動とのつながり

親と地域とのつながりを考える上で、ここでは、より組織的で、計画的な「地域の活動」と親とのかかわり方について調査した。

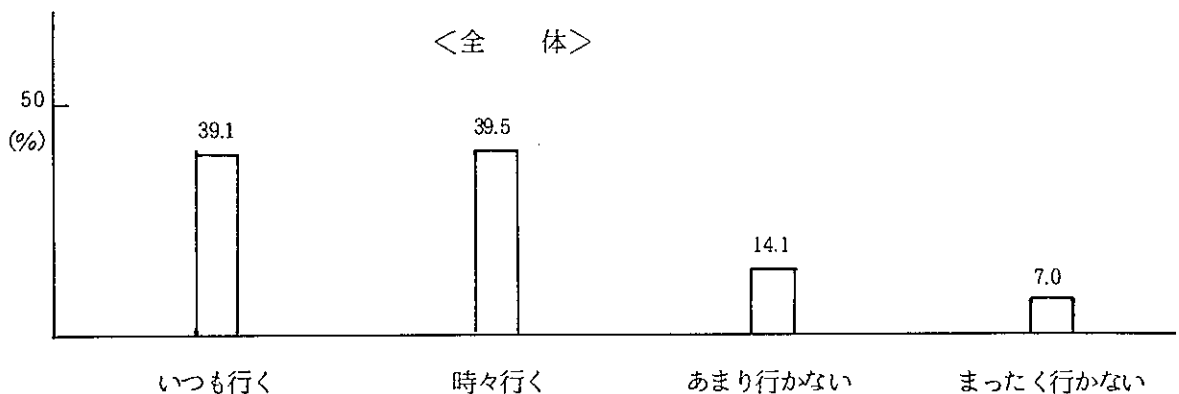
図-Aに示すように、家庭教育とかわりのある地域の活動として、①学校との接点であるPTA、②地域の行事や活動、③公民館等が実施する家庭教育に関する学級・講座など、3つの場を取り上げてみた。



(1) PTAの集会

家庭教育と学校教育の接点であるPTAに、親はどの程度かかわっているだろうか。PTAの集会は、ほとんどの親にとって、子どもの教育について考える最良の機会である。

(図1-40) 15.あなたは、PTAの集会に行きますか。

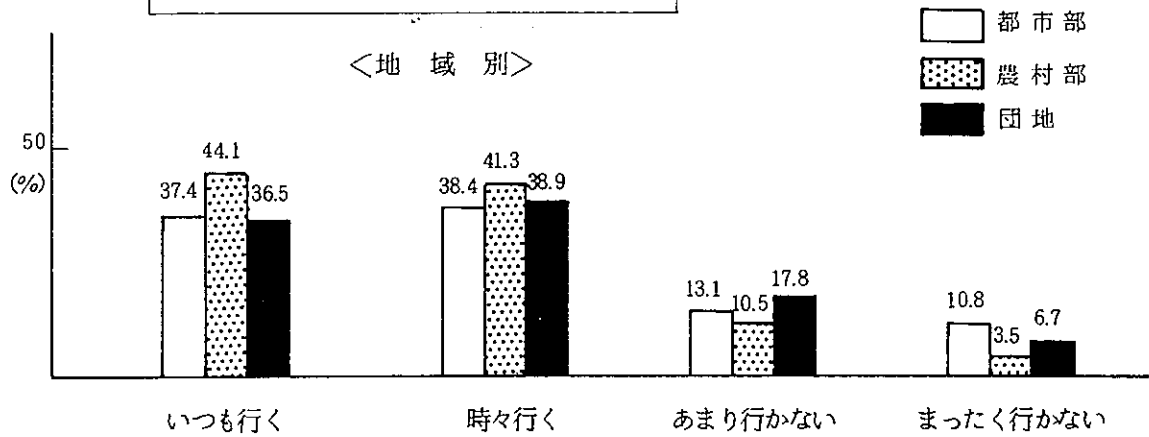


それでは、調査結果をみてみよう。全体では、(図1-40)のように、「いつも行く」39.1%、「時々行く」39.5%を合わせると、約8割の親が、出席している。

しかし、「あまり行かない」と「まったく行かない」を合わせると21.1%にもなり、親としては、いろいろな事情があるにせよ、家庭とはちがった学校での子どもの生活のようすは是非知ってほしいものである。学校の養護の先生に聞いてみると、PTAの集会の日に、親が来ない(親としては、行きたくても、行けないのかもしれないが)子どもたちが、その日によく保健室へ行くとのことである。子どもたちの寂しい気持をみているようである。

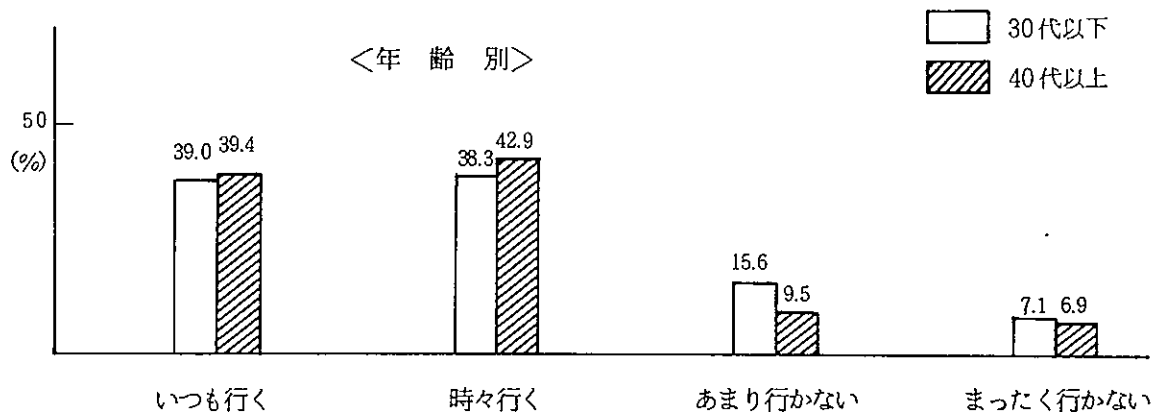
次に、地域別（図1-41）にみると、農村部の親の出席が、他の地域よりぬきんでている。都市部と団地では、ほとんど差はない。この結果をみる限りでは、農村部の親は、何とか時間のやりくりをして、つとめて出席しているように思われる。

（図1-41） 15.あなたは、PTAの集会に行きますか。



それでは、年齢別（図1-42）にみると、「いつも行く」は、ほとんど差がないが、「時々行く」で、40代以上の親が4.6%多く出席している。

（図1-42） 15.あなたは、PTAの集会に行きますか。

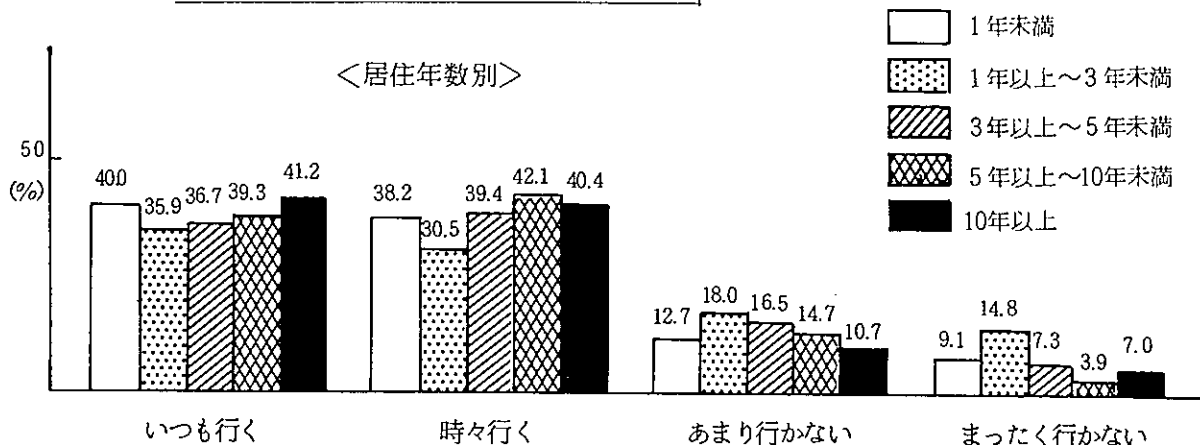


さて次に、居住年数別（図1-43）にみると、居住1年未満と5年以上の親の出席率が高くなっているが、1年以上～3年未満の親は、「いつも行く」と「時々行く」を合わせると66.4%であり、全体の78.6%より12.2%も落ち込んでいる。

1年未満の親は、PTA活動を通して、なるべく早く、学校や地域になじみたいという積極性のあらわれではないだろうか。一方、1年以上～3年未満の消極性は気にかかるところである。

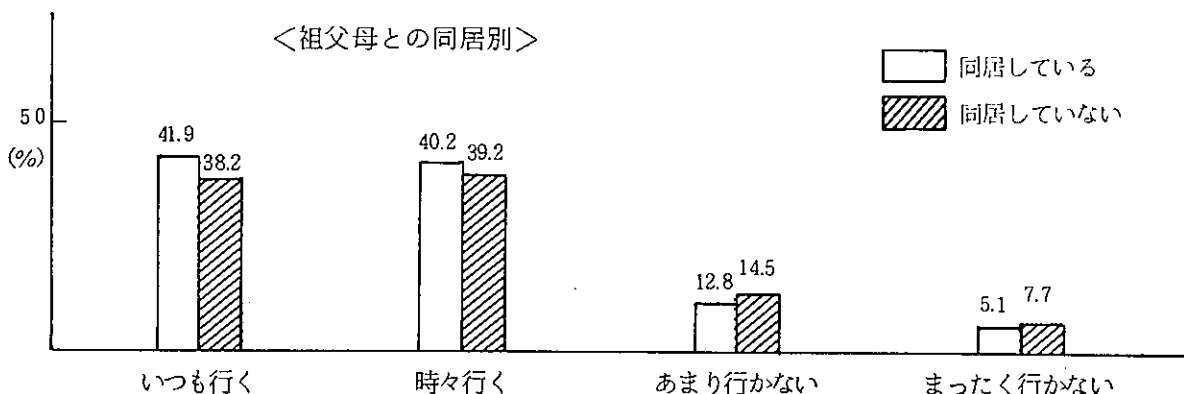
また、「いつも行く」の回答では、1年以上の居住者はその居住年数に比例して高くなっている。

(図1-43) 15.あなたは、PTAの集会に行きますか。



最後に、祖父母との同居別(図1-44)にみると、同居者の方が、非同居者より、「いつも行く」「時々行く」で少しずつ上まわっていて、同居している祖父母の存在が、いい影響を与えているようだ。

(図1-44) 15.あなたは、PTAの集会に行きますか。



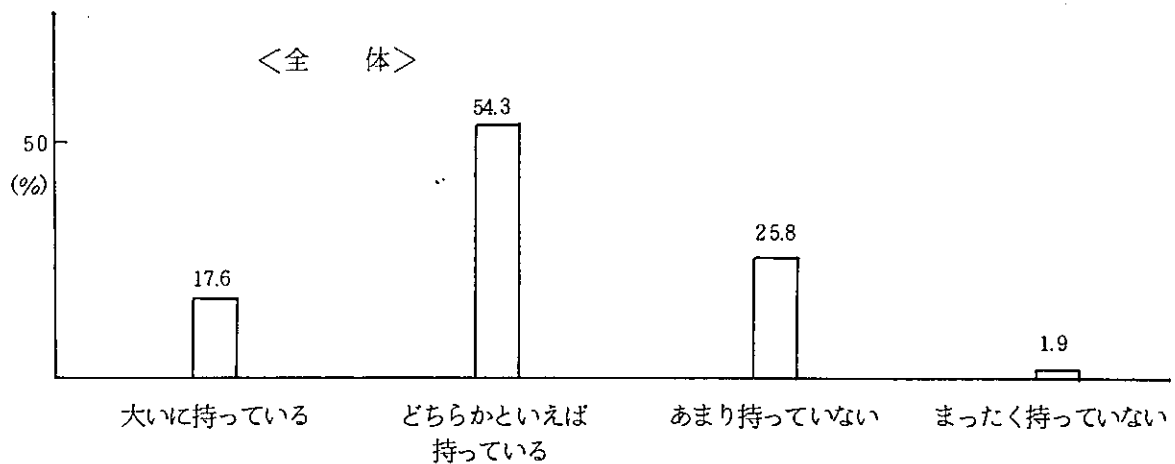
(2) 地域の行事や活動への関心

図-Aに示したように、広義に「地域の活動」をイメージした場合には、PTA活動から、地域の行事・活動、公民館等が実施する学級・講座等までも含むと考えられる。「地域の行事・活動」を本調査のように、三者を並べて質問されると、学校からも公民館からも独立した活動や行事をイメージする親が多かったと思われる。したがって、ここでは、図-Aの“行事・活動”を中核に、“地域の活動”への広がり意識しながら、本問以下の回答を考察してみたい。

ここでは、「地域の行事や活動に関心を持っているか」という問で、親の意識について聞いてみた。

全体では、(図1-45)のように、「大いに持っている」17.6%、「どちらかといえば持っている」54.3%で、合わせると71.9%となる。一方、「あまり持っていない」25.8%、「まったく持っていない」

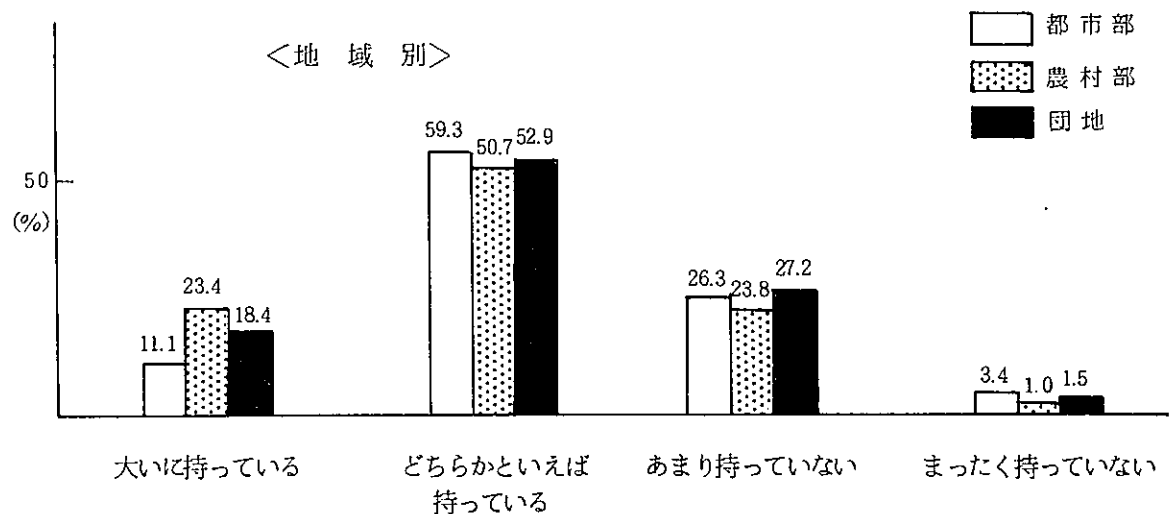
(図1-45) 16.あなたは、地域の行事や活動に関心を持っていますか。



1.9%で、合わせると27.7%にもなり、4分の1以上の親が、地域の行事や活動に関心がないという結果がでた。

次に、地域別(図1-46)にみると、「大いに持っている」と答えた親は、農村部が23.4%と最も多く、次に、団地が18.4%とつづき、都市部は11.1%とかなり落ち込んでいる。農村部と都市部を比較した場合、12.3%も差があるが、地域での行事や活動の数だけでなく、質の違いにも注目する必要がある。農村部には、まだ、生産を通して、住民の生活に直接折り込まれてきた行事や祭りが生き

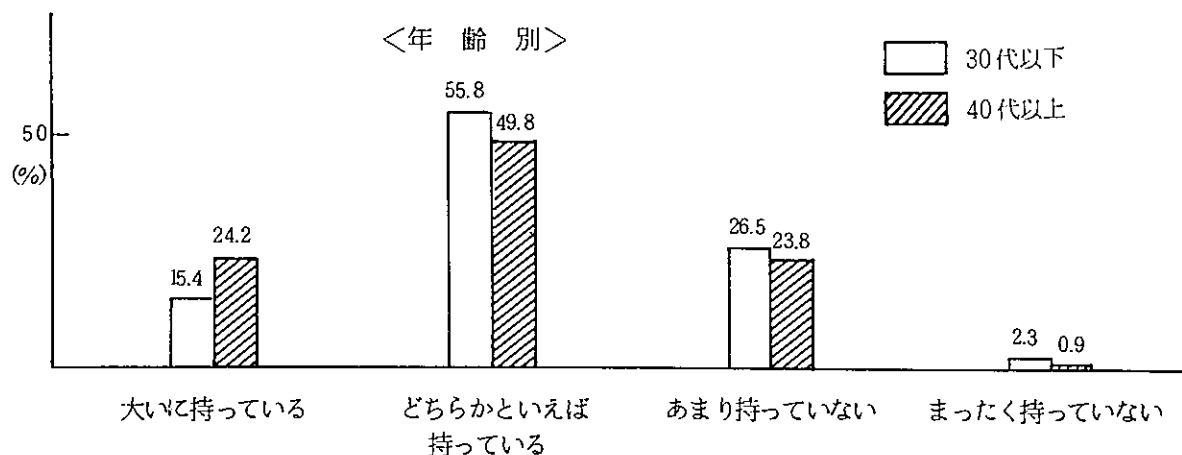
(図1-46) 16.あなたは、地域の行事や活動に関心を持っていますか。



残っているであろう。それに比べて、都市部にも行事や祭りが無いとは言えないが、商業化されたり、担い手がなくなったりしている場合もある。一方、団地では、新しい行事や活動を通じて、住民のつながりをつくり出すとりくみがよくなされていて、大体、平均に近い数字になっているのではないだろうか。

年齢別（図1-47）にみると、「大いに興味を持っている」は30代以下で15.4%、40代以上で24.2%

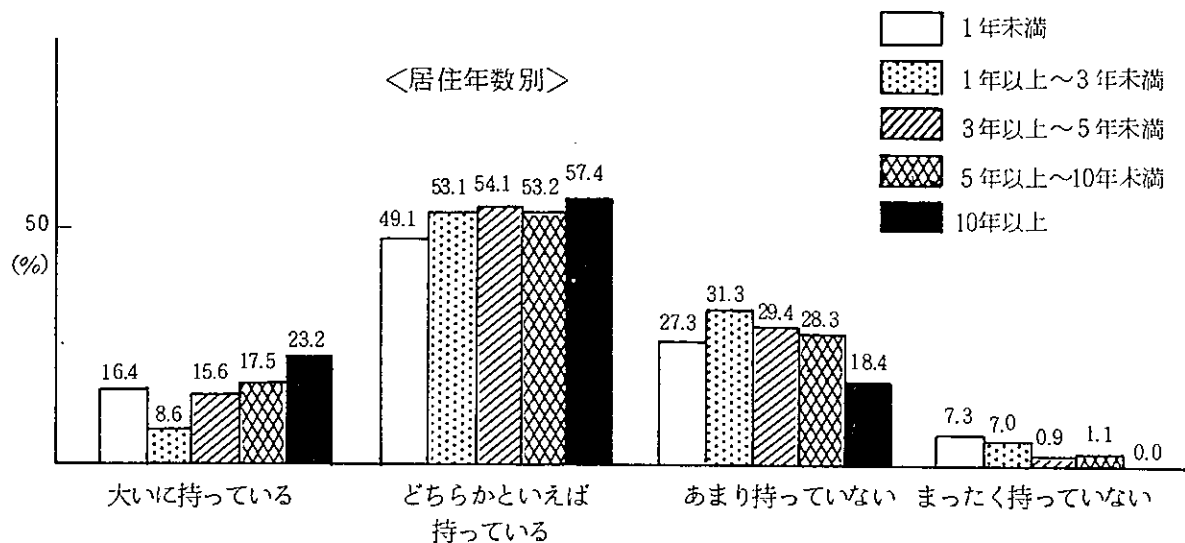
（図1-47） 16.あなたは、地域の行事や活動に関心を持っていますか。



%と約10%の差があり、30代以下は40代以上よりも、地域の行事や活動に対して、関心がうすいと思われる。

次に、居住年数別（図1-48）にみると、「大いに興味を持っている」と回答した親は、1年未満

（図1-48） 16.あなたは、地域の行事や活動に関心を持っていますか。



で16.4%とかなり高く、1年以上～3年未満で8.6%とぐんと落ち込み、それ以後、居住年数が増すごとに、割合は高くなっている。「大いに持っている」と「どちらかといえば持っている」を合わせても、1年以上～3年未満は61.7%と最も低くなっていて、最も高い10年以上の80.6%とは約20%の差がある。このことは、1年以上～3年未満の居住者、すなわち、ひと通りの地域の行事や活動を知った後、2年目、3年目の居住者の興味を引きつけるような行事や活動の工夫の必要性を示唆してい

るのかもしれない。

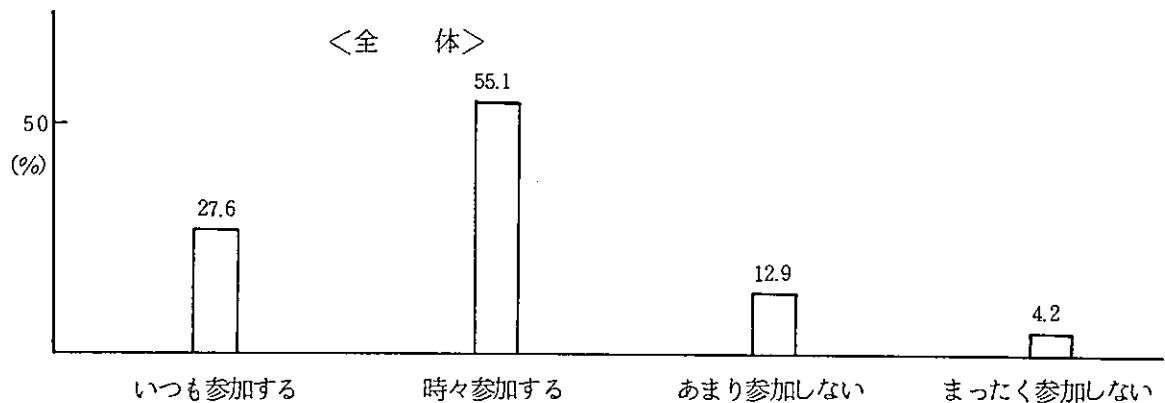
祖父母との同居別については、さほど注目すべき差はないようである。

(3) 地域の行事や活動への参加

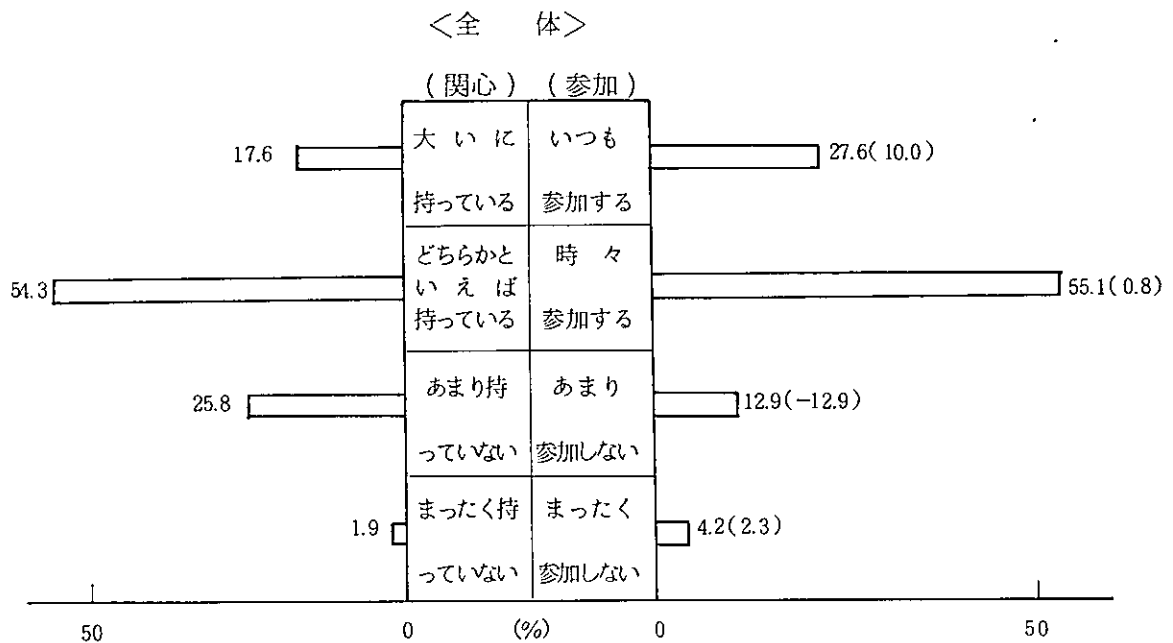
前問では、地域の行事や活動について、関心を持っているかどうかを問うたもので、ここでは、実際に参加するかどうかをみてみよう。いわば、前問が意識ならば、本問は行動ということになる。

全体では、(図1-49)のように、「いつも参加する」27.6%、「時々参加する」55.1%で、合わせて80%以上の親が、参加している。

(図1-49) 17.あなたは、地域の行事や活動に参加しますか。



(図1-50) 地域の行事や活動への関心と参加の比較

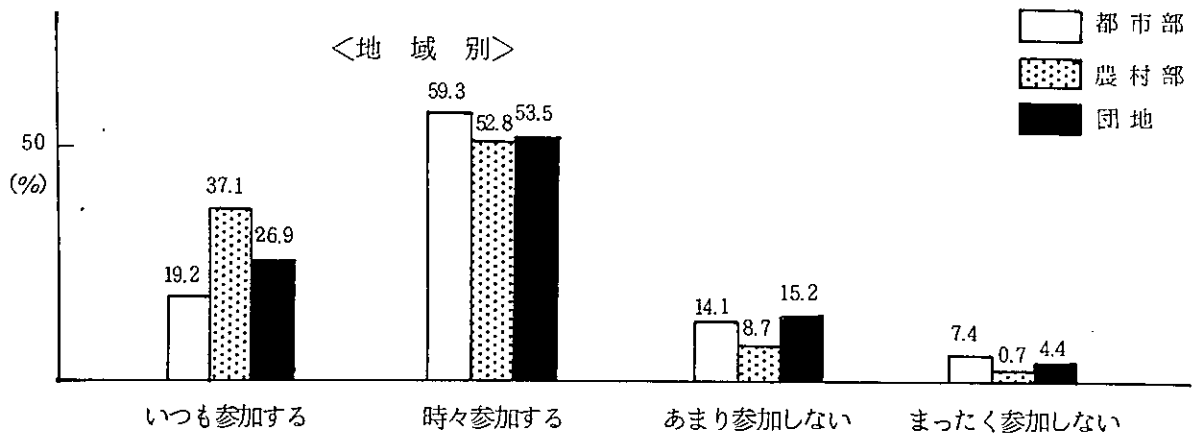


※()内は、(参加度-関心度)

ところで、地域の行事や活動への「関心」と「参加」を比較した(図1-50)をみると、「大いに関心がある」の17.6%に対し、「いつも参加する」27.6%で、参加する親の割合が10%多いことがわかる。逆に、「あまり関心を持っていない」と「まったく持ってない」を合わせると27.7%、「あまり参加しない」と「まったく参加しない」を合わせると17.1%で、参加しない親の割合が10%少ないという、興味深い結果があらわれている。

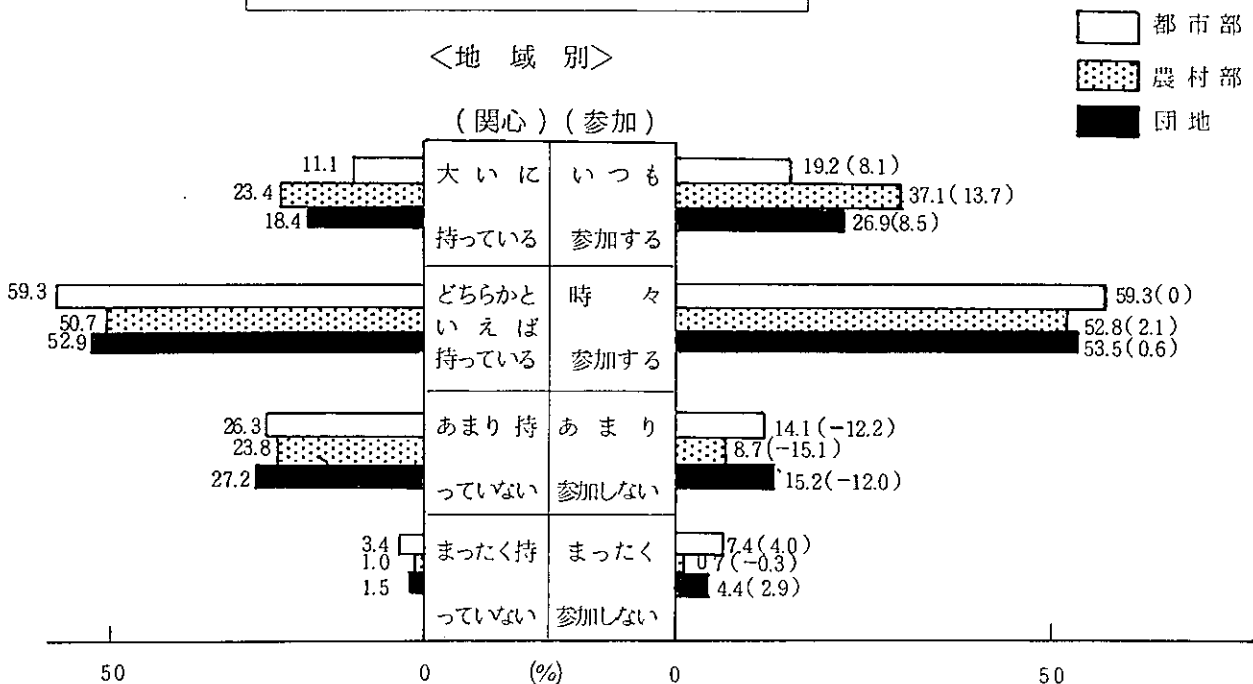
地域別(図1-51)にみると、「いつも参加する」では、農村部で37.1%と他の地域に比べて非常に高率であり、3人にひとりは、地域の行事や活動に「いつも参加する」と答えている。次に、団地

(図1-51) 17.あなたは、地域の行事や活動に参加しますか。



では26.9%で、4人にひとりの割合、都市部では19.2%で、5人にひとりの割合となっている。一方、「まったく参加しない」では、都市部の7.4%が、他に比較して相当高い割合となっていて、非常に

(図1-52) 地域の行事や活動への関心と参加の比較



※ ()内は (参加度 - 関心度)

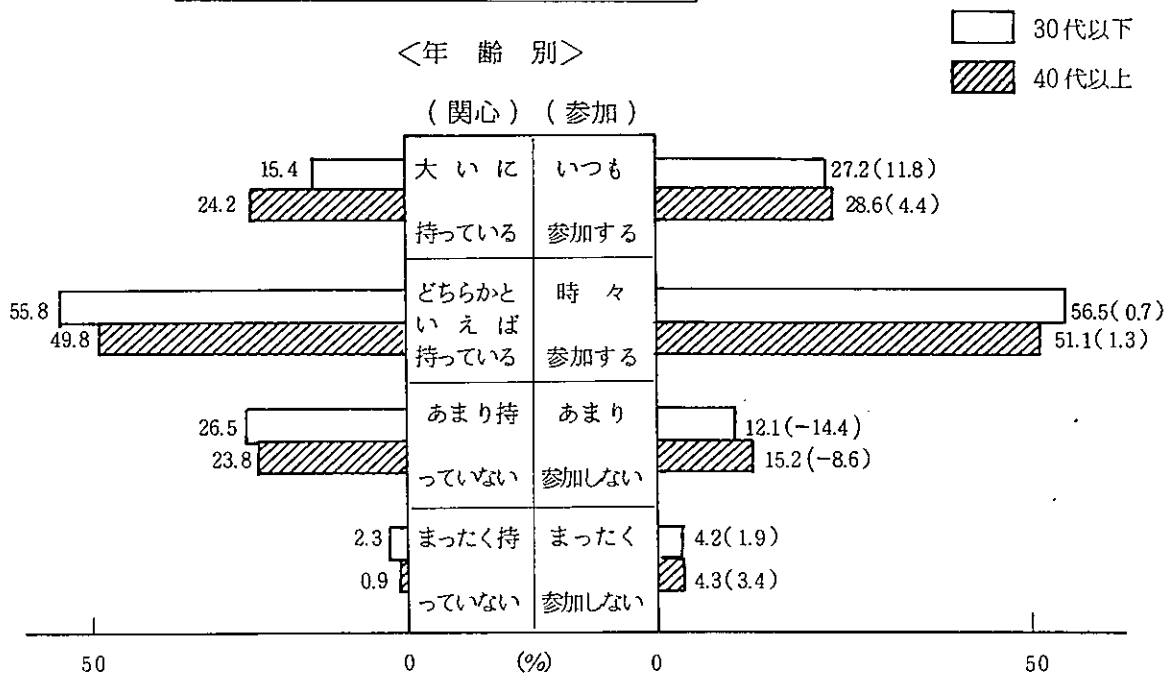
気になる結果となっている。

さらに、(図1-52)で「関心」と「参加」を比較してみると、農村部において、「大いに関心を持っている」より「いつも参加する」が13.7%多くなっていて、都市部の8.1%、団地の8.5%と比較して、実際に参加する親の割合が多い。農村部では、伝統として、生活の一部に、地域の行事や活動が組み込まれているようだ。

年齢別にみると、地域の行事や活動への参加では、「時々参加する」で30代以下が5.4%多く、逆に、「あまり参加しない」で40代以上が3.1%多い程度で、あまり差はない。

さらに、(図1-53)で、「関心」と「参加」を比較してみると、30代以下の親は、「いつも参加する」が「大いに関心を持っている」より11.8%多く、「あまり参加しない」が「あまり関心がない」より14.4%少なくなっていて、関心と参加の差が著しく、関心は大いにあるという訳ではないが、努力して参加しているようだ。40代以上の親は、関心と参加の差はあまりなく、あまり参加しない方だと厳しく自分をみている傾向があるようだ。

(図1-53) 地域の行事や活動への関心と参加の比較

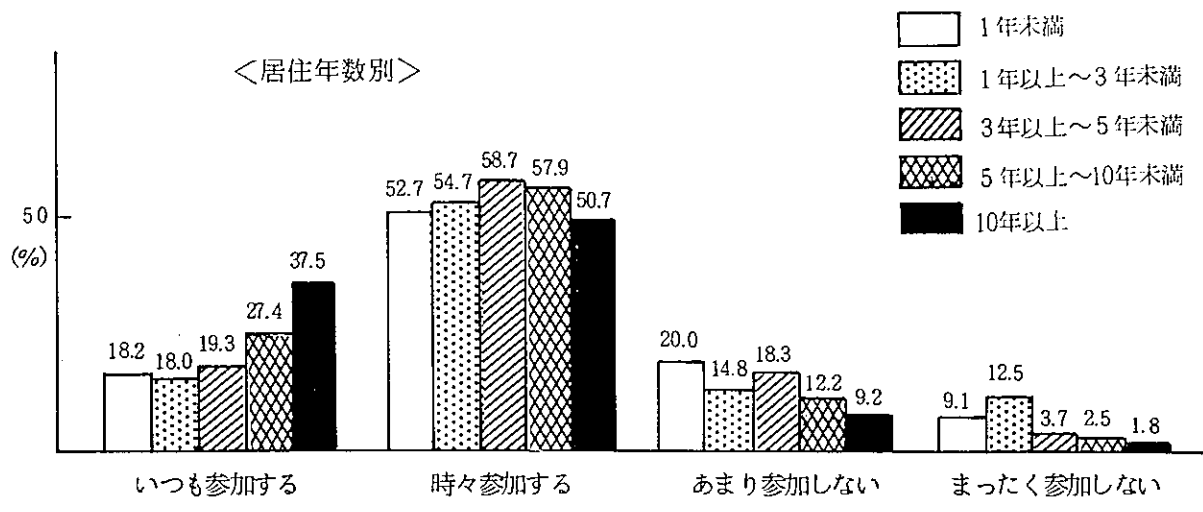


※ ()内は、(参加度-関心度)

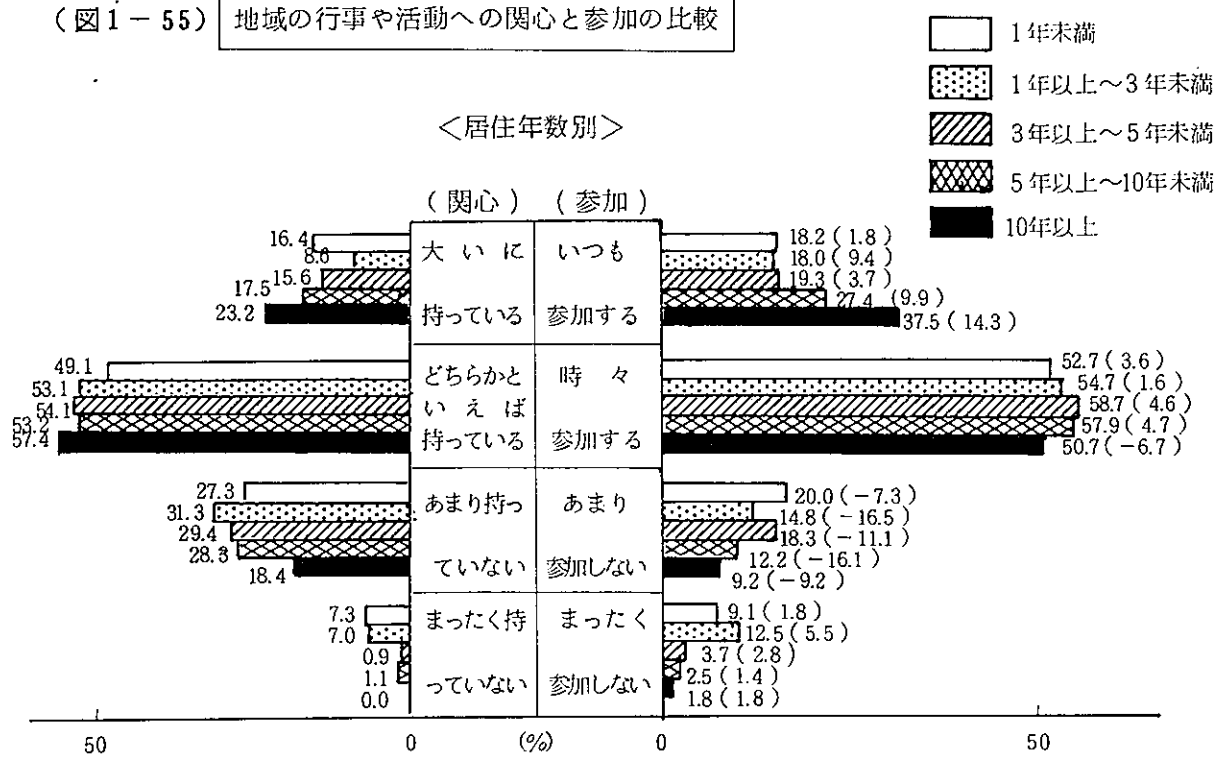
次に、居住年数別(図1-54)にみると、「いつも参加する」親は、ほぼ居住年数に比例して、多くなる傾向を示している。また、5年単位で、8.1%、10.1%と大巾な増加を示していて、地域の行事や活動に積極的に参加する割合は、5年、10年がひとつの大きな節となっているようだ。

さらに、「関心」と「参加」を比較した(図1-55)をみると、5年以上で、「大いに関心を持っている」より「いつも参加する」親の割合が約10%以上多くなっている。また、1年以上～3年未満の親は、「大いに関心を持っている」(8.6%)訳ではないが、「いつも参加している」(18.0%)。または、

(図1-54) 17.あなたは、地域の行事や活動に参加しますか。



(図1-55) 地域の行事や活動への関心と参加の比較

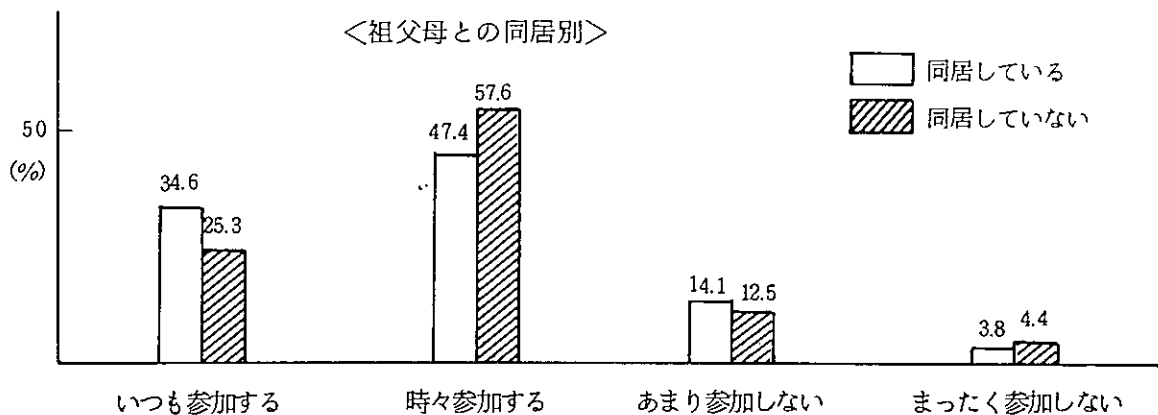


※()内は、(参加度-関心度)

「あまり関心は持っていない」(31.3%)が、「あまり参加しない」(14.8%)訳ではないという特別の意識を持っていることがわかる。この1年以上～3年未満の親への働きかけは、事業の主権者として、大いに工夫の余地が残っているようである。

最後に、祖父母との同居別(図1-56)をみると、前問の「関心」では、ほとんど差がなかったが、実際に参加するかどうかとなると、「いつも参加する」で、同居者の親が約10%多く、「時々参加する」で、非同居者の親が約10%多い。参加しないについては、ほとんど差がないので、同居の祖父母がいれば、時々しか参加できない場合でも、いつも参加しやすい条件になっているようだ。

(図1-56) 17.あなたは、地域の行事や活動に参加しますか。



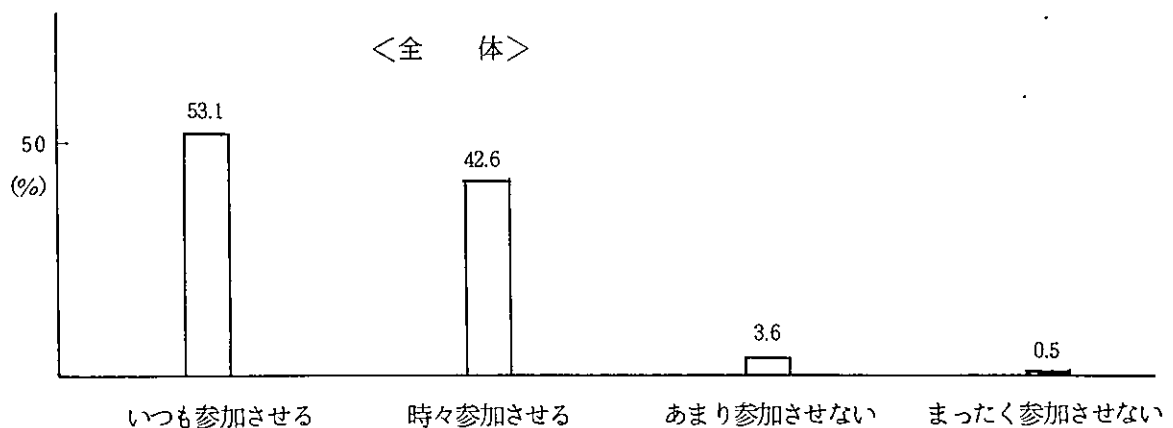
(4) 子どもの地域行事・活動への参加

ここでは、親がわが子を地域の行事や活動に参加するよう指導しているかどうかをみてみよう。

この場合、注意したいのは、アンケートの間では、「あなたは……に参加させますか」となっている点である。したがって、これは、実際に子どもが喜んで参加した場合ばかりではない。さらには、親が、子ども向けの地域の行事や活動に対し関心のネットを広げているかどうかによって、大きく回答が左右される。だから、この問は、親が地域の行事や活動を子どもにとって、有意義であると判断しているかどうかを示している問だともみれる。

全体では、先の間で、地域の行事や活動に「大いに関心を持っている」で17.6%、「いつも参加する」で27.6%であった親も、(図1-57)のように、子どもの場合となると、「いつも参加させる」53.1

(図1-57) 18.あなたは、お子さんを地域の行事や活動に参加させますか。



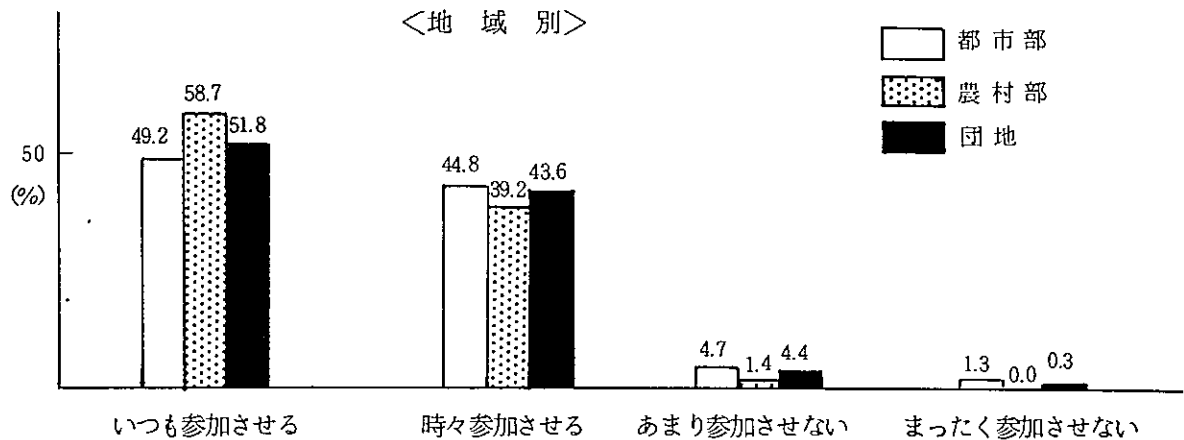
%と急増する。「時々参加させる」の42.6%を合わせると、95.7%の親が、子どもを参加させるという高い数字がでている。しかし、ことわっておきたいのは、この数字が子どもの実際の参加実数を示している訳ではないということ。また、更に大切なことは、子ども達が自らすすんで参加したり、団体生活の楽しさ、厳しさ、苦しさなどを経験しているかどうかである。その点を、親も指導者も留意

していただきたい。

次に、地域別（図1-58）にみると、「いつも参加させる」は、やはり農村部が58.7%と高い。しかし、自らの参加には消極的であった都市部の親も、子どものこととなると、49.2%と高くなっていて、農村部や団地との差を縮めている。

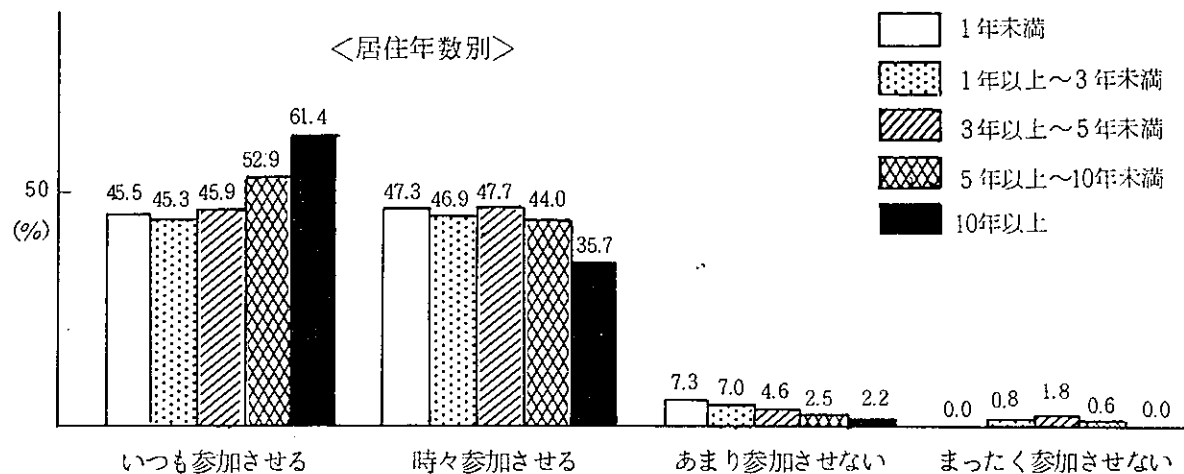
年齢別にみると、あまりきわだった差はないが、40代以上の親に積極的な傾向がみられる。

（図1-58） 18.あなたは、お子さんを地域の行事や活動に参加させますか。



居住年数別（図1-59）にみると、ほぼ居住年数に比例して、子どもを「いつも参加させる」傾向が強まっている。これは、親自身の参加傾向と一致している。やはり、居住年数に比例して、顔見知りも増え、行事に参加させやすくなるのかもしれない。しかし、むしろ、地域に早く溶け込み、子どもの仲間を作るという意味からは、3年未満の親こそ、せめて、子どもだけでも行事に参加するよう指導すべきなのかもしれない。しかも、先の親自身の関心、参加の問題でも述べたが、1年以上～3年未満の親に、ここでもわずかではあるが、落ち込みが見られる。この1年以上～3年未満の親への

（図1-59） 18.あなたは、お子さんを地域の行事や活動に参加させますか。



積極的なアプローチが欲しいところであるし、また、まる3年以上、その土地に住んでいるということの意味は予想外に意識のレベルでは大きいのかもしれない。

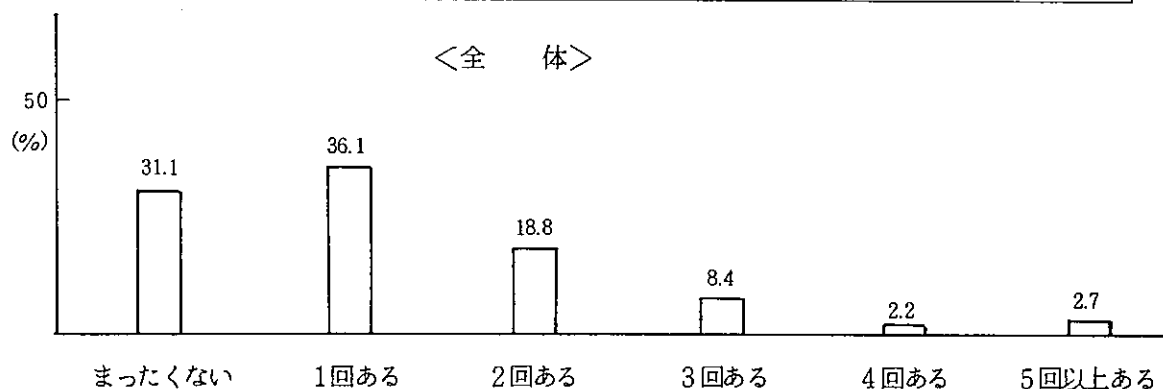
祖父母との同居別では、ほとんど差はみられない。親の参加については、かなりの影響力を示した祖父母も、こと孫の行事や活動への参加にまで影響力は及んでいないということだろうか。

(5) 地域世話役の経験

ここでは、親と地域の行事や活動のかかわりの指標として、地域の世話役の経験回数を聞いてみた。世話役を引受けるかどうかは、その人の積極性の程度を知る目安になるだろうし、なによりも主体的な関与を引出す契機を持てたかどうかを意味している。

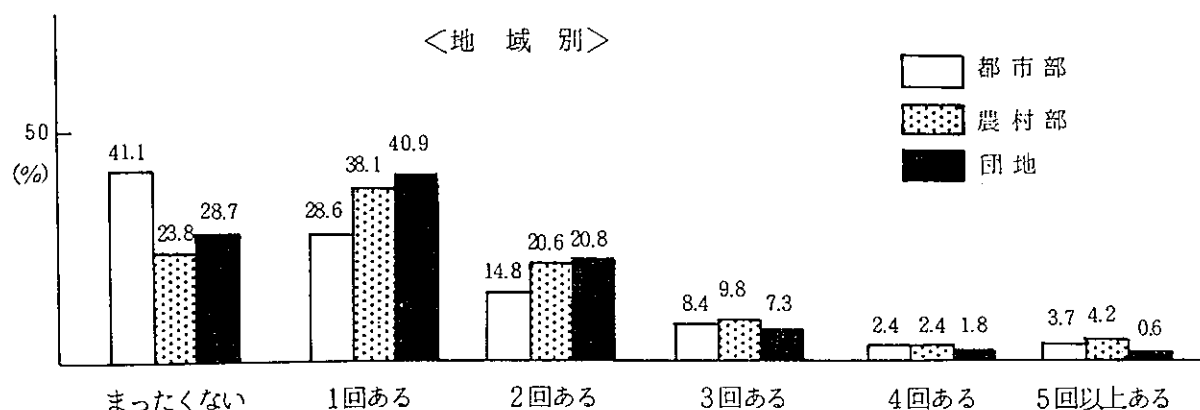
全体では、(図1-60)のように、「1回ある」36.1%、「2回ある」18.8%、50%以上の親が、1～2回の経験を持っていた。しかし、「まったくない」が31.1%とかなりの高率を示している。さすがに、3回以上となると、急に減少する。

(図1-60) 19.あなたは、地域の世話役(町内会や子供会育成会などの役員)をしたことがありますか。



次に、地域別(図1-61)にみると、かなり特色がみられる。「1回ある」が、都市部では28.6%

(図1-61) 19.あなたは、地域の世話役(町内会や子供会育成会などの役員)をしたことがありますか。

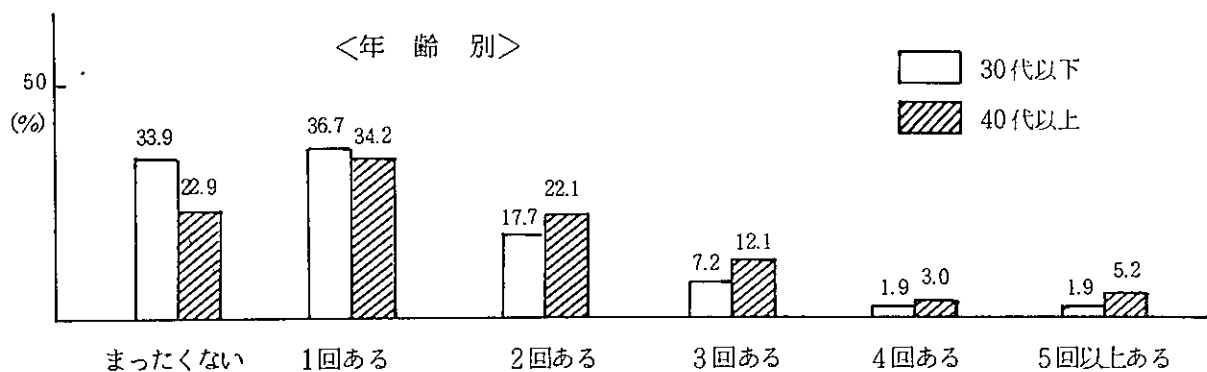


と低く、農村部の38.1%と約10%の差があり、さらに、団地では40.9%と高率を示している。この傾向は、「2回ある」の場合もみられる。ところが、3回以上となると、団地は、他の地域と比べると低率を示している。団地では、合理的な輪番制や分担制が行われているのであろうか。

ところで、「まったくない」が、都市部では41.1%もあり、団地の28.7%、農村部の23.8%と比較にならないほど高率である。一体誰が世話役を引受けているのだろうか。もしかすると、活動そのものが不活発であったり、世話役のポストの絶対数が少ないのかもしれない。

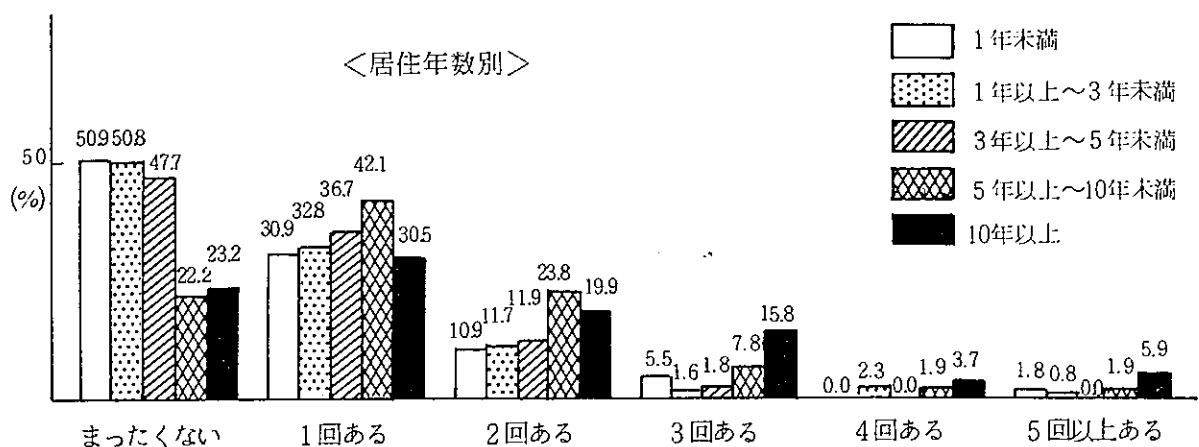
年齢別(図1-62)にみると、「まったくない」で、40代以上の親が10%以上少ないが、2回、3回、4回、5回以上とも30代以下を上まわっている。30代以下の「まったくない」の33.9%の中には、他人の世話が苦手であったり、無関心である新しい世代層が含まれているのかも知れない。

(図1-62) 19.あなたは、地域の世話役(町内会や子供会育成会などの役員)をしたことがありますか。



居住年数別(図1-63)にみると、「1回ある」「2回ある」は、1年未満から10年未満まで(10年以上を除く)の場合、居住年数に比例して高率となっている。10年以上の親は、むしろ、3回、4回、5回以上で、他を引きはなして高い割合となっていて、腰を落ちつけたかかわりとなっているよ

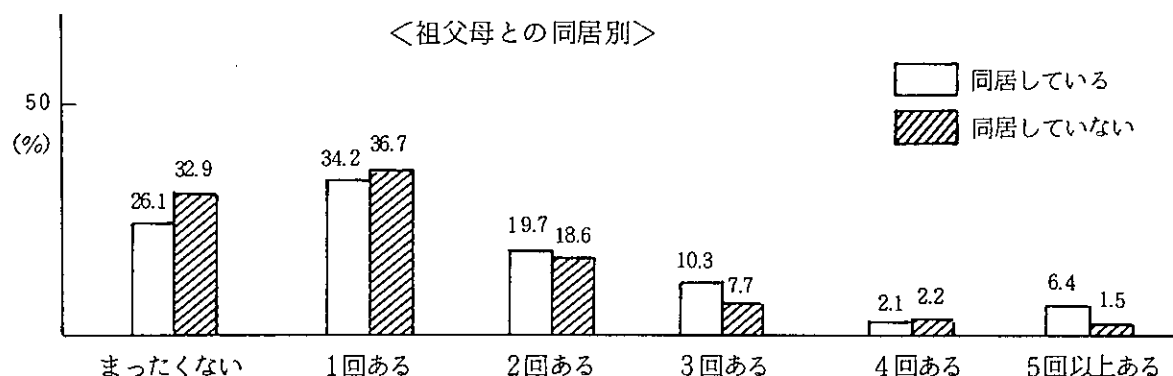
(図1-63) 19.あなたは、地域の世話役(町内会や子供会育成会などの役員)をしたことがありますか。



うである。また、「まったくない」と回答した親の割合が、5年を境として、25%以上の明確な断層ができていて、居住5年で、地域に根づく度合いが違ってくるようである。

祖父母との同居別（図1-64）にみると、「まったくない」と「5回以上ある」でかなり差がでていて、同居者の方が、地域の世話役を引受ける親が多いことがわかる。

（図1-64） 19.あなたは、地域の世話役（町内会や子供育成会などの役員）をしたことがありますか。



最後に、これらをまとめてみると、地域で世話役を数多く引受ける親は、「40代以上」で、その地域に「5年以上居住」し、「祖父母との同居」の場合が多い。逆に、まったく引受けたことのない親は、「30代以下」で、そこへ来て「5年未満」であり、「祖父母と同居でない」場合が多いことになる。

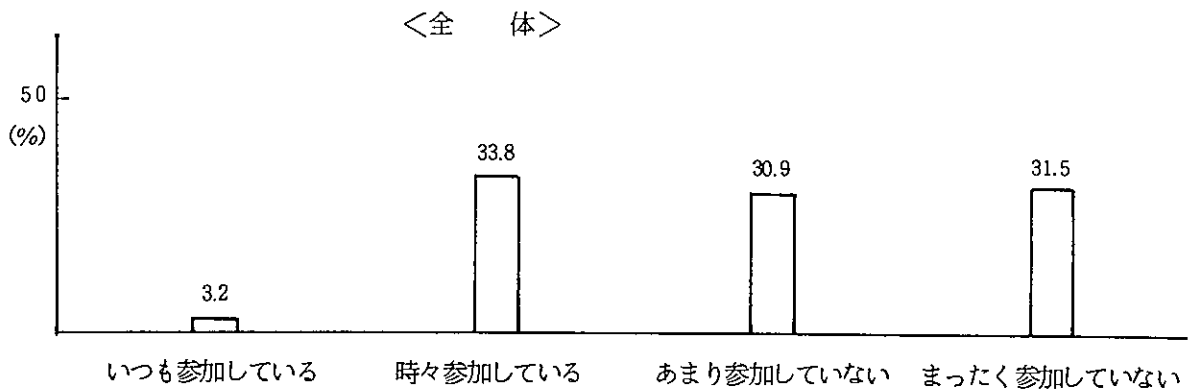
(6) 公民館の家庭教育に関する学級・講座等への参加

この問以下の3問は、親と地域の活動とのつながりの第3側面として、公民館などで実施されている家庭教育に関する学級・講座などのかかわりを取り上げてみよう。P32の図-Aでもわかるように、これは社会教育と家庭教育の具体的接点である。親の立場から考えると、家庭教育について、最も組織的・体系的に学習できる場である。

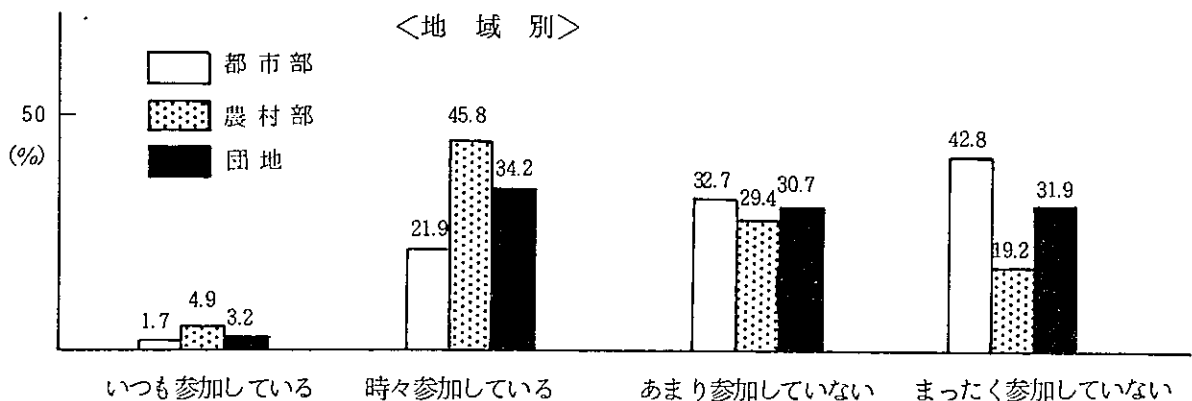
さて、全体では、(図1-65)のように、「まったく参加していない」が31.5%、「あまり参加していない」が30.9%と、参加については、きわめて消極的であるようだ。「いつも参加している」は3.2%で、「時々参加している」は33.8%で、合わせても、37.0%であった。本来、社会教育は、学習者の自由意志によるものではあるが、PTAの集会の参加で「いつも行く」39.1%、「時々行く」39.5%と比較しても、また、地域の行事や活動への参加の「いつも参加する」27.6%、「時々参加する」55.1%と比べても、きわめて低率である。ここに、社会教育関係者の苦悩のひとつが、数字としてよく表われているようである。しかし、県内のいくつかの市町村においては、家庭教育に関する学級・講座などの内容や方法をいろいろ工夫して実施されている。これらの事例をみれば、現在、公民館などの社会教育施設が、学校教育や家庭教育を含めた地域での学習を、総合的な視点から、企画・立案し、推進していくよう要請されているようである。

地域別(図1-66)にみると、農村部では、「いつも参加する」4.9%、「時々参加する」45.8%

(図1-65) 20.あなたは、公民館などで実施されている家庭教育に関する学級・講座、講演会などに参加したことがありますか。



(図1-66) 20.あなたは、公民館などで実施されている家庭教育に関する学級・講座、講演会などに参加したことがありますか。

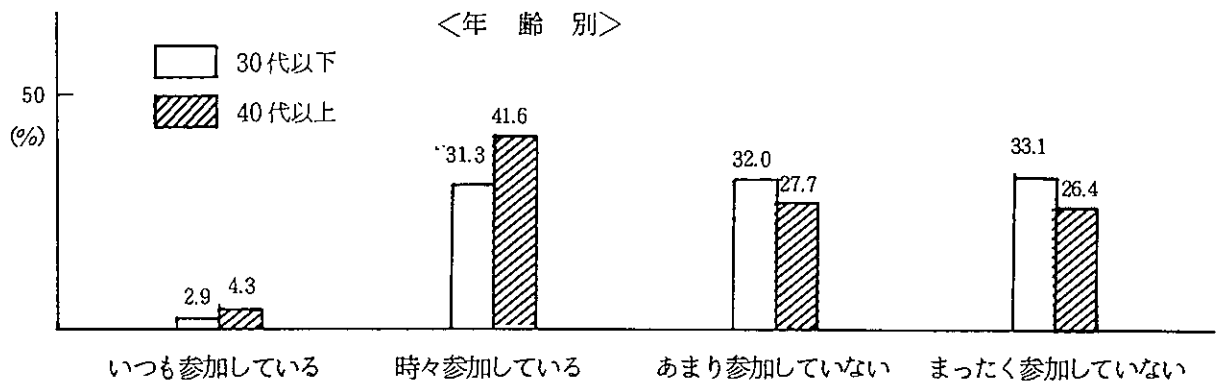


で、他の地域よりかなり高率である。しかし、都市部では、「まったく参加しない」が42.8%であり団地の31.9%、農村部の19.2%と比べて、きわめて高くなっている。カルチャーセンターなどの学習機会の多い都市部でこそ、地域の実情にあった公民館の事業が要請されているのではなかろうか。

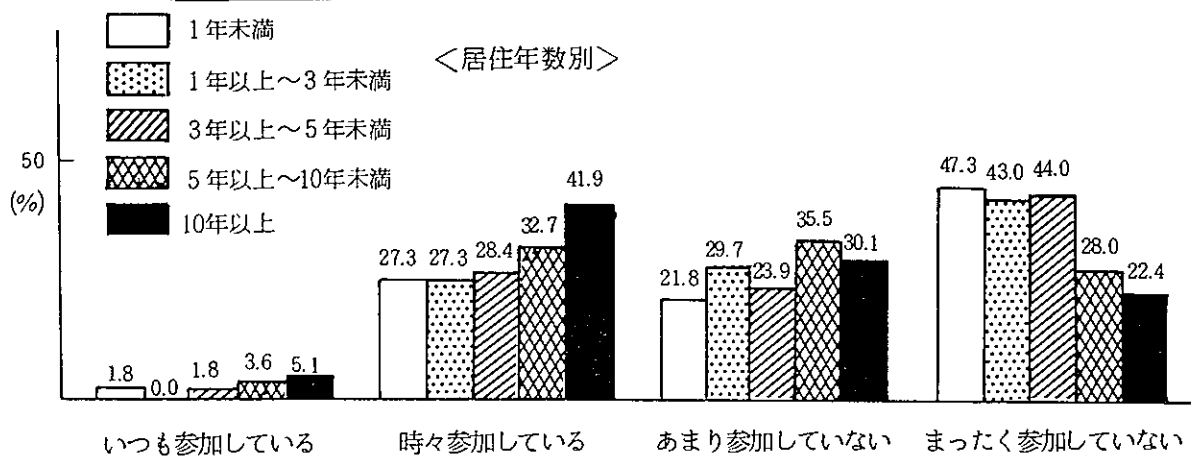
年齢別(図1-67)にみると、学級・講座等への参加は、40代以上の親の方が高率である。「時々参加している」で10%以上の差がついている。30代以下の親への働きかけは、子育て経験の未熟さなどから考えて、もっと工夫の余地がありそうである。このことは、家庭教育に関する学級・講座などに限らず、公民館の事業全体についても、言えることかもしれない。また、若い層の親にとって、きわめて重要な生活課題である“わが子の家庭教育”に、あらためて目を向けるきっかけとして、家庭教育に関するプログラムも、対象者の要望にあったものの研究が要請されているようである。

居住年数別(図1-68)にみると、「時々参加する」親は、3年以上から居住年数に比例して高率となっている。また、「まったく参加していない」も、5年以上になると急減する。公民館を身近かに感じ、実際に足を運ぶようになるには、3年から5年のその地域への居住が必要なのだろうか。さらにくわしくみると、「いつも参加している」でも、「あまり参加していない」でも、1年以上～3

(図1-67) 20.あなたは、公民館などで実施されている家庭教育に関する学級・講座、講演会などに参加したことがありますか。



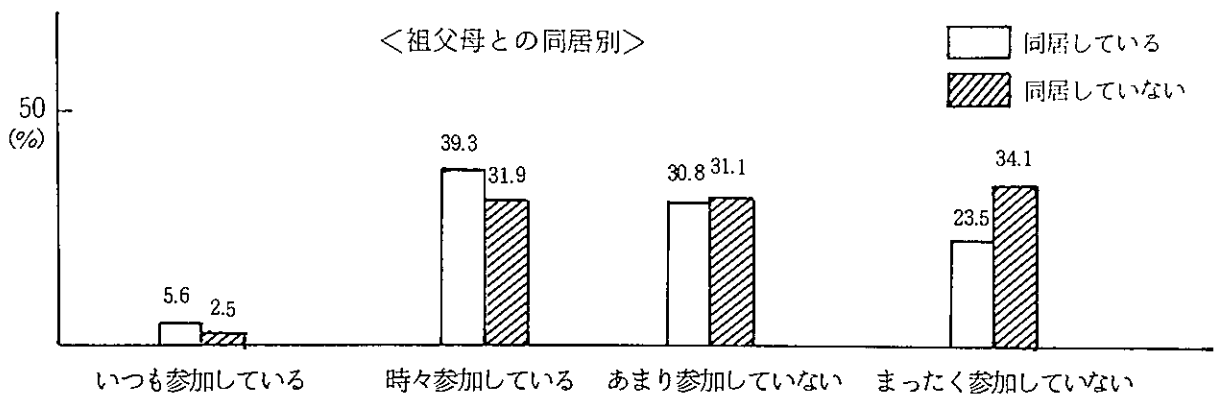
(図1-68) 20.あなたは、公民館などで実施されている家庭教育に関する学級・講座、講演会などに参加したことがありますか。



年未満の親より、わずかではあるが、1年未満の新入居者の方が参加に積極的である。このことは、新入居者が、地域との交流の場として、公民館を活用しようとしている兆しとみることができるようだ。この傾向は、地域の行事や活動への参加にも、あらわれたものである。新しい入居者へのオリエンテーションのために、その地域に合った学習プログラムを用意しておくことが重要な時代になってきているようである。

祖父母との同居別(図1-69)では、祖父母との同居の方が、公民館の学級・講座などへも出やすいようである。「まったく参加していない」では、10%以上の差が生じている。祖父母の公民館活動とのかかわりと相乗効果が生じているのかもしれない。

(図1-69) 20.あなたは、公民館などで実施されている家庭教育に関する学級・講座、講演会などに参加したことがありますか。

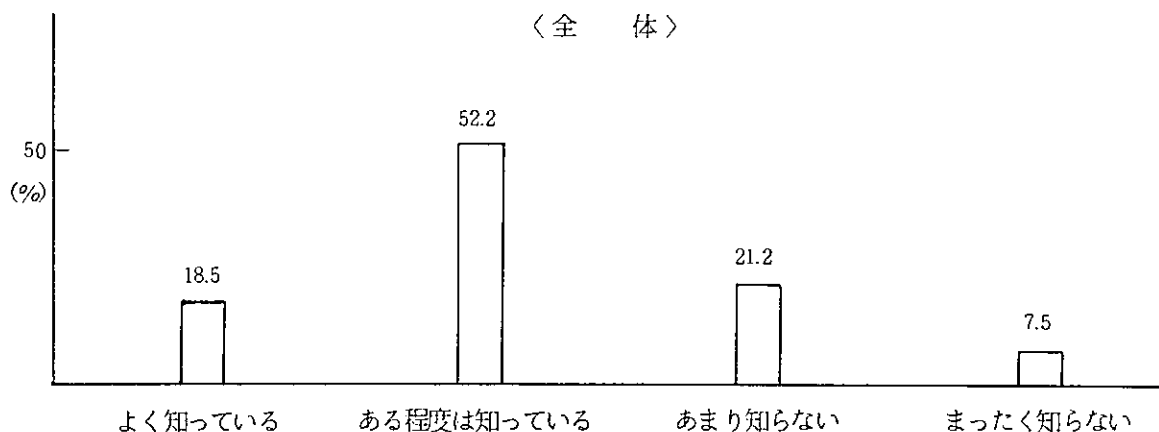


(7) 公民館の家庭教育に関する学級・講座等の存知

学級・講座等への参加を引き出す第一歩は、まず知ってもらうことである。この問では、そもそもの存知（知っているかどうか）を聞いた。

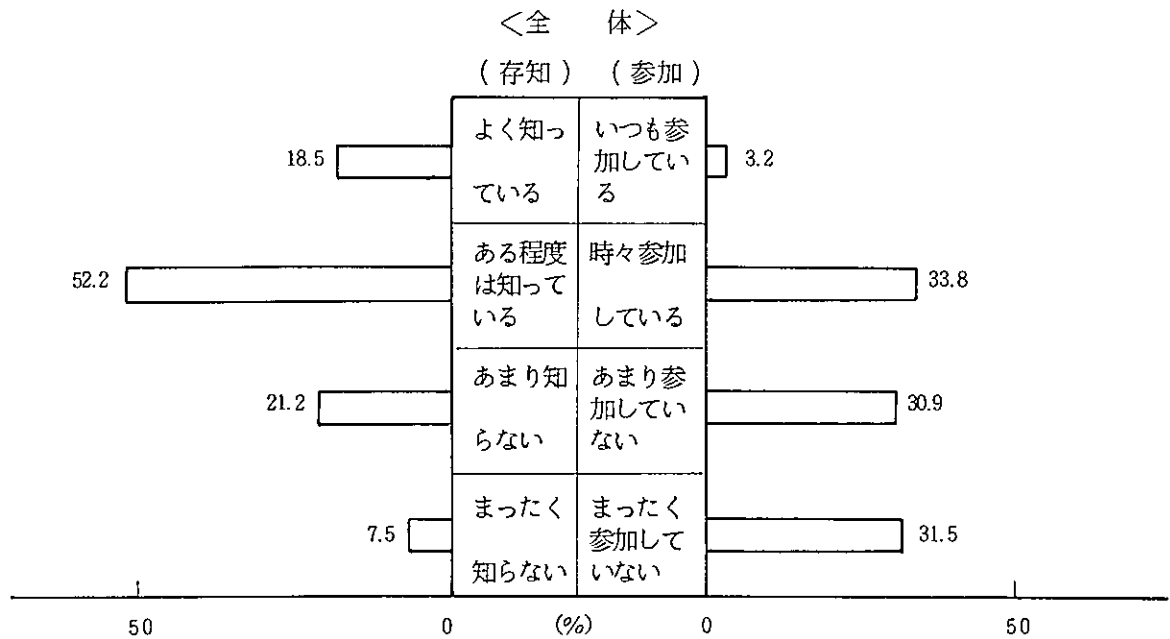
全体では、(図1-70)のように、「よく知っている」18.5%、「ある程度は知っている」52.2%で、合わせると70.7%となる。この数字は、地域の行事や活動に「関心を持っている」71.9%と比べて、さほど低いとは言えない。しかし、実際の参加となると、地域の行事や活動に「いつも参加する」と「時々参加する」をあわせると82.7%となるが、学級・講座等への参加は、37.0%と非常に落ち込んでいる。

(図1-70) 21.あなたは、それらの学級・講座、講演会などが実施されているのを知っていますか。



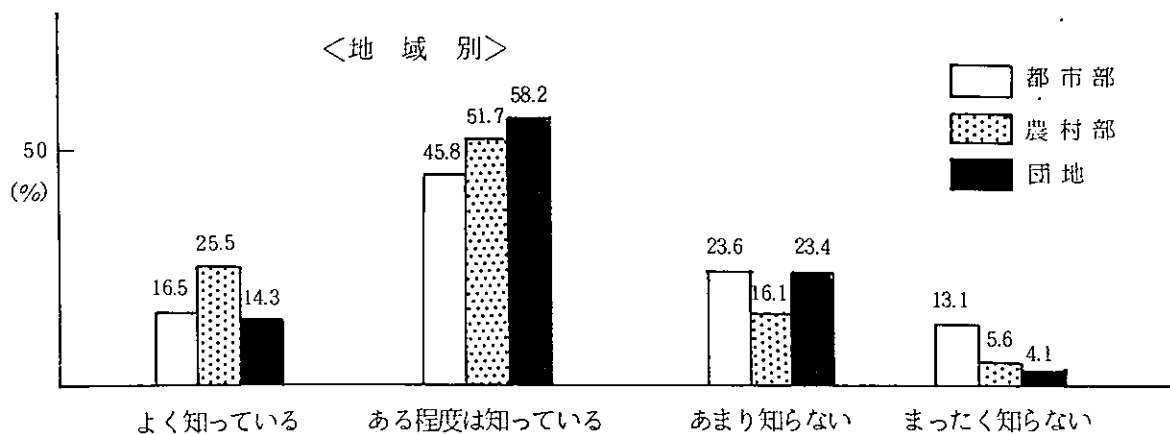
では、(図1-71)で、学級・講座等の「存知」と「参加」を比較してみると、地域の行事や活動とは逆の結果がでている。つまり「よく知っている」18.5%に対し、「いつも参加している」は3.2%で、約2割となっている。また、「ある程度は知っている」52.2%に対し、「時々参加している」は33.8%で、約6割となっている。

(図1-71) 学級・講座等の存知と参加の比較



次に、地域別(図1-72)にみると、「よく知っている」は、農村部が25.5%と最も多い。「よく知っている」と「ある程度は知っている」を合わせると、農村部77.2%、団地72.5%、都市部62.3%となり、農村部や団地での広報がかなりゆきわたっているようだ。逆に、「まったく知らない」は、都市部で13.1%と高くなっている。

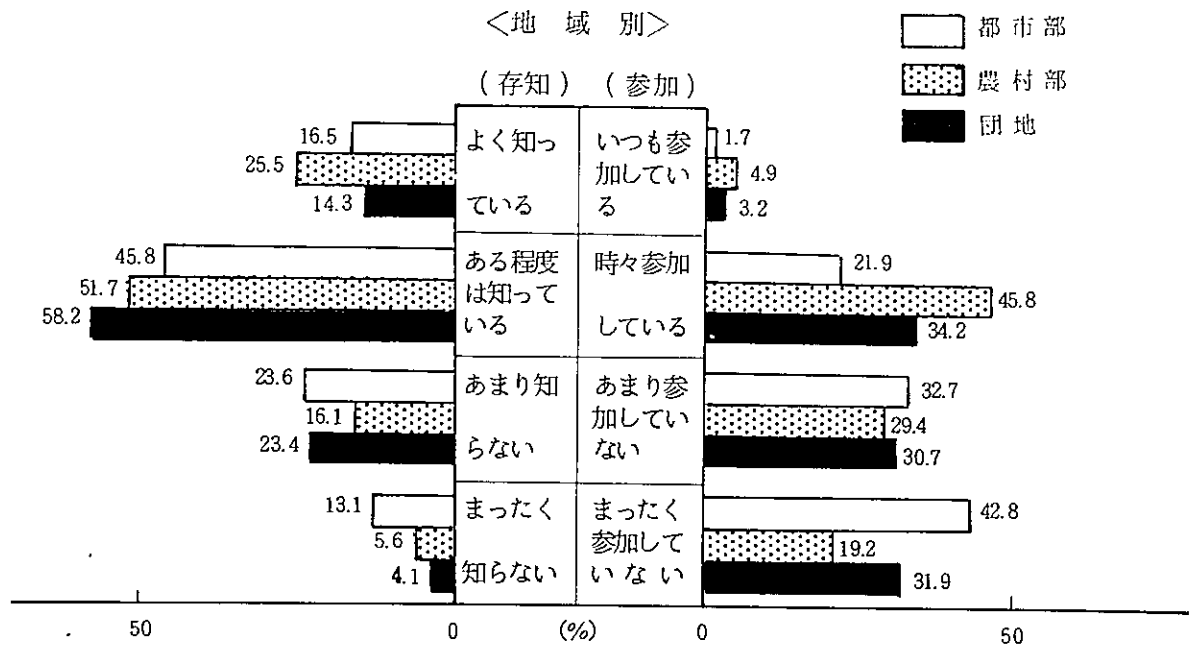
(図1-72) 21.あなたは、それらの学級・講座、講演会などが実施されているのを知っていますか。



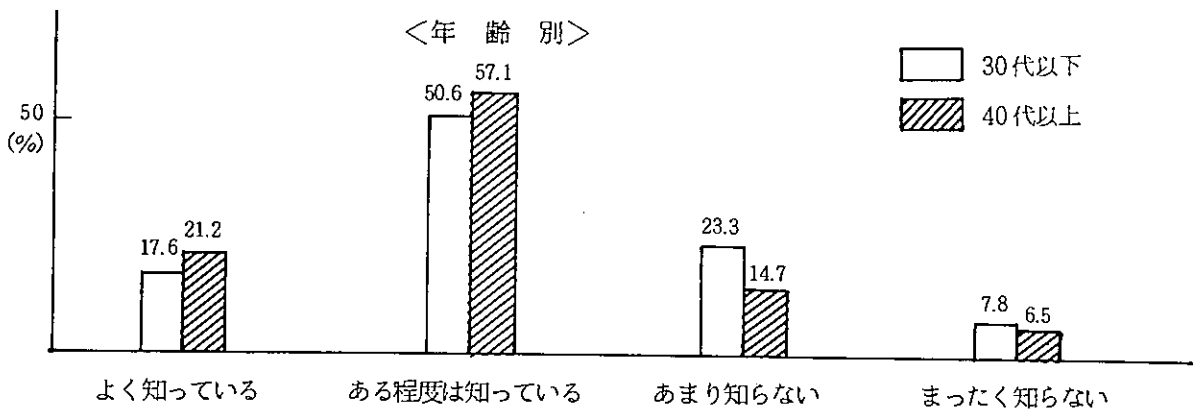
ところで、(図1-73)で、「存知」と「参加」を比較してみると、農村部ではその較差が小さく、都市部や団地では較差が大きくなっていて、知ってはいるが、それが実際の参加に結びついていないようである。

それでは、年齢別(図1-74)にみると、「よく知っている」では、30代以下17.6%、40代以上

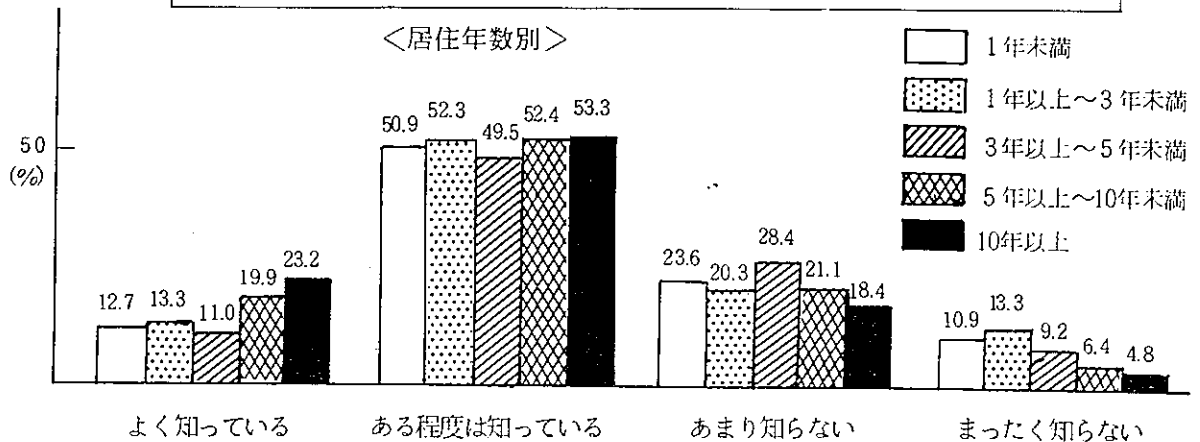
(図1-73) 学級・講座等の存知と参加の比較



(図1-74) 21.あなたは、それらの学級・講座、講演会などが実施されているのを知っていますか。



(図1-75) 21.あなたは、それらの学級・講座、講演会などが実施されているのを知っていますか。



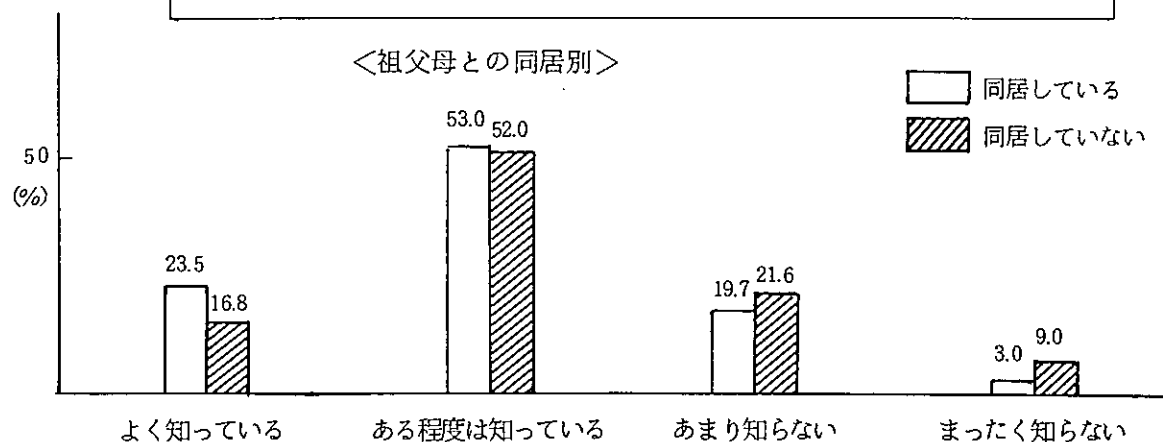
21.2%、「ある程度は知っている」では、30代以下50.6%、40代以上57.1%となり、40代以上の親が情報をよく知っているようだ。

居住年数別（図1-75）にみると、「よく知っている」で、5年以上と5年未満で差がはっきりできています。「まったく知らない」についても、その傾向がみられる。

祖父母との同居別（図1-76）にみると、「よく知っている」で同居者の方が約7%多く、「まったく知らない」では、非同居者の方が6%多くなっていて、祖父母の公民館活動とのかかわりが、家庭全体の公民館への関心を引き出しているのかもしれない。

この調査結果をみれば、大切なことは、参加に直接結びつくような情報を知っているかどうかである。その意味で、地域の人々の日常行動に組み込まれるタイミングで公民館の情報を流す努力が、今後ともなされる必要があるようだ。

（図1-76） 21.あなたは、それらの学級・講座、講演会などが実施されているのを知っていますか。



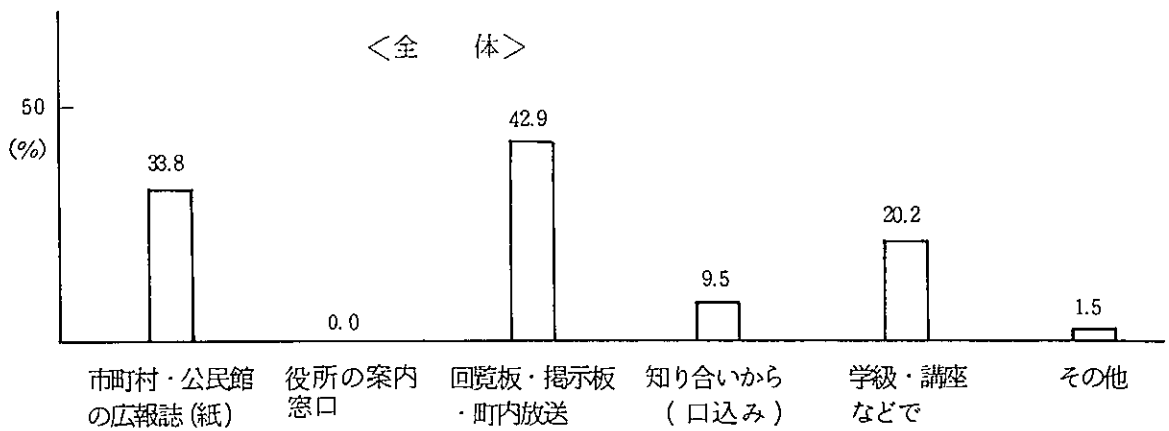
(8) 公民館の情報入手の方法

ここでは、前問に関連して、「公民館等での家庭教育に関する学級・講座などの実施を知っている人」850名に、その情報をどのようにして入手したかを聞いてみた。（複数回答）

全体では、（図1-77）のように、「回覧板・掲示板・町内放送」が42.9%、「市町村・公民館の広報誌（紙）」が33.8%、公民館での「学級・講座などで」が20.2%、「知り合いから（口伝み）」が9.5%であった。役所の案内窓口は0%であった。ただし、これらの情報のうち、どの情報が参加行動に決定的な役割を果たしたかが重要である。一般に、行動に結びつくには、情報が重複して入手されている必要があると考えられている。いずれにせよ、実効性の高い、主体的なPR活動が必要であるがそれを以下のデータで考えてみよう。

まず、地域別（図1-78）にみると、参加の割合が一番高かった農村部では、「回覧板等」と「広報誌」と「学級等」が、ほぼ肩を並べている。行動には重複した情報が必要であることにつながるデ

(図1-77) 21.SQ それを何で知りましたか。

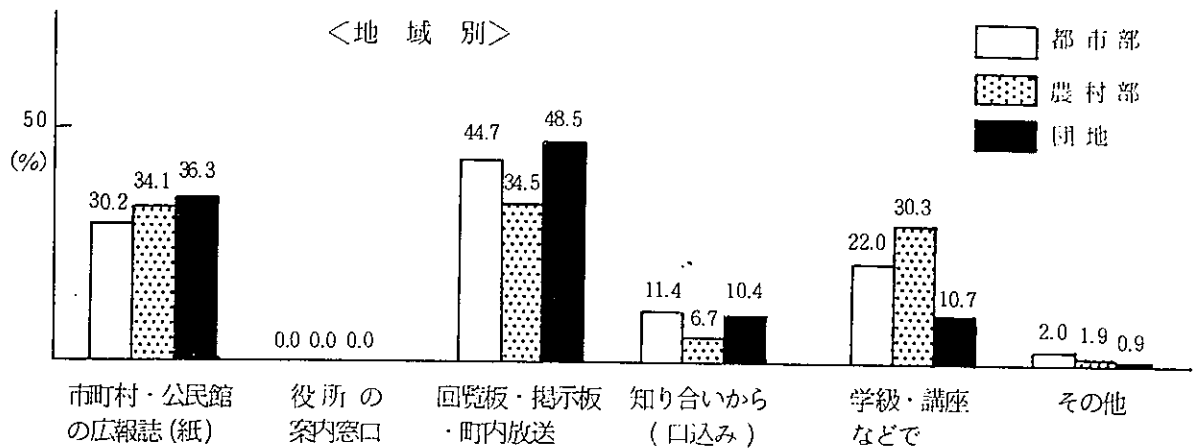


一タかもしれない。とりわけ、「学級等」で順次案内されているケースが多いのが目につく。逆に、他の地域に比べて、「回覧板等」は少ないようである。このことは、「学級等」を通じて、公民館が次の学級・講座を紹介していく方式の重要性を示唆しているのかもしれない。

次に、団地に目をやると、「回覧板等」と「広報誌」が他に差をつけて高率である。団地における回覧板や掲示板などの威力の大きさが伺われる。広報誌も準回覧板的に確実な情報になっているようである。その成果が、(図1-72)の「よく知っている」では都市部と差がなかった団地が、「ある程度知っている」では10%以上の差をつけて高率を示した数字にあらわれているのかもしれない。

都市部でも、団地と同じ順位を示しているが、「広報誌」の力が3地域の中では一番弱いことや、「知り合いから」の直接情報が、3地域の中では一番有力であることなどが特徴的である。「学級等」も高率なのを考え合わせると、都市部では、人と人の直接コミュニケーションによるパーソナルな情報が重要な役割を果たしているのかもしれない。

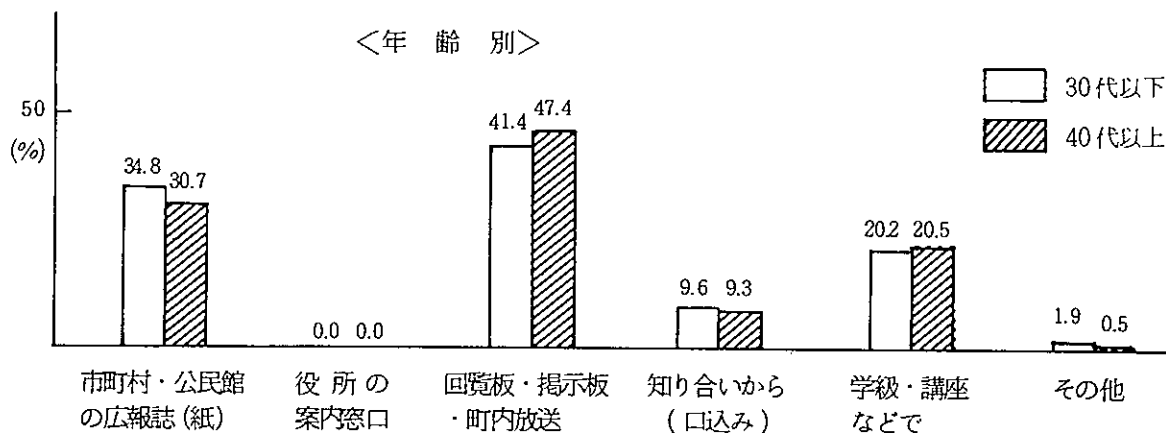
(図1-78) 21.SQ それを何で知りましたか。



年齢別（図1-79）にみると、40代以上は「回覧板等」で、30代以下は「広報誌」で、他より高率を示している。若い世代の方が、情報誌の活用にあらずかだが慣れていないのかもしれない。

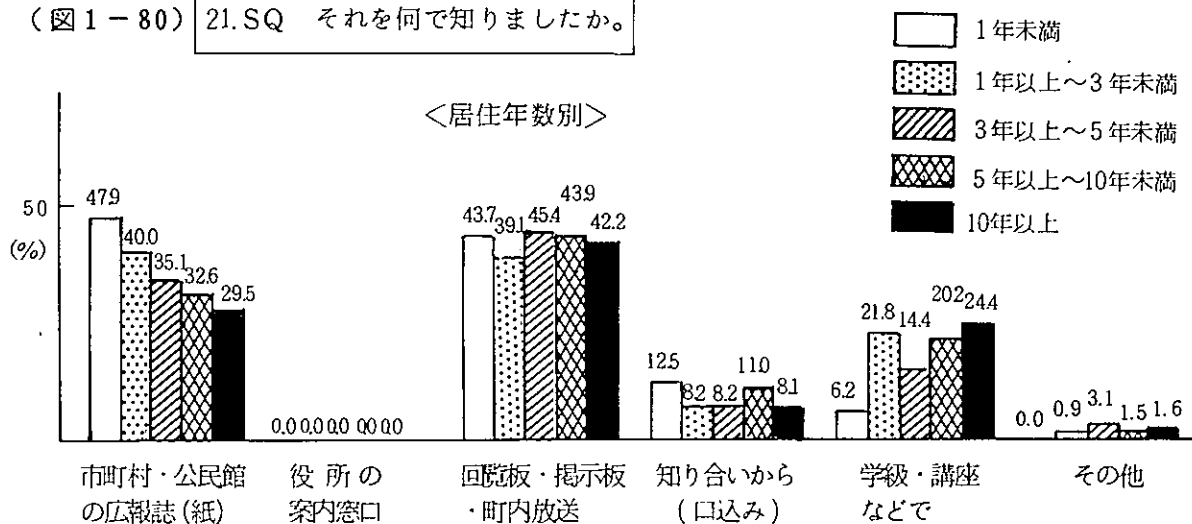
居住年数別（図1-80）にみると、居住1年未満の親は、「広報誌」を活用しているのが一目でわかる。広報誌の新入居者にとっての意義がきわめて大きいことがわかる。また、「広報誌」は、居住年数にきれいに逆比例している。この事実は、（図1-75）の存知の割合が、ほぼ居住年数に比例してい

（図1-79） 21.SQ それを何で知りましたか。

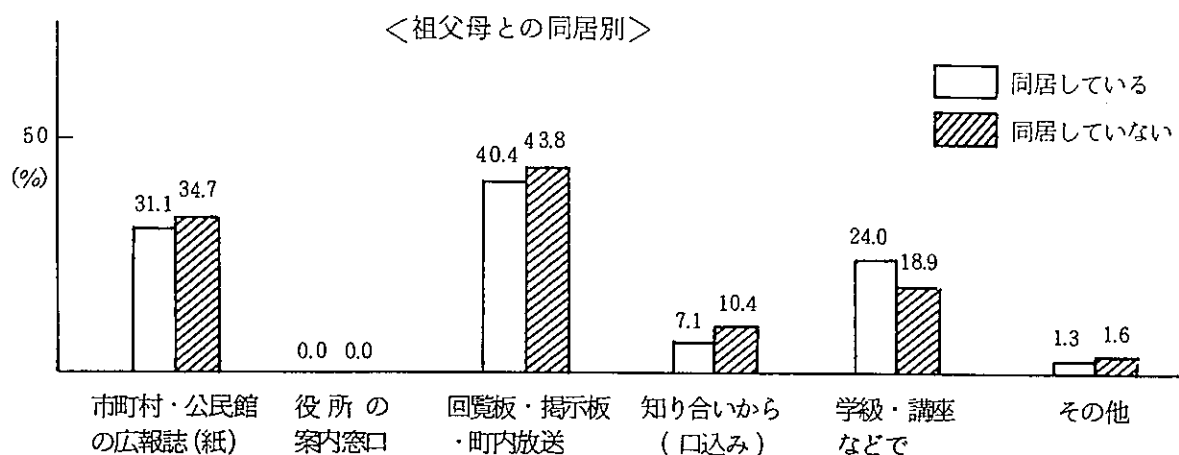


ることと考え合わせると、公民館等の広報誌というメディアの利用の仕方の一考を要することを示唆してはいないだろうか。それに比べて、「回覧板等」は、居住年数にほとんど関係なく一定して活用されているのが、好対照をなしている。

（図1-80） 21.SQ それを何で知りましたか。



(図1-81) 21.SQ それを何で知りましたか。



祖父母との同居別(図1-81)にみると、同居している親は、「学級等」が多く、非同居の親より高率を示したが、これは、(図1-69)の参加の状態そのものの差によると考えられる。一方、非同居の親は、「広報誌」「回覧板等」「知り合いから」が多くなっている。

4 本章のまとめ

まず第1に、親と親のつながりを、その近所でのつきあいの実状から吟味してみた。その結果、近所の人への声かけはよくなされており、近所で気軽に行き来できる家は平均して「3軒」程度であり、親しくなったきっかけは、「家が近いこと」や「子ども同士が友だち」であることが多い。近所の人と、家庭教育について「話す」親と「話さない」親の比率は、3：1であり、近所づきあいを「わずらわしい」と感じている親は、50%弱であることなどが明らかになった。

地域別にみると、団地での親同士のつきあいはよくなされている。団地では、空間的な近さ、生活スタイルの類似などから、「わずらわしさ」もより低く、家庭教育などについても、他の地域より話し合われている。その半面、農村部の「わずらわしさ」や都市部でのつきあいの希薄さが目立っている。

居住年数別にみると、1年未満の親は、「隣近所」よりも、むしろ「子ども同士が友だち」というきっかけで、つきあいが広がり、1年以上～3年未満の親は、近所のつきあいが少しわずらわしくなるが、3年もたつと、近所の人との実質的なつながりが成立しているようである。

祖父母との同居別にみた場合、「隣近所」で親しくなるのは、祖父母との同居の親が高率を示している。これは、祖父母の近所とのつきあいの好影響であろうと考えられる。

第2に、親と地域の子ども達とのつながりはどうであろうか。親は、わが子の親しい友だちやその親も、かなり知っている。また、近所の子どもへのあいさつや声かけを「よくする」親は64.2%であり、危険な遊びをみて、「やめるまで注意する」親は26.5%であり、大半の親は、「やめるよう一応注意する」と回答している。「地域ぐるみの子育て」とよく言われるが、この結果からみれば、もう少し親の積極性を期待したいところである。

そのような中でも、地域別にみれば、子どもへのあいさつ・声かけは団地において、危険な遊びへの注意は農村部において、より活発に実行されているのがわかる。

年齢別では、30代以下の親の方が、子どもの友だちやその親もよく知っている半面、子どもへのあいさつ・声かけ、危険な遊びへの注意は、40代以上の親の方がよくしている。居住年数別では、子どもの友だちを知るのは3年、その親を知ったり、子どもへのあいさつ・声かけは5年、危険な遊びへの注意は10年で、それぞれかなりの較差がでている。また、この項目でも、祖父母との同居は、好影響を及ぼしている。

第3に、親と地域の活動とのつながりはどうであろうか。まず、学校教育との接点であるPTAの集いに「参加する」親は78.6%である。地域の行事や活動については、71.9%の親が「関心がある」と答えているが、それより10%以上多い82.7%の親が、「参加する」と答えている。また、95%以上の親が、子どもを地域の行事や活動に参加させたいと考えているが、いざ、地域の世話役となると、約30%の親が、「まったく経験がない」ことがわかった。さらに、公民館などでの家庭教育に関する学級・講座などについては、「参加している」親は37.0%であり、その実施を70.7%の親が「知っている」と答えていて、その較差は非常に大きい。また、「回覧板」や「広報誌」などが、その主な情報源となっている

ことがわかった。

地域別にみると、農村部ではあらゆる地域の行事や活動への関心・参加が多い。団地では、地域の世話役など、割と均等に経験しているが、都市部では、子どもを参加させたいとのニーズは高い割に、親の地域の行事や活動への関心・参加は少なく、また、地域の世話役の経験も少なくなっている。公民館などでの家庭教育に関する学級・講座等についても、都市部は参加が少なく、農村部がより熱心なのがわかる。そして、農村部では、順次、講座等で紹介されていくようである。

年齢別にみると、学級・講座等については、40代以上の親の方が積極的であることが明らかになった。

居住年数別にみると、居住年数が長くなれば、地域の活動とのつながりは強くなっている。ただし、1年未満の親の積極性が目を引く半面、1年以上～3年未満の親に、地域の行事や活動にせよ、学級・講座等についても、中だるみ的な消極的傾向があらわれることがわかった。

祖父母との同居別では、地域の行事・活動、そして学級・講座等への参加について、同居の方がかなり高率であり、祖父母との同居は、具体的な参加を促進する条件となっているのがわかる。

第2章 子どもと地域とのつながり

子どもは、家庭に生まれ、育ち、自分の生れ育った家庭を中心にした地域へと、その成長とともに進出していく。

近頃、子どもたちは、遊び道具の増加や多様化で、今までと遊びの形が変わり、家の中で遊ぶことが多くなっている。事実、夕方や日曜祭日等の休日に外で多人数で遊んでいる子どもたちの姿を見かけることが少なくなってきた。今日の遊びの道具が屋内で遊ぶもの、しかも少人数で遊ぶものになったことも、その原因の一つにあらうが、他にも、おけいごととか、学習塾へ通う子どもがふえてきたことなどもあらう。

そうなると地域での子ども同士の活動も少なくなり、昔あったような地域における子どもたちのたて社会の成立にも影響を与えているのではないだろうか。

また、地域の教育力の低下ということも言われている。大人と子どものつながりも、昔に比べ希薄になってきているのではなかろうか。

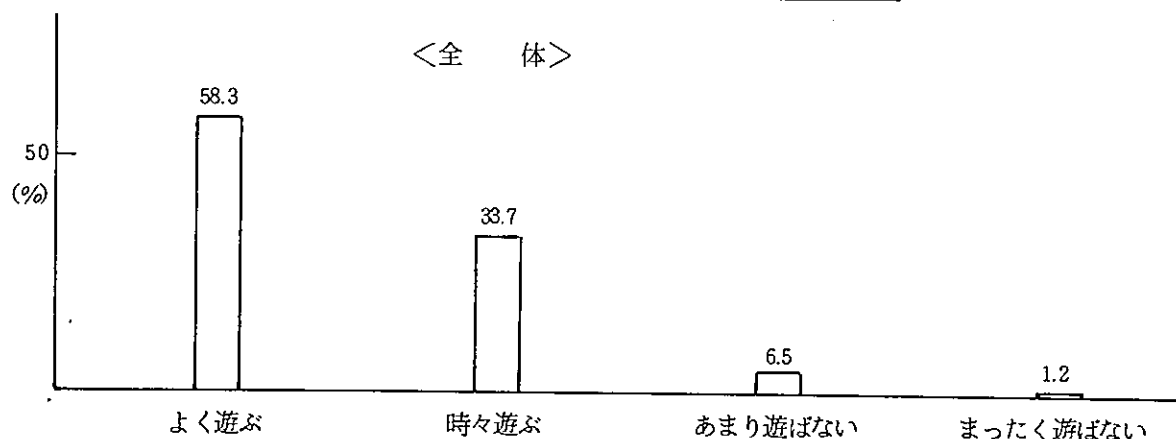
1. 地域での交友関係と子どもの成長

(1) 子ども同士の遊び

「あなたのお子さんは、近所の子どもさんと遊びますか」という問である。

全体では、(図2-1)のように「よく遊ぶ」58.3%、「時々遊ぶ」33.7%、「あまり遊ばない」6.5

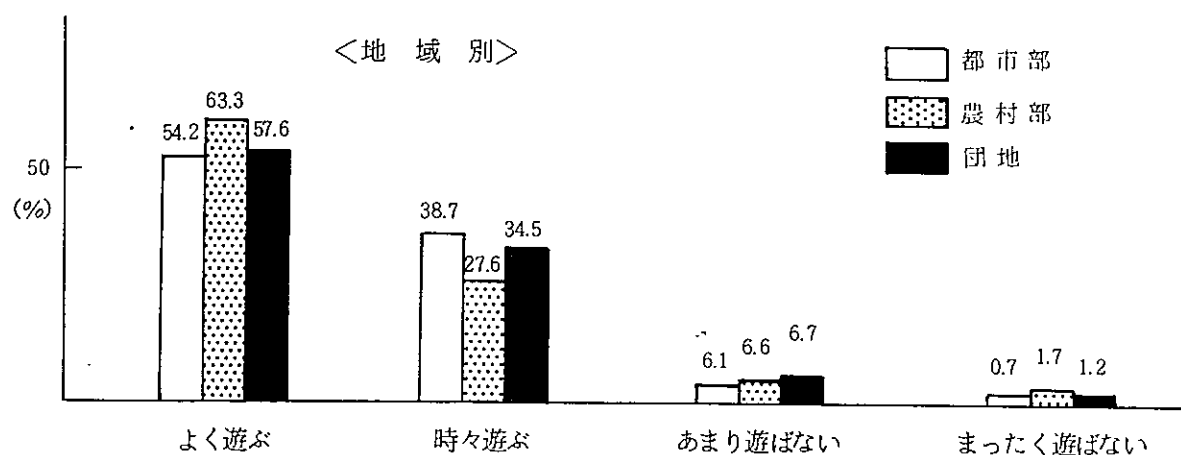
(図2-1) 11.あなたのお子さんは、近所の子どもさんと遊びますか。



、「まったく遊ばない」1.2%となっている。約60%が「よく遊ぶ」で、「時々遊ぶ」まで含めると、92%が近所の子ども同士遊んでいることになる。

次に、地域別(図2-2)にみると、「よく遊ぶ」では、農村部63.3%、団地57.6%、都市部54.2%となり、農村部が他に比べて6~9%多くなっている。「時々遊ぶ」では、都市部38.7%、団地34.5%、農村部27.6%となり、「よく遊ぶ」の場合の逆になる。そこで、「よく遊ぶ」と「時々遊ぶ」を加えると、都市部92.9%、団地92.1%、農村部90.9%となり大差はない。どの地域の子どもも90%以上は、近所の子どもと遊んでいることになる。

(図2-2) 11.あなたのお子さんは、近所の子どもさんと遊びますか。

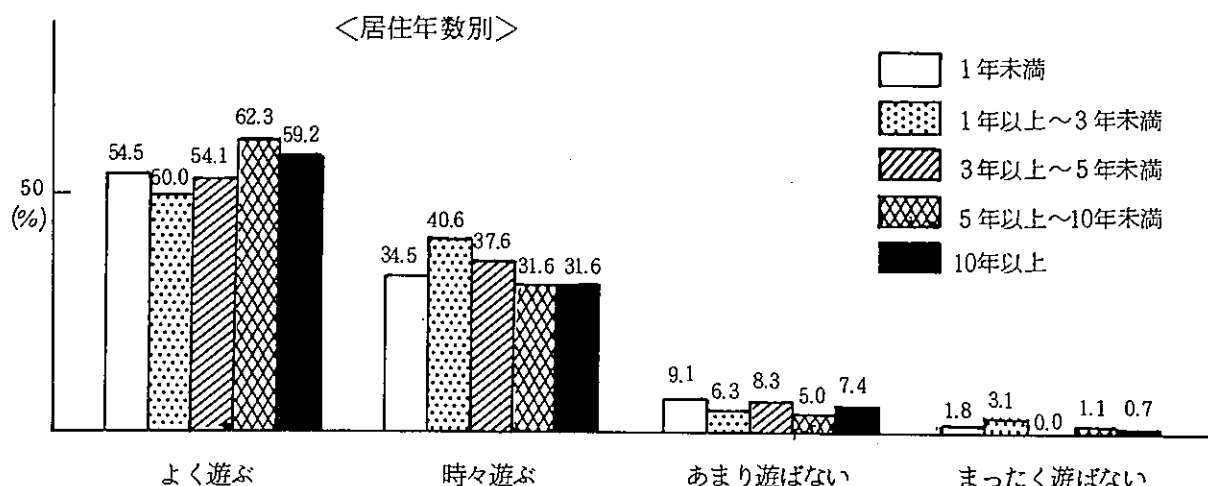


年齢別にみると、「よく遊ぶ」で、30代以下が59.4%、40代以上で55.0%で、30代以下が4.4%多いことになる。

居住年数別(図2-3)にみると、「よく遊ぶ」では、1年未満54.5%、1年以上～3年未満50.0%、3年以上～5年未満54.1%、5年以上～10年未満62.3%、10年以上59.2%となっていて、5年以上が5年未満よりいくらかうまわっている。「時々遊ぶ」まで加えると、どれもほぼ90%で大差はない。祖父母との同居別では、ほとんど差はない。

以上のことから、近所の子ども同士よく遊んでいるとみている親は、約60%であり、農村部、30代以下、居住5年以上の親が、やや多くなっているが、全体的にはそう大差はないようである。

(図2-3) 11.あなたのお子さんは、近所の子どもさんと遊びますか。

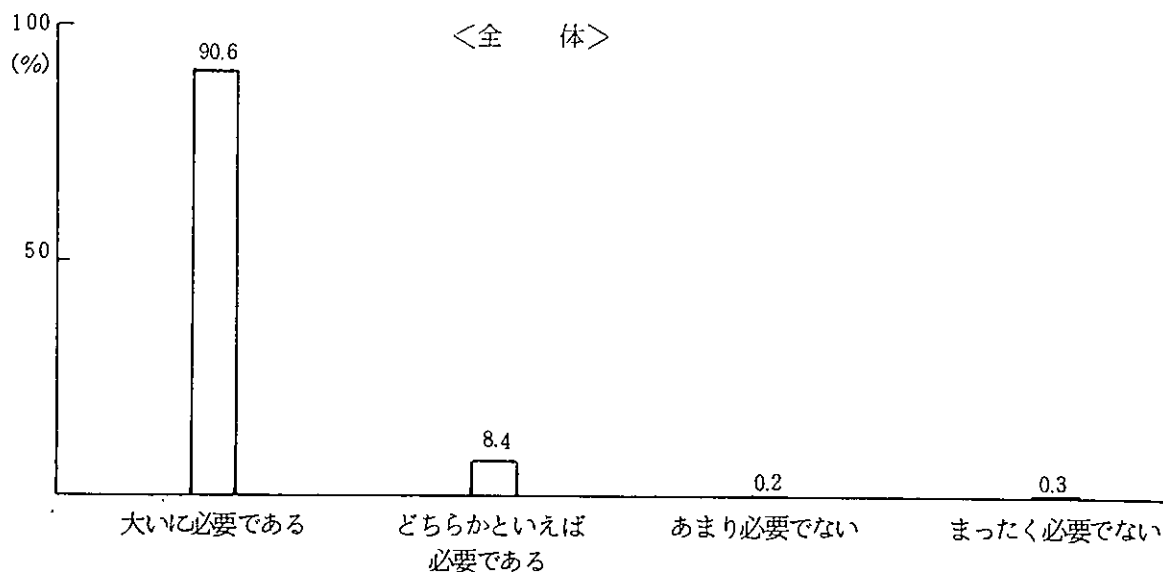


(2) 子ども同士のつきあいと子どもの成長

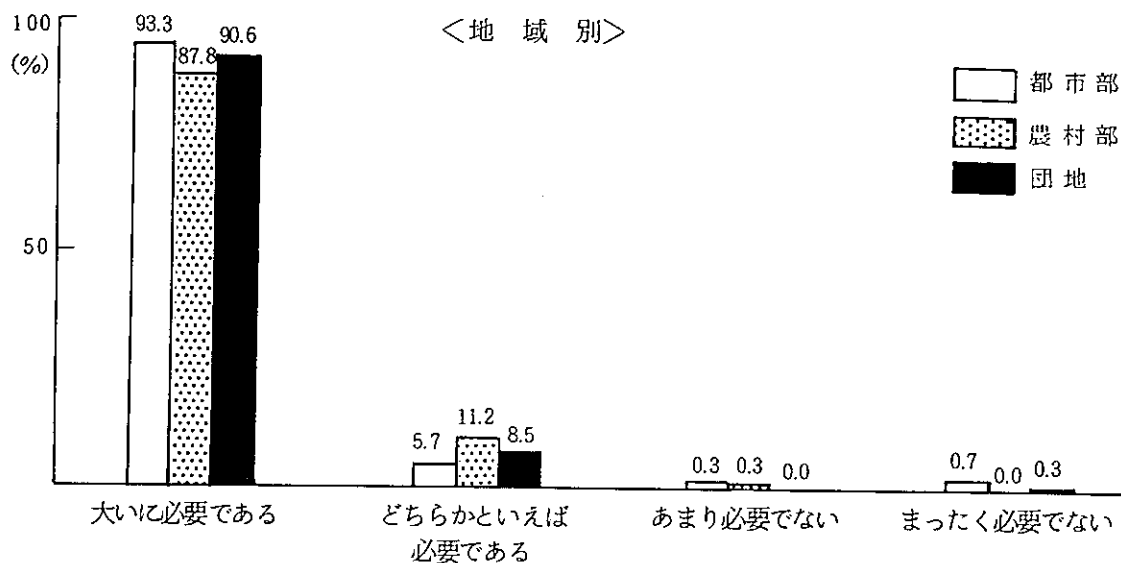
「子どもの成長に、子ども同士のつきあいは必要かどうか」を問うたものであるが、全体では、(図2-4)のように、「大いに必要である」90.6%、「どちらかといえば必要である」8.4%、「あまり必要でない」0.2%、「まったく必要でない」0.3%となっている。99%の親は必要性を認めているが、0.5%の親は必要でないと答えている。

これを、地域別(図2-5)にみると、「大いに必要である」では、都市部93.3%、農村部87.8%、団地90.6%となっている。都市部の親が、農村部の親より5.5%多く、大いに必要だと考える人がいるといえる。「どちらかといえば必要である」では、都市部5.7%、農村部11.2%、団地8.5%となり、前者の逆になる。両者を加えた「必要である」は、ほぼ99%で差はなく、必要性の度合いは、いくらか違っても、必要であると認める割合に地域性はないようである。しかし、「まったく必要でない」をみると、都市部で0.7%の親が、子ども同士のつきあいは必要ないと答えている。

(図2-4) 14.あなたは、お子さんの成長にとって、子ども同士のつきあいは必要だと思いますか。

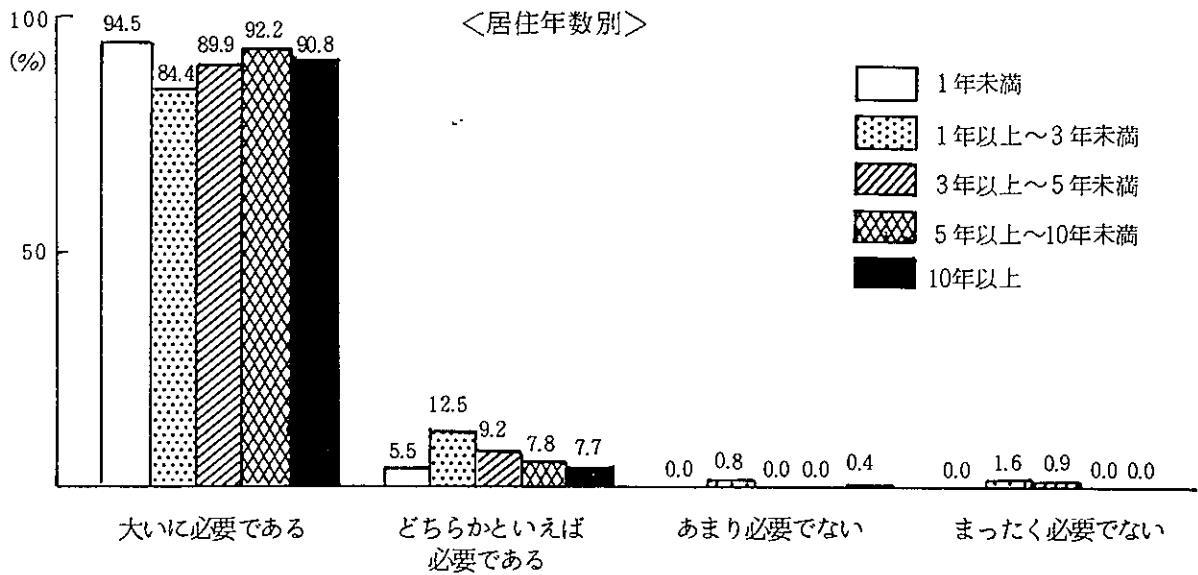


(図2-5) 14.あなたは、お子さんの成長にとって、子ども同士のつきあいは必要だと思いますか。



次に、居住年数別(図2-6)にみると、「大いに必要である」では、1年未満で94.5%と最も多く、5年以上～10年未満の92.2%、10年以上の90.8%、3年以上～5年未満89.9%、1年以上～3年未満の84.4%となり、1年未満と1年以上～3年未満では、約10%の開きが見られる。また、「まったく必要でない」をみると、1年以上～3年未満で1.6%、3年以上～5年未満で0.9%の親が、子ども同士のつきあいは必要でないと答えている。

(図2-6) 14.あなたは、お子さんの成長にとって、子ども同士のつきあいは必要だと思いますか。



親の年齢別、祖父母との同居別では、ほとんど差はみられない。

以上のことから、99%の親が、子ども同士のつきあいは必要だと考え、しかも、都市部の親、1年未満の親が、他の親より数%多く望んでいることがわかった。

2. 地域の人たちとの交流

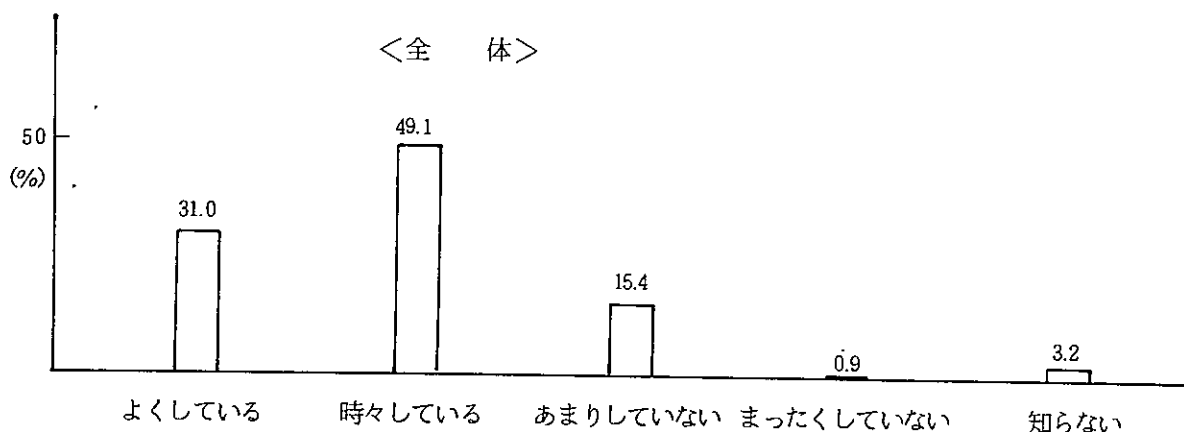
(1) 近所の人へのあいさつ

「子どもたちが、近所の人にあいさつをしているか」という問である。

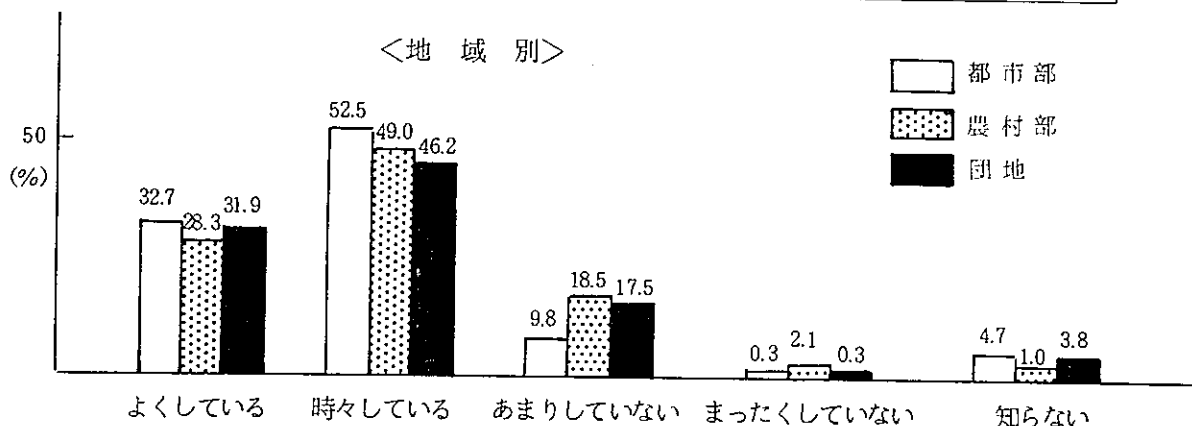
全体では、(図2-7)のように、「よくしている」31.0%、「時々している」49.1%、「あまりしていない」15.4%、「まったくしていない」0.9%となっている。これからいえることは、約3分の1の子どもは、近所の人によくあいさつをし、「時々している」まで含めると80.1%になる。

これを、地域別(図2-8)にみると、「よくしている」では、都市部32.7%、団地31.9%、農村

(図2-7) 12.あなたのお子さんは、近所の人に出会った時、あいさつをしていますか。



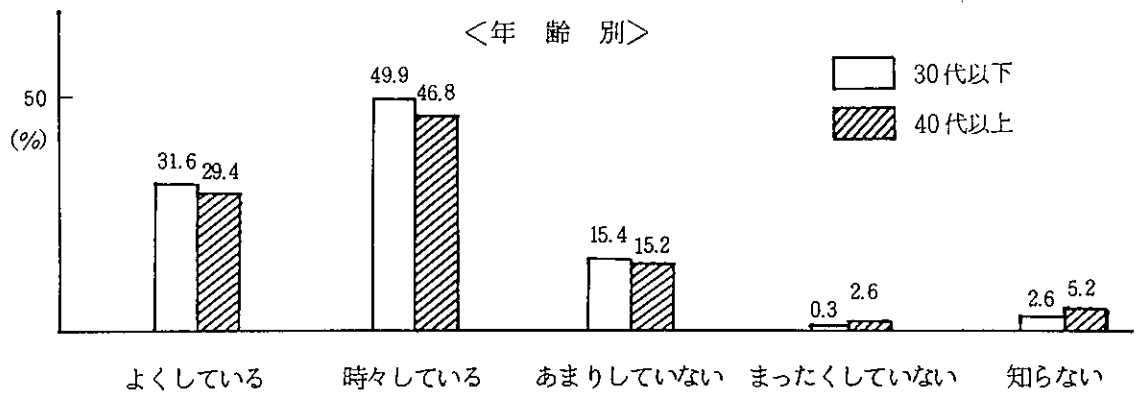
(図2-8) 12.あなたのお子さんは、近所の人に出会った時、あいさつをしていますか。



部28.3%となり、都市部が他の地域より少し多くなっている。「時々している」を含めると、都市部85.2%、団地78.1%、農村部77.3%となり、農村部より都市部が約8%多くあいさつをしていることになる。

次に、年齢別(図2-9)にみると、「よくしている」と「時々している」では、30代以下の親の

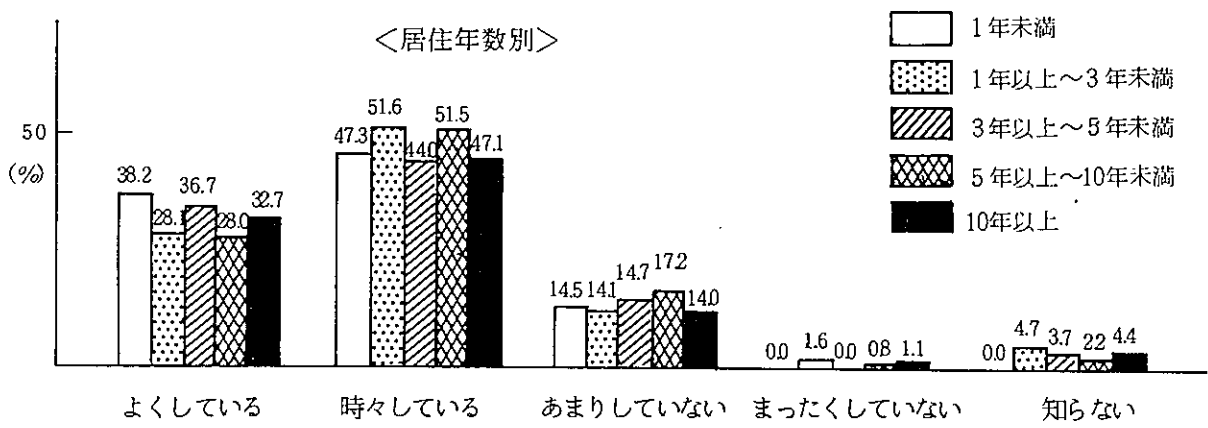
(図2-9) 12.あなたのお子さんは、近所の人に出会った時、あいさつをしていますか。



方が2~3%多く、逆に、「まったくしていない」では、40代以上の親の方が約2%多いようである。

また、居住年数別(図2-10)にみると、「よくしている」では、1年未満が38.2%と最も多く、次に、3年以上~5年未満の36.7%、10年以上の32.7%、1年以上~3年未満の28.1%、5年以上~10年未満の28.0%とつづいている。1年未満の親は、1年以上~3年未満や5年以上~10年未満の親より、約10%多く、子どもが近所の人によくあいさつをしていると答えている。「時々している」まで含めると、1年未満が約85%で、他は約80%となっていて、1年未満が約5%多くなっている。

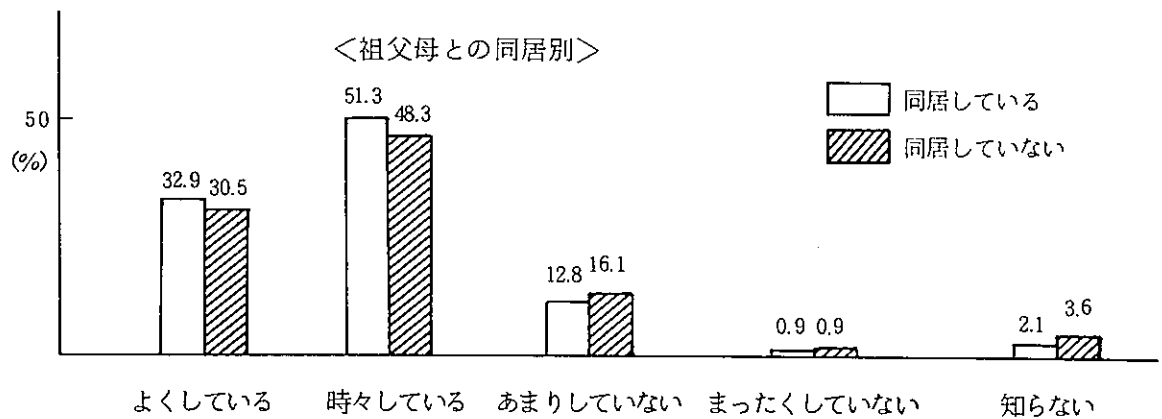
(図2-10) 12.あなたのお子さんは、近所の人に出会った時、あいさつをしていますか。



祖父母との同居別(図2-11)でみると、「よくしている」では、同居者32.9%、非同居者30.5%であり、「時々している」では、同居者51.3%、非同居者48.3%となり、祖父母と同居している子どもが、わずかではあるが、あいさつを多くしていることになる。

以上のことから、子どもたちの近所でのあいさつは、「よくする」が3分の1弱、「時々する」が約半数、「まったくしない」が1%弱であることがいえる。また、地域別にみると都市部が、年齢別

(図2-11) 12.あなたのお子さんは、近所の人に出会った時、あいさつをしていますか。



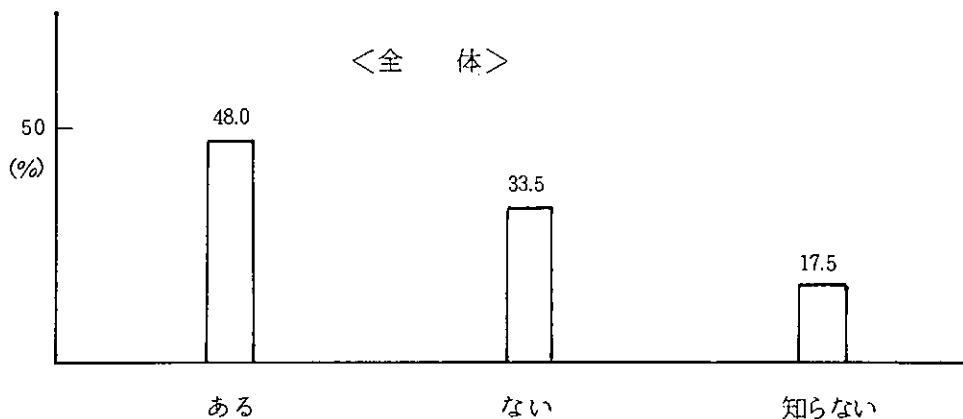
では30代以下が、祖父母との同居別では同居の方が、数%あいさつする子どもが多いこと、居住年数別では1年未満がやや多いが、それ以外はあまりかわらないといえる。

(2) 地域の人の注意

子どもたちが、近所の人に注意されたことがあるか、どうかを聞いてみた。

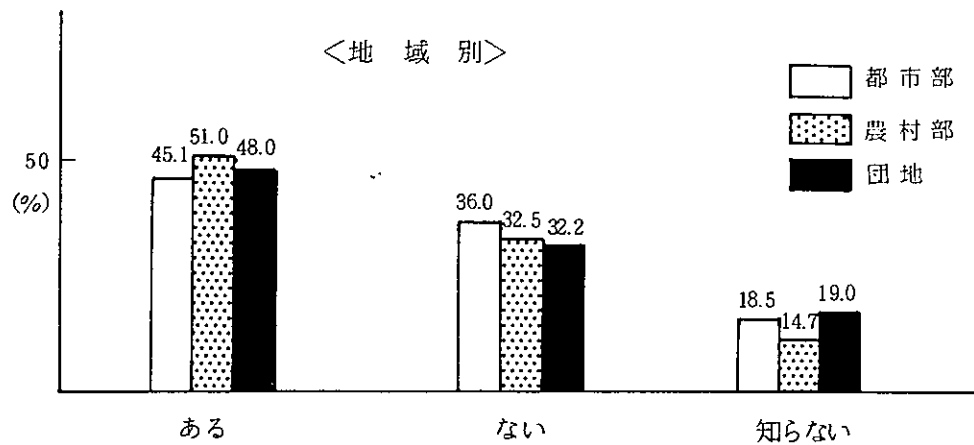
全体では、(図2-12)のように、「ある」48.0%、「ない」33.5%、「知らない」17.5%となっていて、約半数の子どもが、近所の人に注意されたことがあるということになる。

(図2-12) 13.あなたのお子さんは、近所の人に注意されたことがありますか。



これを、地域別(図2-13)にみると、「ある」では、農村部51.0%、団地48.0%、都市部45.1%となっていて、農村部の子どもがやや多く、近所の人に注意されているといえる。「ない」では、都市部36.0%、農村部32.5%、団地32.2%の順になっていて、都市部がわずかに多い。「知らない」と回答した親は、団地19.0%、都市部18.5%、農村部14.7%で、団地や都市部では、約20%の親が自分の子どものそういうことに気付いていない。

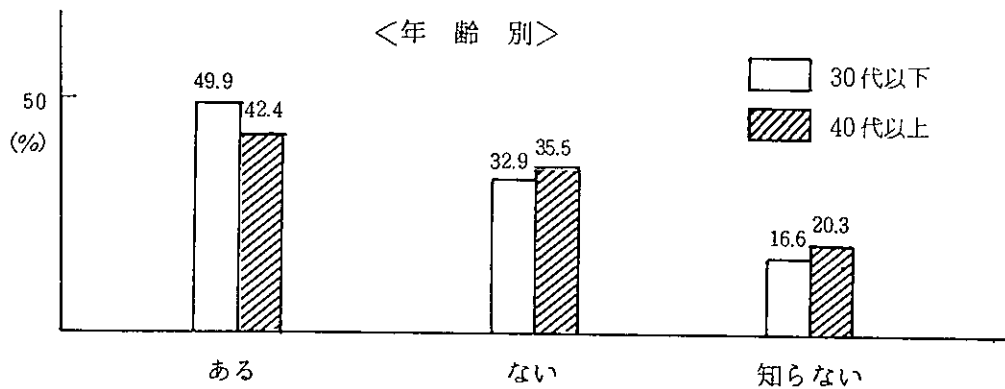
(図2-13) 13.あなたのお子さんは、近所の人に注意されたことがありますか。



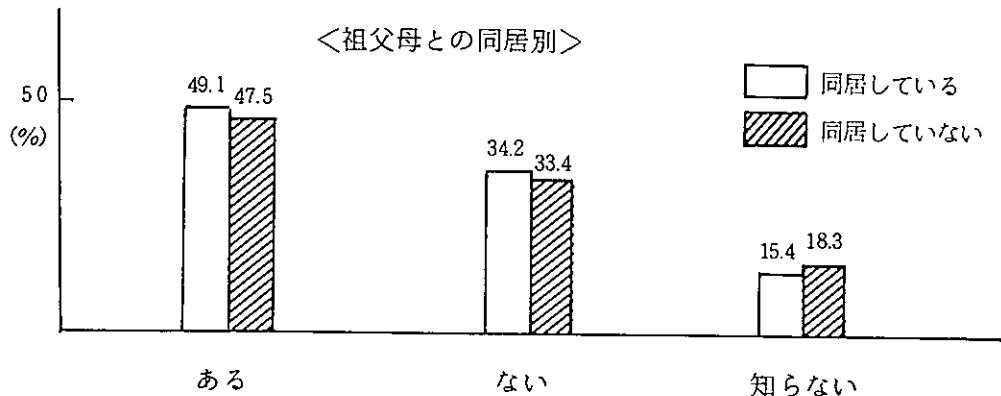
年齢別(図2-14)にみると、「ある」では、30代以下49.9%、40代以上42.4%となり、30代以下の子どもが7.5%多く、注意されていることになる。

祖父母との同居別(図2-15)にみると、「ある」では、同居者49.1%、非同居者47.5%で、同居の子どもが、わずかに多く注意されていることになる。

(図2-14) 13.あなたのお子さんは、近所の人に注意されたことがありますか。

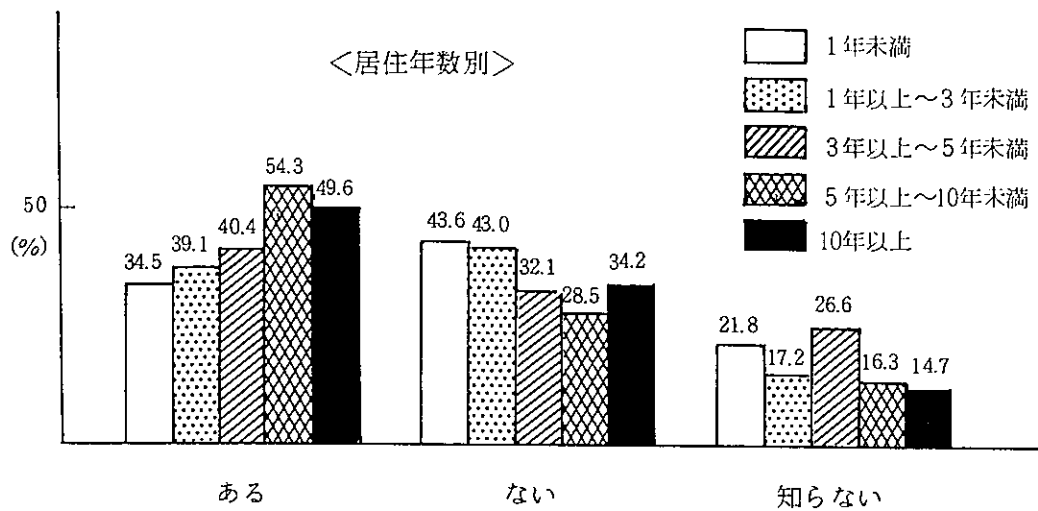


(図2-15) 13.あなたのお子さんは、近所の人に注意されたことがありますか。



最後に、居住年数別（図2-16）にみると、「ある」では、1年未満34.5%、1年以上～3年未満

（図2-16） 13.あなたのお子さんは、近所の人に注意されたことがありますか。



39.1%、3年以上～5年未満40.4%、5年以上～10年未満54.3%、10年以上49.6%となり、ほぼ居住年数の長い方が、注意が多くなっている。

以上のことから、子どもの約半数は、近所の人から注意されたことがある。また、注意されたことがあるかどうかを知らない親が17.5%いることがわかる。地域別では、農村部が他の地域より3～6%多くなり、年齢別では、30代以下が7.5%多く、祖父母との同居別では、同居者がわずかに多く、居住年数別では、5年以上が約50%で5年未満よりかなり多くなっていて、注意しやすい状況にあるようである。

3. 本章のまとめ

子どもと地域とのかかわりについて、子ども同士の遊び、子ども同士のつきあいは必要か、近所の人へのあいさつ、近所の人から注意を受けているか、という点から親の見方や考え方を示してきた。

近所の子ども同士でよく遊んでいるとみている親は、約60%で、農村部が他の地域よりやや多く、30代以下が40代以上よりやや多くなり、居住年数別では5年以上が5年未満よりいくらか上まわっているが、全体的にはそう大差はない。

子どもの成長に子ども同士のつきあいが必要と考えている親は99%であり、しかも、都市部の親、1年未満の親が、他の親より数%多く望んでいることがわかった。

近所の人へのあいさつは、「よくしている」が3分の1弱で、都市部、30代以下、祖父母との同居者、居住1年未満が他より数%多くなっているが、それ以外はあまりかわらない。近所の人へのあいさつは、よくできているとはいえないようである。

子どもが近所の人から注意されたことがあるのは、約半数であり、農村部、30代以下、祖父母との同居者、居住年数の長い方がよく注意されているようで、大人同士の人間関係が必要になるようである。

第3章 家庭教育と地域とのつながり

「地域づくりは人づくり」といわれる。子どもの頃から地域に関心を持ち、自分たちの身近な自然や歴史にふれることが、どんなに考える力を養わせるか、その教育的効果は大きい。

現代社会にとって必要なのは、家庭・学校の拘束力と判断力のほか、地域のもつ力を掘り起こすことである。

青少年の人間形成に強い影響を与えるのは、家庭と学校だけでなく、地域もその役割をになっていることはいままでもない。

かつて、地域活動に参加することによって、非行防止や健康づくり、奉仕の精神や思いやりのある子どもの豊かな人格の形成などに役立ってきた。しかし、地域は近年、魅力に乏しい存在になってきているようだ。

大人たちもそうであるが、青少年も地域にかかわっていくことにきわめて無関心である。つまり、本来、地域が持っていなければならない家庭や学校にはない、人々を引きつける魅力や教育力が、ここ数年低下しているようである。

家庭は、社会における最小集団である。世の中に自分以外の人々がいることや、その世の中に一種の約束ごとがあることを、家庭を通じて、最初に子どもたちは知っていく。

そして、社会性・公共性を体得するためには、まず、親がその必要性を感じ、子どもだけでなく親も地域社会に貢献する活動をすることが大切である。

親子で、地域の活動や自然・歴史などに親しむことによって、自分の地域を知り、愛着が深まり、好ましい地域社会を形成する意識が芽ばえてくれば、理想的である。

「地域は人をつくる」 地域の活力を向上させるためには、日常の家庭生活の中で、地域の話や歴史・自然について関心を持ち、父親を中心に家族で、地域の諸活動に積極的に参加する時が、今きているようである。

1. 家庭教育の実態

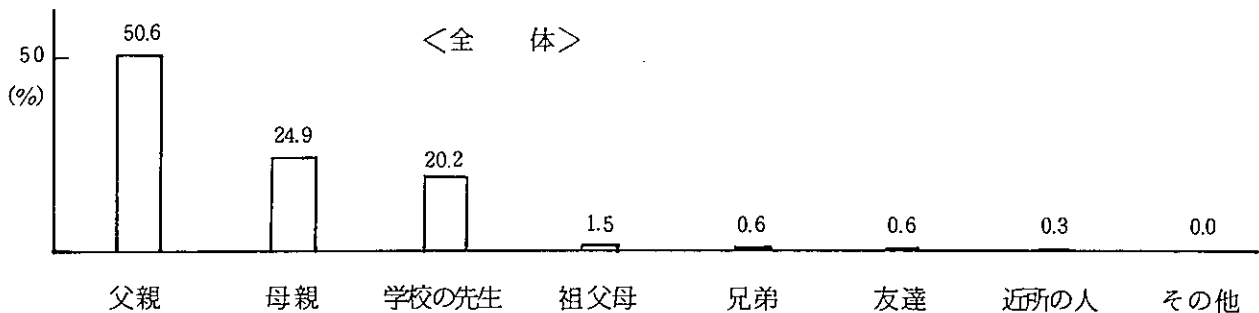
(1) 子どもへの影響力

子どもを叱る親が少なくなっているが、「誰の言うことを最もよく聞きますか」という問に対して、全体では、(図3-1)のように、「父親」50.6%、「母親」24.9%、「学校の先生」20.2%となっており、父親は母親の2倍以上で、ここでは、半数の父親がまだ、威権を保っていることを示している。

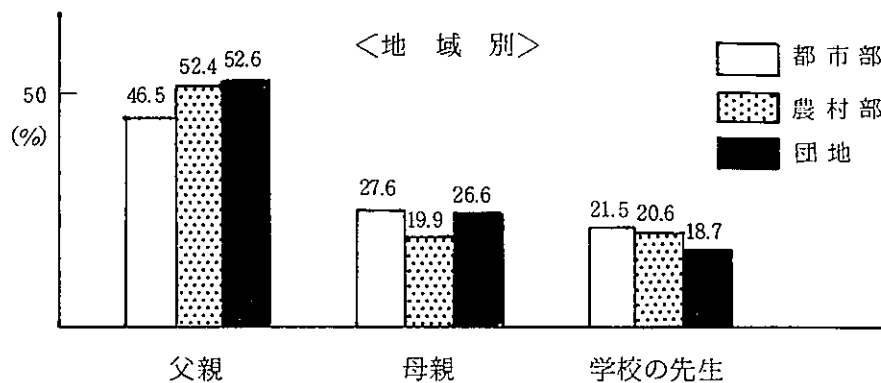
その他、「祖父母」1.5%、「兄弟」、「友達」、「近所の人」は、1%以下ときわめて少なくなっている。

地域別(図3-2)では、「父親」は、農村部52.4%、団地52.6%と全体より高くなっており、都市部では、46.5%と全体より4.1%低く、父親の言うことを最もよく聞く子どもが半数を割っていることを示している。

(図3-1) 22.あなたのお子さんは、誰の言うことを最もよく聞きますか。



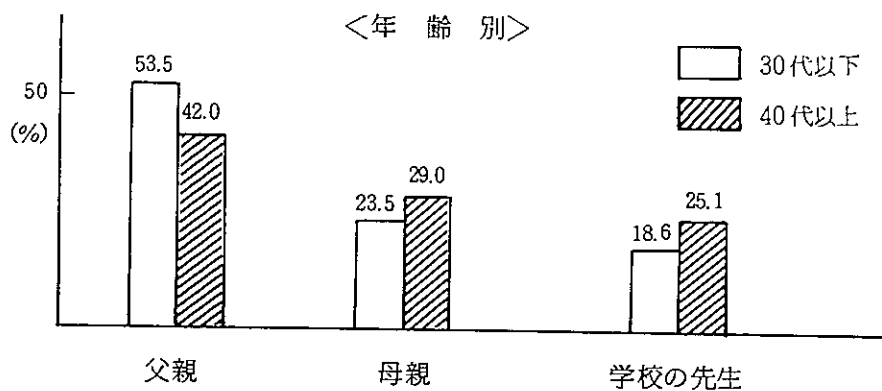
(図3-2) 22.あなたのお子さんは、誰の言うことを最もよく聞きますか。



また、「母親」は、都市部27.6%、団地26.6%と、全体よりやや高くなっているが、農村部では、19.9%と全体より5.0%も低く、「父親」の存在が、まだ大きいことを示しているといえるだろう。「学校の先生」については、団地で18.7%と全体より低くなっている。

年齢別(図3-3)では、「父親」は、30代以下で53.5%と高くなっており、逆に、「母親」と「学

(図3-3) 22.あなたのお子さんは、誰の言うことを最もよく聞きますか。



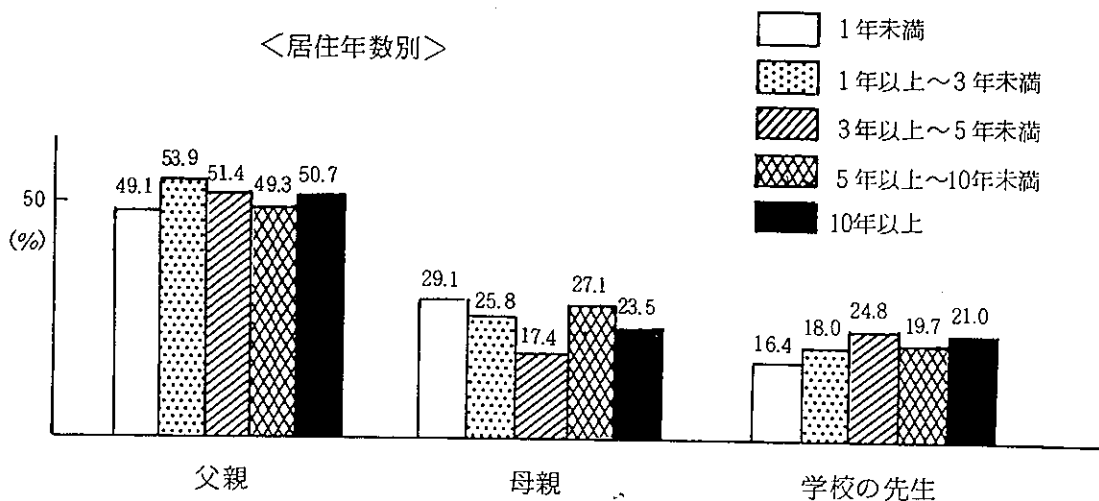
「学校の先生」は、40代以上で29.0%、25.1%と高くなっている。親の年齢が高くなるにつれて、「母親」と「学校の先生」に対する依存度が高くなっているようだ。

居住年数別(図3-4)では、「父親」は、1年以上～3年未満と3年以上～5年未満、10年以上で半数を越えている。

また、「母親」は、1年未満が29.1%と高く、1年以上～3年未満、5年以上～10年未満で25%を越えている。

「学校の先生」は、3年以上～5年未満が24.8%、10年以上が21.0%と全体の20.2%より高くなっている。

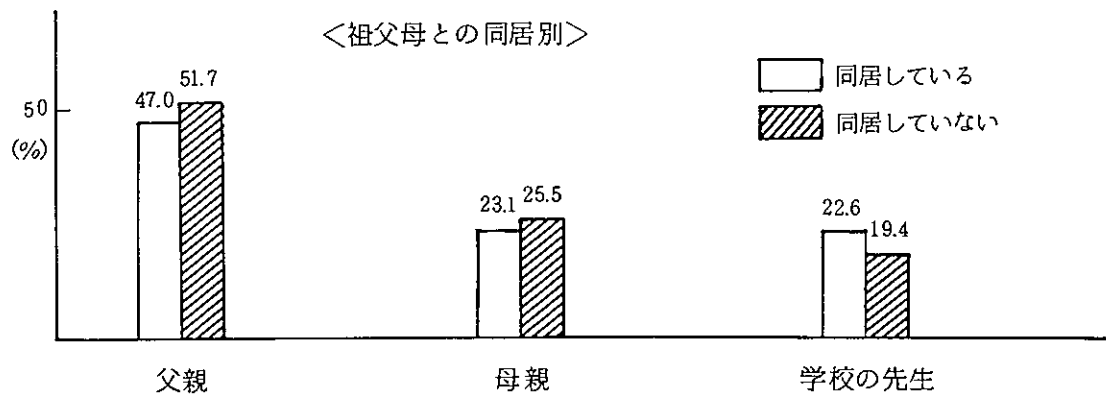
(図3-4) 22.あなたのお子さんは、誰の言うことを最もよく聞きますか。



祖父母との同居別(図3-5)にみると、「父親」と「母親」は、同居していないが51.7%、25.5%で、同居しているの47.0%、23.1%より高くなっている。

一方、「学校の先生」は、同居している 22.6%、同居していない 19.4%と、「父親」、「母親」の結果とは逆になっている。

(図 3-5) 22.あなたのお子さんは、誰の言うことを最もよく聞きますか。

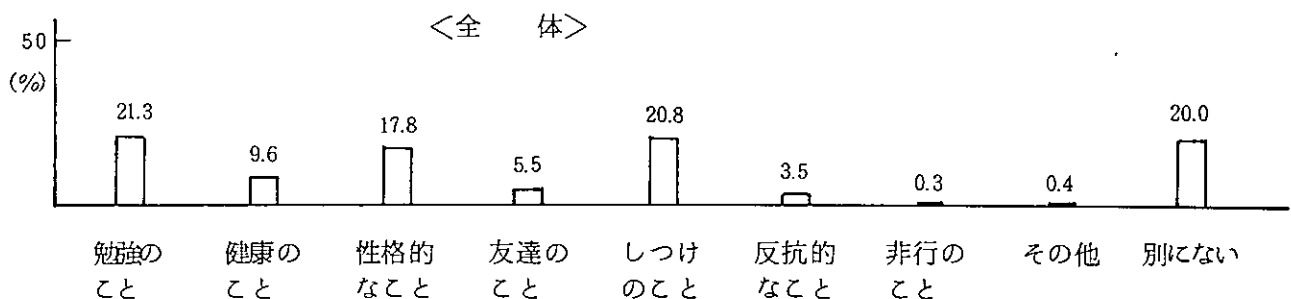


(2) 家庭教育についての悩み

① 悩みの種類

全体では、(図 3-6)のように、「勉強のこと」 21.3%、「しつけのこと」 20.8%、「性格的なこと」 17.8%、「健康のこと」 9.6%、「友達のこと」 5.5%、「反抗的なこと」 3.5%のほか「非行のこと」が 0.3%となっている。また、「別がない」が 20.0%と、5人にひとり、特に悩んでいないようである。

(図 3-6) 23.お子さんの家庭教育について、あなたが今、一番悩んでいるのは何ですか。



地域別(図 3-7)にみると、「勉強のこと」は、都市部で 23.9%と高く、農村部では 19.2%と 20%を割っている。

「しつけのこと」は、19.9%～21.3%と、地域による差はあまり出ていない。

「性格的なこと」は、農村部で 21.7%と全体より 3.9%高くなっているのとは逆に、都市部では 14.5%と平均より 3.3%低くなっている。

「健康のこと」は、やはり都市部で11.4%と関心が高くなっているが、団地では8.2%と若干低くなっている。

「友達のこと」は、都市部6.7%、団地5.8%と高くなっており、地域による特色がよく出ている。

「反抗的なこと」は、農村部で4.9%、都市部で4.0%と全体より高いが、団地では1.8%と全体の半分である。「反抗的なこと」が全体的に低いのは、まだ、子どもたちが反抗期の年齢に達していないからだろうか。

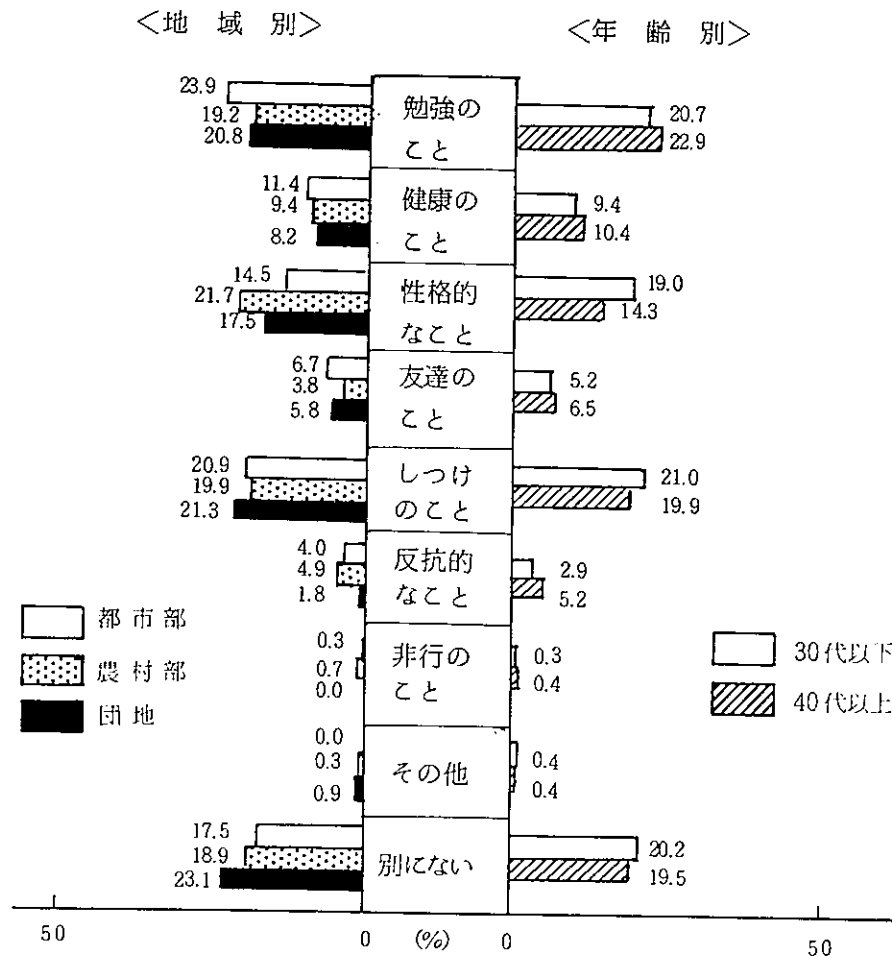
「別がない」が、団地で23.1%と高くなっている。

年齢別(図3-7)にみると、「勉強のこと」は、40代以上で、22.9%と高くなっている。

「しつけのこと」、「性格的なこと」は、30代以下で21.0%、19.0%と若い親の方が悩んでいることがわかる。

逆に、「健康のこと」、「友達のこと」、「反抗的なこと」は、40代以上の親が、10.4%、6.5%、5.2%と高くなっていて、特に、「反抗的なこと」は、40代以上と30代以下では2.3%の差がでている。

(図3-7) 23.お子さんの家庭教育について、あなたが今、一番悩んでいるのは何ですか。



居住年数別（図3-8）にみると、「勉強のこと」は、10年以上の親が26.1%と、全体の21.3%より4.8%高くなっている。逆に、低いのは、3年以上～5年未満の15.6%と5年以上～10年未満の18.8%である。

「しつけのこと」で一番高いのは、1年未満の25.5%で、全体の20.8%より4.7%高くなっている。その他、20%を越えているのは、3年以上～5年未満23.9%、10年以上の21.7%である。

「性格的なこと」は、1年以上～3年未満で23.4%、5年以上～10年未満で20.5%と高くなっているが、1年未満では、7.3%と極端に低くなっているほか、3年以上～5年未満、10年以上で全体平均より下まわっている。

「健康のこと」については、3年以上～5年未満で4.6%と全体の9.6%の半分以下であるが、その他の居住年数では、9.6%～11.7%と平均に近い数字となっている。

「反抗的なこと」は、3年以上～5年未満で6.4%とかなり高くなっているが、1年未満で1.8%と低くなっている。

「別がない」は、1年未満23.6%、3年以上～5年未満で25.7%と高くなっているが、1年以上～3年未満では、14.8%と低い結果である。

祖父母との同居別（図3-8）でみると、「勉強のこと」は、同居している21.8%、同居していない21.0%とあまり特徴的なことはでない。

「しつけのこと」は、同居していないが21.2%と、同居しているより1.5%多くなっている。

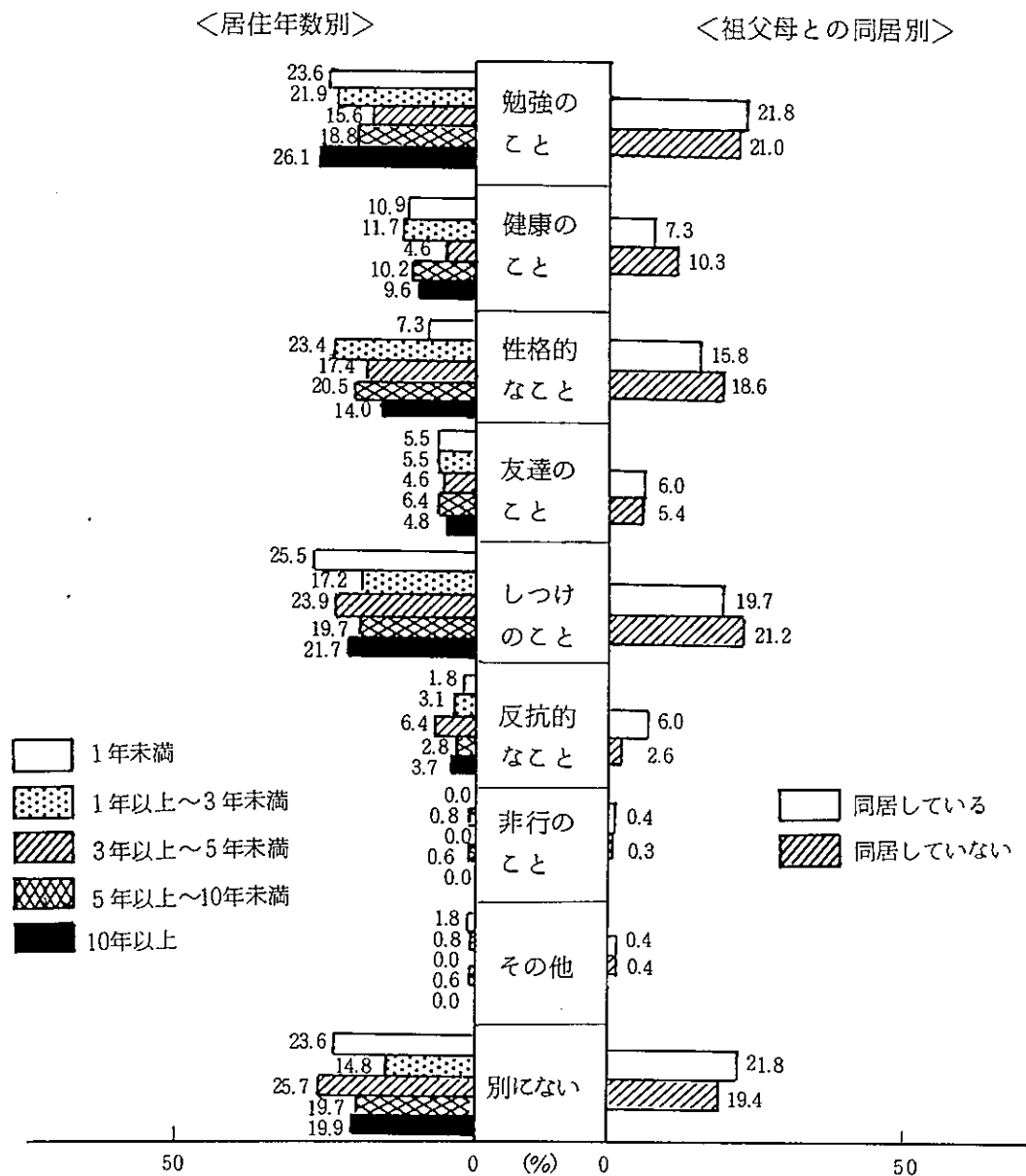
「性格的なこと」は、同居していないが18.6%と、同居しているより2.8%高い。

「健康のこと」は、同居していないが3%高く、悩みを持っている人が多くなっている。

また逆に、「友達のこと」、「反抗的なこと」は、同居しているが、いずれも6.0%と高くなっている。

「別がない」については、同居している21.8%が、同居していないの19.4%よりやや高くなっている。

(図3-8) 23.お子さんの家庭教育について、あなたが今、一番悩んでいるのは何ですか。



② 悩みの程度

前問で、「何らかの悩みを持っている人」733名に、その悩みの程度を聞いてみた。

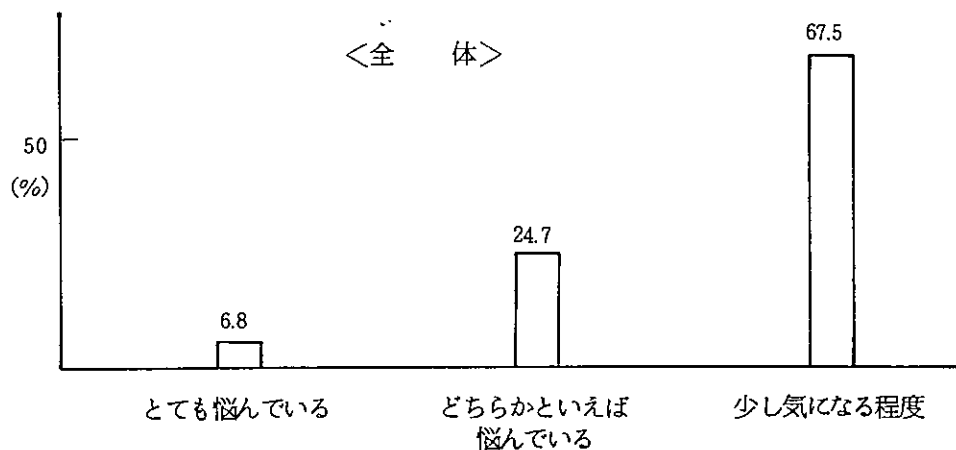
全体では、(図3-9)のように、「少し気になる程度」が67.5%で圧倒的に多く、「どちらかといえば悩んでいる」24.7%、「とても悩んでいる」が6.8%となっている。

地域別(図3-10)にみると、「少し気になる程度」は、団地で69.7%と最も多く、都市部67.5%、農村部65.1%となっている。

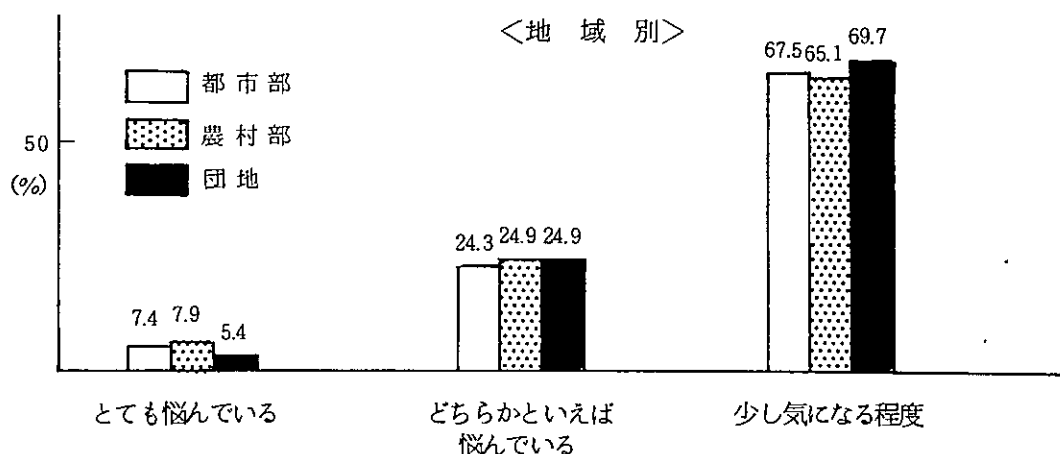
「どちらかといえば悩んでいる」は、都市部24.3%、農村部・団地24.9%と、地域による特色はあまり出ていない。

「とても悩んでいる」は、農村部 7.9%、都市部 7.4%、が全体の 6.8%より高く、逆に、団地では 5.4%と低くなっている。

(図3-9) 23.SQ その悩みは、どの程度ですか。



(図3-10) 23.SQ その悩みは、どの程度ですか。



年齢別では、30代以下、40代以上とも、全体の数値とほとんど同じで、数字的な差はあまりなく悩みの程度は、年齢にあまり関係ないようである。

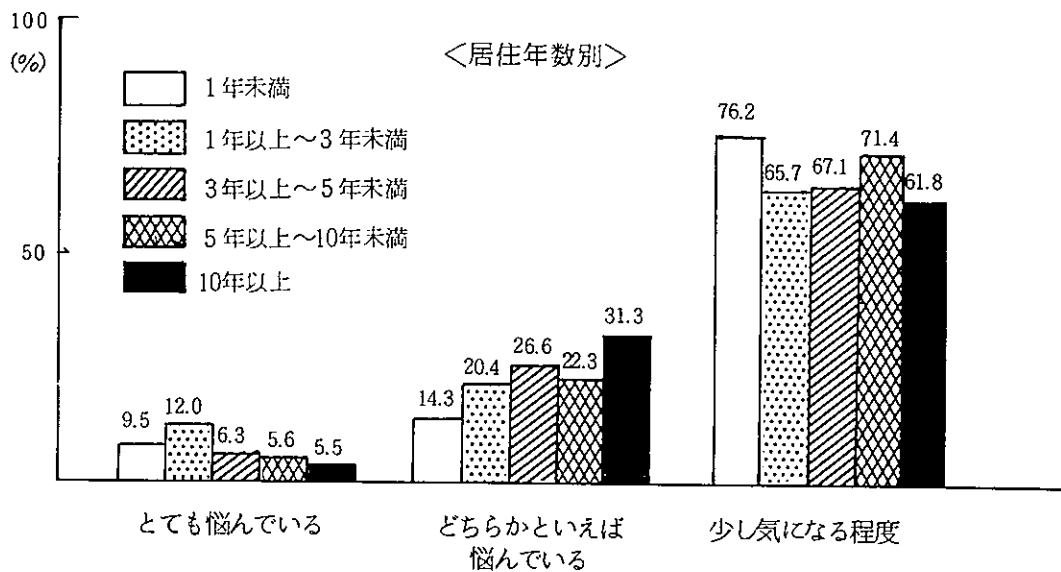
居住年数別(図3-11)にみると、「少し気になる程度」は、1年未満の76.2%が、全体の67.5%より8.7%も高くなっている。次に多いのは、5年以上～10年未満の71.4%で、最も少ないのは10年以上の61.8%で、最高と最低では、14.4%と居住年数によって大きな差がでているのが特徴的である。

「どちらかといえば悩んでいる」は、10年以上で31.3%、3年以上～5年未満で26.6%と全体の

24.7%より高くなっているが、1年未満では14.3%と極端に低く、全体と比べて10.4%、最も高い10年以上とは、17.0%という大きな差がでている。

「とても悩んでいる」は、1年以上～3年未満で12.0%で、全体の6.8%より5.2%も高くなっており、次いで、1年未満が9.5%と高く、居住年数が長くなるにつれて、その悩みも低くなっている。

(図3-11) 23.SQ その悩みは、どの程度ですか。

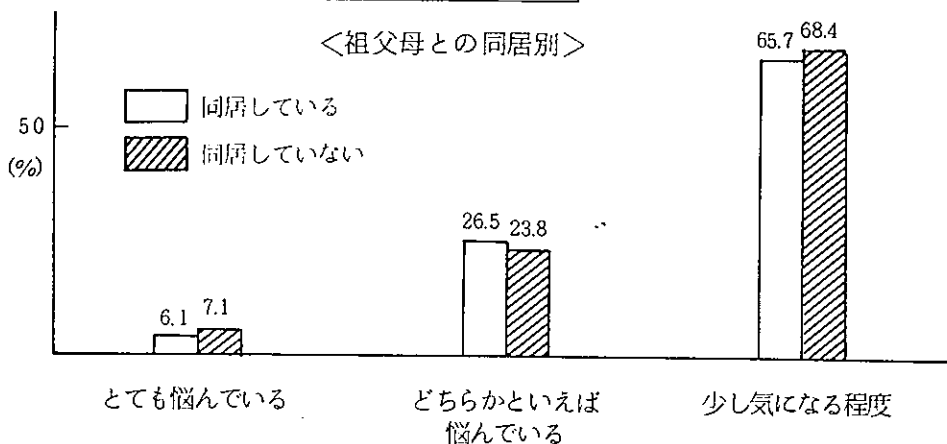


祖父母との同居別(図3-12)では、「少し気になる程度」では、同居していない68.4%、同居している65.7%と、同居していない方が2.7%高い。

また、逆に、「どちらかといえば悩んでいる」は、同居しているが26.5%と、同居していないより2.7%高くなっている。

「とても悩んでいる」は、同居している6.1%、同居していない7.1%で、同居・非同居による差は、ほとんどでない。

(図3-12) 23.SQ その悩みは、どの程度ですか。



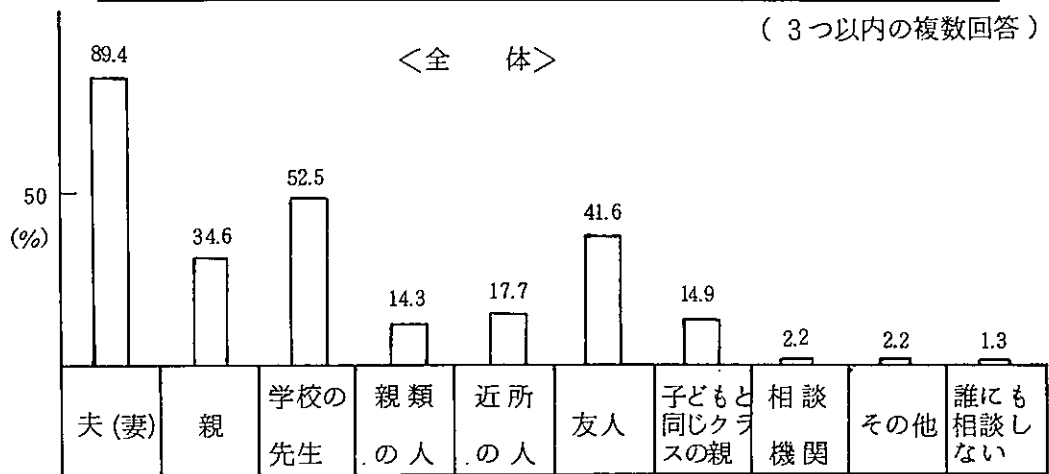
③ 悩みの相談相手

家庭教育について、悩んだときの相談相手を聞いてみた。(3つ以内の複数回答)

全体では、(図3-13)のとおり、やはり、「夫(妻)」が89.4%と最も高くなっている。

次いで、「学校の先生」52.5%、「友人」41.6%、「親(子どもの祖父母)」34.6%、「近所の人」17.7%、「子どもと同じクラスの親」14.9%、「親類の人」14.3%となっており、「相談機関」は2.2%と低くなっている。

(図3-13) 24.あなたは、お子さんの家庭教育について悩んだ時、誰に相談しますか。



地域別(図3-14)にみると、「夫(妻)」に相談するのは、農村部が92.7%で最も高く、団地90.6%、都市部84.8%となっている。

逆に、「学校の先生」は、都市部で54.2%と高く、農村部53.5%、団地は50.3%とやや低くなっている。

「友人」は、都市部が44.1%と全体の41.6%より2.5%高く、団地41.2%、農村部39.5%となっている。

「親」は、農村部37.1%で最も高く、団地34.5%、都市部32.3%である。

「近所の人」は、団地で22.5%と全体より4.8%も高く、団地の親たちの近所の人との密着度がうかがえる。次いで、農村部の16.8%、逆に都市部は13.1%と全体より4.6%も低くなっており、住む地域によって近所の人との人間関係が異っているのがよくわかる。

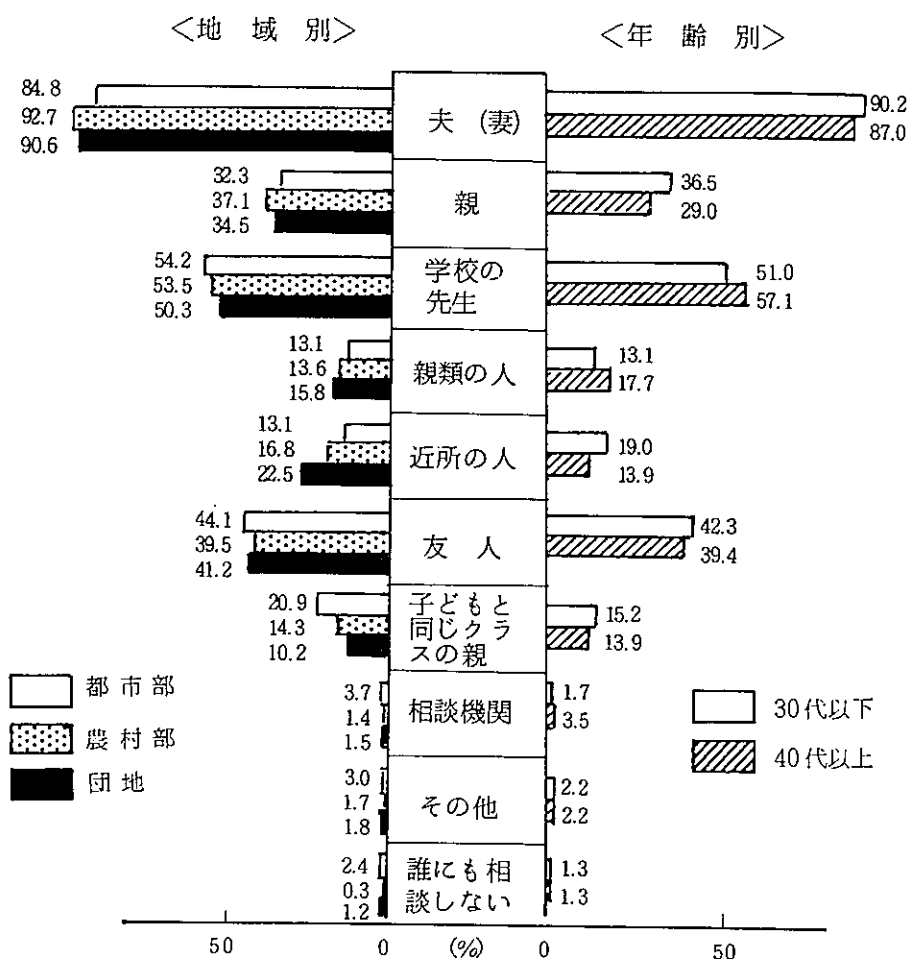
「子どもと同じクラスの親」は、都市部で20.9%と全体より6.0%高く、次いで農村部14.3%、団地10.2%となっている。

「親類の人」は、団地で15.8%でやや高く、農村部13.6%、都市部13.1%とあまり差がでない。

「相談機関」は、数字は低いが、都市部が3.7%と農村部・団地の倍以上である。

年齢別（図3-14）にみると、「夫（妻）」に相談する親は、30代以下90.2%、40代以上87.0%とほとんど差がない。

（図3-14）24.あなたは、お子さんの家庭教育について悩んだ時、誰に相談しますか。



一方、「学校の先生」は、40代以上57.1%、30代以下51.0%と、年上ほど「学校の先生」に相談する親が多い。

「友人」は、30代以下42.3%、40代以上39.4%であり、「親」は、30代以下が36.5%と40代以上より7.5%も高く、よく「親」と相談しているようである。

「近所の人」は、30代以下で19.0%、40代以上で13.9%と、若い親の方が5.1%多い。

「子どもと同じクラスの親」は、30代以下15.2%、40代以上13.9%である。

また、「親類の人」は、40代以上17.7%、30代以下13.1%で、年上の人が多くなっている。

「相談機関」については、40代以上の人々が3.5%と30代以下の倍以上あり、年上の親の子どもほど指導がむずかしくなっているようである。

年代が異なるにつれて、相談する相手が変わっていることがよくわかる。

居住年数別（図3-15）にみると、「夫（妻）」に相談するのは、5年以上～10年未満が91.7%で最も高く、次いで、10年以上が89.3%となっており、あとは、居住年数が長いほど多くなっている。

「学校の先生」は、1年以上～3年未満で44.5%と50%を割っているが、その他は、10年以上の56.3%を最高に、いずれも50%を越えている。

「友人」は、3年以上～5年未満が48.6%と、全体より7.0%高く、次に1年未満が47.3%となっており、10年以上が37.9%とやや低くなっている。

「親」は、1年未満40.0%、10年以上38.6%となっており、居住年数が最も短いのと最も長いのが高くなっている。

「近所の人」は、3年以上～5年未満22.0%、5年以上～10年未満で21.3%と高くなっているが10年以上では13.6%と全体より4.1%低くなっている。

「子どもと同じクラスの親」は、10年以上で17.3%、5年以上～10年未満で16.1%と高くなっているが、3年以上～5年未満では7.3%と、全体の14.9%の半分以下になっているが目立っている。

「親類の人」については、1年未満が16.4%と高く、次に5年以上～10年未満が15.0%となっているが、逆に低いのは、10年以上の12.5%である。

「相談機関」については、1年未満の5.5%がとくに多い。

祖父母との同居別（図3-15）では、「夫（妻）」に相談するのは、同居していない90.6%、同居している85.9%と4.7%の差がある。

逆に、「学校の先生」は、同居しているが58.5%と、同居していないより8%も高くなっている。

「友人」は、同居していない43.3%、同居している37.2%となっており、同居していない親が、「友人」を相談相手にしている模様がうかがえる。

「親」は、やはり同居しているが45.7%と、同居していないの30.8%より14.9%も高くなっているが目立っている。

「近所の人」は、同居していないが20.0%と、同居しているより8.9%も多くなっている。

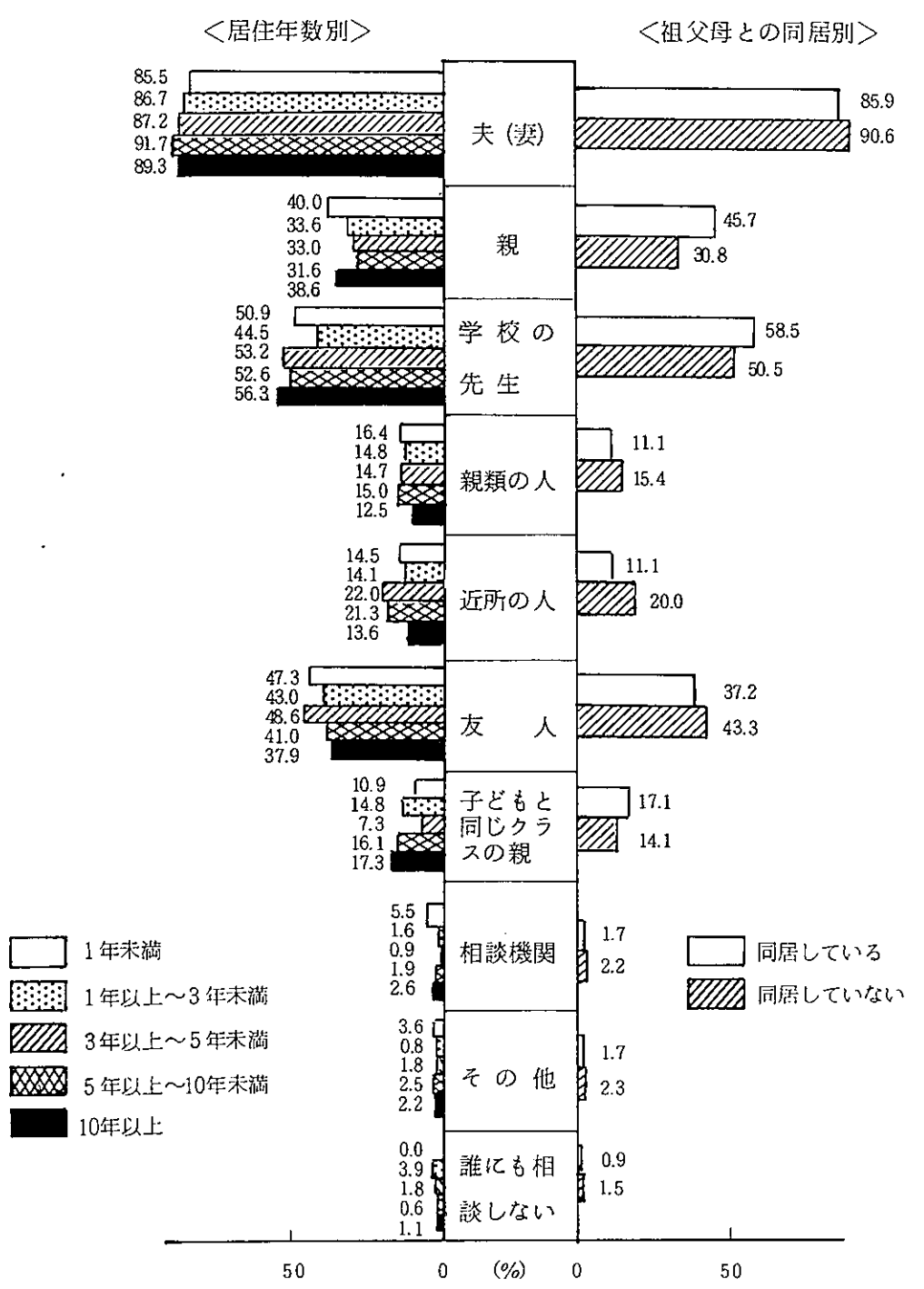
「子どもと同じクラスの親」は、同居している17.1%、同居していない14.1%となっている。

「親類の人」は、同居していないが15.4%と同居しているより4.3%高い。

「相談機関」は、同居していない2.2%が同居しているの1.7%よりわずかに高くなっている。

しかし、これまでの結果をみてもわかるとおり、「悩んだ時の相談相手」は、同居している、同居していないで、回答が複雑に入りこんでいる。

(図3-15) 24.あなたは、お子さんの家庭教育について悩んだ時、誰に相談しますか。



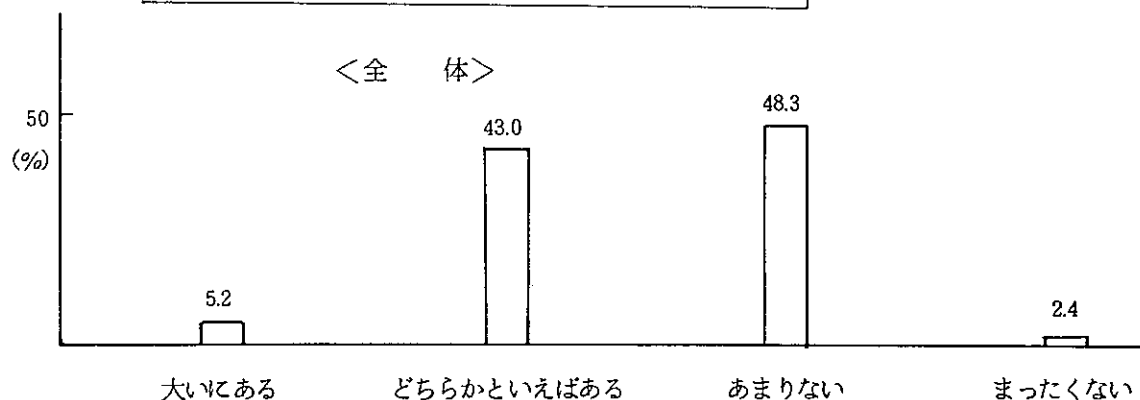
(3) 家庭教育についての自信

全体では、(図3-16)のように、「あまりない」48.3%、「まったくない」2.4%で、否定的回答が50.7%であり、「どちらかといえばある」43.0%、「大いにある」5.2%で、肯定的回答が48.2%となり、家庭教育について自信のない親の方がわずかに多くなっている。

地域別では、「あまりない」は、48.8%～47.2%とほとんど差がない。

また、「どちらかといえばある」は、44.8%～41.2%と、都市部・農村部・団地ではあまり差がでない。

(図3-16) 25.あなたは、家庭教育について、自信がありますか。

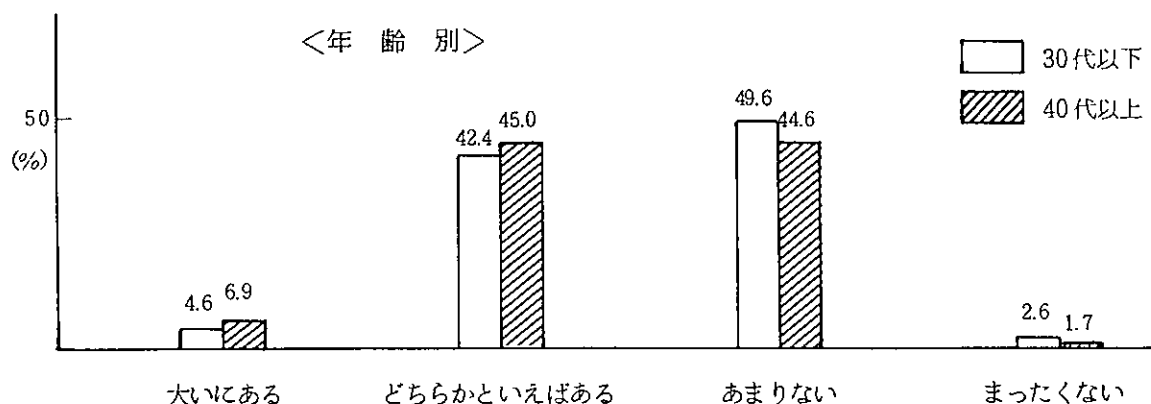


年齢別(図3-17)では、「あまりない」が、30代以下で49.6%、40代以上で44.6%と、若い人が5%高く、あまり自信がないことを示している。

一方、「どちらかといえばある」は、40代以上45.0%、30代以下42.4%となっており、やはり年上の人の方が、家庭教育に自信を持っているようである。

「大いにある」は、40代以上6.9%と、30代以下より2.3%高くなっている。

(図3-17) 25.あなたは、家庭教育について、自信がありますか。



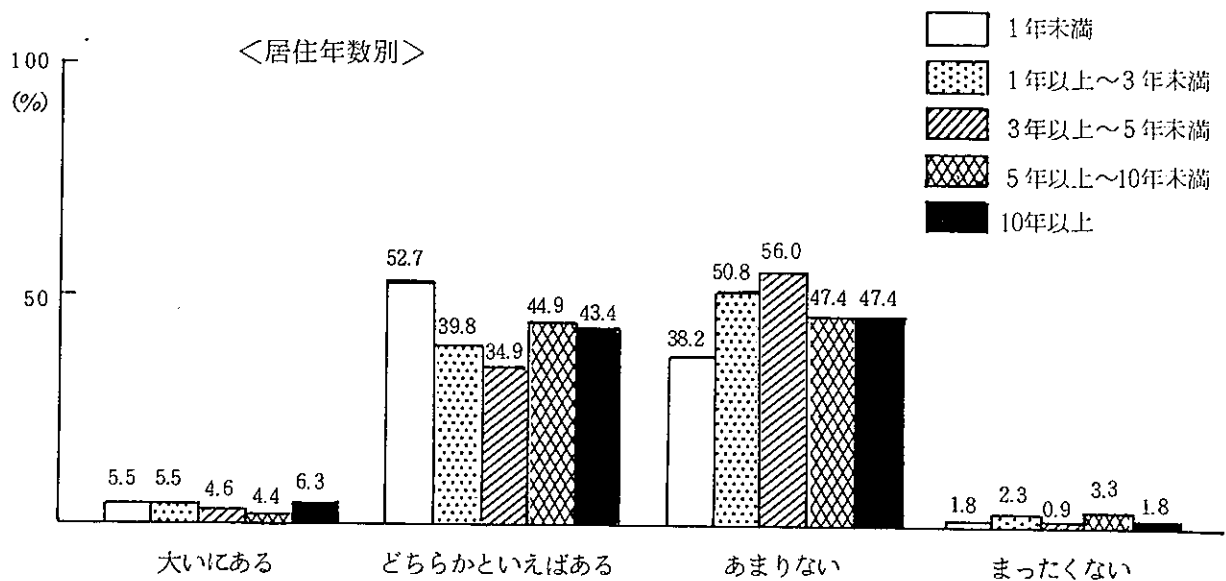
居住年数別（図3-18）では、「あまりない」は、3年以上～5年未満で56.0%と最も高くなっており、次に、1年以上～3年未満が50.8%となっている。また、1年未満は38.2%と最高の56.0%より、17.8%も少なくなっている。

「どちらかといえばある」は、逆に、1年未満だけが52.7%と50%を上まわっており、全体の43.0%より9.7%も高いのが目立っている。逆に、低いのは、3年以上～5年未満で34.9%となっており、全体より8.1%も低く、1年未満と比べると17.8%も低くなっていることが、特徴的である。

また、「大いにある」は、10年以上で6.3%と最も高く、その他は、4.4%～5.5%とあまり差はでない。

祖父母との同居別では、「あまりない」では、同居している50.9%、同居していない47.5%で、同居している方がわずかに高くなっている。

（図3-18） 25.あなたは、家庭教育について、自信がありますか。



「どちらかといえばある」は、その逆で、同居していない43.8%が、同居しているの40.6%より高くなっている。また、「大いにある」は、同居していないが5.5%で、同居しているの4.3%よりわずかに高くなっているが、ここでは、同居・非同居による差はあまりでない。

2. 家庭教育と地域とのつながり

地域の教育力の低下が懸念されている昨今、子育ては「地域全体で」から「家庭の責任」へと、その責任者の範囲が急激に狭められてきた。さらには、本調査でわかるように、調査対象者の4分の3が祖父母と同居しておらず、核家族が多い現状の中では、「家庭で」というより、むしろ、「親のみで」子どもを育てなければならないような状況に落ち入っているのではないだろうか。

本章の1では、親たちの家庭教育に対する自信、子どもを育てる上での悩みやその相談相手などをみてきた。

ここでは、子どもを育てていく上で、「地域の行事・活動」や「近所のつきあい」をどのようにみているのか、親の意識や期待をみてみたい。

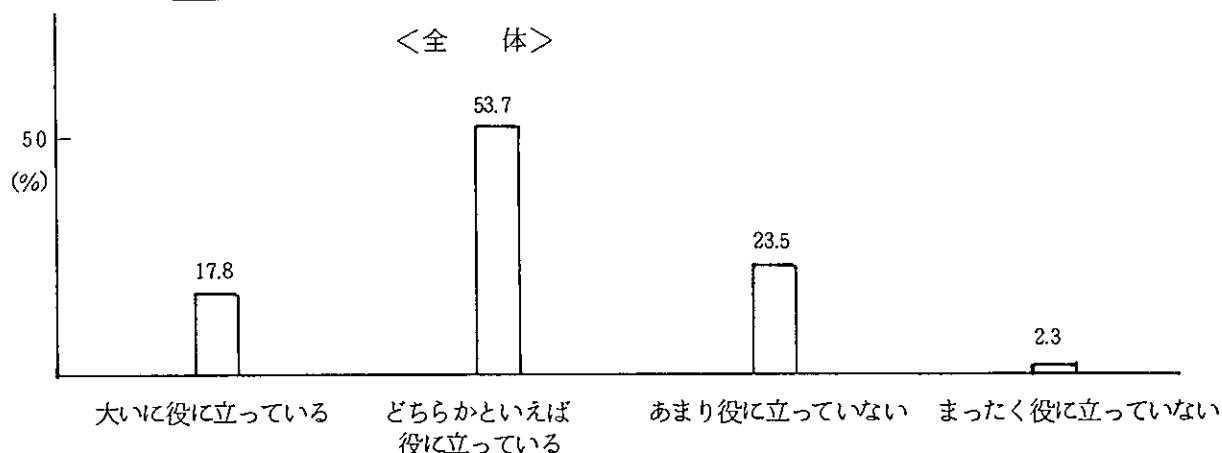
(1) 子育てと地域行事・活動

過去、地域の行事や活動の多くは、地域の社会構造の変化とともに、その必要性がなくなり、継続の困難性と相まって、一時期、衰退・消滅の一途をたどってきた。今日行われている様々な地域行事や活動のほとんどは、地域の必要に迫られ、意図的・組織的に再興・推進されてきた新しい行事・活動といえる。

先に、地域の行事・活動の開催状況やそれらへの参加度合いをみたが、親は子どもを育てていく上で、地域の行事・活動を役に立つものとみているだろうか。

全体では、(図3-19)のように、「大いに役に立っている」とする親が17.8%、「どちらかといえば役に立っている」が53.7%と、肯定する親が合わせて71.5%。一方、「あまり役に立っていない」が23.5%、「まったく役に立っていない」が2.3%で、否定的にみる親の合計は25.8%となり、「役に立つ」と回答した親が圧倒的に多い。行事や活動の主催者側からすれば、少々不満の残る数値かもしれないが、現状から考え合わせると、地域の教育力が低下しているといわれながらも、地域の行事や活動に対する親の評価は高いといえよう。

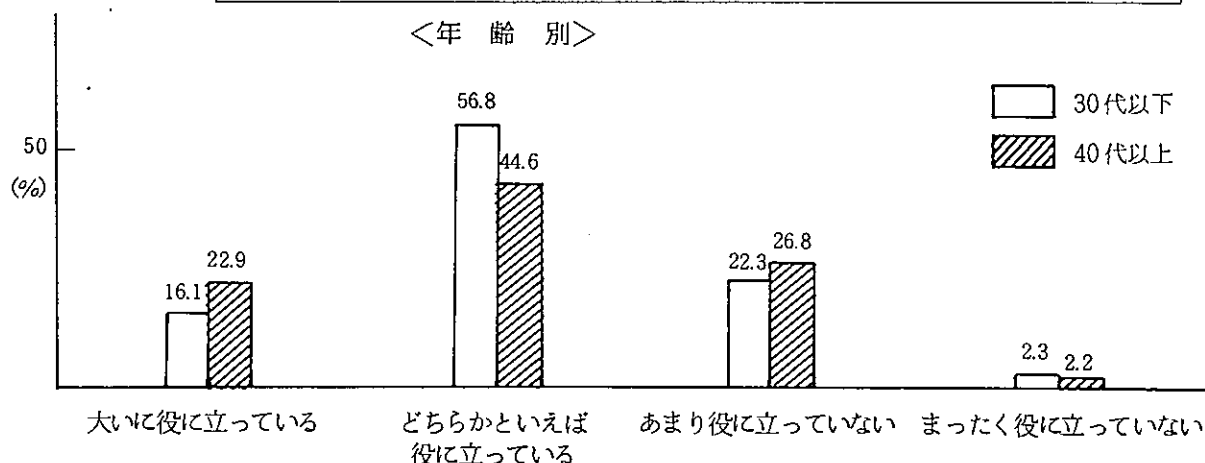
(図3-19) 27. あなたがお子さんを育てていく上で、地域の行事や活動が役に立っていると思いますか。



また、問17 (P.37) で地域行事・活動への参加状況をみたが、ここでの「役に立つ」(71.5%)と比較してみると、あきらかに「参加」の度合い(82.7%)の方が高く、「参加するのは子育てに役立つから」というばかりではないようである。むしろ、問16 (P.35)での地域行事・活動への関心度合い(「関心を持っている」71.9%)の調査結果と近似していることに注目し、行事・活動の展開方法や内容をさらに研究しながら、積極的かつ謙虚に推進することが望まれる。

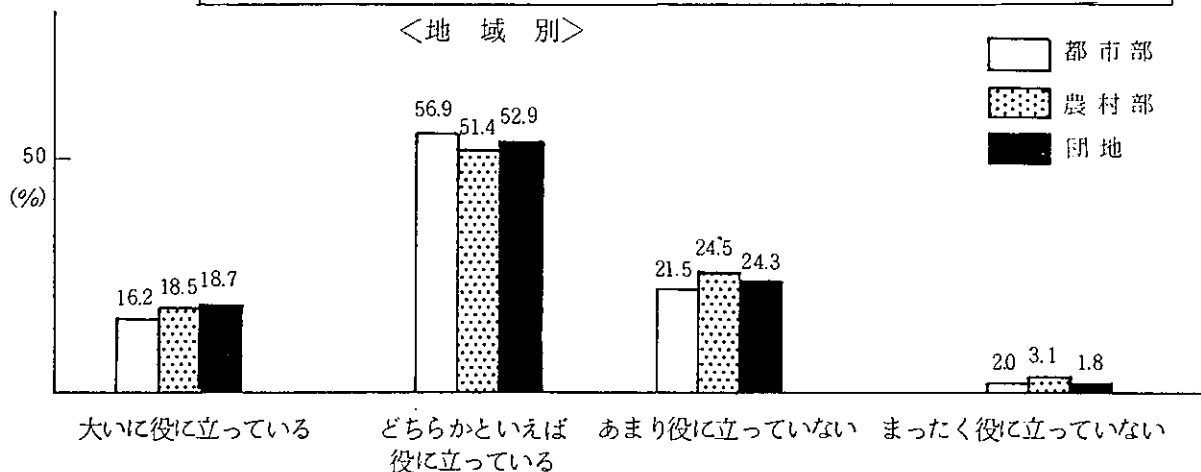
年齢別(図3-20)で見ると、「役に立つ」と肯定的にみる親は、30代以下が72.9%、40代以上が67.5%で、やや30代以下の方が多いが、「大いに役に立つ」と積極的に評価する親は、逆に40代以上の方が7%ほど多くなっている。また、「役に立っていない」と否定的にみる親も40代以上の方が多く、40代以上の親が賛否の意識がはっきりしているように思われる。

(図3-20) 27.あなたがお子さんを育てていく上で、地域の行事や活動が役に立っていると思いますか。



地域別(図3-21)では、「役に立つ」と回答した親は、都市部73.1%、団地71.6%、農村部69.9%の順となったが、「大いに役に立つ」は都市部が一番低くなっている。前の地域の活動の存知や関心度の調査結果からもわかるように、都市部は全体的に消極的であるようだ。

(図3-21) 27.あなたがお子さんを育てていく上で、地域の行事や活動が役に立っていると思いますか。

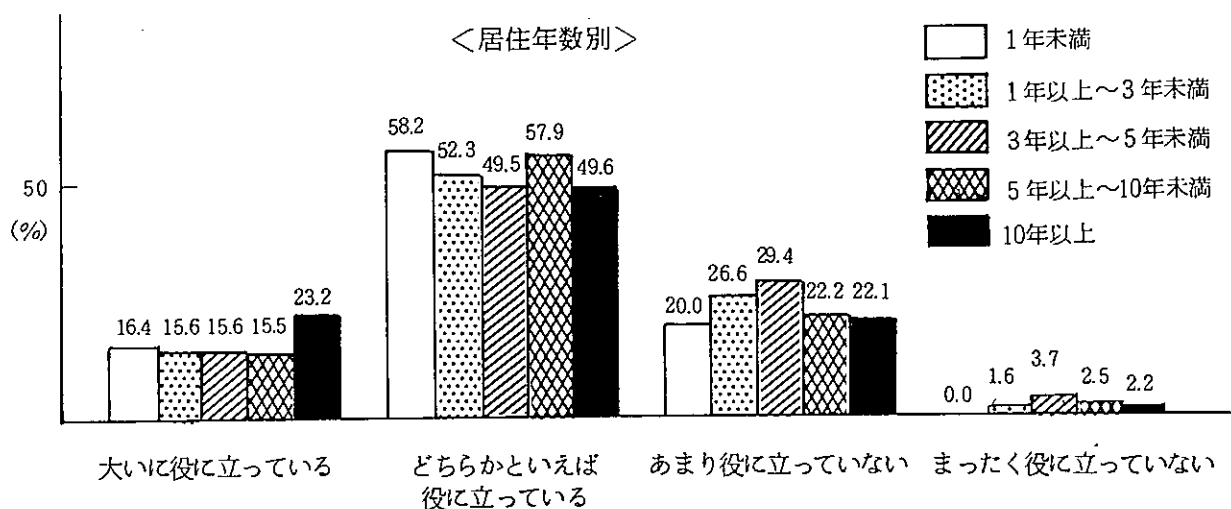


また、「役に立っていない」と回答した親は農村部にやや多くなっている。問16・17のように、行事や活動への関心も高く、参加も多い農村部で、逆に否定的なみかたが多くなっていることは気がかりである。

次に、居住年数別（図3-22）でみると、「大いに役に立っている」は、10年以上が急に高くなっているのが特徴的であるが、「どちらかといえば役に立っている」を含めると、1年未満が74.6%で最も多く、以下、5年以上～10年未満73.4%、10年以上72.8%、1年以上～3年未満67.9%、3年以上～5年未満65.1%の順となっている。逆に、「役に立っていない」が多いのは、3年以上～5年未満や1年以上～3年未満で、問16の関心の度合いと比例しており、居住年数とともに、地域への期待やかかわりを変化し、同時に地域に対する意識が変わっていることがうかがえる。

祖父母との同居別では、ほとんど差は認められない。しいていえば、同居の方が非同居に比べ、肯否の意識がややはっきりしていると感じられる。

（図3-22） 27.あなたがお子さんを育てていく上で、地域の行事や活動が役に立っていると思いますか。



(2) 子育てと近所のつきあい

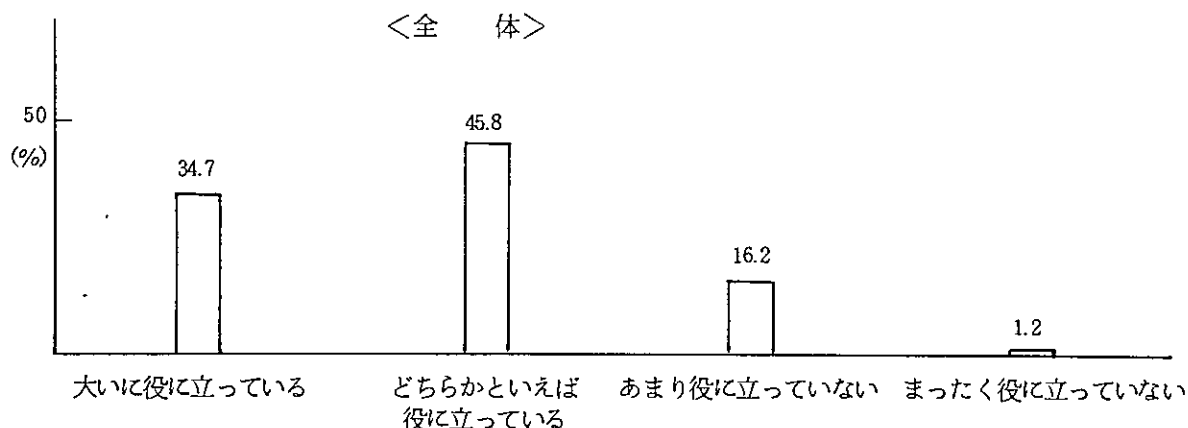
次に、「子どもを育てていく上で、近所の人とのつきあいが役に立っているのか」という問で、親の意識をみてみたい。

全体では、(図3-23)のように、「大いに役に立っている」が34.7%、「どちらかといえば役に立っている」が45.8%で、合計80.5%が肯定的にみていることになる。前問の「地域行事・活動」よりも「近所のつきあい」の方が、子育ての上では、「役に立っている」とする割合が高い。特に、「大いに役に立っている」は、「地域行事・活動」(17.8%)の倍近い値を示している。「近所のつきあい」がどんなかたちで「役に立っている」のか、興味をそそられるが、問10の「近所の子どもが危険な遊

びをしていたら、注意するか」の間に、99%が注意するとしていることや、問13での「自分の子どもは、近所の人に注意されたことがある」が半数近いことなどからも、子どもの安全や非行防止の面で「近所のつきあい」への期待が大きいのではないだろうか。

一方、問14で「子どもの成長にとっての子ども同士のつきあい」の必要性をみたが、「大いに必要である」とするものが実に90%を越えていることからすると、ここでの近所のつきあいの評価は意外

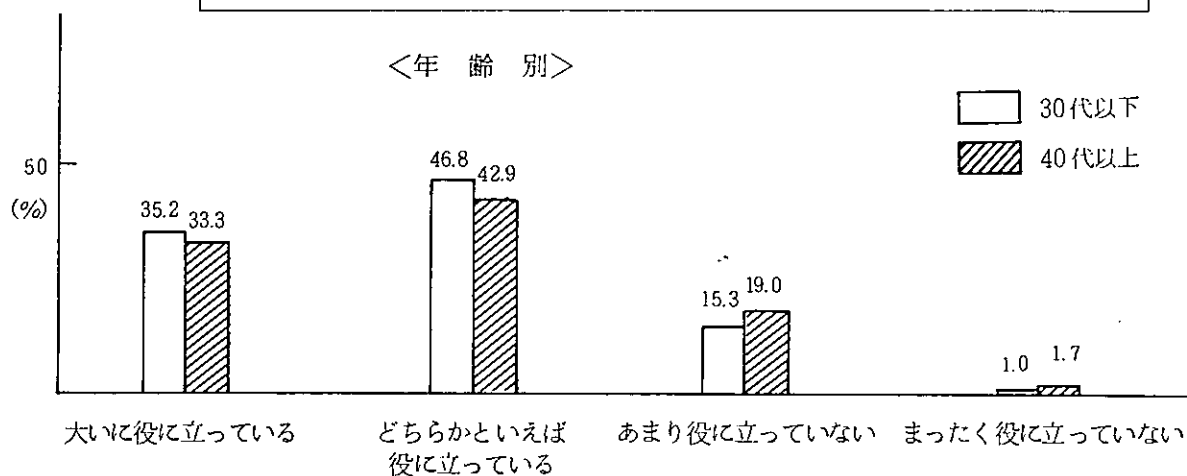
(図3-23) 28.あなたがお子さんを育てていく上で、近所の人とのつきあいが役に立っていると思いますか。



に低い。問5の「家庭教育について、近所の人と話す」度合いや問24の「家庭教育の悩みの相談相手」の調査からみても、親の場合の近所のつきあいは、子ども同士のつきあいほど有効な関係ではないようだ。

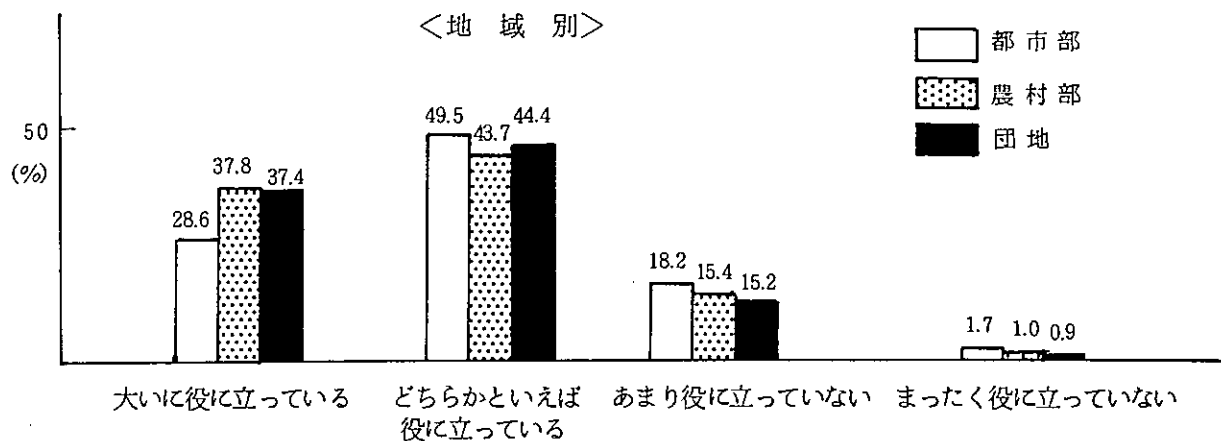
年齢別(図3-24)でみると、「大いに役に立っている」も「どちらかといえば役に立っている」も30代以下の方が2~4%高率になっている。特に、「大いに役に立っている」は、前問の「地域行事・活動」の場合、40代以上の方が7%近く高かったものが、ここでは逆転している。これからすると、30代以下の方が近所のつきあいへの期待は、より大きいことがわかる。

(図3-24) 28.あなたがお子さんを育てていく上で、近所の人とのつきあいが役に立っていると思いますか。



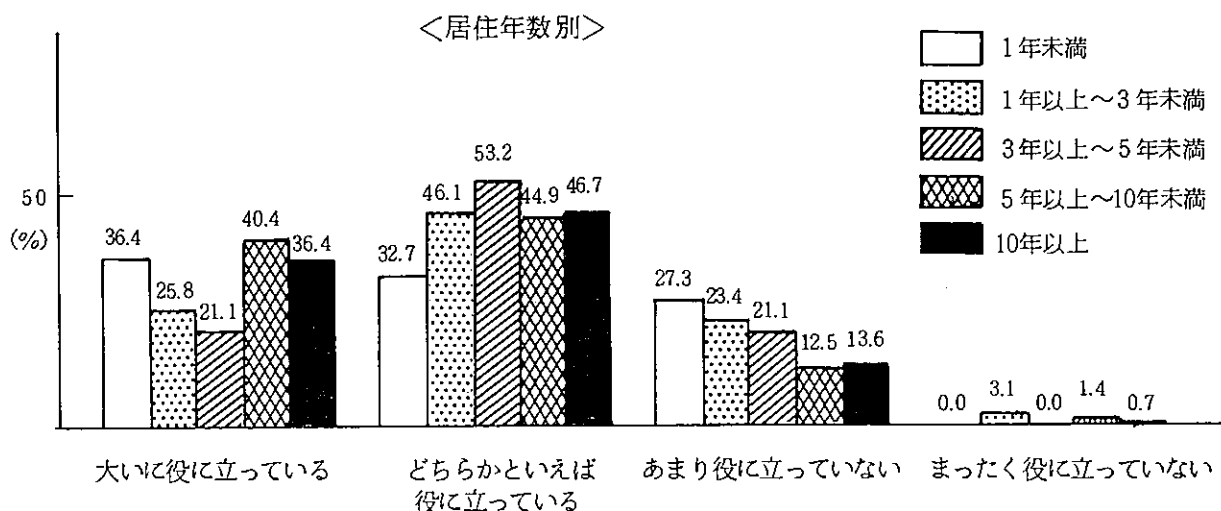
次に、地域別（図3-25）でみると、都市部の「大いに役に立っている」の割合が、団地・農村部より9%程度低くなっていて、「地域の行事・活動」の場合よりもその差が顕著になっている。都市部の人間関係や近所のつきあいの程度を反映した数値であろう。また、団地と農村部との間の大きな差異はここでもみられないが、問6の「近所づきあいのわずらわしさ」の意識や、問10の「近所の子どもの危険な遊びへの注意」の度合いの例からみると、農村部では「近所づきあいはわずらわしいが、子育てに役立っている」という意識傾向が、他よりやや強いようにみうけられる。

（図3-25） 28.あなたがお子さんを育てていく上で、近所の人とのつきあいが役に立っていると思いますか。



居住年数別（図3-26）では、「大いに役に立っている」の積極的評価は、5年以上～10年未満や1年未満、10年以上に多く、1年以上～5年未満に少ない結果となった。他の例でも1年以上～5年未満は、いまひとつ消極的な反応を示しているのが特徴的で、地域に対する関心や近所づきあいへの意識・依存度が低いようである。また、1年未満は、「大いに役に立っている」も多いが、「役に立

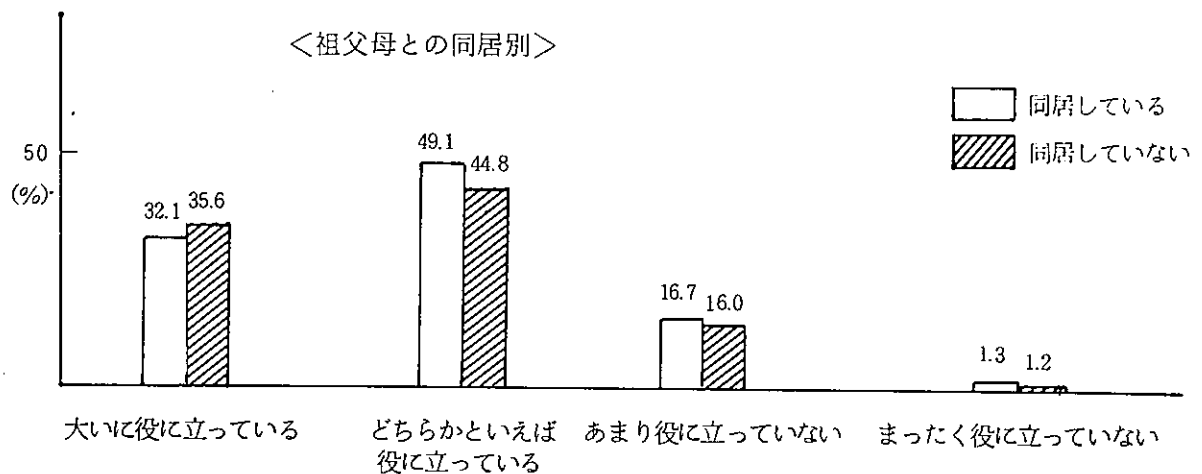
（図3-26） 28.あなたがお子さんを育てていく上で、近所の人とのつきあいが役に立っていると思いますか。



っていない」と回答する親も多く、近所のつきあいへの期待や思いも様々なようである。「どちらかといえば役に立っている」を含めて肯定割合を見ると、1年未満69.1%、1年以上～3年未満71.9%、3年以上～5年未満74.3%、5年以上～10年未満85.3%、10年以上83.1%と、居住年数とほぼ比例して、肯定の割合も高くなってきた。

祖父母との同居別（図3-27）では、前問の「地域行事・活動」の場合より差がみられるようになった。「地域行事・活動」で「大いに役に立っている」は、同居の方がわずかに高い数値であったが、逆に、「近所のつきあい」では非同居の方が、明らかに高くなっていることが注目される。

（図3-27） 28. あなたがお子さんを育てていく上で、近所の人とのつきあいが役に立っていると思いますか。



3. 本章のまとめ

本章では、親たちが子どもを育てていく上での悩みや自信、地域への期待等について集計結果をもとに考察した。ここでも、地域や年齢、居住年数、祖父母との同居の有無等によって、そのかかえる問題や意識にも違いがみられ、興味をそそられる集計結果であったが、同時に全体的な意識傾向から家庭教育や地域事業のあり方に、いくつかの問題がうかびあがってきた。

まず、第一に「子どもは誰の言うことを最もよく聞くか」について、父親とする回答が半数以上を占めたことである。父親が家族との信頼関係のもとに、子どもの成長過程において大きな影響力をもっていることは、数字が示しているとおりでである。要は、この影響力をもつ父親が、子どもの成長・発達のために、どれほどかかわれているのかである。

社会構造や情勢の急変、価値観の多様化が進む中で、父親は子へ伝えるものをもっているのだろうか。親から教わってきた生き方が、子どもの生きる時代にすべて適応できると思われぬ。ほとんどの父親が、勤め人として仕事を家庭外にもつような時代になり、まして小学生の子を持つ父親の年代は、勤め先でも多大な責任と仕事量が課せられ、日夜、奔走というのが大半ではなかろうか。そんな父親達が家庭教育や子どもを育成していくための地域活動にどれほどかかわれているのだろうか。子どもの成長をどれほどの確につかみ、援助しているのだろうか。その判断・実践のための情報や価値観、能力をどこから得ているのだろうか。心配は募るばかりである。

実際、家庭教育の責任は母親というのが現実であろうし、隣近所のつきあいや学校行事・地域活動の中に父親の影は薄い。父親達もその主体者として地域や活動にかかわり、広い視野と洞察力を身につけながら、家庭教育を積極的に担う必要がありはしないだろうか。その上で、親子の信頼関係に裏打ちされた威権をさらに確固たるものにしてほしいと望むのは無理な相談だろうか。

第二は、家庭教育の自信と悩みである。自信についての集計では、半数以上が「自信がない」としている。まあ、謙遜分を差引いたとしても、その判断は非常に消極的といえる。かといって、近所や地域への期待が大きい割には、公民館の家庭教育の学習会をはじめ、PTAの集会や地域活動への参加は意外に少ない。

一方、自信のなさの割には悩みの範囲も、その程度も小さい。相談相手では、夫や妻が断然多いが、相談機関に頼るまでもなく、両親間の相談で解決できていれば幸いである。ただし、子どもの諸問題が顕著化するのは数年後で、その素地ができるのは今である。

地域での学習会や活動の魅力・内容の問題については後に譲るとして、子どもは親たちがつくった社会環境や価値観の中で育っていくことを肝に銘じ、親はその主体者としての自覚に立った社会参加について、もう一度真剣に考えなければならない時期にきている。

なぜなら、子育ては単に非行や危険からわが子を守ることだけではなく、子ども達自身が有する健全な成長の芽と欲求を育くみ、積極的に次代を担いうる人間づくりに参画するということであるか

らである。今だからこそ、これら積極的な子育てが必要とされ、親としての重大な役割をになっていることは言うまでもない。

第三には、地域行事・活動の内容とその展開方法である。今回の調査で気がかりだったのは、居住年数と「大いに役に立っている」の積極的評価に対する意識の関係である。

地域の状況や年代の違いによって、意識や行動に差異が生じてくることは容易に推察できることであるが、地域行事・活動や近所つきあいのメリットについての項目で、居住1～5年に消極的反応がみられる。これは、この項目に限らず、今回の調査結果の随所にみられるものである。居住1年未満では積極的だったものが、1年を過ぎた頃から急激に消極化するのとはなぜか。5年以上になると、また積極派が増えてくるのではあるが。

この意識の背景には、住民自治と地域事業の内容や展開のあり方が大きく関係しているように思える。意識変化のメカニズムを地域とのかかわりで仮説してみると、不安と期待の1年未満→幻滅と失望の1～5年→納得と主体の5年以上、というようなことが考えられる。地域が期待を裏切り、幻滅と失望を生み出す要因になっていないだろうか。

地域子ども会を例にとり、地域の活動を考えてみよう。まず、実態として、子ども会育成会の世話を喜んで引き受け、積極的に取り組む人はまれである。役のなり手がなければ、短期の交代輪番制にでもして、役員をつくらなければ継続していかない。当然、この状態からは発展は望めず、当番の役員は任期中の事なかれを願うのは無理もない。ここでは、子どもたちによる活動の計画や自主運営など問題外で、大人達が子ども会の運営まで行ってしまふ。結果的には、子ども会本来の目的がそこなわれるどころか、子どもの過保護を地域をあげてやっているようなもので、役に立たないというのも当然の状況である。行事消化に追われ、納得のいかない仕事を引き受ける人はいないはずである。任期が終えると、交代輪番で次の人に譲って、また一からスタートになる。居住して1～2年もすると、やがてこの役も回ってくるだろう。このような実情からは、責任感や期待感があっても、半分逃げ腰の姿勢が生じてきても不思議ではない。

この状態がくり返されるかぎり、地域の行事・活動の必要性や自分達も地域の親として積極的にかかわっていかうという自立した社会的姿勢は育ってこないであろう。意義が感じられない苦役のような仕事に、効果は望めない。少々乱暴な言い方ではあるが、問題を拡大するような活動や組織は、一度どこかで壊し、改めて必要性の合意にたって再始動する勇気をもちたい。

以上、三つの問題を提示したが、今後、各地において「父親の積極的子育て参加」「子育て主体者としての親の学習や活動への参加」「地域行事・活動の内容や展開方法の点検と改革」等がさらに推進されることを期待してまとめたい。

第4章 地域の活動

心身ともに健全で人間性豊かな子どもを育成するためには、家庭・学校・社会がそれぞれに持つ教育機能を十分発揮し、相互に緊密な連携を図りながら総合的にすすめていく必要があることはいうまでもない。

特に、子どもにとって家庭とは、親やきょうだいなど家族とのふれ合いを通じて、人間的に成長していく最初の間である。したがって、基本的な生活習慣、ものの考え方など子どもの人間形成に及ぼす家庭の影響には大きなものがある。それだけに、子どもの成長に応じて適切に行われる家庭の教育は、いわば子どもの教育の根幹をなすものとして極めて重要な役割を担っている。

子どもは、また、家庭や学校以外に、友人・隣人・教師・マスコミなど地域社会全体の人間関係や自然環境の影響を受けながら育っている。子どもはその成長発達の過程の中で、地域社会とのまじわりを通じ、数々の成功や失敗の体験を積み重ねて次第に自己を確立し、その能力や個性にもとづいて自立していく、といわれている。

そのため、今後、望ましい家庭教育のあり方を考えていく場合、単に、家庭や学校の中で子どもをどう育て、指導していくかということのみにとらわれず、もっと広がりのある地域社会の中で子育てを考えていくことが大切である。

その意味から、今後家庭の教育機能を高めるにあたっては、子どもの社会性・公共性を涵養する諸活動……例えば、子ども会、PTAなど社会教育関係団体が主催する各種の地域活動に、親子ともども積極的に参加する態度が強く望まれるところである。

近年、地域社会における教育機能の低下が指摘されているが、その機能の充実を図っていくのは、究極のところ、個々の家庭で行う教育を地域に広げ、住民相互が一体となって地域に根ざした活力ある教育活動を展開する以外に方法はない。

ところで、現在、子どもたちの健全育成をめざす地域活動はどんな形で、どの程度活発に行われているのだろうか。ここでは、各地で行われている地域活動の実態や子を持つ親の地域への期待を見ることによって、今後の望ましいあり方を考えてみたい。

1. 地域活動の実態

各地で行われているさまざまな地域活動の中から、比較的身近かに取り組まれている活動を10項目抽出して調査した。調査では、地域活動の活発化の度合を4段階で評価する方法で質問したが、その分析結果は次のとおりである。

(1) 家庭教育などの学習活動

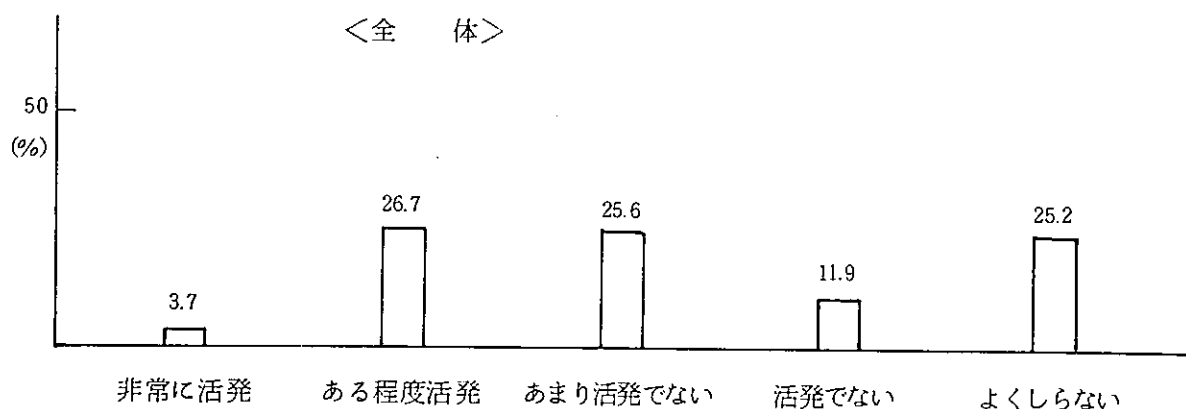
公民館や学校など身近かな教育施設で、家庭教育学級など子どもの健全育成に関する学習活動が各地でかなり活発に行われている。

その度合を問うたわけだが、全体では、(図4-1)のように、「ある程度活発」が26.7%で、「非常に活発」の3.7%と合わせると、全体の30%強が「まあまあ活発な方である」と回答している。しかし、「あまり活発でない」と評価する割合も25.6%と高く、「活発でない」の11.9%を加えると、不活発であると思う親の方がわずかながら多い。

また、「よく知らない」と答えた親は全体の25.2%にも達しているが、この数値は学習活動に対する興味や関心の薄さを示す数値として受けとるべきか、少しばかり気になる率である。

次に、年齢別・居住年数別・地域別・祖父母との同居別にみた評価の割合は、全体としてあまり大きな差異はみられない。

(図4-1) 26.(1)家庭教育学級など子どもを健全に育てるための学習活動

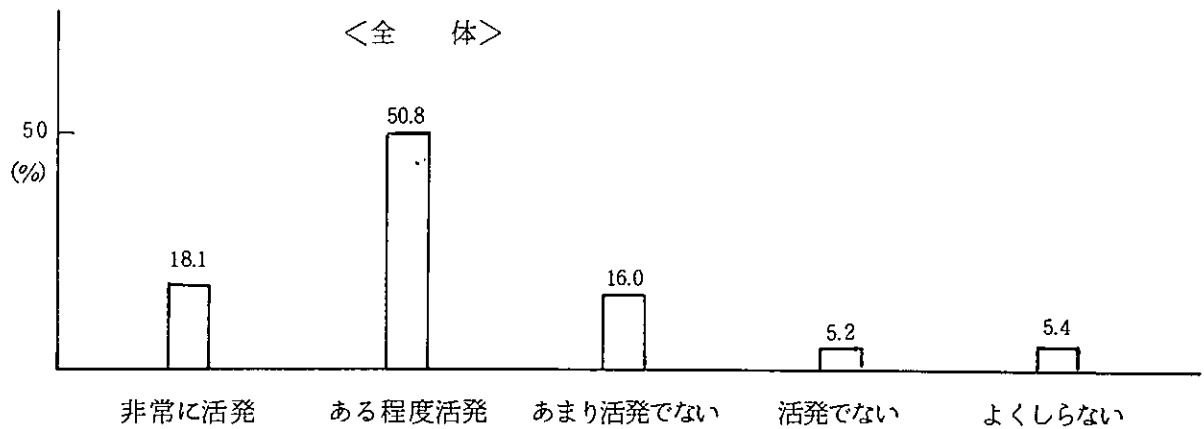


(2) スポーツ、レクリエーションなどの活動

全体では、(図4-2)のように、「ある程度活発」が50.8%と群を抜いて高く、次に「非常に活発」が18.1%と続いている。「あまり活発でない」、「活発でない」は両方合わせても21.2%に過ぎず、地域におけるスポーツ、レクリエーション活動はかなり活発であることをうかがわせる。

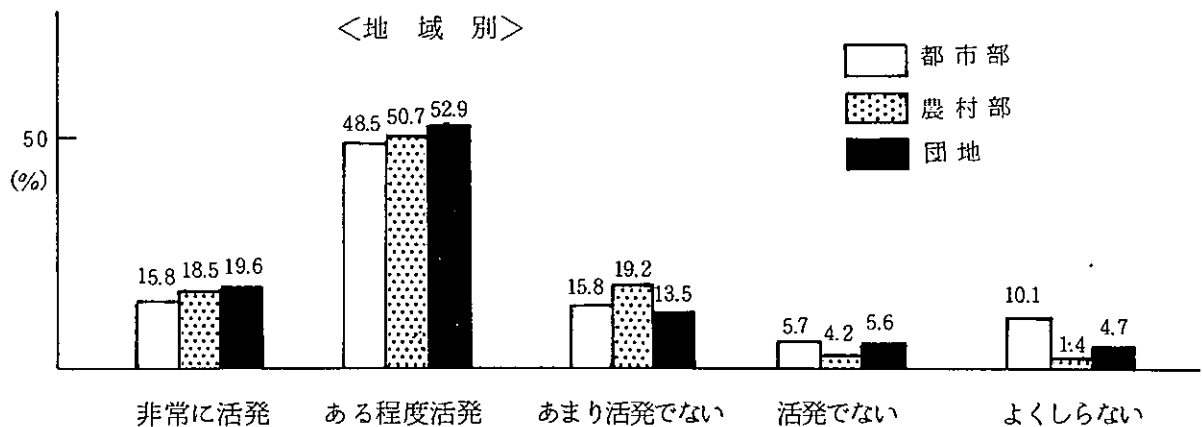
「ある程度活発」と答えた親を年齢別に見てみると、40代以上より30代以下の方がわずかに多く、

(図4-2) 26.(2)スポーツ、レクリエーションなどの活動



また、居住年数別では、5年以上～10年未満が、地域別(図4-3)では、農村部、都市部よりも団地が、祖父母との同居別では、同居よりも非同居の方が、それぞれわずかながら他より高い比率を示している。

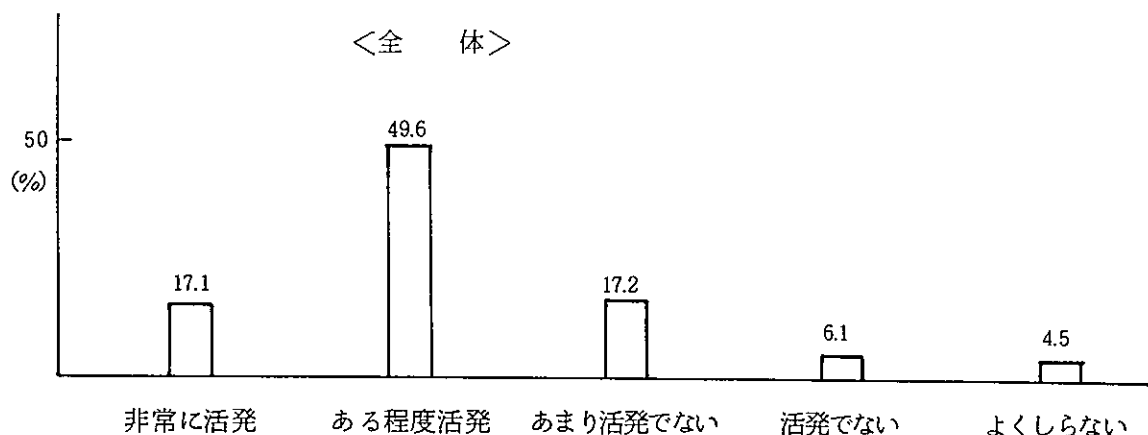
(図4-3) 26.(2)スポーツ、レクリエーションなどの活動



(3) 祭り、年中行事などの地域の行事

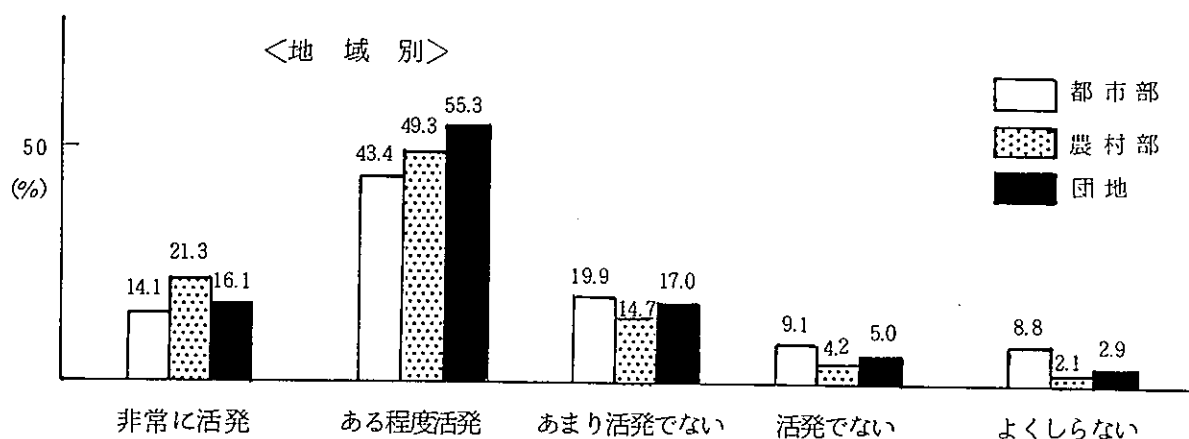
全体では、(図4-4)のように、「ある程度活発」が49.6%と最も高く、「あまり活発でない」と「非常に活発」がそれぞれ17.2%、17.1%とほぼ同率となっている。スポーツ、レクリエーションなどの活動と同様、この「祭り・年中行事」は住民の生活に密着した身近かな地域活動として、各地で活発に行われていることがこれらの数字から読みとることができる。

(図4-4) 26.(3)祭り、年中行事などの地域の行事



「活発である」と答えた親の年齢別、祖父母との同居別の割合には大きな相違は認められない。ただ、居住年数別では、比較的長い年月にわたってその地域に住んでいる親の肯定率が高く、また、地域別(図4-5)では、農村部・都市部よりも、団地の方が活発であると回答した親が多いのが特徴的であった。ただ、「非常に活発」と積極的な肯定は、農村部が21.3%と最も多かった。

(図4-5) 26.(3)祭り、年中行事などの地域の行事

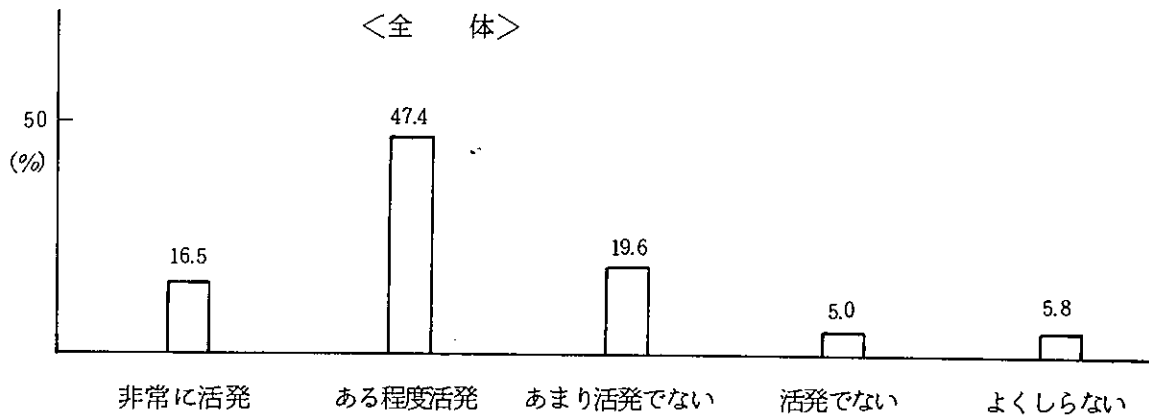


(4) 子ども会、青少年団体などの活動

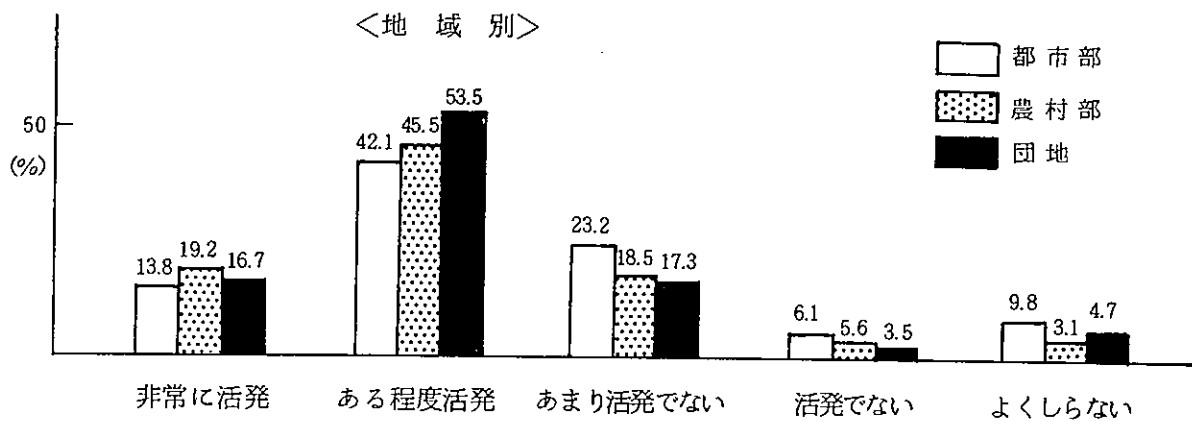
全体では、(図4-6)のように、「非常に活発」、「ある程度活発」を合わせると64%弱となり、不活発であるとする24.6%を大きく引き離している。

居住年数別では、5年以上～10年未満の親が最も活発であると評価している。年齢別、祖父母との同居別ではいずれも大きな差は認められないが、地域別(図4-7)では、ここでも団地の高い比率が目される。ただし、「非常に活発」と答えたのは農村部の19.2%が最高で、団地の16.7%はわずかに及ばない。

(図4-6) 26.(4)子ども会、青少年団体などの活動



(図4-7) 26.(4)子ども会、青少年団体などの活動

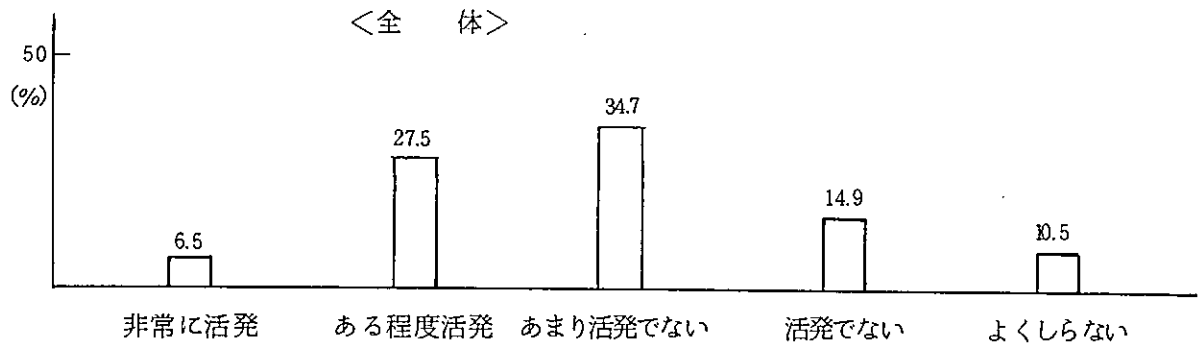


(5) 地域の子どもへのあいさつ・声かけ運動

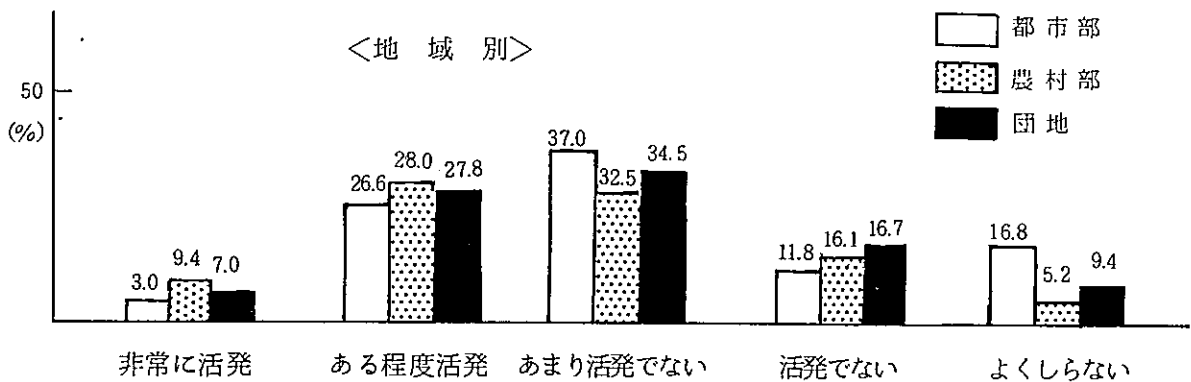
全体では、(図4-8)のように、「あまり活発でない」が34.7%で、「活発でない」の14.9%を加えると49.6%に達し、「ある程度活発」、「非常に活発」の34.0%をかなり上廻った割合となっている。

年齢別では40代以上より30代以下の方が「活発でない」と評価し、地域別(図4-9)では都市部が農村部・団地に比べて不活発であると思うと答えている。農村部・団地より、都市部の方が近隣社会との交流の機会が少ないせいであろうか。

(図4-8) 26.(5)地域の子どもへのあいさつ・声かけ運動



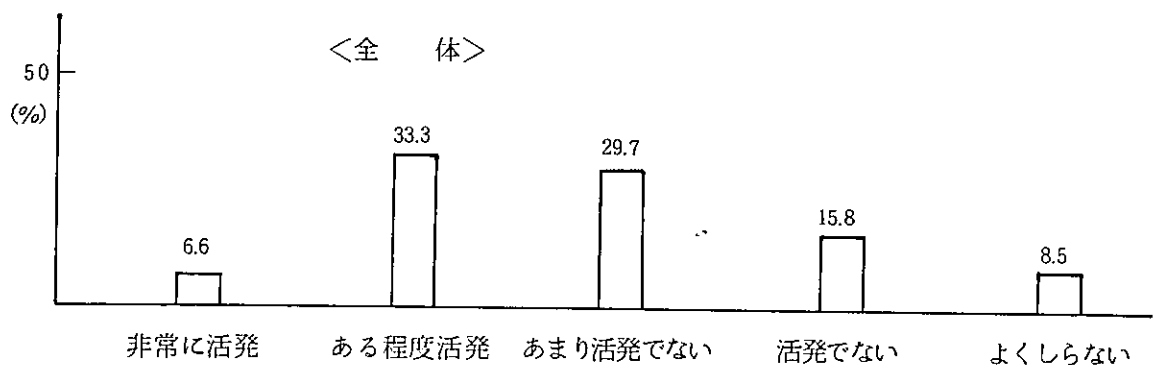
(図4-9) 26.(5)地域の子どもへのあいさつ・声かけ運動



(6) 道路、公園などの環境美化運動

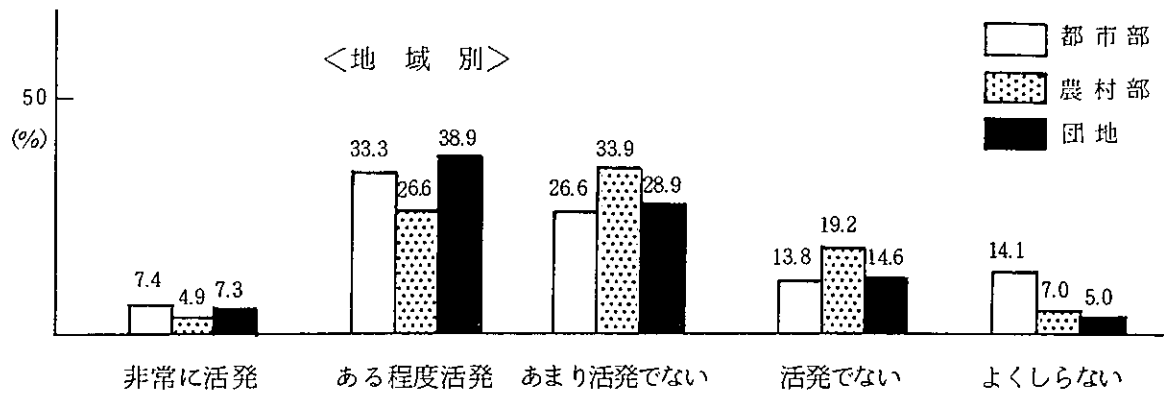
全体では、(図4-10)のように、「ある程度活発」(33.3%)と「あまり活発でない」(29.7%)と答えた比率が拮抗する形で並んでいる。しかし、「活発でない」15.8%を加えると、全体として不活発の割合の方が高くなり、かなり否定的な評価となるようだ。

(図4-10) 26.(6)道路、公園などの環境美化活動



環境美化運動を不活発とみるのは、地域別（図4-11）では農村部に多く、逆に活発であると評価するのは団地に多い。年齢別、祖父母との同居別では、活発・不活発ともほとんど差はなく、居住年数別に多少のバラつきがみられる程度である。

（図4-11） 26.(6)道路、公園などの環境美化活動

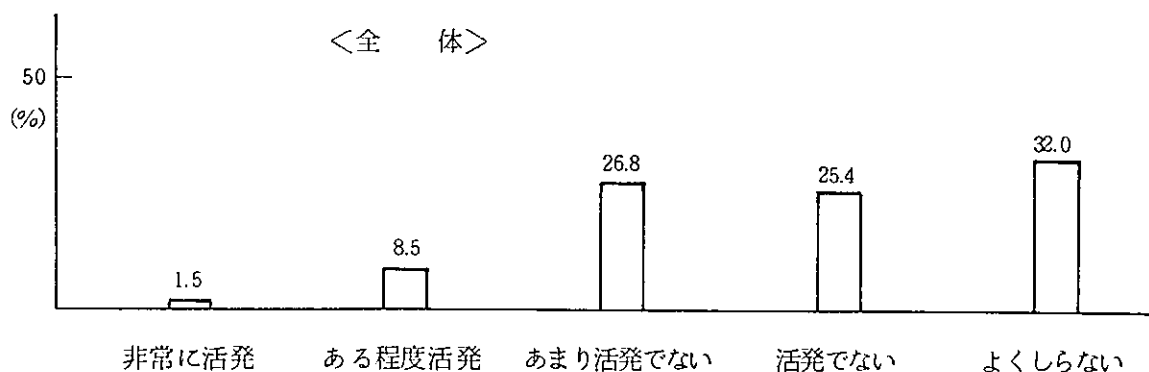


(7) 高齢者や身体の不自由な人に対する奉仕活動

いわゆる地域福祉ボランティアの活動状況であるが、他の地域活動に比べて一番取り組みが遅れているのがこの領域である。全体では、(図4-12)のように、「あまり活発でない」、「活発でない」の合計が52.2%、それに「よくしらない」の32.0%を加えると実に84.2%の人が不活発であると評価している。

年齢別、居住年数別、地域別、祖父母との同居別のいずれをみても不活発が極めて高い数字を示している。とりわけ、「よくしらない」という回答がどの区分を見ても際立って多いのは気になるところである。

（図4-12） 26.(7)高齢者や身体の不自由な人に対する奉仕活動

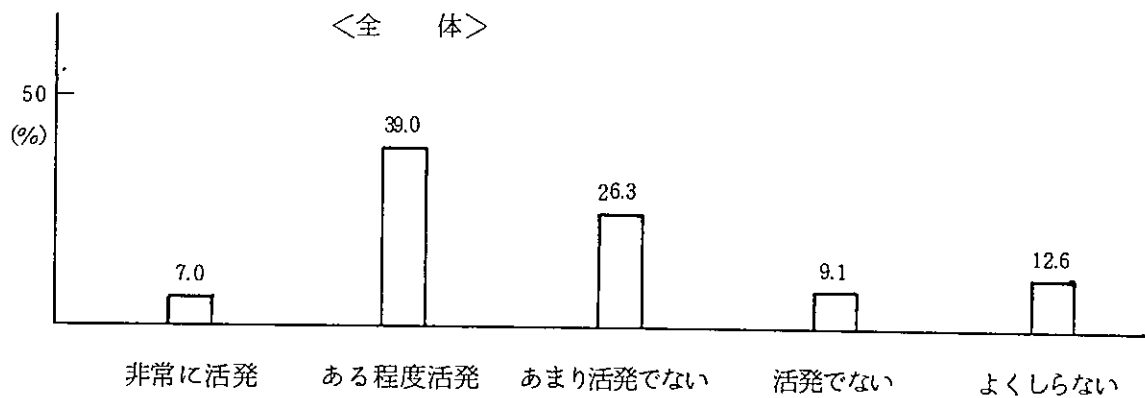


(8) P T Aの地域懇談会などの活動

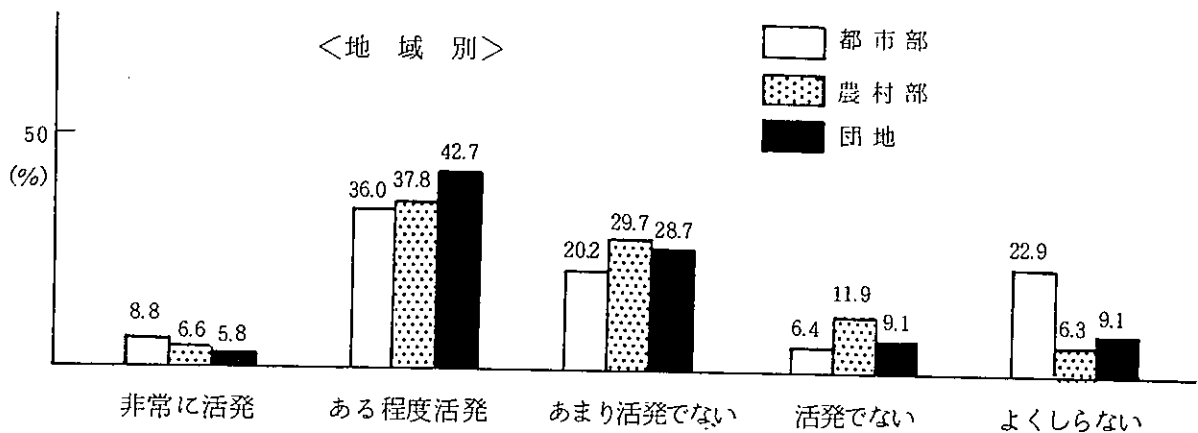
P T Aや子どもを守る会などが核となって、地域における青少年の健全育成を組織的に図っているだけあって、その活動はかなり活発である。全体では、(図4-13)のように、「非常に活発」、「ある程度活発」を合わせると46.0%、「活発でない」はわずかに9.1%に過ぎない。

「非常に活発」という回答には、区分別に見て多少のアンバランスがあるものの、「ある程度活発」という答えを地域別(図4-14)にみると、団地の回答率が最も高く、次いで農村部、都市部と続いている。また、居住年数別(図4-15)では、永年その地に住み慣れた居住年数順に評価が高くなっているが、P T Aの地域懇談会などの活動には、地縁的な人と人とのつながりを強化するための一定期間の年限がやはり必要であるように見受けられる。

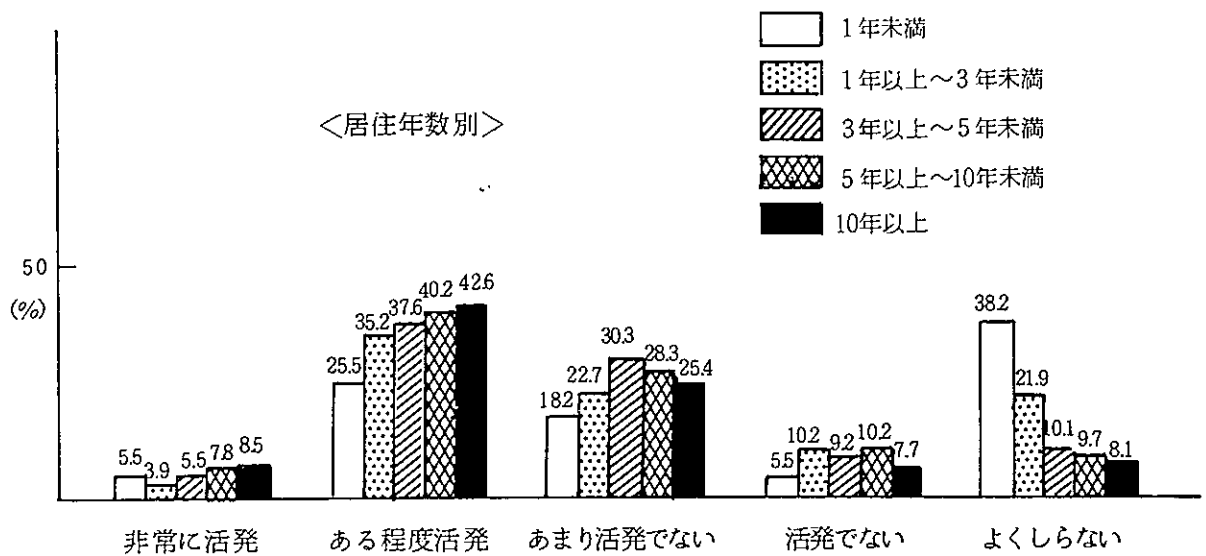
(図4-13) 26.(8)P T Aの地域懇談会などの活動



(図4-14) 26.(8)P T Aの地域懇談会などの活動



(図4-15) 26.(8) P T A の地域懇談会などの活動



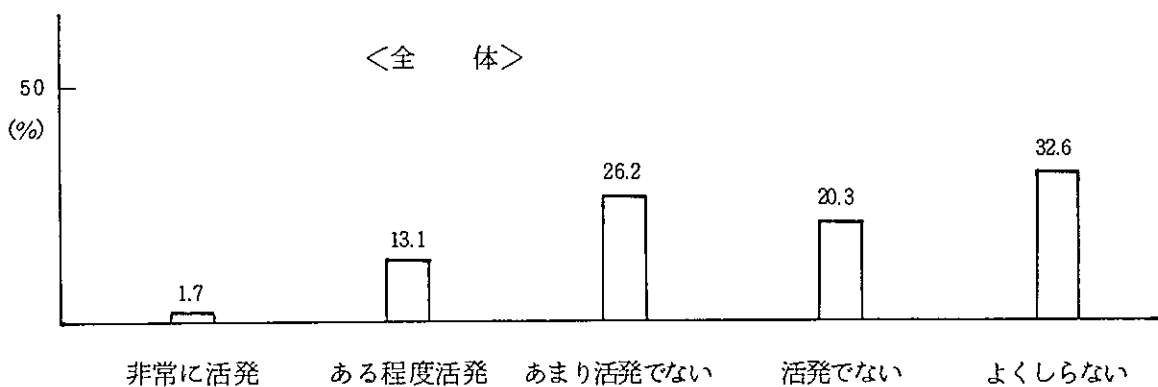
(9) 有害図書追放など健全な環境づくり活動

地域住民にとってこの種の活動は、福祉ボランティア活動同様あまり得意の領域ではなさそうである。全体では、(図4-16)のように、「あまり活発でない」と「活発でない」を合わせると46.5%になり、「よくしらない」の32.6%をこれに加算すると、あと少しで80%に手が届きそうな高率となる。

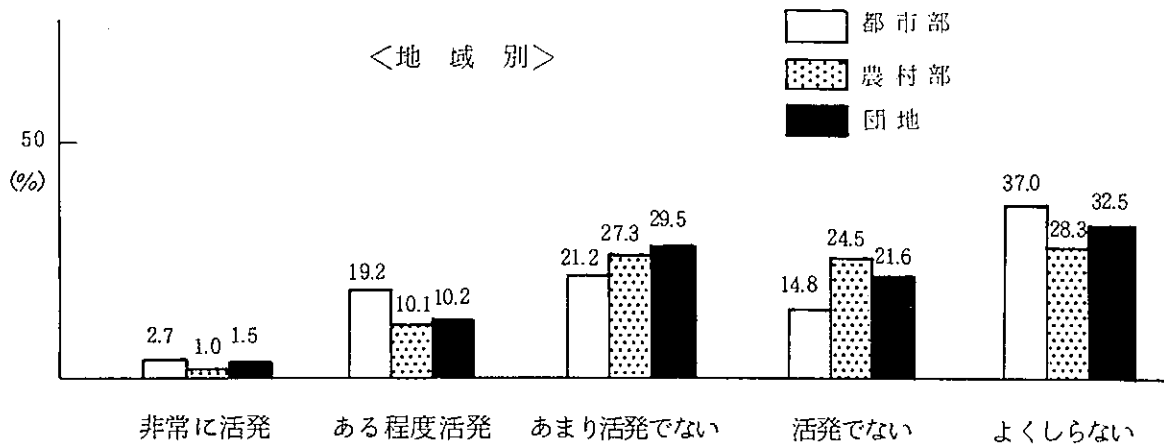
地域別にみた場合(図4-17)、活発でない割合は団地と農村部がほぼ同率で、都市部はわずかに低くなっている。しかし、「よくしらない」と答えた親は逆に都市部に多く、最も少ない農村部より、約10%多くなっている。

その外、年齢別・居住年数別・祖父母との同居別では、際立った相違は見受けられないものの、どの区分においても「よくしらない」と答えた比率が目立って高いのは気になるところである。

(図4-16) 26.(9)有害図書追放など健全な環境づくり活動



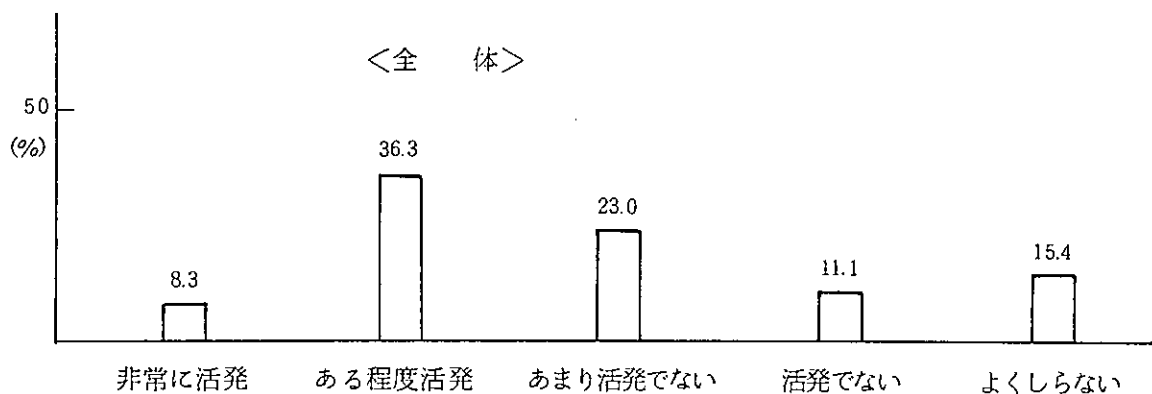
(図4-17) 26.(9)有害図書追放など健全な環境づくり活動



(10) 交通安全や街頭パトロールなどの活動

全体では、(図4-18)のように、「ある程度活発」が36.3%と最も高く、次の「あまり活発でない」というやや否定的な回答は23.0%にとどまっている。また、「非常に活発」とする評価と正反対の

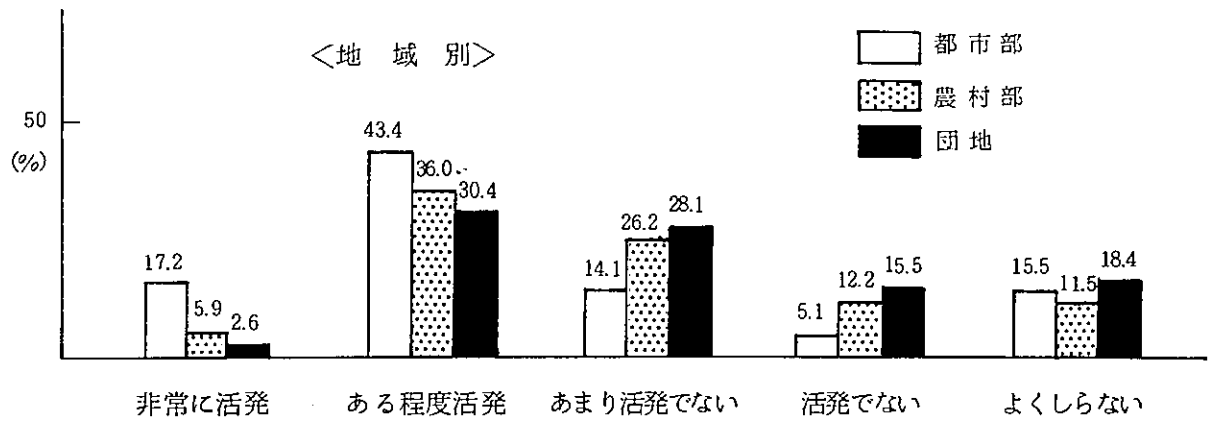
(図4-18) 26.(10)交通安全や街頭パトロールなどの活動



「活発でない」という評価の開きがあまりないのも特徴的である。この項目では、総じて活動は活発であるという意見が大勢を占めているようであるが、その背後にはPTAや地域懇談会の関連した活動が大きな力となっていることを見逃すわけにはいくまい。

その外、地域別(図4-19)では、都市部において活動が活発であるという理由もうなづける。交通量や好ましくない教育環境が集中する都市部では、当然のことながら、常時取り組むべき地域活動の一つであるようだ。

(図4-19) 26.(10)交通安全や街頭パトロールなどの活動



2. 地域への期待

子どもを育てる上で、地域に特に期待するものは何か、を調査してみた。調査項目は、前掲の項目とほぼ同じであるが、他に2項目「地域における子どもの健全な遊び場などの整備充実」及び「電話相談など相談窓口と相談員の整備」を追加し、特に期待すること3つを選択させて回答を求めた。その集計結果から、調査対象者が地域に何を期待しているかを見てみよう。

(1) 全般的な傾向

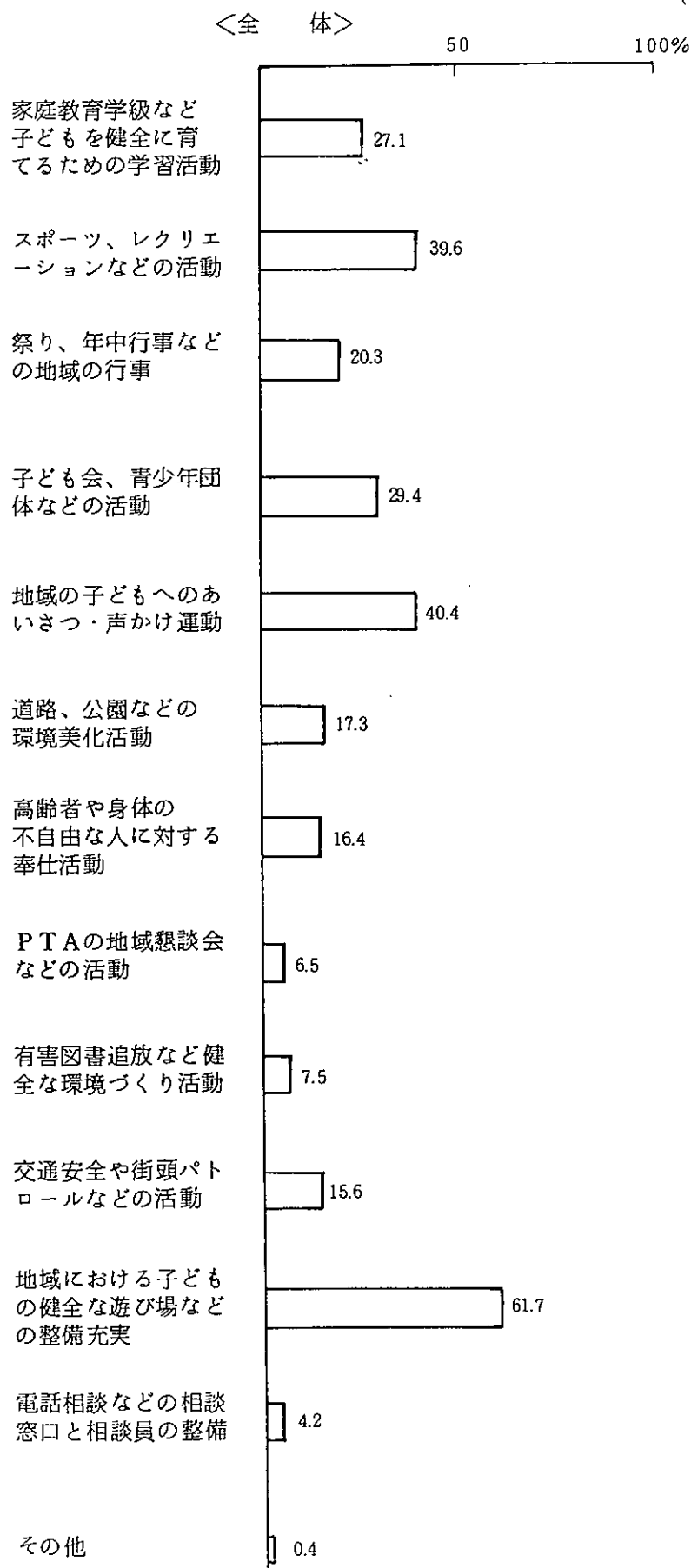
全体の結果からみれば、(図4-20)のように、「地域における子どもの健全な遊び場などの整備充実」への期待が群を抜いて高く、61.7%を占めている。次いで、「地域の子どもへのあいさつ・声かけ運動」が40.4%、「スポーツ、レクリエーションなどの活動」39.6%、「子ども会、青少年団体などの活動」29.4%と続き、家庭教育学級などの学習活動やPTAが主催する地域懇談会などの団体活動は、予想外に低い比率となっている。

「道路、公園などの環境美化運動」、「高齢者や身体の不自由な人に対する奉仕活動」及び「交通安全や街頭パトロールなどの活動」はほぼ同率、また、「有害図書追放など健全な環境づくり活動」は、具体的な取り組みに困難性を伴うせいか期待度は極めて低い。

なお、前述したように、地域活動の中でも不活発の部類に評価されていた「高齢者や身体の不自由

(図4-20) 29.あなたがお子さんを育てていく上で、地域に特に期待することは何ですか。

(3つ以内の複数回答)



な人に対する奉仕活動」が、実態とほうらはらに 16.4%と高くなっているのは注目に値する。

(2) 年齢別

次に、年齢別の期待度をみてみよう。30代以下、40代以上ともに、項目別の期待順位は、全体的な傾向と比べて大きな変動はみられない。ただ、(図4-21)に示されているとおり、「地域における子どもの健全な遊び場などの整備充実」、「スポーツ、レクリエーションなどの活動」及び「家庭教育などの学習活動」等に多少のバラつきがみられる。

これは、異なった年齢の子どもを持つ親の価値観の相違であろうか。例えば遊び場などの整備充実の期待度をみると、小さな子どもが多いと予想される30代以下の親が高くなっている。

(3) 住居年数別

(図4-22)でみる限りでは、居住年数の長短によって項目ごとの期待度に微妙な差が生じている。例えば、1年未満の居住者の場合、「地域における子どもの健全な遊び場などの整備充実」を始め、「高齢者や身体の不自由な人に対する奉仕活動」、「交通安全や街頭パトロールなどの活動」等に高い期待率を示しているのに対し、「子ども会、青少年団体などの活動」、「家庭教育学級などの学習活動」等いわゆる団体活動・集団学習に対する期待度は低いレベルにとどまっている。

逆に、10年以上の居住者の場合は、「地域の子どもへのあいさつ・声かけ運動」、「PTAの地域懇談会などの活動」等地縁的な人と人とのつながりを重視する活動に期待を寄せるなど、それぞれの立場や生活観の相違から評価の基準にもわずかながら開きが見受けられる。

(4) 地域別

地域別にみれば、(図4-23)のように、地域の特性に応じて、期待する特定事項の内容にかなりの相違が認められるとあってよい。例えば、交通量の激しい都市部では「交通安全や街頭パトロールなどの活動」、あるいは「子どもの健全な遊び場などの整備充実」にかかる願いが非常に高く、「道路、公園などの環境浄化活動」への期待は、住宅密集地帯ともいうべき団地に多く見受けられる。

また、「地域の子どもへのあいさつ・声かけ運動」については、都市部・団地より農村部で強い期待感が持たれている。過密化されない住宅事情にもよろうが、近隣では顔なじみの多い農村部にあっては、まず、あいさつ・声かけ運動が子どもの健全育成活動の第一歩だという認識に立っているようだ。

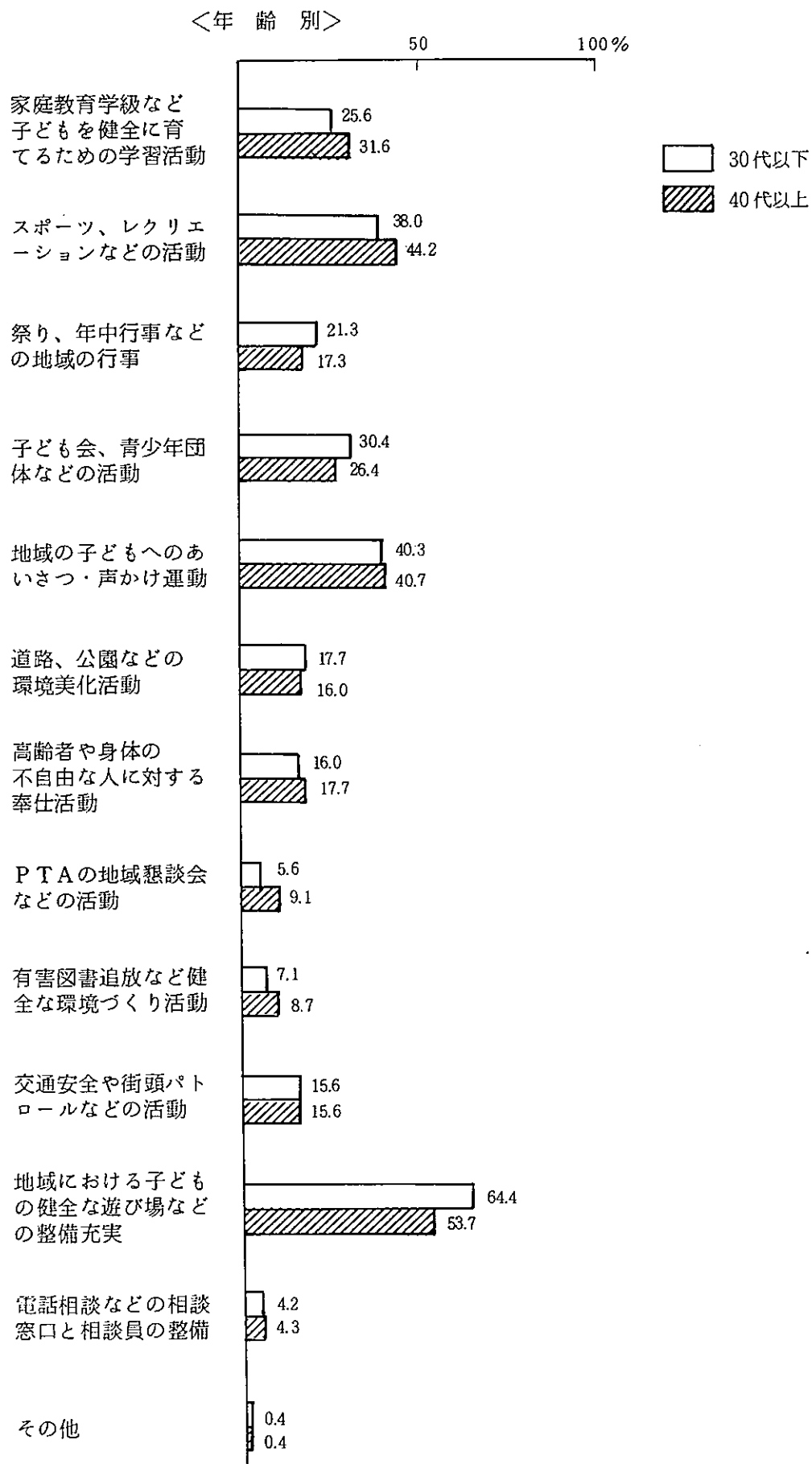
なお、その他の項目に関しては、都市部・農村部・団地を比較しても大した差異は認められなかった。

(5) 祖父母との同居別

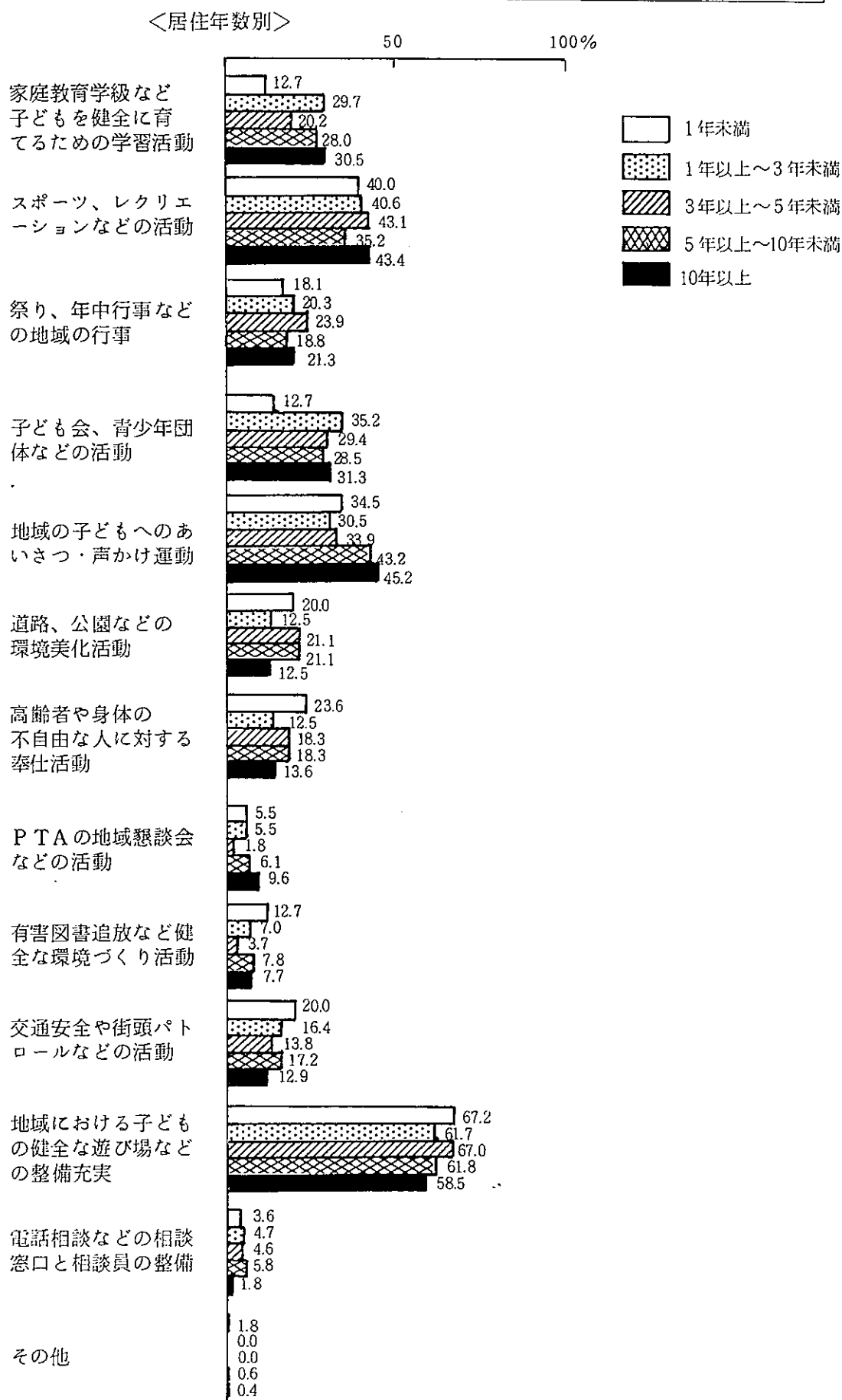
祖父母との同居別では、(図4-24)のように、いずれの項目をみても目立った相違は認められない。ただ、「地域の子どもへのあいさつ・声かけ運動」については、同居している親の期待度が49.1%に達し、同居していない親の37.6%をかなり上廻っていることと、「道路、公園などの環境美化運動」では逆に、同居していない親が同居している親よりわずかに多いといった程度の差は出ている。

しかし、地域に期待する内容に祖父母との同居別の区別はあまり影響がないように思われる。

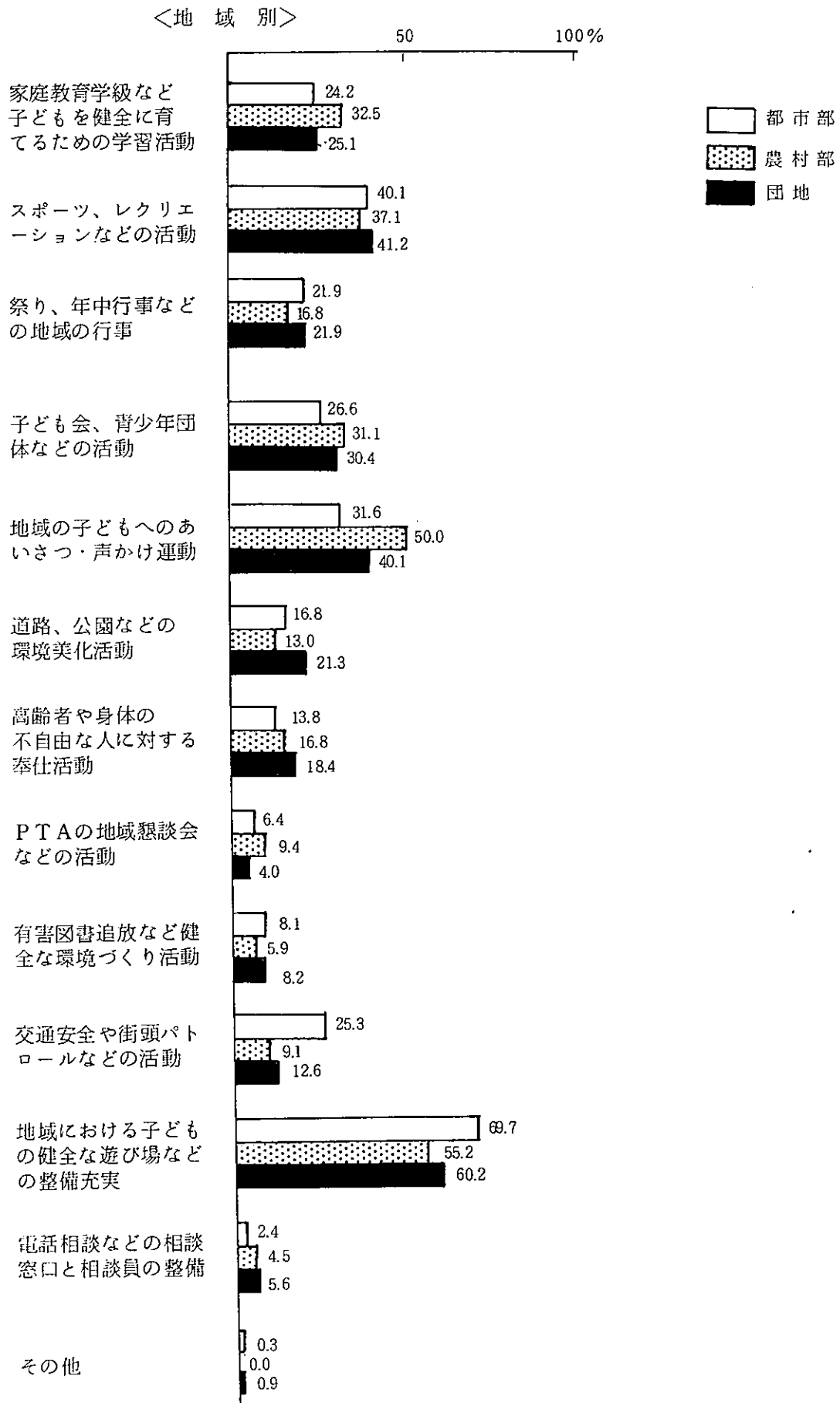
(図4-21) 29.あなたがお子さんを育てていく上で、地域に特に期待することは何ですか。



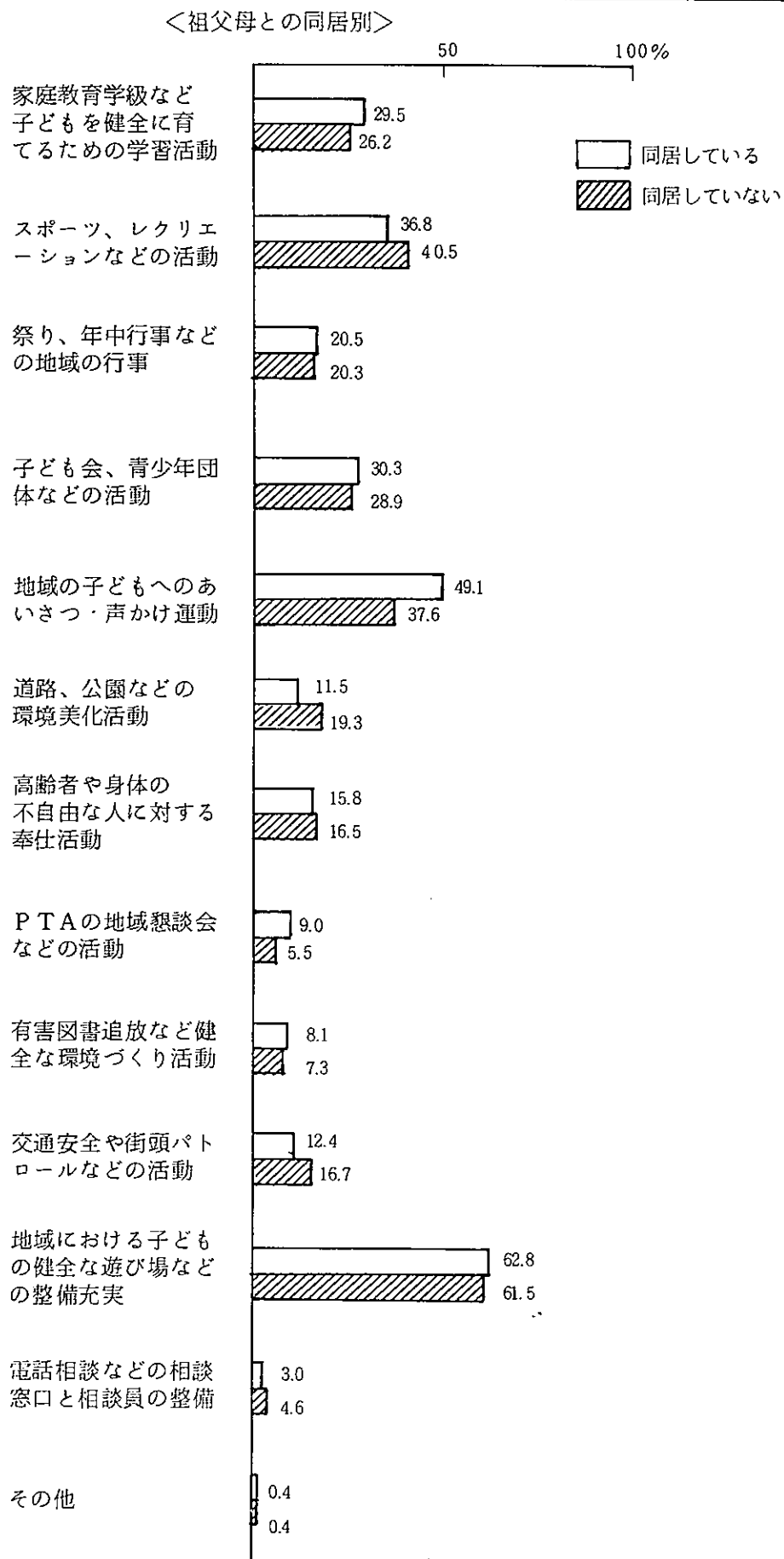
(図4-22) 29.あなたがお子さんを育てていく上で、地域に特に期待することは何ですか。



(図4-23) 29.あなたがお子さんを育てていく上で、地域に特に期待することは何ですか。



(図4-24) 29.あなたがお子さんを育てていく上で、地域に特に期待することは何ですか。



3. 本章のまとめ

本章では、地域で行われている様々な子どもの健全育成のための活動の状況と、子を持つ親として、望ましい環境づくりの面で地域に特に何を求めているか、を集計されたデータをもとに分析してみた。

その結果、「スポーツ、レクリエーションなどの活動」、「祭り、年中行事などの地域の行事」、「子ども会、青年団体などの活動」が各地で比較的活発に行われていることがわかった。これらの活動は、いずれも集団活動であり、年間を通じて組織的に行われているところに特徴があるが、こうした活動に参加することによって、住民相互の交流の促進や地域連帯感の醸成を図るという点では確かに意義深い活動であるといえる。

しかし、問題はこれらの活動が表面的には活発であっても、果して内容面でどれだけ充実しているか、という点であろう。なかには、単なるスケジュール消化に終わった活動もありはしないだろうか。特に、子ども会や青年団などの団体活動には、事業計画を検討する段階でもうひと工夫を要するものが間々見受けられるし、本来の目的を逸脱してただ興味本位の活動に終始するケースもないとはいえない。

また、もう一つの問題は、これらの活動に親子そろって参加しているか、どうかという点である。調査では、参加の形態に関する設問がないので、データによる正確な分析はできないが、親子のふれ合いを地域の中に広げていくところに活動の意義を認めるとするならば、親子共同参加は地域活動を活性化させる大事な要素となる。言葉を換えれば、本当の意味での「活発化」とは、親子ともども手を携えて、積極的にこれらの地域活動に参加することによって決まるのではないだろうか。

一方、最も不活発な活動としてあげられているものに、「高齢者や身体の不自由な人に対する奉仕活動」がある。高齢化社会を迎え、その具体的な対応策が真剣に模索されている今日、身近な地域社会においてこれら恵まれない人びとに暖かい手を差し伸べて、「ともに生きる」環境づくりに努める必要があることはあらためて述べるまでもない。今後は、地域活動の中でも陥没したこの領域を埋めるため、地域総ぐるみで適切な推進方策を検討する必要があるだろう。まず、第1の段階として、子どもたちに福祉ボランティア活動の意義と役割をしっかりと教え、導くことが肝要である。

次に、「子どもを育てていく上で、地域に特に期待することは何か」であるが、「健全な遊び場の整備充実」が圧倒的に多いのは無理からぬ結果だといえる。都市化の波が押し寄せて土地空間が狭隘になったばかりでなく、モータリゼーションの激化に伴う子どもの安全な遊び場の確保が困難になりつつある現代では、親にとってこの種の願いが一番切実であるのかも知れない。

室内でテレビゲームに熱中し、孤独なひとり遊びしかできない現代っ子を、戸外に放り出して仲間と思いっきり身体をぶっつけ合って遊ばせるのは確かによい方法である。

しかし、誰かがいつかやってくれるだろうと、ただ手を拱いているばかりでは健全な子どもの遊び場の確保などおぼつくものではない。やはり、PTA活動や自治会活動などに自からが参加し、そうした組織活動を通じて行政や関係機関に働きかける積極的な姿勢を持つべきだろう。明るく、住みよい地域社会は、ごく一握りの住民によって築かれるものではなく、全員それぞれの自覚と責任のもと協同して

築き上げていく以外に成立するものではない。

地域への期待は期待として、他力本願的な願いではなく、自らが地域とかがわって実現可能な課題とは何かを見極め、その上で、より具体的な地域への期待像を明らかにしていくことが、地域活動を活性化させる最短の道のりになるのではなかろうか。

第5章 結論と今後の課題

家庭教育の現状について、その全体像を把握しておくことから始めよう。調査の目的の項で述べた論点に従って結果をまとめる。

まず、家庭内教育について考える。家庭教育の責任者である親は、自信と不安とが相半ばしている。親として自分はどうするという考えが確保されていないために、子育てについてこれでいいという中流意識が無い。家庭教育を進めていくパートナーは夫(妻)であり、介添え人は学校の先生、友人、子どもの祖父母である。その周りを地域の間人関係が取り巻いている。家庭教育を担う間人的環境の形式はこれ以外にはないが、その機能が親が考えるほど十分に働いていない所に、親の不安の原因があるものと思われる。具体的にはどのような不安を親は抱えているのだろうか。三大悩みは、勉強の悩み、子育ての成果である今の子どもの性格的な悩み、方法としてのしつけの悩みである。その他も含めさまざまな悩みを、ほとんどの親が持っている。親はこの悩みを解消するために、家庭の外へ、例えばPTA集会、近所の人との話、公民館での学習などへ、手がかりを求めている。家庭を取り巻く環境は、家庭教育の情報源として豊かでなければならない。

子どもは家庭内での教育だけでは抱えきれない。子どもの世界は家庭の外にも広がっているからである。では、そこでは、誰が教育担当者であるのか。近所のお兄ちゃん、お姉ちゃん、おじさん、おばさんといった人たちであろう。近所の人というとき、顔見知りであるということが基本的条件である。この点に関しては、例えば7割の親が出会った時によく声をかけているし、また気軽に行き来できる家が3軒(向こう3軒両隣の半分)以上あるという親は、ほぼ半数である。

このような状況の中で、親は近隣との付き合いと家庭教育との関係をどのように考えているのかをみると、子どもの成長に子ども同士の付き合いが必要であり、また親にとっても子育ての上で近所付き合いが役に立っていると思っている。近隣関係を基盤とする家庭間教育の重要性は、十分に親に意識されている。しかしながら、そのことが親の意識の上だけに留まっており、子どもの具体的な生活行動の中に定着しているとは言い難い。例えば、近所の子どもにあいさつをしたりする親は64%だが、自分の子どもが近所の人とあいさつをすると答えられた親は31%と、半分である。また、近所の子どもとよく遊ぶ子どもは58%に過ぎない。親自身が近所の人との付き合いを半分はわずらわしいと思っていることが、子どもの行動に正直に現れていると言えよう。

子どもは親の思うようにはしないで、親のするようにすると言われるが、このような現状をみると、望ましくないことについてはそのままそっくりに真似をされ、望ましい親の行動は半分しか真似されないうもどかしさが見えてくる。このことが、親にしつけの上で不安をもたらす一つの要因である。親の望みの半分が子どもの現実であると良い意味で開き直ってみることが、親の自信を回復する方法ではないだろうか。

さらに家庭を遠くから見てみよう。個々の家庭から分離された所で営まれる家庭外教育については、

親は近隣関係ほどではないにしても、子育ての上で役に立つという評価を与え、またそれなりの関心も示している。ほとんどの親が地域の行事や活動に子どもを参加させようとしているのは、そこに何等かの期待が込められていると考えられる。しかし一方で、親自身の地域活動への参加が自分の子どもに望んでいるほどではないことから、ここでも実際の地域活動への子どもの参加は親の願う所までには至っていないであろう。

家庭外教育の場では、家庭内の父親ほどの強く確かな指導は発揮できない。そこは基本的には子どもが自由に大人の真似をする場である。社会の影響が直接に子どもに現れてくるのは、子どもがあまりに無防備に大人の真似をしているからである。その意味で、地域とは家庭・近隣と社会との中間に位置し、確固とした存在感を持てるように親の意図的行動を反映することができる最も身近な社会であるという認識があらためて必要となる。その認識があるからこそ、今日まで親自身が地域の世話役として地域社会を支えてきたのである。子どもを育てる場というよりも、子どもが自由に育つ場として地域を捉えるならば、親は地域の教育的環境の整備に対する責任を負っていることになる。

このような立場にある親が今地域に求めていることは、第一には健全な遊び場の整備充実を挙げ、第二にはあいさつや声かけ運動、スポーツやレクリエーション活動、子ども会などの団体活動という人間的つながりの充実を挙げている。地域はやはり単なる居住地域ではなく、その地域独自の人間的まとまりをもつことが必要であると考えられている。

家庭教育の立場から見ると、地域の三つの役割として、住環境の整備、地域のまとまりとネットワーク、そして経験の蓄積とそれを支える学習を中心とした情報の受発信機能が挙げられる。この三つの役割をバランス良く実践活動の中に組み込むことが大切である。

地域活動はたとえその形式が画一的であったとしても、内容の面で地域独自の特色を出さなければ意味がない。地域活動のマンネリ化が言われるとき、その多くの場合、形式のみならず内容の画一化が見られる。そうなるにはそれなりの理由がある。その地域活動が手作りではないということである。誰かに任せっぱなしになっているからである。地域は他人に支えてもらっているのではない。自分の住む地域は自分で支えなければならない。地域活動はそこに住む人が手を加えて初めて地域の特色が出てくるものである。地域に何をしてもらおうかではなく、地域に何をして上げられるかが、地域活動の基本理念である。充実した活動であるか否かは、参加する人の手の中にある。地域活動への評価が居住年数と共に増加傾向を示していることは、自分たちの活動という気持ちが育っているからである。地域が自助社会になれたとき、そこに住む大人と子どもに地域の仲間としての連帯感が生まれ、地域が健全な家庭外教育の場になることができる。

次に視点を指導者の側に置いて結果の特徴を見てみよう。指導者が地域活動全般を通じて家庭教育に携わる場合に留意しておくべきことは、対象となる地域住民の多様性である。詳細については各章の解説に譲ることにして、ここでは大づかみな特徴をまとめておくことにしたい。

都市部・農村部・団地という地域区分をしてみると、都市部ではやはり近隣との人間関係が弱いが、

それだけに子どもたちは近所の人とあいさつを通して一生懸命つながりを持つようとしている。農村部では人間的つながりは強く、地域意識はまだしっかりと根づいており、その分、地域を高めようとする活力が見られ学習活動への期待も大きい。団地ではその形態から人間的つながりは十分あるが、農村部のものとは違っている。近所付き合いなどについては農村部と同じであるが、もう一步踏み込んだ関係、例えば危険な遊びをしている子どもに注意するといった場面では、都市部に似ている。

親の年代、すなわち30代と40代では、それほど目立った違いは見られないが、40代の方が年代的に世話役経験が増え地域への関わりが増える分だけ、地域活動などへの参加が増えている。その反面、自分の子どもへの関心やPTA活動への参加が減っている。

居住年数の違いに現れる特徴は三つある。その一つは近隣とのつながりの確立には3年という境界が存在するということである。表面的な付き合いには1年で入ることができるが、親しい間柄になるには3年の年月がかかっている。二つ目は地域とのつながりに関しては5年を境界とする段差があるということである。家庭の生活が地域に根づくためには、5年という期間が必要である。三つ目は地域活動への関心とその意義を認めるようになるには、さらに5年、つまり10年以上の居住期間が必要である。この結果は都市部での地域活動を進めている指導者には辛い数字であろう。

子どもの祖父母と同居しているかいないかについては、同居していることが、親の行事や活動への参加にプラスに働いている。また、近隣、地域の情報を入手するのにも、祖父母が関係しているようである。

指導者に是非知っておいて欲しい数字がある。地域での学習活動についての情報を知っている割合と実際に参加する割合との関係である。良く知っている人の割合の2割が、よく参加している人の割合である（都市部では1割）。またある程度知っている人の割合の6割が、時々参加する人の割合である。広報活動とその結果を見るとき参考になるであろう。

もう一つは地域の行事や活動に関心を持っている割合と、実際に参加する割合との関係である。大いに関心を持っている人の割合よりいつも参加する人の割合が10%多い。逆に関心を持っていない人の割合よりも参加しない人の割合が10%少ない。このことは地域の人たちがとにかく参加してみようという姿勢を持っていることを示している。参加が少ないという声がよく聞かれるが、それはある意味で地域の人たちに失望を与えることになりはしないだろうか。指導者が主力を注ぐべきことは参加を増やすことではなく、参加した人の関心を増やすことであろう。

指導者にとって大切な資質の一つは、正しい状況把握である。それは指導者が、目標と現状を結び付ける方向に正確に舵取りをする役割を持つからである。個人の多様な生き方を可能にするために、それだけ高度な社会が造り上げられてきた。ということは、社会的な活動はきめ細かな状況把握をしなければできないということである。例えば、家庭状況に関して核家族化が進んでいるという判定がある。時代背景としては確かにその通りである。しかし、指導者は実践するものとして、背景ばかり見ているわけにはいかない。背景の上に描かれている現実こそ目を向けなければならない。子どもの祖父母と同

居している家庭は、平均すると25%である。核家族がかなり一般化している。しかしこの数字は、農村部では38%に増え、団地では17%に減る。30代の家庭では24%、40代の家庭では30%である。10年以上居住している家庭では50%の高率である。一口に核家族化と言っても、現実是多様である。

指導者が現実の数字を把握した上で舵取りをするのでなければ、地域の実情に合った活動は望めない。この報告書の数字が個々の地域の数字と比較検証されたとき、その数字の違いの中にその地域が進むべき活動の方向が自ずから現れてくるはずである。例えばこの報告書と同じ調査を個々の地域で実施して、その結果をこの報告書と比べて見てほしい。地域のことはその地域に住む人が考えなければ誰も教えてはくれない。この報告書の本当の結論は、指導者自身が書き加えなければならないし、それが地域の進路決定を任された指導者と呼ばれる人の責任である。

資 料

(資料 1) 家庭教育と地域とのかかわりに関するアンケート調査票

(資料 2) 調 査 結 果 の 集 計

(資料 3) 昭和 6 2 年度家庭教育総合推進事業の概要

問4 あなたは、近所で最も親しい家とはどんなきっかけで、そうになりましたか。

- | | | |
|-----------|------------|-----------|
| 1. 隣近所 | 2. 子供同士が友達 | 3. 親同士が友達 |
| 4. PTA活動で | 5. 地域の活動で | 6. 同じ趣味 |
| 7. 同じ職場 | 8. その他() | |

問5 あなたは、家庭教育について、近所の人と話しますか。

- | | |
|------------|-------------|
| 1. よく話す | 2. 時々話す |
| 3. あまり話さない | 4. まったく話さない |

問6 あなたは、近所の人とのつきあいをわずらわしいと思うことがありますか。

- | | |
|----------|-----------|
| 1. よくある | 2. 時々ある |
| 3. あまりない | 4. まったくない |

問7 あなたは、お子さんの最も親しい友達を知っていますか。

- | | |
|----------|---------|
| 1. 知っている | 2. 知らない |
|----------|---------|

問8 あなたは、お子さんの最も親しい友達の親を知っていますか。

- | | |
|----------|---------|
| 1. 知っている | 2. 知らない |
|----------|---------|

問9 あなたは、近所の子どもさんに出会った時、あいさつをしたり、声をかけたりしますか。

- | | |
|-----------|------------|
| 1. よくする | 2. 時々する |
| 3. あまりしない | 4. まったくしない |

問10 あなたは、近所の子どもさんが危険な遊びをしていたら、注意しますか。

- | | | |
|---------------|----------------|----------|
| 1. やめるまで注意する | 2. やめるよう一応注意する | |
| 3. 気になるが注意しない | 4. まったく注意しない | 5. わからない |

問11 あなたのお子さんは、近所の子どもさんと遊びますか。

- | | |
|------------|-------------|
| 1. よく遊ぶ | 2. 時々遊ぶ |
| 3. あまり遊ばない | 4. まったく遊ばない |

問12 あなたのお子さんは、近所の人に出会った時、あいさつをしていますか。

- | | |
|------------|------------|
| 1. よくしている。 | 2. 時々している。 |
|------------|------------|

3. あまりしていない 4. まったくしていない 5. 知らない

問13 あなたのお子さんは、近所の人に注意されたことがありますか。

1. ある 2. ない 3. 知らない

問14 あなたは、お子さんの成長にとって、子ども同士のつきあいは必要だと思いますか。

1. 大いに必要である 2. どちらかといえば必要である
3. あまり必要でない 4. まったく必要でない

問15 あなたは、PTAの集会に行きますか。

1. いつも行く 2. 時々行く
3. あまり行かない 4. まったく行かない

問16 あなたは、地域の行事や活動に関心を持っていますか。

1. 大いに持っている 2. どちらかといえば持っている
3. あまり持っていない 4. まったく持っていない

問17 あなたは、地域の行事や活動に参加しますか。

1. いつも参加する 2. 時々参加する
3. あまり参加しない 4. まったく参加しない

問18 あなたは、お子さんを地域の行事や活動に参加させますか。

1. いつも参加させる 2. 時々参加させる
3. あまり参加させない 4. まったく参加させない

問19 あなたは、地域の世話役（町内会や子供会育成会などの役員）をしたことがありますか。

1. まったくない 2. 1回ある 3. 2回ある
4. 3回ある 5. 4回ある 6. 5回以上ある

問20 あなたは、公民館などで実施されている家庭教育に関する学級・講座、講演会などに参加したことがありますか。

1. いつも参加している 2. 時々参加している
3. あまり参加していない 4. まったく参加していない

問21 あなたは、それらの学級・講座、講演会などが実施されているのを知っていますか。

- | | |
|------------|---------------|
| 1. よく知っている | 2. ある程度は知っている |
| 3. あまり知らない | 4. まったく知らない |

(問21で、1～3と回答された方のみお答えください。)

SQ それを何で知りましたか。

- | | |
|-------------------|----------------|
| 1. 市町村・公民館の広報誌(紙) | 2. 役所の案内窓口 |
| 3. 回覧板・掲示板・町内放送 | 4. 知り合いから(口込み) |
| 5. 学級・講座などで | 6. その他() |

問22 あなたのお子さんは、誰の言うことを最もよく聞きますか。1つだけ選んでください。

- | | | | |
|-------|-------|----------|-----------|
| 1. 父親 | 2. 母親 | 3. 学校の先生 | 4. 祖父母 |
| 5. 兄弟 | 6. 友達 | 7. 近所の人 | 8. その他() |

問23 お子さんの家庭教育について、あなたが今、一番悩んでいるのは何ですか。1つだけ選んでください。

- | | | |
|----------|-----------|-----------|
| 1. 勉強のこと | 2. 健康のこと | 3. 性格的なこと |
| 4. 友達のこと | 5. しつけのこと | 6. 反抗的なこと |
| 7. 非行のこと | 8. その他() | |
| 9. 別はない | | |

(問23で、1～8と回答された方のみお答えください。)

SQ その悩みは、どの程度ですか。

- | | |
|-------------|------------------|
| 1. とても悩んでいる | 2. どちらかといえば悩んでいる |
| 3. 少し気になる程度 | |

問24 あなたは、お子さんの家庭教育について悩んだ時、誰に相談しますか。次の中から上位3つを選んで()の中に順番をつけてください。

- | | | |
|-------------------|------------------|-------------|
| 1. 夫〔妻〕() | 2. 親〔子どもの祖父母〕() | 3. 学校の先生() |
| 4. 親類の人() | 5. 近所の人() | 6. 友人() |
| 7. 子どもと同じクラスの親() | 8. 相談機関() | |
| 9. その他() () | 10. 誰にも相談しない() | |

問25 あなたは、家庭教育について、自信がありますか。

- | | |
|----------|---------------|
| 1. 大いにある | 2. どちらかといえばある |
| 3. あまりない | 4. まったくない |

問26 次にあげるような青少年を育てる活動は、あなたが住んでいる地域ではどの程度活発だと思えますか。(1)~(10)のすべての項目それぞれについて、最もふさわしい番号を1つだけ選んで○でかこんでください。

	○ 非常に 活発	○ ある 程度 活発	○ あまり 活発 でない	○ 活 発 で な い	○ よ く し ら な い
(1) 家庭教育学級など子どもを健全に育てるための学習活動 ……………	5	4	3	2	1
(2) スポーツ、レクリエーションなどの活動 ……………	5	4	3	2	1
(3) 祭り、年中行事などの地域の行事 ……………	5	4	3	2	1
(4) 子ども会、青少年団体などの活動 ……………	5	4	3	2	1
(5) 地域の子どもへのあいさつ・声かけ運動 ……………	5	4	3	2	1
(6) 道路、公園などの環境美化活動 ……………	5	4	3	2	1
(7) 高齢者や身体の不自由な人に対する奉仕活動 ……………	5	4	3	2	1
(8) P T Aの地域懇談会などの活動 ……………	5	4	3	2	1
(9) 有害図書追放など健全な環境づくり活動 ……………	5	4	3	2	1
(10) 交通安全や街頭パトロールなどの活動 ……………	5	4	3	2	1

問27 あなたがお子さんを育てていく上で、地域の行事や活動が役に立っていると思えますか。

- | | |
|----------------|--------------------|
| 1. 大いに役に立っている | 2. どちらかといえば役に立っている |
| 3. あまり役に立っていない | 4. まったく役に立っていない |

問28 あなたがお子さんを育てていく上で、近所の人とのつきあいが役に立っていると思えますか。

- | | |
|----------------|--------------------|
| 1. 大いに役に立っている | 2. どちらかといえば役に立っている |
| 3. あまり役に立っていない | 4. まったく役に立っていない |

問29 あなたがお子さんを育てていく上で、地域に特に期待することは何ですか。次の中から上位3つを選んで()の中に順番をつけてください。

1. 家庭教育学級など子どもを健全に育てるための学習活動 …………… ()
2. スポーツ、レクリエーションなどの活動 …………… ()
3. 祭り、年中行事などの地域の行事 …………… ()
4. 子ども会、青少年団体などの活動 …………… ()
5. 地域の子どもへのあいさつ・声かけ運動 …………… ()
6. 道路、公園などの環境美化活動 …………… ()
7. 高齢者や身体の不自由な人に対する奉仕活動 …………… ()
8. P T Aの地域懇談会などの活動 …………… ()
9. 有害図書追放など健全な環境づくり活動 …………… ()
10. 交通安全や街頭パトロールなどの活動 …………… ()
11. 地域における子どもの健全な遊び場などの整備充実 …………… ()
12. 電話相談などの相談窓口と相談員の整備 …………… ()
13. その他() …………… ()

○ あなたが住んでいる地域について、あなたが、日頃思っていることや望んでいることを自由にお書きください。

()

アンケートにご協力いただきありがとうございました。

調 査 協 力 校 名

(順不同)

市 町 村 名	学 校 名
福 岡 市	赤 坂 小 学 校
〃	美 野 島 小 学 校
宗 像 市	南 郷 小 学 校
太 宰 府 市	太 宰 府 南 小 学 校
篠 栗 町	勢 門 小 学 校
古 賀 町	花 鶴 小 学 校
小 石 原 村	小 石 原 小 学 校

(資料2)

調査結果の集計

(%)

問	肢	全 体	都市部	農村部	団 地	30歳代 以下	40歳代 以上	1 年 未 満	1年以上 3年未満	3年以上 5年未満	5年以上 10年未満	10 年 以 上	同 居	非同居
1	1	25.3	22.6	38.1	17.0	23.8	29.9	9.1	10.9	21.1	15.8	49.6	--	--
	2	74.5	77.1	61.5	83.0	76.1	69.7	90.9	89.1	78.0	84.2	50.0	--	--
	NA	0.2	0.3	0.3	0	0.1	0.4	0	0	0.9	0	0.4	--	--
2	1	70.7	67.3	71.3	73.1	70.9	70.1	47.3	57.0	74.3	73.1	77.2	73.9	69.8
	2	26.3	30.3	25.5	23.4	26.1	26.8	45.5	39.1	21.1	24.4	21.0	23.9	27.1
	3	2.6	2.0	2.4	3.2	2.7	2.2	7.3	3.1	2.8	2.5	1.5	1.7	2.9
	4	0.1	0	0	0.3	0.1	0	0	0	0.9	0	0	0.4	0
	NA	0.3	0.3	0.7	0	0.1	0.9	0	0.8	0.9	0	0.4	0	0.1
3	1	9.0	11.8	7.0	8.2	8.2	11.3	25.5	21.1	9.2	5.8	4.0	9.0	9.0
	2	12.4	15.2	10.5	11.7	11.5	15.2	34.5	16.4	12.8	7.5	12.5	13.7	12.0
	3	22.7	25.3	21.3	21.6	23.2	21.2	14.5	30.5	18.3	24.1	20.6	17.9	24.2
	4	23.6	25.3	26.2	19.9	25.8	16.9	10.9	19.5	30.3	24.7	23.9	24.4	23.4
	5	7.9	6.7	7.3	9.4	7.6	8.7	3.6	6.3	4.6	10.8	7.0	8.1	7.8
	6	23.9	15.5	26.9	28.7	23.2	26.0	9.1	6.3	23.9	26.9	31.3	26.9	22.9
	NA	0.5	0.3	0.7	0.6	0.4	0.9	1.8	0	0.9	0.3	0.7	0	0.6
4	1	38.9	28.3	45.1	43.0	39.6	36.8	25.5	24.2	41.3	41.0	44.9	47.0	36.3
	2	37.0	45.5	30.8	34.8	37.5	35.5	34.5	32.8	40.4	38.8	35.7	33.3	38.2
	3	12.2	12.8	11.9	12.0	12.8	10.4	9.1	10.9	9.2	13.3	13.2	8.5	13.5
	4	2.9	3.0	1.7	3.8	2.7	3.5	1.8	3.9	2.8	3.0	2.6	1.7	3.3
	5	7.9	6.1	10.1	7.6	6.6	11.7	3.6	5.5	5.5	8.3	10.3	9.8	7.3
	6	4.4	3.0	4.2	5.8	4.5	4.3	1.8	2.3	4.6	6.1	3.7	2.1	5.2
	7	3.9	3.7	4.5	3.5	4.2	3.0	0	7.8	2.8	3.0	4.4	2.6	4.4
	8	3.4	3.0	5.2	2.0	3.3	3.5	7.3	3.9	1.8	2.8	3.7	2.6	3.6
5	1	20.4	20.9	17.1	22.8	20.3	20.8	20.0	15.6	14.7	25.5	18.4	15.8	22.1
	2	54.2	52.5	56.6	53.5	55.2	51.1	38.2	51.6	56.0	54.0	58.1	58.5	52.7
	3	17.6	16.2	18.9	17.8	17.7	17.3	30.9	17.2	22.9	15.2	16.2	17.1	17.9
	4	7.2	9.4	7.0	5.6	6.2	10.4	9.1	15.6	5.5	4.7	7.0	8.1	7.0
	NA	0.5	1.0	0.3	0.3	0.6	0.4	1.8	0	0.9	0.6	0.4	0.4	0.4
6	1	3.7	4.0	5.2	2.0	3.6	3.9	7.3	5.5	0.9	4.4	2.2	4.3	3.5
	2	41.1	39.7	43.7	40.1	41.8	39.0	32.7	44.5	45.0	41.0	39.7	35.5	43.0

(%)

問	肢	全 体	都市部	農村部	団 地	30歳代 以下	40歳代 以上	1 年 未 満	1年以上 3年未満	3年以上 5年未満	5年以上 10年未満	10 年 以 上	同 居	非同居
6	3	45.7	47.8	42.0	47.1	45.8	45.5	50.9	45.3	43.1	46.3	45.2	47.0	45.4
	4	9.4	8.4	8.7	10.8	8.8	11.3	9.1	4.7	11.0	8.3	12.5	13.2	8.1
	NA	0.1	0	0.3	0	0	0.4	0	0	0	0	0.4	0	0
7	1	92.2	93.3	90.9	92.4	93.4	88.7	87.3	89.1	94.5	92.8	93.0	93.2	92.0
	2	7.2	6.4	7.7	7.6	6.2	10.4	12.7	10.9	5.5	6.4	6.3	6.4	7.5
	NA	0.5	0.3	1.4	0	0.4	0.9	0	0	0	0.8	0.7	0.4	0.4
8	1	82.3	83.8	81.5	81.6	83.7	77.9	72.7	75.8	77.1	85.3	85.3	86.8	80.8
	2	17.3	16.2	17.1	18.4	16.3	20.3	27.3	24.2	22.0	14.7	13.6	12.8	18.9
	NA	0.4	0	1.4	0	0	1.7	0	0	0.9	0	1.1	0.4	0.3
9	1	64.2	63.6	62.9	65.8	63.8	65.4	61.8	58.6	58.7	65.9	67.3	70.5	62.1
	2	33.8	34.3	35.0	32.5	34.1	32.9	36.4	39.1	38.5	32.4	30.9	28.6	35.7
	3	1.8	2.0	1.7	1.8	2.0	1.3	1.8	2.2	2.8	1.7	1.5	0.9	2.2
	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	NA	0.1	0	0.3	0	0	0.4	0	0	0	0	0.4	0	0
10	1	26.5	22.2	33.6	24.3	23.6	35.1	27.3	21.9	19.3	24.4	34.2	28.2	26.0
	2	72.1	75.8	65.0	74.9	75.2	62.8	70.9	76.6	79.8	74.2	64.3	71.4	72.3
	3	0.9	1.0	0.7	0.9	1.0	0.4	1.8	0.8	0.9	1.4	0	0	1.2
	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	5	0.3	1.0	0	0	0.1	0.9	0	0.8	0	0	0.7	0.4	0.3
	NA	0.2	0	0.7	0	0	0.9	0	0	0	0	0.7	0	0.3
11	1	58.3	54.2	63.3	57.6	59.4	55.0	54.5	50.0	54.1	62.3	59.2	60.3	57.5
	2	33.7	38.7	27.6	34.5	33.7	33.8	34.5	40.6	37.6	31.6	31.6	33.8	33.8
	3	6.5	6.1	6.6	6.7	5.5	9.5	9.1	6.3	8.3	5.0	7.4	5.6	6.8
	4	1.2	0.7	1.7	1.2	1.3	0.9	1.8	3.1	0	1.1	0.7	0.4	1.5
	NA	0.3	0.3	0.7	0	0.1	0.9	0	0	0	0	1.1	0	0.4
12	1	31.0	32.7	28.3	31.9	31.6	29.4	38.2	28.1	36.7	28.0	32.7	32.9	30.5
	2	49.1	52.5	49.0	46.2	49.9	46.8	47.3	51.6	44.0	51.5	47.1	51.3	48.3
	3	15.4	9.8	18.5	17.5	15.4	15.2	14.5	14.1	14.7	17.2	14.0	12.8	16.1
	4	0.9	0.3	2.1	0.3	0.3	2.6	0	1.6	0	0.8	1.1	0.9	0.9
	5	3.2	4.7	1.0	3.8	2.6	5.2	0	4.7	3.7	2.2	4.4	2.1	3.6
	NA	0.4	0	1.0	0.3	0.3	0.9	0	0	0.9	0.3	0.7	0	0.6

(%)

問	肢	全 体	都市部	農村部	団 地	30歳代 以下	40歳代 以上	1 年 未 満	1年以上 3年未満	3年以上 5年未満	5年以上 10年未満	10 年 以 上	同 居	非同居
13	1	48.0	45.1	51.0	48.0	49.9	42.4	34.5	39.1	40.4	54.3	49.6	49.1	47.5
	2	33.5	36.0	32.5	32.2	32.9	35.5	43.6	43.0	32.1	28.5	34.2	34.2	33.4
	3	17.5	18.5	14.7	19.0	16.6	20.3	21.8	17.2	26.6	16.3	14.7	15.4	18.3
	NA	1.0	0.3	1.7	0.9	0.7	1.7	0	0.8	0.9	0.8	1.5	1.3	0.9
14	1	90.6	93.3	87.8	90.6	90.8	90.0	94.5	84.4	89.9	92.2	90.8	91.0	90.4
	2	8.4	5.7	11.2	8.5	8.5	8.2	5.5	12.5	9.2	7.8	7.7	7.7	8.7
	3	0.2	0.3	0.3	0	0.1	0.4	0	0.8	0	0	0.4	0.9	0
	4	0.3	0.7	0	0.3	0.4	0	0	1.6	0.9	0	0	0.4	0.3
	NA	0.4	0	0.7	0.6	0.1	1.3	0	0.8	0	0	1.1	0	0.6
15	1	39.1	37.4	44.1	36.5	39.0	39.4	40.0	35.9	36.7	39.3	41.2	41.9	38.2
	2	39.5	38.4	41.3	38.9	38.3	42.9	38.2	30.5	39.4	42.1	40.4	40.2	39.2
	3	14.1	13.1	10.5	17.8	15.6	9.5	12.7	18.0	16.5	14.7	10.7	12.8	14.5
	4	7.0	10.8	3.5	6.7	7.1	6.9	9.1	14.8	7.3	3.9	7.0	5.1	7.7
	NA	0.3	0.3	0.7	0	0	1.3	0	0.8	0	0	0.7	0	0.4
16	1	17.6	11.1	23.4	18.4	15.4	24.2	16.4	8.6	15.6	17.5	23.2	19.7	17.0
	2	54.3	59.3	50.7	52.9	55.8	49.8	49.1	53.1	54.1	53.2	57.4	53.0	54.7
	3	25.8	26.3	23.8	27.2	26.5	23.8	27.3	31.3	29.4	28.3	18.4	26.1	25.7
	4	1.9	3.4	1.0	1.5	2.3	0.9	7.3	7.0	0.9	1.1	0	1.3	2.2
	NA	0.3	0	1.0	0	0	1.3	0	0	0	0	1.1	0	0.4
17	1	27.6	19.2	37.1	26.9	27.2	28.6	18.2	18.0	19.3	27.4	37.5	34.6	25.3
	2	55.1	59.3	52.8	53.5	56.5	51.1	52.7	54.7	58.7	57.9	50.7	47.4	57.6
	3	12.9	14.1	8.7	15.2	12.1	15.2	20.0	14.8	18.3	12.2	9.2	14.1	12.5
	4	4.2	7.4	0.7	4.4	4.2	4.3	9.1	12.5	3.7	2.5	1.8	3.8	4.4
	NA	0.2	0	0.7	0	0	0.9	0	0	0	0	0.7	0	0.3
18	1	53.1	49.2	58.7	51.8	52.9	53.7	45.5	45.3	45.9	52.9	61.4	53.8	52.8
	2	42.6	44.8	39.2	43.6	42.2	43.7	47.3	46.9	47.7	44.0	35.7	42.7	42.5
	3	3.6	4.7	1.4	4.4	4.3	1.3	7.3	7.0	4.6	2.5	2.2	2.6	3.9
	4	0.5	1.3	0	0.3	0.6	0.4	0	0.8	1.8	0.6	0	0.9	0.4
	NA	0.2	0	0.7	0	0	0.9	0	0	0	0	0.7	0	0.3
19	1	31.1	41.1	23.8	28.7	33.9	22.9	50.9	50.8	47.7	22.2	23.2	26.1	32.9
	2	36.1	28.6	38.1	40.9	36.7	34.2	30.9	32.8	36.7	42.1	30.5	34.2	36.7

(%)

問	肢	全 体	都市部	農村部	団 地	30歳代 以 下	40歳代 以 上	1 年 未 満	1年以上 3年未満	3年以上 5年未満	5年以上 10年未満	10 年 以 上	同 居	非同居
19	3	18.8	14.8	20.6	20.8	17.7	22.1	10.9	11.7	11.9	23.8	19.9	19.7	18.6
	4	8.4	8.4	9.8	7.3	7.2	12.1	5.5	1.6	1.8	7.8	15.8	10.3	7.7
	5	2.2	2.4	2.4	1.8	1.9	3.0	0	2.3	0	1.9	3.7	2.1	2.2
	6	2.7	3.7	4.2	0.6	1.9	5.2	1.8	0.8	0	1.9	5.9	6.4	1.5
	NA	0.6	1.0	1.0	0	0.7	0.4	0	0	1.8	0.3	1.1	1.3	0.4
20	1	3.2	1.7	4.9	3.2	2.9	4.3	1.8	0	1.8	3.6	5.1	5.6	2.5
	2	33.8	21.9	45.8	34.2	31.3	41.6	27.3	27.3	28.4	32.7	41.9	39.3	31.9
	3	30.9	32.7	29.4	30.7	32.0	27.7	21.8	29.7	23.9	35.5	30.1	30.8	31.1
	4	31.5	42.8	19.2	31.9	33.1	26.4	47.3	43.0	44.0	28.0	22.4	23.5	34.1
	NA	0.5	1.0	0.7	0	0.7	0	1.8	0	1.8	0.3	0.4	0.9	0.4
21	1	18.5	16.5	25.5	14.3	17.6	21.2	12.7	13.3	11.0	19.9	23.2	23.5	16.8
	2	52.2	45.8	51.7	58.2	50.6	57.1	50.9	52.3	49.5	52.4	53.3	53.0	52.0
	3	21.2	23.6	16.1	23.4	23.3	14.7	23.6	20.3	28.4	21.1	18.4	19.7	21.6
	4	7.5	13.1	5.6	4.1	7.8	6.5	10.9	13.3	9.2	6.4	4.8	3.0	9.0
	NA	0.6	1.0	1.0	0	0.7	0.4	1.8	0.8	1.8	0.3	0.4	0.9	0.6
(SQ) 21	1	33.8	30.2	34.1	36.3	34.8	30.7	47.9	40.0	35.1	32.6	29.5	31.1	34.7
	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	3	42.9	44.7	34.5	48.5	41.4	47.4	43.7	39.1	45.4	43.9	42.2	40.4	43.8
	4	9.5	11.4	6.7	10.4	9.6	9.3	12.5	8.2	8.2	11.0	8.1	7.1	10.4
	5	20.2	22.0	30.3	10.7	20.2	20.5	6.2	21.8	14.4	20.2	24.4	24.0	18.9
	6	1.5	2.0	1.9	0.9	1.9	0.5	0	0.9	3.1	1.5	1.6	1.3	1.6
22	1	50.6	46.5	52.4	52.6	53.5	42.0	49.1	53.9	51.4	49.3	50.7	47.0	51.7
	2	24.9	27.6	19.9	26.6	23.5	29.0	29.1	25.8	17.4	27.1	23.5	23.1	25.5
	3	20.2	21.5	20.6	18.7	18.6	25.1	16.4	18.0	24.8	19.7	21.0	22.6	19.4
	4	1.5	1.0	3.5	0.3	1.7	0.9	1.8	0.8	1.8	0.8	2.6	4.3	0.6
	5	0.6	0.3	1.0	0.6	0.4	1.3	0	0.8	0.9	0.3	1.1	0.4	0.7
	6	0.6	1.7	0	0.3	0.6	0.9	1.8	0.8	0.9	0.6	0.4	0	0.9
	7	0.3	0	0.7	0.3	0.4	0	1.8	0	0.9	0.3	0	0.4	0.3
	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	NA	1.2	1.3	1.7	0.6	1.3	0.9	0	0	1.8	1.9	0.7	2.1	0.9
23	1	21.3	23.9	19.2	20.8	20.7	22.9	23.6	21.9	15.6	18.8	26.1	21.8	21.0

(%)

問	肢	全 体	都市部	農村部	団 地	30歳代 以 下	40歳代 以 上	1 年 未 満	1年以上 3年未満	3年以上 5年未満	5年以上 10年未満	10 年 以 上	同 居	非同居
23	2	9.6	11.4	9.4	8.2	9.4	10.4	10.9	11.7	4.6	10.2	9.6	7.3	10.3
	3	17.8	14.5	21.7	17.5	19.0	14.3	7.3	23.4	17.4	20.5	14.0	15.8	18.6
	4	5.5	6.7	3.8	5.8	5.2	6.5	5.5	5.5	4.6	6.4	4.8	6.0	5.4
	5	20.8	20.9	19.9	21.3	21.0	19.9	25.5	17.2	23.9	19.7	21.7	19.7	21.2
	6	3.5	4.0	4.9	1.8	2.9	5.2	1.8	3.1	6.4	2.8	3.7	6.0	2.6
	7	0.3	0.3	0.7	0	0.3	0.4	0	0.8	0	0.6	0	0.4	0.3
	8	0.4	0	0.3	0.9	0.4	0.4	1.8	0.8	0	0.6	0	0.4	0.4
	9	20.0	17.5	18.9	23.1	20.2	19.5	23.6	14.8	25.7	19.7	19.9	21.8	19.4
	NA	0.8	0.7	1.0	0.6	0.9	0.4	0	0.8	1.8	0.8	0.4	0.9	0.7
23 (SQ)	1	6.8	7.4	7.9	5.4	6.9	6.5	9.5	12.0	6.3	5.6	5.5	6.1	7.1
	2	24.7	24.3	24.9	24.9	24.6	24.9	14.3	20.4	26.6	22.3	31.3	26.5	23.8
	3	67.5	67.5	65.1	69.7	67.9	66.5	76.2	65.7	67.1	71.4	61.8	65.7	68.4
	NA	1.0	0.8	2.2	0	0.5	2.2	0	1.9	0	0.7	1.4	1.7	0.7
24	1	89.4	84.8	92.7	90.6	90.2	87.0	85.5	86.7	87.2	91.7	89.3	85.9	90.6
	2	34.6	32.3	37.1	34.5	36.5	29.0	40.0	33.6	33.0	31.6	38.6	45.7	30.8
	3	52.5	54.2	53.5	50.3	51.0	57.1	50.9	44.5	53.2	52.6	56.3	58.5	50.5
	4	14.3	13.1	13.6	15.8	13.1	17.7	16.4	14.8	14.7	15.0	12.5	11.1	15.4
	5	17.7	13.1	16.8	22.5	19.0	13.9	14.5	14.1	22.0	21.3	13.6	11.1	20.0
	6	41.6	44.1	39.5	41.2	42.3	39.4	47.3	43.0	48.6	41.0	37.9	37.2	43.3
	7	14.9	20.9	14.3	10.2	15.2	13.9	10.9	14.8	7.3	16.1	17.3	17.1	14.1
	8	2.2	3.7	1.4	1.5	1.7	3.5	5.5	1.6	0.9	1.9	2.6	1.7	2.2
	9	2.2	3.0	1.7	1.8	2.2	2.2	3.6	0.8	1.8	2.5	2.2	1.7	2.3
	10	1.3	2.4	0.3	1.2	1.3	1.3	0	3.9	1.8	0.6	1.1	0.9	1.5
25	1	5.2	4.4	4.2	6.7	4.6	6.9	5.5	5.5	4.6	4.4	6.3	4.3	5.5
	2	43.0	43.4	44.8	41.2	42.4	45.0	52.7	39.8	34.9	44.9	43.4	40.6	43.8
	3	48.3	48.8	47.2	48.8	49.6	44.6	38.2	50.8	56.0	47.4	47.4	50.9	47.5
	4	2.4	2.7	2.4	2.0	2.6	1.7	1.8	2.3	0.9	3.3	1.8	3.4	2.0
	NA	1.1	0.7	1.4	1.2	0.9	1.7	1.8	1.6	3.7	0	1.1	0.9	1.2
26 (1)	1	25.2	33.3	18.2	24.0	25.2	25.1	45.5	32.0	30.3	22.7	19.1	23.5	25.8
	2	11.9	8.8	12.9	13.7	12.0	11.7	5.5	7.8	15.6	13.6	11.4	11.1	12.2
	3	25.6	20.5	29.0	27.2	26.1	24.2	25.5	23.4	23.9	25.8	27.2	26.5	25.3

(%)

問	肢	全 体	都市部	農村部	団 地	30歳代 以 下	40歳代 以 上	1 年 未 満	1年以上 3年未満	3年以上 5年未満	5年以上 10年未満	10 年 以 上	同 居	非同居
26 (1)	4	26.7	27.9	28.0	24.6	27.5	24.2	10.9	25.8	22.9	28.0	30.1	29.1	25.8
	5	3.7	4.0	4.2	2.9	3.3	4.8	7.3	2.3	2.8	3.9	3.7	3.0	3.9
	NA	6.9	5.4	7.7	7.6	5.9	10.0	5.5	8.6	4.6	6.1	8.5	6.8	7.0
26 (2)	1	5.4	10.1	1.4	4.7	5.8	4.3	21.8	10.2	7.3	2.2	3.3	5.6	5.4
	2	5.2	5.7	4.2	5.6	5.3	4.8	1.8	5.5	4.6	5.5	5.5	5.1	5.2
	3	16.0	15.8	19.2	13.5	15.7	16.9	12.7	12.5	20.2	13.6	19.9	20.1	14.7
	4	50.8	48.5	50.7	52.9	51.3	49.4	43.6	52.3	46.8	56.2	46.0	47.9	51.7
	5	18.1	15.8	18.5	19.6	18.2	17.7	16.4	13.3	17.4	18.8	19.9	17.1	18.4
	NA	4.5	4.0	5.9	3.8	3.7	6.9	3.6	6.3	3.7	3.6	5.5	4.3	4.6
26 (3)	1	4.5	8.8	2.1	2.9	5.0	3.0	21.8	7.8	6.4	3.0	0.7	2.6	5.2
	2	6.1	9.1	4.2	5.0	5.8	6.9	9.1	5.5	4.6	5.5	7.0	7.3	5.7
	3	17.2	19.9	14.7	17.0	17.6	16.0	16.4	18.8	22.0	17.2	14.7	15.0	18.0
	4	49.6	43.4	49.3	55.3	50.0	48.5	38.2	44.5	45.0	52.9	51.8	51.7	48.9
	5	17.1	14.1	21.3	16.1	17.6	15.6	9.1	15.6	18.3	17.5	18.4	17.1	17.0
	NA	5.5	4.7	8.4	3.8	4.0	10.0	5.5	7.8	3.7	3.9	7.4	6.4	5.2
26 (4)	1	5.8	9.8	3.1	4.7	6.8	3.0	23.6	10.2	5.5	3.9	2.9	4.7	6.2
	2	5.0	6.1	5.6	3.5	4.2	7.4	5.5	3.1	7.3	3.3	7.0	5.6	4.8
	3	19.6	23.2	18.5	17.3	20.2	17.7	18.2	25.0	24.8	17.5	18.0	19.7	19.6
	4	47.4	42.1	45.5	53.5	48.6	43.7	34.5	43.8	43.1	53.2	45.6	43.2	48.8
	5	16.5	13.8	19.2	16.7	16.1	17.7	12.7	10.9	16.5	18.0	18.0	19.2	15.5
	NA	5.7	5.1	8.0	4.4	4.2	10.4	5.5	7.0	2.8	4.2	8.5	7.7	5.1
26 (5)	1	10.5	16.8	5.2	9.4	11.0	9.1	27.3	18.0	13.8	6.9	7.0	10.7	10.4
	2	14.9	11.8	16.1	16.7	15.1	14.3	10.9	14.1	11.0	19.1	12.1	10.7	16.4
	3	34.7	37.0	32.5	34.5	36.0	30.7	23.6	32.0	36.7	35.5	36.4	39.3	33.1
	4	27.5	26.6	28.0	27.8	27.5	27.3	27.3	22.7	26.6	26.9	30.9	26.9	27.6
	5	6.5	3.0	9.4	7.0	5.9	8.2	5.5	6.3	6.4	7.2	5.9	5.6	6.8
	NA	5.9	4.7	8.7	4.7	4.5	10.4	5.5	7.0	5.5	4.4	7.7	6.8	5.7
26 (6)	1	8.5	14.1	7.0	5.0	9.8	4.8	21.8	14.1	7.3	6.4	6.6	8.1	8.7
	2	15.8	13.8	19.2	14.6	16.3	14.3	9.1	15.6	19.3	19.1	11.4	12.8	16.8
	3	29.7	26.6	33.9	28.9	29.1	31.6	23.6	32.0	27.5	28.5	32.4	32.1	28.9
	4	33.3	33.3	26.6	38.9	33.9	31.6	25.5	25.8	36.7	35.7	33.8	32.1	33.8

(%)

問	肢	全 体	都市部	農村部	団 地	30歳代 以 下	40歳代 以 上	1 年 未 満	1年以上 3年未満	3年以上 5年未満	5年以上 10年未満	10 年 以 上	同 居	非同居
26	5	6.6	7.4	4.9	7.3	6.3	7.4	12.7	4.7	5.5	5.8	7.7	7.7	6.1
	(6) NA	6.1	4.7	8.4	5.3	4.6	10.4	7.3	7.8	3.7	4.4	8.1	7.3	5.7
26	1	32.0	41.4	22.4	31.9	32.7	29.9	56.4	42.2	35.8	29.6	23.9	25.6	34.3
	2	25.4	18.9	26.9	29.8	25.5	25.1	10.9	19.5	27.5	29.4	25.0	23.5	26.1
	3	26.8	25.9	30.1	24.9	27.2	25.5	20.0	23.4	23.9	27.7	29.8	30.8	25.5
	(7) 4	8.5	8.8	9.4	7.6	8.5	8.7	7.3	7.0	8.3	7.5	11.0	11.5	7.3
	5	1.5	1.3	2.1	1.2	1.4	1.7	0	0	0.9	1.7	2.6	1.7	1.5
	NA	5.7	3.7	9.1	4.7	4.6	9.1	5.5	7.8	3.7	4.2	7.7	6.8	5.4
26	1	12.6	22.9	6.3	9.1	13.7	9.5	38.2	21.9	10.1	9.7	8.1	10.3	13.5
	2	9.1	6.4	11.9	9.1	8.8	10.0	5.5	10.2	9.2	10.2	7.7	6.0	10.2
	3	26.3	20.2	29.7	28.7	26.7	25.1	18.2	22.7	30.3	28.3	25.4	28.6	25.5
	(8) 4	39.0	36.0	37.8	42.7	39.2	38.5	25.5	35.2	37.6	40.2	42.6	40.6	38.3
	5	7.0	8.8	6.6	5.8	6.8	7.8	5.5	3.9	5.5	7.8	8.5	6.4	7.3
	NA	5.9	5.7	7.7	4.7	4.9	9.1	7.3	6.3	7.3	3.9	7.7	8.1	5.2
26	1	32.6	37.0	28.3	32.5	33.0	31.6	58.2	36.7	40.4	31.6	23.9	28.6	34.1
	2	20.3	14.8	24.5	21.6	20.7	19.0	7.3	16.4	20.2	23.0	21.3	18.8	20.9
	3	26.2	21.2	27.3	29.5	26.5	25.1	18.2	26.6	24.8	25.8	28.7	28.2	25.4
	(9) 4	13.1	19.2	10.1	10.2	13.0	13.4	7.3	11.7	9.2	12.7	16.9	15.8	12.0
	5	1.7	2.7	1.0	1.5	2.0	0.9	0	1.6	1.8	1.9	1.8	1.7	1.7
	NA	6.1	5.1	8.7	4.7	4.8	10.0	9.1	7.0	3.7	5.0	7.4	6.8	5.8
26	1	15.4	15.5	11.5	18.4	16.1	13.0	32.7	20.3	16.5	15.0	9.6	15.8	15.2
	2	11.0	5.1	12.2	15.5	10.8	12.1	1.8	10.9	11.9	13.3	9.9	9.8	11.6
	3	23.0	14.1	26.2	28.1	24.1	19.9	23.6	19.5	26.6	23.8	22.1	20.5	23.9
	(10) 4	36.3	43.4	36.0	30.4	35.9	37.7	20.0	32.0	34.9	37.1	41.2	42.7	34.1
	5	8.3	17.2	5.9	2.6	8.4	8.2	14.5	9.4	5.5	6.6	9.9	4.7	9.4
	NA	5.8	4.7	8.0	5.0	4.8	9.1	7.3	7.8	4.6	4.2	7.4	6.4	5.7
27	1	17.8	16.2	18.5	18.7	16.1	22.9	16.4	15.6	15.6	15.5	23.2	18.8	17.6
	2	53.7	56.9	51.4	52.9	56.8	44.6	58.2	52.3	49.5	57.9	49.6	53.0	53.8
	3	23.5	21.5	24.5	24.3	22.3	26.8	20.0	26.6	29.4	22.2	22.1	23.5	23.5
	4	2.3	2.0	3.1	1.8	2.3	2.2	0	1.6	3.7	2.5	2.2	3.0	2.0
	NA	2.7	3.4	2.4	2.3	2.4	3.5	5.5	3.9	1.8	1.9	2.9	1.7	3.0

(%)

問	肢	全 体	都市部	農村部	団 地	30歳代 以 下	40歳代 以 上	1 年 未 満	1年以上 3年未満	3年以上 5年未満	5年以上 10年未満	10 年 以 上	同 居	非同居
28	1	34.7	28.6	37.8	37.4	35.2	33.3	36.4	25.8	21.1	40.4	36.4	32.1	35.6
	2	45.8	49.5	43.7	44.4	46.8	42.9	32.7	46.1	53.2	44.9	46.7	49.1	44.8
	3	16.2	18.2	15.4	15.2	15.3	19.0	27.3	23.4	21.1	12.5	13.6	16.7	16.0
	4	1.2	1.7	1.0	0.9	1.0	1.7	0	3.1	0	1.4	0.7	1.3	1.2
	NA	2.1	2.0	2.1	2.0	1.7	3.0	3.6	1.6	4.6	0.8	2.6	0.9	2.5
29	1	27.1	24.2	32.5	25.1	25.6	31.6	12.7	29.7	20.2	28.0	30.5	29.5	26.2
	2	39.6	40.1	37.1	41.2	38.0	44.2	40.0	40.6	43.1	35.2	43.4	36.8	40.5
	3	20.3	21.9	16.8	21.9	21.3	17.3	18.1	20.3	23.9	18.8	21.3	20.5	20.3
	4	29.4	26.6	31.1	30.4	30.4	26.4	12.7	35.2	29.4	28.5	31.3	30.3	28.9
	5	40.4	31.6	50.0	40.1	40.3	40.7	34.5	30.5	33.9	43.2	45.2	49.1	37.6
	6	17.3	16.8	13.0	21.3	17.7	16.0	20.0	12.5	21.1	21.1	12.5	11.5	19.3
	7	16.4	13.8	16.8	18.4	16.0	17.7	23.6	12.5	18.3	18.3	13.6	15.8	16.5
	8	6.5	6.4	9.4	4.0	5.6	9.1	5.5	5.5	1.8	6.1	9.6	9.0	5.5
	9	7.5	8.1	5.9	8.2	7.1	8.7	12.7	7.0	3.7	7.8	7.7	8.1	7.3
	10	15.6	25.3	9.1	12.6	15.6	15.6	20.0	16.4	13.8	17.2	12.9	12.4	16.7
	11	61.7	69.7	55.2	60.2	64.4	53.7	67.2	61.7	67.0	61.8	58.5	62.8	61.5
	12	4.2	2.4	4.5	5.6	4.2	4.3	3.6	4.7	4.6	5.8	1.8	3.0	4.6
	13	0.4	0.3	0	0.9	0.4	0.4	1.8	0	0	0.6	0.4	0.4	0.4

(資料 3)

昭和 62 年度 家庭教育総合推進事業の概要

1. 事業の趣旨

家庭をとりまく経済社会状況が変化し、青少年の問題行動が増加する中で、今日の家庭教育の課題に対処するため、家庭教育総合セミナー事業の成果を更に発展させ、総合的な視点から家庭教育の充実方策を推進し、その振興を図るために実施するものです。

2. 事業の内容

(1) 家庭教育企画推進委員会の設置

当面する家庭教育上の諸問題を調査研究し、具体的・実践的な解決方策を探求し、その他の事業の企画、実施及び評価等を行うものです。

- ・研究主題 家庭教育と地域とのつながりをもとめて

家庭教育企画推進委員名簿

年 度	昭 和 6 2 年 度
委 員 長	森 紘(九州大学)
委 員	秦 政 春(福岡教育大学)
	林 義 樹(中村学園大学)
	西 村 健 也(NHK福岡放送局)
	村 山 延 夫(古賀町中央公民館)
	低 綿 敬 二(筑紫野市中央公民館)
	末 松 哲 夫(勢門小学校)
	尾 籠 宏 子(稲築東中学校)
	小 野 敏 弘(福岡県教育委員会)
	久 家 貞 美(福岡県立社会教育総合センター)

(2) 家庭教育指導者研究協議会の開催

家庭の教育機能を補完する地域活動の活性化を図るため、指導的立場にある人を対象に、地域の実情に即して、今日の家庭教育の課題に対処する具体的・実践的な方策等を研究協議するものです。

- ・共通研究主題 59~61年度 「今、親に求められているもの」
62年度 「家庭教育と地域とのつながりを考える」
- ・方法 趣旨説明(企画推進委員)、問題提起、シンポジウム、分科会等

家庭教育指導者研究協議会実施状況

年度	期 日	会 場	参加者	担当企画推進委員	担当教育事務所等
昭和59年度	昭和59年10月21日(月)	田川青少年文化ホール	262 ^人	尾籠・河角	筑豊教育事務所
	昭和59年11月27日(火)	県立社会教育総合センター	408	大塚・中島幸	福岡教育事務所
	昭和59年11月27日(火)	筑後市勤労婦人センター	290	永渕・浜田	南筑後教育事務所
	昭和59年11月30日(金)	遠賀町中央公民館	424	横山・岩尾	北九州教育事務所
	昭和60年1月27日(日)	甘木朝倉市町村会館	300	岡部・西村	北筑後教育事務所
	昭和60年1月27日(日)	行橋市役所市民ホール	259	河角・中島正	京築教育事務所
昭和60年度	昭和60年12月1日(日)	飯塚総合会館	237	久家・河角・中島正	筑豊教育事務所
	昭和60年12月12日(木)	県立社会教育総合センター	308	久家・森・尾籠	福岡教育事務所 社会教育総合センター
	昭和61年1月26日(日)	吉井町ムラおこしセンター	356	岡部・西村・井上	北筑後教育事務所
昭和61年度	昭和61年11月29日(土)	教育庁南筑後教育事務所	220	西村・河角	南筑後教育事務所
	昭和62年2月26日(木)	県立社会教育総合センター	385	企画推進委員 全員	社会教育総合センター
昭和62年度	昭和62年12月4日(金)	県立社会教育総合センター	500	企画推進委員 全員	社会教育総合センター
	昭和63年3月17日(木)	県立社会教育総合センター	105	企画推進委員 全員	社会教育総合センター

(3) 家庭教育電話相談の実施（「家庭教育110番」）

少年の問題行動の増加状況にかんがみ、主として乳児期及び少年期の子どもをもつ親を対象に、家庭教育全般にわたる相談に電話で応じるものです。

- ・名称及び番号 家庭教育110番 ☎092-947-3515（専用電話）
- ・設置場所 県立社会教育総合センター（調査研究課）
- ・実施日時 原則として毎週月～金曜の9時30分～12時・13時～16時30分
- ・相談員 学識経験者等に委嘱又は任命

家庭教育110番相談状況(59.4~63.3)

年 度	総 件 数	相 談 者			対 象 者					地 域						
		母 親	父 親	そ の 他	乳 児	小 学 生	中 学 生	高 校 生	そ の 他	福 岡 市	北 九 州 市	福 岡 地 区	筑 後 地 区	北 筑 九 州 豊 地 区	京 築 地 区	不 明
59	184	179	4	1	85	24	45	24	6	63	11	29	14	12	2	53
60	438	421	5	12	311	33	53	28	13	126	23	67	38	26	10	148
61	448	416	9	23	322	45	46	21	14	156	63	87	70	46	10	16
62	458	428	6	24	325	29	50	26	28	158	60	95	80	44	10	11

(4) 家庭教育指導資料の作成・配布

各事業の成果を企画推進委員会が取りまとめて資料を作成し、関係行政機関、関係団体、学校等に配布して、その活用を図るものです。

資 料 一 覧

事業名	年度	資 料 名
家 庭 教 育 総 合 セ ミ ナ ー 事 業	54	・昭和54年度家庭教育総合セミナー報告書 望ましい家庭教育をめざして
	55	・昭和55年度家庭教育総合セミナー報告書 望ましい家庭教育をめざして ー福岡県における小学生をもつ父親・母親の養育態度・行動の実態
	56	・昭和56年度家庭教育総合セミナー報告書 望ましい家庭教育をめざして ー福岡県における小学生をもつ父親・母親の養育態度・行動の実態(その2) ・ー小学生をもつーあなたの子育てのために
	57	・昭和57年度家庭教育総合セミナー報告書 望ましい家庭教育をめざして ー福岡県における中学生をもつ父親・母親の養育態度・行動の実態(その1) ・ー小学生をもつーあなたの子育てのために(改訂版)
	58	・昭和58年度家庭教育総合セミナー報告書 望ましい家庭教育をめざして ー福岡県における中学生をもつ父親・母親の養育態度・行動の実態(その2) ・ー中学生をもつーあなたの子育てのために
家 庭 推 進 教 育 事 業 総 業	59	家庭教育の指導のために ー今、親に求められているものー
	60	家庭教育の指導のためにⅡ ー今、親に求められているものー“親の後ろ姿を求めて”
	61	・子どもが見ていますよ お父さん お母さん ・市町村の家庭教育事業の現状とその考察
	62	・家庭教育の活性化のためにー地域とのつながりをもとめてー

家庭教育 110 番 (092-947-3515)

福岡県立社会教育総合センターでは、幼児期及び少年期のお子さんをお持ちの家庭を対象に家庭教育一般に関する電話相談を実施しています。お気軽な気持ちでダイヤルしてください。

また、医学や心理学等に関する専門的なことからについても、適切な相談窓口を紹介しています。

- * 曜日 / 毎週月曜から金曜まで
(ただし毎月第2月曜と国民の祝日及び
年末年始はお休みです)
- * 時間 / 9時30分から12時00分まで及び
13時00分から16時30分まで
- * 電話番号 / 092-947-3515

